博士学位論文

日本殖民地時代の台湾文学
― 形成と変容

平成２６年８月

城西国際大学大学院　人文科学研究科

比較文化専攻

陳　惠文

目次

目次----------I
要旨----------II

第一章　序論
第一節　研究動機と目的----------1
第二節　第二節　研究の内容と方法----------5
第三節　先行研究と本研究の特色----------10

第二章　詩社日中台文人の唱和
第一節　日本殖民地時代前に台湾漢詩の発展----------26
第二節　詩社の組織と日本殖民地文人の交流----------31
第三節　皇民化政策下で抗日と「漢体和魂」の詩作--------44

第三章　台湾新文学運動の興新と発展
第一節　台湾新文学の興起----------62
第二節　新旧文学、台湾語文と郷土文学論争----------71
第三節　相互理解と共生における新文学の意義----------87

第四章　皇民化時期の台湾新文学
第一節　言語の転換と皇民文学の出現----------103
第二節　皇民文学の論争----------115
第三節　台湾文学史の流れ----------129

第五章　結論
第一節　日台異文化の親縁性と抵抗----------145
第二節　異文化に対する理解、共生と再生----------147
第三節　異文化に対する同化する台湾文学----------151
結び　　政治的異文化傾向に同化される台湾文学---------153

参考文献----------154

要旨

本論文の目的は台湾文学を通して、日台間の異文化接触後の現象を研究するにある。まず第一章は序論で、本論文の研究動機と目的、研究方法と内容、さらに先行研究の概況等を説明する。

第二章「詩社の日台文人の唱和」では、日本が台湾を殖民統治する前から台湾に数多く存在した詩社について考察する。詩社の活動内容は主に中国の伝統文学の一つである漢詩の創作を行うことであったが、日本の台湾統治時代に来台した日本人の中には漢学の素養を持つ者が多く、台湾で日本人だけの詩社や、漢民族と共同の詩社を組織して、漢詩をつくった。

日本の台湾統治以前に漢詩を作ることができた台湾人の文化人は、多くが教育を受けた地方の指導層であった。日本の殖民地当局は文化人による反発を政府への助力に変えようと、1909 年に「瀛社」を創設した。総督府の政策に従う瀛社の成立後、詩作を奨励する風潮が生まれ、各種歓迎会が開かれて各地の有力者を招待し、詩作を掲載するなど、台湾全島で詩社の設立が奨励された。

詩社の目的は総督府が文化人を支配下に入れることにあり、作品には「漢体和魂」が現れている。日中戦争の勃発以後、皇民化政策の下で、表面上は漢文が禁止されたものの、徹底されたわけではなかった。それゆえ、詩社の活動は盛んではなかったものの、中断されることもなかった。

第三章「台湾新文学運動の興新と発展」では、一般に台湾新文学が包括するとされる、伝統文学とは異なる形式、文化啓蒙、反殖民統治の意識、現代性、あるいは土地や民衆などを主に考察した。このような意義を持つ台湾新文学は、一般には 1920 年『台湾青年』の創刊から始まり、中でも陳炘が創刊号で旧文学を批評し、白話文を奨励するなど、新旧文学の論戦が始まった。これらの運動の一部は大正デモクラシーや中国の新文化運動や、読書の普及等によるものであった。

台湾で新文学が叫ばれるようになってから、1924 年に北京留学した張我軍が、一郎というペンネームで『台湾民報』に次々と発表したことで「糟糕的台湾文学界」が、新たな新旧文学の論争に火をつけた。1926 年には新旧文学論争は次第に下火になり、やがてそれが一段落すると、文字改革を主とする新文学運動が漢文の白話文学が確立された。

新文学運動は 1930 年代に入ると郷土文学論争へと発展した。黄石輝が 1930 年に『伍人報』で「為什麽不提倡郷土文学（なぜに郷土文学を提唱されないか）」。これは郷土文学論争の幕開けとなった。1931 年には郭秋生が黄石輝の概念を拡張して「台湾話文」を正式に掲げ、台湾話文による創作で論争が繰り広げられた。論争の中で、黄石輝、郭秋生、頼和、荘垂勝等の台湾話文派、廖毓文、林克夫、朱点人、頼明弘等の中国白話文派、さらに日本語で台湾文学を確立すべきだとする呉坤煌、劉捷らの一派や、張深切等の中立派もあった。ここで台湾新文学の言語や、いかに台湾文学を位置づけるかなどの問題が議論された。こうして次第に「本土論述」が現れると、成熟した「台湾」主体意識が生まれた。

第四章「皇民化時期の台湾新文学」では、台湾人作家の文学活動の組織として、郷土文学の論戦が 1934 年に、理念の異なる各派が台湾文芸連盟を組織した。その機関誌は『台湾文芸』と命名されたが、1936 年に同聯盟は解散、雑誌は停刊となった。この間に楊陸が聯盟を脱退して『台湾新文学』を組織し、発行したが、これも 1937 年に日本政府の皇民化政策遂行のために活動を停止した。

皇民化体制下で、漢文が廃止され、漢文白話文の文学はなくなったが、これにより台湾人作家による

日本語作品が大量に出現し、皇民化政策は成功するかに見えた。ただ漢詩は日本語の作品でも用いられたため、いくらかその形を残すことになった。皇民化政策の 1939 年には、日台の作家が台湾文芸家協会を共同で設立し、黄得時や西川満を始めとする準備委員らが、機関誌を『文芸台湾』と名づけた。だが同協会結成後、台湾人作家の張文環らは地方文化振興という名の下に 1941 年、啓文社を結成し、『台湾文学』を発行した。

皇民化政策の下で殖民地当局は文学活動のコントロールを一層強化し、1941 年には皇民奉公会を設立した。奉公会の指導により、1942 年に台湾文芸家協会の組織改革が行われ、台湾文学史を編纂するという任務が与えられた。1943 年になると、台湾文学奉公会が設立され、文芸による精神運動という任務が与えられた。同年には「台湾決戦文学会議」が開かれ、席上で西川満が文芸家協会の『文芸台湾』を提供を提案、1944 年に『文芸台湾』が張文環の『台湾文学』が合体して台湾文学奉公会発行『台湾文芸』となった。

「皇民化運動」の時期の台湾人作家の作品は主に日本語による創作であった。自発的に国策に即したものや、強制された文学作品も生まれた。その一方で、反殖民統治的の作家が台湾の現実の生活の特色を取り上げたことは意義深い。

キーワード：

異文化理解、多文化共生、詩社、漢詩、漢体和魂、台湾新文学運動、新旧文学論争、台湾話文論争、郷土文学論争、皇民化、皇民文学、糞リアリズム

日本殖民地時代の台湾文学　－　形成と変容

第一章　序論

第一節　研究動機と目的

台湾の明朝の鄭成功の時代から、従来の原住民の文化を除いて、中国の福建、広州から大量の移民が渡ってきたことや、後に清朝の統治下にあったことなどから、台湾の住民は中国文化の薫陶と影響を深く受けることになった。そして 1895 年に清国が台湾を日本に割譲してから日本の殖民地当局が持ち込んだ日本文化は、台湾にすでに存在していた中国文化から見ると一種の文化的な衝突に他ならず、この種の文化的な衝突は日本が台湾を統治した 50 年間を経て、中国文化と日本文化に文化的な衝突と摩擦が常に存在する状態をもたらし、また一種の「異文化の理解」と「多文化の共生」という現象を生むことになった。この問題意識こそが、本論文の最も基本的な研究動機である。

この問題意識から敷衍される問題として、文化的な衝突は政治、経済、社会、言語、教育、音楽、演劇、文学、美術、映画、建築などを含む極めて広範囲に及び、社会の各層を包含するが、では台湾の日本統治時代の日本文化と中国文化の接触から発生した文化的衝突の状況と特色を表すものは何であろうか。本論文では、言語文化こそがこの文化的衝突を最もよく表すものであると考えている。これは日本統治時代の日本の殖民地当局が台湾に進出したその日から、50 年間に及ぶ台湾統治を終了するまで、実施した統治政策の内容の如何を問わず、また実施の成否にも拘わりなく、統治政策の公布は全て日本語を使用したことによる。台湾の殖民統治に対する日本の政策は、台湾総督府の施政方針の変遷により、前期武官総督期、文官総督期、後期武官総督期に区分でき、それぞれ無方針主義[1]（或いは漸進主義）時代　(1895 年-1918 年)、内地延長主義時代（1919 年-1937 年）、皇民化時代（1937 年-1945 年）[2]とされている。日本による台湾の殖民統治期間の中で、この時期区分のうち統治の基礎が定まらない武装抗日の時期と後の同化および皇民化の時期は何れも、言語上の同化的政策が殖民地当局の主要な任務であった。

さらに論じると日本統治初期の教育を所掌したのは民政局に属する学務部であり、教育政策を主導したのは学務部長の伊沢修二[3]である。彼が領台早々一番悩んだことは台湾人との意思疎通であった。 しかし、北京官話で用が足せると起用した百数名の陸軍通訳が実は「英雄無用武之地」（有能な人が腕をふるう機会がない）の意であり全く役に立たなかった[4]。その実情を記した文があった。

言語不通の為、文武官吏の不便を感ずる事意外に強く、百数十名の陸軍通訳ありと雖も、臺北

---

[1]李園會「日據時期台湾教育史」国立編訳館、(2005 年)、647 ページ
「無方針主義」は当時の後藤新平からの提唱で、彼は事前理想を設定してすることは反対であった。彼の主張は実際社会の発展状況で方針を設定すべきであると いうことである。つまり、「無方針主義」とは社会環境の変遷で方針を設定しようとするものであった。
[2]王詩琅『日本殖民体制下的台湾』、眾文、(台北市、1980 年)、11 ページ
黄秀政、張勝彦、呉文星『台湾史』、五南図書、(台北市、2002 年)、176-180 ページ
[3]伊沢修二の台湾での事績については、上沼八郎『伊澤修二』、吉川弘文館、(東京、1988 年) を参照
[4] 蔡茂豊『台湾日本語教育の史の研究-1895～1985-』、大新書局、(台北市、2003 年)、1 ページ

地方の土民を尋問するに、譯を重ねて而して尚不通の語を聞くこと間々有之、況や憲兵警察官の如き、少数相離れて職務に従事する者にありては、一々譯訳を附する能はず假令之を附するも、官話を談ずる土民を、其の中間に使用する不便あり、従って危険も亦、其の間に生ぜざるを期し難し[5]

こういう情勢のもとで伊沢修二の台湾の学制創設における構想には主に、「第一目下急用の教育関係事項」と「第二永遠の教育事業」とにわけたのである。「第一目下急用の教育関係事項」とは、「総督府講習員」と「国語伝習所」の二つである[6]、このうち「講習員の養成」は、日本人教師の養成と新領土の官吏養成をするためのものであった。もう一つの「国語伝習所」は台湾人の日本語能力を育成し[7]、さらに日本文化を理解し日本をアイデンティティーとする台湾人を養成するためのものであった。また第二の「永遠の教育事業」とは「総督府国語学校」と「総督府師範学校」を設けることであった。「総督府国語学校」の「師範部」では教員の養成に当たるとともに、台湾における一般教育の方法を研究するところとし、「語学部」では通訳・官吏を養成するために日本語を教授した[8]。伊沢修二の主導により「第一目下急用の教育関係事項」、即ち「国語伝習所」の設立が推進され、1895 年、芝山巖開漳聖王廟（芝山岩恵済宮）に「国語伝習所」を開設し伝習生の募集を行ったのが日本の殖民地当局の台湾統治の始まりである[9]。武装抗日運動の平定と同時に統治上の施策である言語同化政策の第一歩が踏み出され進められていたことから、それがいかに重要であったかがわかる。

このほか、1933 年に開始された「国語普及十箇年計画」を例に見ると、当該計画は 10 年内に台湾総人口の 50%が日本語を話せるようになるよう、全台湾の各部集落に国語講習所を一つ設置することを原則とした。この政策により在学していない青年については、各市に国語講習所を分設することで対応した。国語講習所の費用は当局が補助し、12 歳以上 25 歳以下で日本語を話せない青年を対象に日本語の初等教育を行うことを目標とした。また各村落には簡易国語講習所を設け、教育対象を就学前児童や 70 歳以下の成人にまで拡げた。農閑期を利用して 3 か月から 6 か月を一期とし、経費は地方住民に負担させ、州と市が補助を行った。この計画以前の 1932 年には、台湾人で日本語を話す能力がある者は 22.7%であったが、計画後の 1940 年には日本語を話せる者はすでに総人口の 51%に達し、日本の降伏時には台湾人で日本語に通じている者はすでに 70%に上っていた[10]。これが殖民地当局の言語同化政策の具体的成果である。

言語同化政策の下において、言語文化的な衝突を最もよく表しているのが日本統治時代の台湾文学の発展である。ゆえに本論文では、文学を中心に日本統治時代の台湾に以前から存在していた中国文化と日本文化の間で、「異文化の理解」や「多文化の共生」といった現象が発生したか否かを検討したい。文化的衝突を最もよく表すものを文学とした主な理由は、文学が必ず言語を通じて表現されるためであるが、これについては、以下に二つの側面から説明してみたい。

---

[5]台湾教育会編『台湾教育沿革誌』上、南天書局出版、（1995 年）、6 ページ
[6]『台湾教育沿革誌』上、6-7 ページ・166-168 ページ
[7]「日據時期台湾教育史」16 ページ
[8]関正昭『日本語教育史研究序説』、養成社、（東京、1997 年）、9 ページ
[9]「日據時期台湾教育史」17-21 ページ
[10]薛綏之「旅台雑記」、『北方雑誌』6、（1947 年 6 月）、32 ページ
『日本語教育史研究序説』、10 ページ

一つ目の側面は、文学の表現は必ず言語を使用しなければならなかったため、日本の殖民地当局の言語同化政策の下で、元来中国文化の漢文教育を受けた文人は、統治者の公式言語の問題に直面し、また新世代の台湾人は言語同化の教育の問題に直面したことである。台湾の教育問題は、前述の伊沢修二が主張した急用の教育関係事項と永遠の教育事業の構想を例に取れば、台湾で台湾の教育体制を打ち立てて行くに当たり、その中で教育分野において最初に台湾の学童の教育を担ったのは公学校の教育体系である。公学校については1898年7月28日、総督府が台湾公学校令を公布し[11]、その附則で「国語学校附属学校竝ニ国語伝習所ノ設備ハ其ノ全部ヲ公学校ニ譲与スルコトヲ得」[12]と定め、澎湖島、恆春と台東の3か所の伝習所と4か所の分教場を除き[13]、各地の国語伝習所はみな公学校に変えられた。だが公学校が設置されてからも、なお伝統的な中国文化に由来する書房による挑戦と競争は続き、当時の台湾人学生は公学校と書房のいずれかを選んで就学するしかなかった。1902年から1904年の間は書房と公学校の増減に関する要となる時期であり、1904年には公学校数が正式に書房[14]の数を上回っている。1904年は1898年の第一期生から公学校の教育を修了した卒業生が出現したときで、完全に日本式教育を受けたこれらの卒業生は、台湾人として基本初等教育を受けた知識層であり、また将来の社会を担う中堅層または指導階層である。日本式の教育を受けた人数はまもなく中国の伝統的教育を受けた者を上回り、これが将来の同化政策と皇民化政策の実施を一層容易なものとしたが、その最も重要な理由は日本語を理解する人口が大幅に増加したことである。

文学の表現には、言語の使用が不可欠である。そのため、日本語を理解する人口の大幅な増加によって、特に文学創作を業としようとする人にとっては、日本語の使用が選択肢の一つとなった。一方でこうした文学創作に従事することを目指す人は、公学校以外で中国文化の漢文教育を受けることも可能であったが、公学校においても台湾社会の伝統文化の必要性から漢文科が設けられていた。このため、文学創作者にとっては、公学校数が次第に書房に取って代わり、大部分の創作者が公学校で日本語と漢文の教育を受けることになり、これがその後の創作で日本語または漢文の使用を選択する際に、中国文化と日本文化間の衝突を生み出したのである。こういった衝突は、文化的衝突の因子が幼年時代の初等教育の段階ですでに伏在している。その後、台湾総督府の統治政策は同化および皇民化の時期を経たが、言語同化政策は一貫して重要な殖民統治方針であった。特に皇民化の時期には公学校の漢文科が廃止され、これにより後期の台湾人学童の初等教育段階での日本語への同化の程度はより深刻なものとなり、後期の文学創作者が創作に当たり言語を選択する際の趨勢に更に大きな影響を与えた。このため本論文では、文学を通して言語同化教育政策の下での台湾文学の発展を検討することとし、これにより中国文化と日本文化の衝突に代表される意義を明らかにして行きたいと考える。

二つ目の側面は、文学には具体的に明確な作品が存在するために、作者の言語能力とその伝えたい思想が明らかに表現されているということである。言語文化を表現することができる異文化の理解と多文化の共生という現象には、確かに言語文化の音声言語と文字言語の記録が含まれており、これら二種類

---

[11]『台湾教育沿革誌』上、223ページ
[12]『台湾教育沿革誌』上、224ページ
[13]『台湾教育沿革誌』上、243-247ページ・『台湾教育沿革誌』下、南天書局出版、(1995年)、980-981ページ
[14]『台湾教育沿革誌』上、408-409ページ・下、984-985ページ

の記録が日本統治時代の言語文化の衝突を研究する上で主要な根拠となるものである。本論文では文字記録の中でも文学を選択するが、その主な理由は、音声言語の記録においては、日本統治時代には概ね放送、レコードの録音、映画、ドキュメンタリーの対話等があるものの、一般民衆の日常的な会話の記録はあまり多く残ってはいないことによる。文字言語の記録の領域では公文書記録、政令の広報から一般書籍、文学の出版、学校教科書の使用、新聞や雑誌の小説、新詩、文章、報道、広告、さらには一般民衆の書簡の往来や日記等に至るまで多数に上る。公文書記録や政令の広報、学校教科書を除けば、前述の言語の音声と文字の記録は、大部分が日本の殖民地当局の態度と立場を表しているだけでなく、その他の文字記録のどれ一つを取ってみても、言語文化が台湾人に与えた衝突の状況を詳しく検討することは、非常に意義深いと言える。例えば台湾人が一般書籍、文学作品の出版、新聞雑誌に発表した文章や報道、さらに一般の信書の往来、日記等において、中国語または日本語を用いたことで、その言語能力や物事の見方が表れている。言語文化の記録の中で、音声言語と文字言語の記録を同時に保有することができるのは、音楽、映画、文学の三種である。これら三種の文字言語は何れも作者が意図した芸術表現形式であると同時に音声言語と文字言語を記録した具体的な作品であり、文学の広義の定義から見ると、音楽や映画のほうが、包含性や特殊性が大きい。

文学の包容性が比較的大きいことは、文学の定義と密切な関係がある。これは広義と狭義から見ることができるが、広義で言えば、文学は学問の知識と文化的内容全て、または著述の全てを指す。狭義で言えば、文学は感情と想像に訴え読者に感興と感動をもたらす純文学作品を指す。文学の広義の定義は学術、学問、あるいは著作のすべてを指すのに対し、狭義の定義は比較的細部に及び、形式、内容、閲読の三つの部分が含まれる。狭義は、文字により構成された形式、作者の思想と感情の内容のほか、必ず目的性があり、それが表現されて読者に読ましめ、理解させ、想像させ、興味を覚えさせる[15]。音楽と映画の定義については、音楽は広義に言えば音声により組成された芸術全てに該当し、本論文では歌詞のついた流行音楽を指す。映画の定義は、多数の独立した写真から構成され、人類の視覚の残像現象を利用して作られるが、これは同時に一種の演技、視覚、聴覚の芸術であり、フィルム、ビデオテープやデジタル媒体を利用して映像と音声を収録、さらに後で編集作業を行って作られる。前述の文学、音楽、映画の定義を本論文の言語文化の観点から見るならば、流行音楽の歌詞も一種の文学的表現と見ることができるが、流行音楽の歌詞は通常長くはなく、概ね一種の詩的な表現と見ることができ、小説、散文を含む文学と比較すると、その範囲はなお狭いものである。映画の言語文化は通常は、一種口語の対話形式であり、文章体の言語表現は比較的に少なく、同時に映画は映像を持ち、芸術的表現を文字によらず、身体、言語により表現することができる。

全ての芸術は媒体を通じて伝達する必要があり、流行音楽はレコード、映画はフィルム、演劇は舞台、文学は紙面で表現される。前述の幾つかの類型的な芸術は、いずれも言語がその構成要素の一つとなっているが、文学表現の言語文化の指向は、音楽、映画と比較すると、前述のとおり広範であり、また日本統治時代の演劇は映画に似ており、これを記録した映画は少ない。ゆえに本論文は小説、散文、詩作

---

[15] ラマーン・セルデン（Raman Selden）、ピーター ウィドーソン（Peter Widdowson）、ピーター ブルッカー（Peter Brooker）共著、林志忠訳、『當代文学理論導読』、巨流出版、（台北、2005 年）

等を含む文学を中心とし、これにより日本統治時代の異文化の理解と多文化の共生という現象を検討することとする。

一般書籍の出版や新聞雑誌の文章や報道は、その文字記録は言語文化における台湾人の言語能力を表したものではあるが、文学とは性質を異にするものである。文学は常に言語を象徴記号として永遠の美感を形作り、作品には常に概念やメタファーが多く用いられ、同時に文学的な言語は重層的な構造を持ち、角度によって異なる意義を生み出すものである。また文学は認知の過程を通して美感を引き起こし、想像を揺り動かすものである。ゆえに本論文は一般書籍、新聞雑誌の文章と報道、そして一般の書簡や日記の記載については、本文の検討する範囲には含めないこととする。

前述の説明により、なぜ文学が言語文化の衝突のもとで、最も代表性を備えるものであるのかが理解できる。そしてこのような観点から出発して本論文の異文化の理解および多文化の共生の主旨、そして本論文が解決しようとする具体的な問題、また本文の研究目的に戻ることにする。その研究目的は、主に以下の三点である。

第一は、文学をテーマに、台湾に元来あった中国文化における文学が日本から来た文化の文学に出遭い、両者は台湾でどのように接近したのかを掘り下げる。

第二は、日本文化の影響を受けて台湾文学自身はどのような変化を生み出したのか。特に日本文化の背後には日本の殖民地当局があり、支配者という立場で政治的な保護も受けていたため、一種の優位文化ということができる。台湾文化は、優位に立つ日本文化の下でいかに日本文化を理解し、共生したのか。これも本文のもう一つの研究目的としたい。

第三は、1937 年以降の皇民化の時期に、日本の殖民統治者は政治的統制を強化し、また皇民化に関連する措置を実施しているが、ここで殖民地当局がいかなる政治手段で元来は作者個人の思想を表現するべき文学を国家の意識形態の下に屈服させたかのかを探求してみる。また皇民化政策のもとにおける台湾人作家の文学作品の内容や真に表現したかった思想についても検討していく。

第二節　研究の内容と方法

本論文の研究テーマは、日本殖民地時代の台湾文学-その形成と変容である。この研究を進めるためには、「異文化の理解」と「多文化の共生」とは何かを理解しなければならない。

まず「異文化」と「多文化」は統一的に解釈することができる。本論文の問題意識において研究する「異文化」と「多文化」は、専ら日本文化の影響を受けた台湾文化と中国文化の薫陶を受けた台湾文化という二つの総体的な国家的又は地域的な文化を指す。日本文化のその他のサブカルチャー、例えば民族グループの問題は比較的単純で、問題提起にはなりにくく、言語の中の関東弁、関西弁等の問題も政府が使用する日本語を標準とし、統一して一つの日本文化とされている。台湾の文化に至っては、例えば原住民文化、客家文化、閩南文化等の民族グループの問題があるが、これらの文化は本論文においては統一的に一つの台湾文化、とりわけ漢文の文字言語の記録を使用する文化の中に包含する。

「理解」の定義については、英文の Understanding、あるいは領会、瞭解、了解とも言えるが、これは、人類が他人または情報等、ある種の抽象的又は具象的な対象に対し、一個人の心理過程の思考と思

慮の作用を通して、かつ概念を運用し当該の対象に適当な処理を行い、その後概念の表現を通して何等かの事物を理解すること、またその事物に一定程度の概念の表現又は概念化を実現することを指している。この理解についての定義を本文中で運用することは、即ち日本文化の中の日本人と、台湾文化の中の台湾人が、相互の文化の中の全ての事物に対し、心理過程の思考を通じて、文字言語によりその概念と理解の程度を表現していることであり、また文学はその概念の表現の手段の一つとして、とりわけ芸術を通して表現する形式で、その理解の程度を表現するものである。

最後に「共生」の定義であるが、その概念は主に生物学に見られ、英語では commensalism と言われるものである。字句の意味は「共同」と「生活」であり、異なる生物体が共に生活する相互作用と、一種の緊密な相互利得関係の構築を指す。この種の共生現象は同時に動物、植物、菌類等の生物間にも見られ、共生関係により形成されうるもので、一方がもう一方に生存するために協力すると同時に相手の協力を得るものである。前述の定義の下で、本論文中で用いる日本文化と台湾文化は、台湾というこの地域で共同に生活する過程の中で、相互作用から一種の緊密な関係が形成されており、こうした関係は同様に言語文化の中の文学を通して、関係の程度を表することができるものである。

上記の定義の説明から、本論文の研究方法の一つはすでに明らかであるが、日本統治時代の日本文化と台湾文化という二つの異なる文化が多文化と接触し、如何なる相互「理解」と「共生」の現象を生んだかについて文学を通して検討していくものである。

然るに一般的に、異文化と多文化の理解と共生の現象は、二つの文化が自然に接触する情況で生まれるものを指しているが、日本統治時代の日本文化と台湾文化は自然な情況の下で接触したものではなく、それはひとつの政治的な過程、即ち清国が台湾を日本に割譲したという過程を経たものであり、日本文化と台湾文化の間は平等で自然な状態ではなかったのであり、日本文化は統治者の文化、台湾文化は被殖民者の文化を表しており、これら二つの文化は政治上の不平等を有している。

日本統治時代の政治上の不平等が台湾にもたらした影響は、後藤新平の生物学的統治原則と旧慣尊重の政策から始まっている。日本の台湾統治の初期の台湾総督府が採用したのは、後藤新平の生物学的統治原則と旧慣を尊重する政策である。日本の台湾統治初期には、台湾の旧慣を尊重し調査を行ったが、日本政府の「旧慣尊重」とは台湾の伝統的風俗を全て尊重する意味ではなく、まず民間、続いて公式に旧習を改正する統治の策略であった。そのため 1903 年の大阪博覧会では、台湾と殖民母国の差異を展示し、その後、統治方針に従い清朝から残る旧習が次第に改正されている。

日本の殖民統治下で台湾の旧習を改正するために、台湾総督府は多くの習俗を改変する措施を実施したが、そこでもたらされた変化の中で重要なものは以下の通りである。

1. 時間制度の確立：1895 年総督府は東経 120 度の子午線の時間を標準時間とし、日本との時差を 1 時間とし、1920 年には毎年 6 月 10 日を「時の記念日」と定めた。
2. 大租権の廃止：清朝時代の台湾の土地には「一田両主」制度があり、一つの土地には大租戸と小租戸という二つの地主が同時に存在したが、1905 年に総督府が大租権を買取り、大租権は全台湾で消滅した。
3. 三大陋習の阿片、纏足、弁髪：阿片問題は初期には厳禁・漸禁策間の争いがあったが、最終的には 1897 年に総督府の専売による漸禁政策が採用された。纏足と弁髪の問題は、総督府は当初民間に委

ねていたが、後に当局の政策により、1915 年に解纏と断髪を保甲規約に定めた。

4. 民法の財産、親族、相続：1922 年に日本政府は民法、商法等を台湾に施行したが、一部は台湾の習慣に依ることを承認した。しかしながら殖民政府はなおも少しずつ近代西方の法理を導入し、例えば法院が妻を追い出す等の旧慣の法的効力を否定し、旧慣の導入は否定した。また相続問題では子供は共同相続としたが、男子がない場合は女子にも相続を認め、これも旧慣と異なっていた。
5. 医療衛生：神に伺いを立てることや収驚、薬籤等の医療行為は、台湾固有の医療衛生概念である。殖民地当局は 1897 年に「台湾伝染病予防規則」を公布したものの、台湾の医療衛生に関する迷信をすぐに改変することはできず、後に教育を通して西洋医学と医学校を導入し、例えば予防接種などの衛生措置等を実施し、次第に台湾人の概念を変えて行った。
6. 宗教信仰：1937 年の日中戦争勃発と皇民化運動により、台湾固有の宗教信仰は「迷信」と「国民精神に反する」との汚名を着せられ大規模に整理され、固有の寺廟が廃止されたり日本式の神社に変えられたりした。
7. その他の旧習：台湾の端午節にはかつて石戦という習慣があり、人々が疫病を避けるために石を投げ合ったが、後に日本政府により禁じられた[16]。

以上、台湾総督府が台湾の習俗を改変した措置を簡単に説明したが、これらは日本文化が政治的な強制力が及ぶ中で、台湾文化の発展に顕著な影響を与えたこと、またそれが非常に広範囲に及ぶものであることを示している。ゆえに本論文は文学を中心に、殖民地当局の統治政策の台湾の言語文化的影響を示して行くことにする。

日本殖民地当局の言語統治政策の台湾文学の発展に対する影響を研究するために、本論文では具体的な研究方法として「文献分析法」を採用する。この方法で選択する文献は日本統治時代の台湾の文学で、新聞雑誌に発表又は書籍として出版された作品とされた。それには新詩、散文、小説等が含まれる。このほか、日本統治時代にはすでに台湾文学史に関する研究があり、これも本論文の文学文献の具体的な作品の中に含めていく。先にも述べたとおり、日本文化と台湾文化の政治上の不平等により、日本人作家は文化的衝突をあまり受けることがなく、一般にはなお日本の文化的脈絡において創作に従事した一方で、台湾人作家の作品には比較的深刻な日本文化との衝突が生じている。ゆえに台湾文学の作品の選択については台湾人作家の作品を主とし、日本人作家の作品のうち台湾に影響を与えた作品を本論文の比較の対象とする。こうした文献の選択のほか、本論文では主に、文学作品の中に示される日本文化と台湾文化との相違、なお、本論文の構成は以下の通りとする。

第一章　序論

第一節　研究動機と目的

第二節　研究の内容と方法

第三節　先行研究と本研究の特色

---

[16]旧慣の改正については、呉文星『日據時期台湾社会領導階層之研究』、正中書局、（台北、1992 年）、11-22 ページ
呂紹理『展示台湾－権力、空間與殖民統治的形象表述』、麥田出版社、（台北、2005 年）
王泰升「台湾日治時期的法律改革」、『台湾研究叢刊』、聯経出版社、（台北、1999 年）を参照。

第二章　詩社日中台文人の唱和
第一節　日本殖民地時代以前の台湾漢詩の発展
第二節　詩社の組織と日本殖民地文人の交流
第三節　皇民化政策下での抗日と「漢体和魂」の詩作
第三章　台湾新文学運動の興新と発展
第一節　台湾新文学の興起
第二節　新旧文学、台湾語文と郷土文学論争
第三節　相互理解と共生における新文学の意義
第四章　皇民化時期の台湾新文学
第一節　言語の転換と皇民文学の出現
第二節　皇民文学の論争
第三節　台湾文学史の流れ
第五章　結論
第一節　日台異文化の親縁性と抵抗
第二節　異文化に対する理解、共生と再生
第三節　異文化に同化する台湾文学
結び　政治的異文化傾向に同化される台湾文学

本論文は台湾文学を通して、日台間の異文化接触後の現象を追求してみることにある。各章で行う研究内容の概要は以下の通りである。

まず第一章は序論として、本論文の研究動機と目的、研究方法と内容、さらに先行研究の概況等を説明する。

第二章「詩社の日台文人の唱和」では、日本が台湾を殖民統治する前から台湾に数多く存在した詩社について考察する。詩社の活動内容は主に中国の伝統文学の一つである漢詩の創作を行うことであったが、日本の台湾統治に来台した日本人の中に漢学の素養を持つ者が多く、これらの人物は来台後に日本人だけの詩社や、漢民族と共同の詩社を組織して漢詩がつくられた。

日本の台湾統治以前に漢詩を作ることができた台湾人の文化人は、多くが教育を受けた地方の指導層であった。日本の殖民地当局は文化人による反発を政府への助力に変えようと、1909 年に「瀛社」を創設した。総督府の政策に従う瀛社の成立後、詩作を奨励する風潮が生まれ、各種歓迎会が開かれて各地の有力者を招待し、詩作を掲載するなど、台湾全島で詩社の設立が奨励された。

詩社の目的は総督府が文化人を支配下に入れることにあり、作品には「漢体和魂」が現れている。日中戦争の勃発からは皇民化政策の下で、表面上は漢文が禁止されたものの徹底された訳ではなかった、それゆえに詩社の活動は盛んではなかったものの、中断されることもなかった。

第三章「台湾新文学運動の興新と発展」では、一般に台湾新文学が包括するとされる、伝統文学とは異なる形式、文化啓蒙、反殖民統治の意識、現代性、あるいは土地や民衆などを主に考察したい。この

ような意義を持つ台湾新文学は、一般には1920年『台湾青年』の創刊から始まり、中でも陳炘が創刊号で旧文学を批評し、白話文を奨励する等、新旧文学の論戦が始まった。これらの運動の一部は大正デモクラシーや中国の新文化運動や、読書の普及等によるものであった。

台湾で新文学が叫ばれるようになってから、1924年に北京留学した張我軍が一郎というペンネームで『台湾民報』に次々と発表されたことで何がと「糟糕的台湾文学界」等が、新たな新旧文学の論争に火をつけた。1926年には新旧文学論争は次第に下火になり、やがてそれが一段落すると、文字改革を主とする新文学運動が漢文の白話文学が確立された。

新文学運動は1930年代に入ると郷土文学論争へと発展され。黄石輝が1930年に『伍人報』で「為什麽不提倡郷土文学（なぜに郷土文学を提唱されないか）」。これは郷土文学論争の幕開けとなった。1931年には郭秋生が黄石輝の概念を拡大して「台湾話文」を正式に掲げ、台湾話文による創作で論争が繰り広げられた。論争の中で、黄石輝、郭秋生、頼和、荘垂勝等の台湾話文派、廖毓文、林克夫、朱点人、頼明弘等の中国白話文派、さらに日本語で台湾文学を確立すべきだとする呉坤煌、劉捷等の一派や、張深切等の中立派もあった。ここで台湾新文学の言語、そしていかに台湾文学を位置づけるか等の問題が議論された。こうして次第に「本土論述」が現れると、成熟した「台湾」主体意識が生まれた。

第四章「皇民化時期の台湾新文学」では、台湾人作家の文学活動の組織として、郷土文学の論戦が1934年に、理念の異なる各派が台湾文芸聯盟を組織した。その機関誌は『台湾文芸』と命名されたが、1936年に同聯盟は解散、雑誌は停刊とされた。この間に楊陸が聯盟を脱退し「台湾新文学」を組織し、これが機関誌として発行したが、これも1937年に日本政府の皇民化政策遂行のためにやめられた。

皇民化体制下で、漢文が廃止され、漢文白話文の文学はなくなったが、これにより台湾人作家による日本語作品が大量に出現し、皇民化政策は成功するかに見えた。ただ漢詩は日本語の作品でも用いられたため、いくらかその形を残すことになった。皇民化政策の1939年には、日台の作家が台湾文芸家協会を共同で設立し、黄得時、西川満を準備委員らが、機関誌を「文芸台湾」となつげた。だが同協会結成後、台湾人作家の張文環等は地方文化振興という名の下に1941年、別に啓文社を結成し、「台湾文学」を発行した。

皇民化政策の下で殖民地当局は文学活動のコントロールを一層強化し、1941年には皇民奉公会を設立した。奉公会の指導により、1942年に台湾文芸家協会の組織改革が行われ、台湾文学史を編纂するという任務が与えられた。1943年になると、台湾文学奉公会が設立され、文芸による精神運動という任務が与えられた。同年には「台湾決戦文学会議」が開かれ、席上で西川満が文芸家協会の『文芸台湾』を提供するということで、1944年に台湾文学奉公会の発行する『台湾文芸』が『文芸台湾』と張文環の『台湾文学』が一つになった。

「皇民化運動」の時期の台湾人作家の作品は主に日本語による創作であった。なお自発的に国策に即したものや、強制された文学作品も生まれた。とりわけ反殖民統治的の作家は、台湾の現実の生活の特色を取り上げたところに意義深いことを感じる。

第三節　先行研究と本研究の特色

（一）　異文化研究

本論文は日本殖民地時代の台湾文学-その形成と変容テーマに関する先行研究は、二つの側面から説明することができる。第一の側面は「異文化の理解」と「多文化の共生」に関連する理論や具体的な研究についてである。「異文化の理解」と「多文化の共生」の字義的な定義は前節で述べたとおりであるが、そこから行われる文化研究において、異なる文化の間に文化的な理解と共生を如何に進めるべきかについての著作は、既に少なからぬ研究成果があり、中でも重要と思われるものを以下に紹介する。

日本における異文化コミュニケーションの研究は、欧米とりわけアメリカからの影響が強く、1960 年代前後アメリカで芽生えた研究の紹介や翻訳から始まった。異文化コミュニケーション研究の父とされるエドワード T・ホールによる一連の著作の翻訳が日本における異文化コミュニケーション研究の発端とも言える。ほかの翻訳書は、たとえば、『沈黙のことば（The silent language）』（南雲堂、1966 年）に『かくれた次元（The hidden dimension）』（みすず書房、1970 年）など。欧米文献の翻訳を通して異文化コミュニケーション研究の基本的な概念や理論的枠組が確定しつつ、日本なりの研究の模索が始まった。

欧米研究の影響の下で、日本人による研究はないわけではない。日本人による文化論として、中根千枝の『タテ社会の人間関係一単一社会の理論』（講談社、1967 年）や、土居健郎の『「甘え」の構造』（弘文堂、1971 年）、そして言語と文化の相関を探る鈴木孝夫の名著『ことばと文化』（岩波書店、1973 年）を挙げることができる。

1980 年代に異文化コミュニケーションに関する書物も増えてきた。直塚玲子の『欧米人が沈黙する時一異文化間コミュニケーション』（大修館書店、1980 年）、岡部郎の『異文化を読む一日米間のコミュニケーション』（南雲堂、1988 年）、西田ひろ子の『日米コミュニケーション・ギャップ』（大修館書店、1989 年）などがよく参考・引用文献にリストアップされる文献である。

しかし、それらのタイトルに見られるように、いずれも欧米、とりわけアメリカを対象に異文化コミュニケーションの問題を考察したものであり、アメリカに偏向しているといわざるを得ない。

欧米研究の影響の下で、異文化コミュニケーション研究に関する組織もある。日本で最初にできた異文化コミュニケーション関係の学会は、1981 年に設立された「異文化間教育学会（Intercultural Education Society of Japan）」である。この学会は異文化コミュニケーション研究の学際性、多面性を強く意識し、日本における異文化コミュニケーションの研究教育活動を積極的に展開しようとしたのである）。それから、「日本コミュニケーション学会（Communication Association of Japan）」である。当会は異文化コミュニケーションと深く関わっている外国語や国際コミュニケーション、比較文化論などに関するものが多い。もう 1 つ言及すべき研究組織としては、「異文化コミュニケーション研究会（SIETARJAPAN）」がある。年次大会、月例研究会、ワークショップ、異文化教育実践研修会を開き、

不定期に紀要『異文化コミュニケーション（Journal of Intercultural Communication） 』を刊行するなど、充実した活動が展開されている。

また、神田外語大学付属「異文化コミュニケーション研究所（Intercultural Communication Institute） （以下「異文研」と略す）の設立である。「異文研」は、1983 年に設立され、 「日本における異文化コミュニケーション研究をリードするような役割を果たしており、その存在の意義が大きい。異文研の初代所長だった古田暁氏の監修で出版された『異文化コミュニケーション新・国際人-の条件』（有斐閣、1987 年）は、異文化コミュニケーションに関する日本の最初の概説書として認められ、模索期にあった日本の異文化コミュニケーション研究の大きな成果の 1 つとして迎えられた。また、1990 年に古田他『異文化コミュニケーション・キーワード』（有斐閣）が出版された。これは、80 年代における異文化コミュニケーション研究模索のまとめと研究の結晶の一部と言えるような刊行物である。

1990 年代に研究に関する組織下で、異文化コミュニケーションに関する書物は、たとえば、高橋順一他編『異文化へのストラテジー』（川島書店、1991 年）、本名信行他編著『異文化理解とコミュニケーション 1 ことばと文化』、『異文化理解とコミュニケーション 2　人間と組織」（三修社、1994 年）、古田暁監修『異文化コミュニケーション:新・国際人-の条件[改訂版]』（有斐閣、1996 年）、鍋倉健悦『異文化間コミュニケーション入門』（丸善、1997 年）などがある。

また、1997 年に出版された『異文化コミュニケーション・ハンドブック』は欠かせない。総勢 26 名の研究者の共同作業であるが、「基礎知識から応用・実践まで」という副題が示すように、異文化コミュニケーション研究に関する基本的な考え方、指針を示したものといえる。

21 世紀に入ってから、出版された石井敏･、久火昭元･、遠山淳共著『異文化コミュニケーションの理論　新しいパラダイムを求めて』で、これは三つの部分から構成されている。第一は、異文化コミュニケーションに関する研究の背景、方法と観点で、この部分は、石井敏の異文化コミュニケーションに対する見解の記述である。石井は、異文化コミュニケーションで重要な文化の基本概念は、芸術、科学技術のような高等文化や歌舞伎と能に代表される伝統文化ではなく、一般市民の日常生活様式としての文化であるとしている[17]。一定社会の成員が共通にもつ価値観・思考様式や感情傾向等のような内面的な精神活動、言語行動の特徴や身体表現様式、そして衣食住のような物質的生活条件等は、日常生活様式としての文化の代表的なものである。異文化コミュニケーションの理論的理解と実践においては、このような文化の基本概念を明らかにしておくことが重要な前提条件となる。

そして第二の部分で同書は異文化コミュニケーション理論の概念とその関連する理論の特徴を紹介している。同書の紹介する理論概念は、 対人関係中心の理論、集団・組織中心の理論、異文化接触中心の理論など、異文化コミュニケーションに関連する既存の代表的な理論

[17]石井敏、久火昭元、遠山淳『異文化コミュニケーションの理論　新しいパラダイムを求めて』有斐閣ブックス、(2001 年)、10-38 ページ
石井敏，久米昭元，遠山淳『異文化コミュニケーション・ハンドブック―基礎知識から応用・実践まで』、有斐閣、(1997 年) を参照

をやさしく批評的に解説する。ものとなっている[18]。

このほか、この第三の部分は、新たな異文化コミュニケーション理論の構築の試みを紹介するものであり、その主なものは情報代謝理論、縁の人間関係システム理論、集団・組織内の意思形成、言語運用論、言語政策の理論等で、これらの理論は 「日本を含む東洋の文化的伝統に根ざした仮説理論の構築と提示を試み、新しいパラダイムを模索した」 ものである。この書籍における紹介は、日本国内「異文化コミュニケーション理論概説書である」[19]。と言うことができよう。

第二の比較的重要な書籍はチャールズB.ブリブル著の『21 世紀に向けて異文化コミュニケーション』である。本書も前掲の書籍同様に異文化コミュニケーションの問題を考察しているが、中でもいかにコミュニケーションするかという問題に重点を置いている。同書は 5 章に分かれており、第 1 章は異文化コミュニケーションに関連する理論の紹介で、異文化コミュニケーションの歴史と関連する研究の問題点を簡単に説明している。第 2 章はコミュニケーションとは何か、人類は何ゆえにコミュニケーションを必要とするのか、また人類のコミュニケーション過程の主要なモデルとは何かを検討している。第 3 章は文化的な基礎を紹介している。主に文化とは何かを検討し、また異文化コミュニケーションについて定義付けを行っている。第 4 章は異文化コミュニケーションに影響する要素を考察しており、この部分が同書の重要な部分となっている。筆者は異文化コミュニケーションに影響を与える要素として、自文化中心主義、信念と価値観、高低コンテキスト、カテゴリー化、帰属、ステレオタイプ、コミュニケーションタイルズ、ホフステードの文化次元、教育以及非言語的コミュニケーションがあると考えている。第 5 章は異文化コミュニケーションの現実世界における実際上の問題の分析である。

全体として本書は、基本的理論をわかりやすく説くとともに、チェックテストを掲載、具体的かつ実用的にアドバイスをする。ものであり、また 異文化間の類似性を相違を通して、自己と他者の交流を考察する。ほか、語学が堪能で外国人と自信をもって対面できる人=国際人・有能な異文化コミュニケーターという表面的なイメージや誤解を修正し、異文化コミュニケーションの世界と学習の方向性を示すものとなっている[20]。

第三に挙げられるのは、伊佐雅子、池田理知子、灘光洋子、今井千景、吉武正樹、E.M.クレーマー、山田美智子、岩隈美穂等共著の『多文化社会と異文化コミュニケーション』[21]である。この本は多くの筆者の異文化コミュニケーションに関する研究を収めており、主に、既存の国民国家を軸にした異文化コミュニケーションだけではなく、あらゆるコミュニケーションを異文化コミュニケーションとしてとらえた形での異文化コミュニケーション論を扱っている。そのテーマに基づき幾つかの異なるテーマが扱われており、 空間、時間、異文化コミュニケーションと異文化コミュニケーションと誤解の接点などが

---

[18]『異文化コミュニケーションの理論　新しいパラダイムを求めて』、40-72 ページ
[19]『異文化コミュニケーションの理論　新しいパラダイムを求めて』、142-151 ページ
[20] チャールズB.ブリブル『21 世紀に向けて異文化コミュニケーション』、ナカニシヤ出版、(2000 年)
[21]伊佐雅子、池田理知子、灘光洋子、今井千景、吉武正樹、E.M.クレーマー、山田美智子、岩隈美穂『多文化社会と異文化コミュニケーション』、三修社、(2002 年)

言及され、異なる空間と時間においての異文化コミュニケーションの意義、また異文化コミュニケーションが如何に相互理解を深めるか、そして現行の研究に見られる異文化コミュニケーションに対する多くの誤解を扱っている。このほか、異文化コミュニケーターとしての通訳者、異文化コミュニケーションにおける言語選択等の論述は、異文化コミュニケーションと言語の問題を検討し、異文化コミュニケーションにおける言語の重要性を論じている。本書はこれとは別に現在の社会のグローバル化という問題を提出し、「地球都市」の出現とコミュニケーションの関係を論じており、さらに、今日のグローバル化社会では、毎日の生活の中で異なる文化をもつ人たちとのコミュニケーションが増加している。また、モノやカネ、サービスや情報の文化移動が容易に行われ、それが国内ばかりではなく、外国にも影響を及ぼすようになってきたので、これからますます地球規模で物事を考えることが重要となってくる。そのため、これまでの外国人とうまくコミュニケーションがとれるようになるといった実利的な面ばかりではなく、地球時代に生きるうえでの思考力や教養を身につけることが強く求められている[22]。としている。本書はまたマスメディア、障がい者、高齢者、女性などの問題を取り上げ、本書はmulticulturalism（多文化主義）で、これはさまざまな文化をグローバルな視点で考えることである[23]という立場であると言えるだろう。

第四番目の書籍は、川上郁雄･、鳥谷善史合著の『異文化理解と情報』である。本書は「日本語教師養成シリーズ」の一書で、日本語教師となる場合には、必ず日本語と異文化コミュニケーションの関係を理解している必要があるとの立場から出発している。本書は2章に分かれており、第1章「異文化間教育・コミュニケーション教育」は、主として異文化においていかに日本語教育を行うか、という問題を取り上げており、その中で検討している問題点として、児童・生徒の日本語教育、言語学習と心理、国際化と国際理解教育、言語教育からインターアクション教育がある。第2章「言語情報処理」は、情報とリテラシー、コンピュータによる言語研究、教育とコンピュータ、及びインターネットと著作権を中心に知的所有権などの問題であり、このテーマから知り得る検討すべき要点は、情報を自己の目的に適合するように使用できる能力のことである。情報を主体的に選択、収集、活用、編集、発信する能力と同時に、情報機器を使って論理的に考える能力が含まれている。ゆえに本論文が主に検討しているのは、情報機器を活用して情報社会を生きていく能力といったニュアンスで使われているようである。このため、情報機器、特に現代の科学技術社会のコンピュータ及びインターネットをいかに使用するか、いかに日本語教育の道具としてゆくか、いかに著作権問題を処理するか、という問題を検討している[24]。

2005年に、上述した石井敏氏と久米昭元氏が前著を踏まえ、異文化コミュニケーション研究に関する日本初の方法論の専門書『異文化コミュニケーション研究法：テーマの着想から論文の書き方まで』を編集、出版した。分野が異なる10名の研究者による共同作業であるが、日本において構築された異文化

---

[22]『多文化社会と異文化コミュニケーション』、三修社、(2002年)、87-108ページ
[23]『多文化社会と異文化コミュニケーション』、三修社、(2002年)
[24]川上郁雄、鳥谷善史、『異文化理解と情報』、東京法令出版株式会社、(2004年)

コミュニケーション研究の一部を反映させたものである。

また、異文化とは何か、異文化コミュニケーションとは何か、新たに問い直す書物が出て来た.細谷昌志編『異文化コミュニケーションを学ぶ人のために』[25]である。言語中心志向の異文化コミュニケーション研究の反動、反発も見られ、新たに異文化コミュニケーションとは何か、という根本的な問いを投げかけている。

21 世紀に新しい研究の組織に関する、異文化コミュニケーション研究の新展開としてもう 1 つ言及すべきことは、「多文化関係学会」（Japan Society for Multicultural Relations）の発足である。多文化関係学は個人レベルから組織・社会・国家レベルに至るまでの諸問題を文化性、関係性および超頚城性という視点を軸にアプローチするものである。

前述の日本国内の関連する先行研究は、日本では「国際化、グローバル化が更に進んだ社会的環境の下では、異文化コミュニケーションの関心や、異文化コミュニケーション研究の認知が一段と高まったことを裏付ける。国際ビジネス関連のものが最も多く、異文化コミュニケーション研究は、国際ビジネスに牽引されるともいえる」。とされ、研究テーマの方向性は「依然として、言語・外国語中心志向と言わざるを得ない。いままで、相変わらず「言語中心」の傾向にあるといえる」[26]。としている。これは本論文の異文化の理解と多文化の共生に関する研究から見れば、本論文は言語文化の衝突と文学を中心に表現しており、日本の学界の異文化コミュニケーションの研究動向にも符合するもので、言語文化の衝突の重要性を示すものでもある。

前述の日本における先行研究は、異文化コミュニケーション言語文化の重要性を示してはいるが、ほとんどが現代を対象とした、特に第二次大戦後の理論的検討と研究成果であり、戦前の異文化コミュニケーションに関する研究は比較的少ない。本論文は日本統治時代の台湾文学の発展を選択することにより、異文化の理解と多文化の共生について、歴史の観点から異文化コミュニケーションの研究に延伸しようとするものである。そして日本統治時代の台湾文学の異文化コミュニケーションにおける意義を検討するためには、日本が台湾統治を始めた後に日本文学と台湾文学が接触した後の相互関係をまず理解しなければならない。

（二）詩社

日本文学は台湾に入る以前に、自身が漢文文化圏のもとで発展した歴史がある。豊かで強勢な漢文化は、秦や漢の時代にすでに周辺民族や国家に徐々に波及しており、現在の韓国、日本、ベトナム、ミャンマー等のインドシナ半島で影響を受けなかった国はない。こうした国家の早期の歴史、文化は基本的に漢文で書かれた書物で構築されており、ゆえにこれらの「異国他族」は漢文化を熟知していた。日本語、韓国語、ベトナム語等の文字の創造も漢字システムの変形と改造によるものであり、その文字シス

---

[25]細谷昌志（編）『異文化コミュニケーションを学ぶ人のために』、世界思想社、(2006 年)

[26]盧濤「日本における異文化コミュニケーション研究の歴史と現状」、マネジメント研究、7 号、PP.79-92　、(2007 年 3 月)、84 ページ

テムには「漢字」が大量に使用された。漢文化システムの「異族」が、武力で「中原」を征服した後に直面した問題は、少数による統治と文化的対峙という少なくとも二つの大きな問題があった。このような文化現象は「同体多枝」、即ち根源は漢文化の体系に由来するが、枝葉はそれぞれ異なるものと呼ぶことができる。だがいわゆる「漢文化」自体も実は多種の文化の交じり合った総合体であり、異なる種族の文化が「翻訳」のプロセスを通して漢文化を構成する一部分となったのである。漢文化のうちの「周辺」民族と国家は、彼ら自身の固有文化、習俗を除き、事実上は中国と重なる部分が多い。この重なる部分こそが漢文化圏での「異文化の理解」と「多文化の共生」の基礎となるものである。

日本は漢文化圏の影響を受けたとはいえ、自身の歴史と文化を持っていたため日本文学も日本の文化的特色をもって発展した。この状況下において、日本の文学史の発展の先行研究は本論文のテーマにおける重要性を有しているが、先に述べた通り、日本統治時代の台湾は日本の殖民地統治のもとに、日本文化は台湾文化よりも優位にあったため、日本文学が受けた台湾の伝統的な中国文化との衝突は少ない。ゆえに本論文では、日本統治時代の日本と台湾の文化の接触における日本文学史的な研究成果にはおおむね言及しない。だが、以下の一部の学者は、中国（漢）文化の要素が日本文学に及ぼした影響について、中国文化の下の台湾文学が日本文学への異文化理解と共生を進める際に、どのような文化的基礎を共有したのかということに注目している。

まず宇野哲人は、「中国は古来わが日本文化の源泉であり、わが日本の発展の軌跡の研究という観点から、中国文化の研究もまた非常に必要である」と述べている[27]。他にもかつて台北帝国大学に十余年奉職した神田喜一郎は『日本における中国文学Ⅰ−日本歌詞史話』の緒言で「日本漢文学は、わが邦第二の国文学である」と言っている。そして日本文学が受けた中国の影響は「その本来持って生れた宿命」であり、逃れることのできない事実だとした。神田喜一郎はさらに、「日本に於ける中国文学は、言ひ換へるならば中国文学の一支流」といい、興味深い一つの名詞を作りだした。それは「二重性格的文学」である。このほかに朝鮮や安南という二つの国家も同様に漢文学の影響を受けており、日本と同様に「二重性格的文学」に属している。ただ神田は、日本文学は絶えず漢文学に「追随」してきたが、日本列島では中国とはことなる日本式の漢文学が発展したとしている[28]。神田喜一郎の論点は一個の意見に過ぎず、日本の漢学界全体の見方を代表するものではないが、類似した詩文の素養により、日本文化が台湾に入ってからの文化接触においては、文学上の異文化理解と共生の可能性はその他の国家に比べ、より高い融合の基礎を有していると言える。

日本と台湾間の文学はいずれも中国文化の影響を受けたことにより、両者の間に異文化理解と共生の可能性が生まれ、それによって両者間に似たような発展の状況をもたらした。とくに詩社の組織と漢詩の作詩は相当に盛んで、日本におけるこの分野の発展状況についての先行研究では、三浦叶の『明治漢

---

[27]宇野哲人著、張学鋒訳『中国文明記、第二部分，一、中国之家族制度』、光明日報出版社、（北京市、1999 年）、182 ページ
[28]神田喜一郎『日本における中国文学Ⅰ−日本填詞史話』（一 緒言）、9-10 ページ

文学史』が明治時代の漢学について、総合的な論述を行っている。三浦叶の見方によれば、明治時代の漢詩は三期に分けることができる。第一期は明治初年から下谷吟社（大沼枕山）、茉莉吟社（森春濤）がリードする明治 23 年前後で、これは「詩壇は蕾が将に開かんとする時期」であった。第二期は明治 30 年前後の星社の時代までで、この時期は「詩壇の花が満開した時期」である。第三期は明治末年で、この頃漢詩はすでに衰退期に入り、「詩壇の花衰微の時期」であった[29]。この間、漢詩については「維新」以前にもすでに松平春嶽、鍋島閑叟、伊達藍山等といった詩壇の大家が存在した。これらの人はいずれも当時の政治的重要人物であり、同時に作詩に長じており、漢学の素養が豊かだった。詩社で最も有名なのは「玉池吟社」で、第一代の宗師を梁川星巌とし大勢の門徒を誇った。この他にも三浦叶はその本の中で有名な詩人、作詩の傾向、詩社での活動、詩文に関する出版、関連作品等、詳細な論述と分析を行っている。中でも重要なのは、彼は明治時代の漢詩隆盛の理由の一つは、清国公使館館員と日本の文人との交遊に始まると見ていることである[30]。

このほかには町田三郎の『日本幕末以来漢学家及其著述』の一書が明治時代（1868-1911）の日本の漢学、特に漢詩の作詩について研究している。町田三郎は明治時代の漢学は非常に隆盛を極めたとしており、「明治一代は日本の漢学の隆盛期」であると述べ、その理由を三点挙げている。第一は維新後の教育解放により、人民が自由に教育を受けるようになり、私塾が林立したが、大部分の私塾は俸禄を失った武士が設けたものであったため、これらの武士の多くは四書五経を教えたことである。第二に、新聞雑誌の出版事業が勃興し、新聞の「文芸欄」が常に漢詩の作品、そして漢詩の評論を掲載したことである。これらの詩作は生活現象、詩人の感興、時勢の変化に応じてすぐさま大変な歓迎を受けるようになり、明治 20 年代（1887-1897）には詩人による詩社の結成が非常に盛んになった。第三に、輔政大臣も詩文を非常に好み、詩作の報酬があったことが挙げられる。明治 30 年代から明治末年（1897-1911）に至るまで、漢詩壇は森春濤、森槐南父子に主導され、最盛期を迎えている。このような要素の下で日本の政界人、漢学者、詩人はなお中国文化を崇敬する心を持ち、中国文化人との交友を大きな光栄としていた。このため彼らは清国公使館の館員や文化人と常に詩文を贈り、詩酒の会を催すなど、明治 11 年（光緒四年、1878 年）から明治 27 年（光緒二十年、1894 年）までの間、最も盛んに交流した。この種の異国の間の「以詩会友（詩を以って友と会す）」、「風雅交接（風雅な交流）」といった方法は、漢文化圏ではしばしば見られるものであった[31]。

台湾においては、明代の鄭成功時代から清国の統治期まで、中国から大量の移民が渡ったのに伴い中国文化が台湾に伝来し、主要文化となった。このような状況において、日本の台湾統治開始以前から台湾の詩社と漢詩は非常に隆盛を極めていた。また日本は台湾統治において台湾の旧慣を尊重する政策を

---

[29]三浦叶『明治漢文学史』（第一章第一期（初年より二十三年頃まで）の漢詩）、汲古書院、（東京、1998 年）、20 ページ
[30]『明治漢文学史』（第一章第一期（初年より二十三年頃まで）の漢詩）、195-196 ページ
[31]町田三郎著、連清吉訳『日本幕末以来漢学家及其著述』「服部宇之吉及其所編『漢文大系』」、文史哲出版社印、（台北市、1992 年）、195-196 ページ。沈慶昊著、金培懿訳「関於日本漢文学歴史展開之一考察：與韓国漢文学作比較」、張宝三、楊儒賓編『日本漢学初探』、261-262 ページ

採ったため、台湾の詩社と漢詩は禁止されることもなく、また日本から渡台した官吏や文化人の多くが漢学の素養をもっており、自分たちで詩社を組織しただけでなく、台湾人と共に詩社を結成したり、詩文を創作したりした。こうしたことから、詩社と漢詩は一層の発展を見るようになった。この詩社に関しては、台湾に豊富な先行研究の成果が見られる。以下に、簡単に説明する。

専門書では黄美娥の「古典台湾：文学史、詩社、作家論」[32]に詩社に関する論述があり、同著者の「日治時代台湾詩社林立的社会考察」には、「北台第一大詩社---日治時代的瀛社及其活動」とする部分で、主に瀛社の社員と密接な関わりのある「台湾日日新報」を参考に、同社の成立とその組織化の過程、文学活動の様子、社員のリスト、そして瀛社の台湾詩史上の役割や位置づけの概要を説明している。廖振富の「櫟社研究新論」は、近年発見された「台大図書館蔵櫟社詩稿」を研究対象として、周辺事情、作品の内容、特定のテーマなど多元的な観点からの考察を行っており、これらの詩稿の豊かな内容と研究価値を論証していると同時に、新発見の文学史史料を用い、「櫟社と鹿港の淵源」をテーマとした地域文学研究でもある。さらに個別の論述を重ね、頼紹堯、荘雲従、陳瑚、傅錫祺、葉栄鐘等の 6 人の詩人を縦横に論じており、櫟社の「抗日」を描くだけでなく、文学史で長い間注目されることのなかった複雑で多元的な一面に注目することに研究の主軸を置いている。

呉毓琪は「南社研究」[33]において、南社の成立とその発展の時代背景を論述し、かつ南社の組織構成員や活動状況、重要な詩人の詩作等を分析し、最後に南社の台湾古典文学史上の影響について総合的に論じている。王幼華の「冰心麗藻入夢来－日治時期苗栗県詩社」は、主に日本統治時代の苗栗県の伝統的な詩社の発展の過程と創作表現を論じ、特に社長の選び方、資金源、詩作の選択と評論、詩人の経歴、出題方法、詩社の連吟といった詩社の組織や運営について細かく論証と叙述を行っている。『松山地区之古老詩社-松社』の作者である林正三は、蘇水木の所持していた『松社吟集』の謄写版に関連史料や訪問インタビュー等を加え、松社の昭和 4 年（1929 年）創設後の発展の過程を整理した。同書の内容は松社の成立の沿革、漢詩研究会の運営状況、歴代社長と教席、社員の介紹、また松社と鐘亭、潜社又は瀛社の間の連吟活動のほか、同社の一部の詩稿を掲載している。巻末では松社の地方における教育、文化の発展に対する影響をまとめているほか、松社の吟集から郷土の情感に係わる作品を総合的に論じている。

また雑誌論文では、黄美娥の「日治時代台湾詩社林立的社会考察」と「実践與転化-日治時代台湾伝統詩社的現代性体験」[34]の二篇が、台湾の伝統的な詩社研究について、従前の文学や歴史の研究とは異なる視点で論じている。前者の論文は、日本統治時代の伝統的な詩社の再興と発展を描写することで、伝統的な文化人の集会が、当初の日本人、台湾の官吏や地方紳士の宴会というような交際から、昔の文化人

---

[32]黄美娥 『古典臺灣：文學史･詩社･作家論』、國立編譯館、(台北、2007 年)
[33]呉毓琪『南社研究』、台南市立文化中心、(1999 年)
[34]黄美娥「日治時代臺灣詩社林立的社會考察」、『台灣風物』、第 47 巻、第 3 期、(1997 年)、43-88 ページ
黄美娥「實踐與轉化-日治時代臺灣傳統詩社的現代性體驗」、收於黄美娥,『重層現代性鏡像：日治時代臺灣傳統文人的文化視域與文學想像』：麥田出版、(臺北、2004 年)、162-174 ページ

が行った詩作のやりとりという形態を次第に取り戻す歴史、政治的要素を検討し、時間と空間の二つの軸から台湾の伝統的な詩社の数量の変化、地域分布の状態、日本統治時代後期の伝統的な詩社の遊戯や娯楽的な特徴がますます強まったこと等の具体的例証を観察している。そして、外在的要素、内在的要素により、日本統治時代の台湾に詩社が林立した理由を遡って検討し、文学や社会学の角度から、「文学の社会化」、「社会の文学化」では深層の構造を分析している。後者の論文は、社会学の「現代性」概念により、現代性の観点から見た文化的視野や文学の実践を考察し、日本統治時代の台湾の伝統的な詩社群の変型と更新の過程において表現された特質を綿密に、着実に研究している。その他には、例えば劉遠智の『台湾詩社的淵源與流衍』は明朝時代の復社、幾社の沿革と二者の台湾での詩作教育への影響、さらに東吟社が台湾詩社の始まりとなった契機を紹介し、さらに清朝から戦後初期にかけて台湾各地における詩社の活動の概略を説明している。陳国威の「台湾詩社初探」は、台湾詩社の明、清、日本、台湾の政権復権後の発展の状況を概説しており、文中では台湾の撃鉢吟詩の規則を簡単に紹介している。

また、学位論文の詩社に関する研究はさらに興味深い。以下に数冊を羅列する。

1. 王文顔「台湾詩社之研究」政治大学中国文学研究所修士論文（台北：1979 年）
2. 鍾美芳「日據時代櫟社之研究」東海大学歴史研究所修士論文（台中：1985 年）
3. 黄美娥「清代台湾竹塹地区伝統文学研究」、曾絢煜「栗社研究」、蘇秀鈴「日治時期崇文社研究」彰化師範大学国文学研究所修士論文（彰化：2000 年）
4. 張作珍「北港地区伝統詩社研究」南華大学文学研究所修士論文（嘉義：2000 年）
5. 陳芳萍「彰化應社及其詩作研究」清華大学中国文学研究所修士論文（新竹：2001 年）
6. 王幼華「日治時期苗栗縣傳統詩社研究 ― 以栗社為中心」中興大学中文研究所（台中：2001 年）
7. 林惠源「嘉義芸文発展的歴史観察」成功大学歴史学科修士論文（台南：2002 年）
8. 張淑玲「台湾南投地区伝統詩研究」中国文化大学中国文学研究所修士在職専班（台北：2002 年）
9. 王玉輝「日據時期高雄市詩社和詩人之研究 ―以旗津吟社為例」中山大学中国語文学研究所修士論文（高雄：2003 年）
10. 張端然「日治時期瀛社之研究」中国文化大学中国文学研究所修士在職専班修士論文（台北：2003 年）

（三）台湾新文学運動

日本統治時代の日本文化と台湾文化は、いずれも中国文化の要素を持っていたため、両者には文学が発展する過程において、異文化理解と共生の可能性がもともと存在した。だが、日本文化は統治者という優越的な地位にあったため、台湾文学の発展、とりわけ台湾人作家の作品における使用言語、文学で表現する内容、更には文学史をいかに書くか等は、日本人作家に比べ異文化の深刻な衝撃を受けていた。

そのため、日本文化の影響を受けて多くの理解や思考が生まれ、台湾の新文学運動の台頭が促されたのである。この分野に関する先行研究を以下に簡単に紹介する。

林瑞明の『台湾文学的本土観察』[35]（1996 年）は、台湾新文学運動の起源について、文中で以下のように説明している。

台湾新文学運動は新文化運動の重要な部分で、始まって以来、新文化運動と共にあった。『台湾青年』創刊号には当時慶応大学へ留学していた陳炘の書いた「文学与職務」という一文があるが、これは台湾新文学運動理論の最初の論述であり、作者は「文学者、乃文化之先駆也（文学は文化の先駆）」だと考え、真の文学は文化啓発や、文明思想の伝達、民族の振興、社会改造の使命を負っているとし、さらに「民国新学、奨励白話文」を引用して以下のように結論づけている。今日の台湾において、今日の形勢に処するのに、文学に自覚させ、その職務を励行せしめ、もって陋習を打破し、堕眠を叩き起こし、今日の文明思想に就き、もって百般の革新の先導となることが急務である。

そして台湾新文学は 1930 年代の台湾新文学運動の動きに至ると、戦前の台湾新文学発展の成熟期と見なされるようになり、その中でも「台湾新文学」と「南音」、「福爾摩莎」、「先発部隊」、「第一線」、「台湾文芸」等の文芸雑誌はいずれも台湾文学の輝ける時代を共同で記録するものとなっている。こうした文芸雑誌の中で、『台湾文芸』の発行は疑いなく学界の最も重視するところに意義があり、最も大きな成果や影響をもたらしている。『台湾文芸』の外に、これに次ぐ大きな成果を挙げたのは『台湾新文学』であろう。これに関しては、黄得時「台湾新文学運動概観」、葉石濤「台湾文学史綱」が代表的である[36]。黄得時は『台湾文芸』と『台湾新文学』の前後 3 年間の文学上の成果はそれ以前の 10 年の合計を上回っていると見ており、『台湾新文学』にも十分に高い評価を与えている。そして葉石濤は『台湾新文学』は同時期の『台湾文芸』に比べて、更に民族意識を有していると見ている。

（四）皇民文学

台湾作家は、日本という異文化の影響を受けて生まれた理解と思考に対し、台湾新学運動を促し、日本文化に対する理解と共生を試みたものの、政治的要素の影響により、1937 年日中戦争の勃発後、日本殖民当局が台湾で進めた皇民化政策により、日本文化と台湾文化が新文学運動下で異文化との共生を形成する可能性があったにも係わらず、皇民化運動で台湾新文学は日本文化のみの発展を可能とせしめ、いわゆる皇民文学を形成した。皇民文学の下に隠れた形ではあるが、何人かの台湾人作家はこの状況を意識し、単一文化的の影響力について意図的あるいは無意識に批判あるいは考察を行っている。しかし、政治的な強制的作用に抵抗することは事実上不可能であった。また皇民化時代に唯一優位に立った日本文化のもとで、文学史を著述することでこの状況を考察した作家もいる。前述の皇民文学と日本統治時

---

[35]林瑞明『台灣文學的本土觀察』、允晨文化公司、（台北、1996 年）
[36]黄得時「台湾新文学運動概観」、『台北文物』、4 巻 2 号、（1955 年 8 月）、51 ページ
葉石濤『台湾文学史綱』、文学界雑誌社、（高雄、1998 年）38-58 ページ

代の文学史についての先行研究は、概ね以下の通りである。

柳書琴の修士論文「戦争与文壇--日拠末期台湾的文学活動」は詳細な史料と当時の評論を第一の資料として研究を進め、戦局下の文学者の時代に対する思考と行動を分析している。戦争前期の台湾の二大文学集団である『文芸台湾』と『台湾文学』の活動にも評価を行い、これらの二大刊行物は異なる理念で競い合っただけでなく、統治者と適当な距離を保ち、その時代の台湾文学の活動に高度な自主性を持たせたとしている。後に皇民化運動の熱が高まり、台湾文壇は当局に強力に文学を抑圧されるという困難な状況にあっても、なお不断の抵抗を試み、自身の文学活動の自主性の維持に努めた。こうした精神は非常に尊く、またこうした意識形態が日本に傾斜した文学者に対しては、柳書琴は歴史的な現実と個人的な立場から考えるべきで、一概に「精神的敗北」と評価することはできないとし、日本統治時代末期の台湾文学の活動に明晰な論述と説明とを行っている。

柳書琴の「誰的文学？誰的歴史？－論日治末期文壇主体与歴史史詮釈之争」の一文は、「皇民文学」を生んだ背景と過程を検討することを目的とし、作者が論じた論題には、戦時中の文壇の変質と在台日本人作家の歴史的意識の形成、外地文学史の解釈の変化、殖民地文学統制と文化解釈の断裂、そして皇民文学の製作と生産等が含まれている。台湾文学は 1937 年の盧溝橋事件までは主流であったが、同事件後は空前の落ち込みとなり、日本人作家が中心となった。作者は、1935 年以降の台湾文壇は若干の日本人作家を中心として文学史の意味を整理した著述があるが、固定された歴史観や一定規模の歴史論述の評論は未だなく、これは日本、台湾文学勢力の消長のもとで起きた現象の一つであるとしている。これらの評論は日本人の文芸活動を主とするものの、劉捷、王詩琅の文章が含まれており、これは、台湾文壇が徐々に再生される 1940 年まで、台湾作家は弱体化していく台湾文学に如何に向き合ったか、また台湾人の著述した台湾文学史の最初の動機は何であったかを本論文が考察する一助となるものである。

李文卿の修士論文「殖民地作家書写策略研究—以皇民化運働時期『決戦台湾小説集』為中心」は、決戦期に日本政府が出版した『決戦台湾小説集』を主な研究対象とし、その中から殖民地作家の決戦体制下の文学創作における思想の脈絡の変遷を推察している。歴史、政治、テキストの三方向から分析に切り込み、まず大量の文学史料を参考に、豊富な考察の根拠に基づき、次に権力構造から、殖民体制下の当局、雑誌主宰者、台湾・日本人の知識分子の間の相互関係を明らかにし、最後にテキストに重点を置き、日本人、台湾人作家的の発言、行動を分析し、さらに作品の表現した思考と意識形態を通して、殖民地作家の決戦時期の歴史的位置を改めて位置づけることを意図している。

井手勇の修士論文「決戦時期台湾日人作家与皇民文学」は、皇民化運動期における日本人作家の皇民文学の表現の雰囲気の研究を開始したもので、皇民文学の概念と形式内容につき考察と分析を加え、「台湾人作家の皇民文学」、「日本人作家の皇民文学」の両種を区分する見方を示し、決戦時期の日本人の文学活動を把握することで、当時の台湾人作家の活動の方向や思想の進路を検討している。だが、日本人作家の書いた作品がなぜ皇民文学と言えるのか。日本人作家は自らの血統や言語につき少しも疑問をもつ必要がなく、民族アイデンティティーにも矛盾を生じない。それなのに、なぜその作品を皇民文学

に含めて論じなければならないのか。井手勇は皇民文学を客観的な歴史名詞として認めようとしているが、これには検討と討論の必要があろう。

王郁雯の修士論文「台湾作家的『皇民文学』（認同文学）之探討 ― 陳火泉、周金波的小説為研究中心」は、陳火泉「道」と周金波「水癌」、「志願兵」の三篇の小説の本質と戦後の評価内容を検討することで、そこに含まれる問題を発掘し、「文学のアイデンティティー」という観点から検討を行い、「皇民文学」という殖民意識が充満し価値を下げる名詞を置き換えることを試み、陳火泉と周金波の皇民文学小説の研究に斬新な角度を提供した。

姚蔓嬪の修士論文「王昶雄小説研究」は、王昶雄の戦前の検討可能な五篇の小説を主題とした研究である。作家の生い立ちを追うだけでなく、章を分けて小説各篇を紹介し、その中で論議を呼んだ小説「奔流」の各章を研究するに当たり、小説創作の背景、人物の性格、形式の含意、秘められた精神を検討しただけでなく、同作品の戦後の評価と解釈にも検討を加えており、王昶雄の細微に渡る心境や文学創作の風貌と作品自体について、詳細な説明と分析を行い、後世の研究者に確かな研究の礎を残したものと言える。

陳建忠の「発現台湾：日治到戦後初期台湾文学史建構的歴史語境」は、歴史の文脈という角度から台湾文学史が発見される「現場」を「再現」したものであり、作者は日本統治時代末期の島田謹二による「外地文学」は、台湾を「他者」とする「コロニアルな視線」の結果であり、島田が露見させたものは紛れもない殖民者の優越意識であり、文学的な殖民主義であるとしている。また黄得時は島田の本土主義史観に対し反殖民支配的な論述という意義を持ち、戦後初期の台湾の作家と外省人作家の台湾文学論争と台湾文学史の構築には複雑な権力関係があり、台湾人作家は頼和文学の強調と台湾文学史の構築そして再構築により「汚名化」や「無視化」の意図を逃れてきたと指摘している。

その他、尾崎秀樹「決戦下の台湾文学」『近代文学の傷痕』岩波書店（1991 年 6 月 14 日）103 - 193 ページと、垂水千恵の「台湾人作家のアイデンティティーと日本―周金波の近代観」『台湾の日本語文学』五柳書院（1995 年 1 月 24 日）51 - 72 ページの、二名の日本の学者の研究が非常に重要といえる。

（五）文学史執筆

以上は、台湾新文学運動と皇民化運動の時期に関する先行研究であるが、何れも台湾人作家の作品に偏っており、日本人作家の作品に至っては上述の研究にも幾らかの論及は見られるものの、研究の主題であるとは言い難い。日本人作家の作品は、異文化の理解と共生という範囲において、統治者としての優越的地位を保ったことで、台湾文化の衝撃を受けることは比較的少なく、十分に日本文化を主体とする立場にたち、台湾文化に対する観察や想像を表現したと見ることができよう。このような作品は日本文学史上では、外地文学又は南方文学と称され、このタイプの日本人作家の作品には、台湾文化の理解と共生の程度を表現している作品も幾つかある。日本文学史上で台湾の人、事、物を描写の主体としたいわゆる外地文学の作家には、主に 1910 年代前後の竹越与三郎、中村古峡、1920 年代の佐藤春夫、梶

井基次郎、葉山嘉樹、1930 年代の中村地平、真杉静枝、1940 年代の西川満、新垣宏一、坂口れい子等が挙げられる。

外地文学という言葉は、日本統治時代の日本国内の比較文学者、島田謹二によるものである。彼は文学史を著述することで日本統治時代の台湾文学の意義を考察しており、また彼の学生であった黄得時もその影響を受け、台湾文学史を書いている。日本統治時代の学者または作家が台湾文学史の著述を手がけ、日本統治時代の日本人と台湾人や、その身を置いた時代の日本と台湾の文化の理解と共生の程度について表現している作品としては、島田謹二と黄得時が最も重要であろう。

島田謹二と黄得時に関する研究では、橋本恭子の修士論文[37]が多くの文献を収集し、島田謹二「外地文学論」の形成の過程とその背後にある真の意義を考察し、新しい見方を示している。橋本の論文の主要な論点は、島田謹二は台湾文学を研究したのではなく、在台湾日本人の文学に注目しており、「台湾文学」という表現を使用せず、自身が関心を持った在台湾日本人の文学は「台湾の文学」または「外地文学」等の異称で呼んでおり、基本的には台湾文学に対しては全く「学術的興味」を有していないと考えていることである。故に橋本は、島田を殖民主義文学史観から台湾文学史を研究したと見なすことはできないとし、またこの観点から従来の台湾、日本の研究者らの島田に対する批判はすべて固定観念による誤解であり、島田が台湾に在住した時期の比較文学上の成果を正視する必要があると批判している。このほか、橋本は島田と黄得時の師弟関係にも焦点を当て、黄得時がこのときに書いた「台湾文学史」の意義を検討している。黄得時は島田と比較すると、島田の台湾文学史観との最大の差異は、前者が「本土中心主義」であり、後者は「宗主国中心主義」であることであり、この差異により両者の「台湾文学」の定義は明確に異なっている。

橋本の論文で黄得時に関して重要な点は二点ある。第一点は、「黄得時は島田が内地人を中心とする『台湾文学史』を書いたということに対してではなく、島田の「『台湾文学史』を単独で考える必要は全然ない」という考え方、あるいは「『台湾文学史』は書きたくもなかった」という態度を批判している」ことである。第二点は、黄得時は島田が研究を「分担」し改隷以後の在台内地人文学を研究対象としたことを理解しており、このため黄得時は島田の動機をまったく批判していないことである。橋本の観点について、黄美娥は、島田謹二『外地文学論』の観点は、「その源がフランス殖民地文学の論点に由来しており、実際には依然として帝国主義の本質を脱していない」とし、かつその「『特に』本島人文学の視点を理解せず、高姿勢の殖民者の地位にあることから逃れていない嫌いがある」。としている。

このほか、陳建忠「発現台湾：日治到戦後初期台湾文学史建構的歴史語境」[38]は、歴史のコンテクストから台湾文学史が発見される「現場」を「再現」している。作者は日本統治時代末期の島田謹二による「外地文学」は、台湾を「他者」とする「殖民的視線」の結果であり、島田が露呈させたのは正に殖民者の優越意識、文学の殖民主義に他ならないとしている。その一方で、黄得時の島田に対して提唱した本土主義史観は、反殖民支配的の論述としての意義を持つものである。戦後初期における台湾人作家と外省人作家の台湾文学論争と台湾文学史の構築には、複雑な権力関係が存在した。台湾人作家は頼和文

[37]橋本恭子「島田謹二《華麗島文學志》研究–以「外地文學論」為中心–」清華大學中國文學研究所碩士論文、（2003 年）
[38]陳建忠「発現台湾：日治到戦後初期台湾文学史建構的歴史語境」、『台湾文学評論』、1 巻 1 号、（2001 年 7 月 1 日）

学を強調し、台湾文学史の構築や再構築を行うことで、「汚名をきせられたり」や「無視されたり」することを免れようとしたのである。陳建忠は、橋本が「島田は『台湾の文学』を研究しただけで、『台湾文学』を研究したのではない。ゆえに殖民主義史観を持つと見なすべきではない」というのは島田の弁護にすぎないと指摘する。島田は台湾人作家の存在を意識しなかった訳ではなく、彼が台湾文学を軽視して「執筆しなかった」のも一種の「執筆」であり、また一種の殖民主義から「書かなかった」のであるとし、更に島田は「啓蒙理性の進歩主義ロジックをもって『異族』という対象を改造すべき低劣なものとした。台湾人作家を見ないふりをしたのではなく、軽蔑的な態度をとったのであり、まさしく殖民者の優越意識、文学の殖民主義を露呈した」。ものだと指摘している。

（六）文学史全体の研究

以上は詩社、台湾新文学運動、皇民文学、文学史執筆等に関する先行研究であるが、このほかにも、文学史全体の角度から日本統治時代の台湾文学を検討した先行研究がある。

まず、藤井省三は『台湾文学この百年』（東方書店、1998 年）の中でB.アンダーソン「想像の共同体」とハーバマス「公共圏」の論点を援用しながら台湾ナショナリズムを論じる時、「大東亜共栄圏建設」とは「欧米殖民地であった東アジアの日本殖民地への転換を意味している」と指摘している。欧米殖民地の日本殖民地への転換とは、当時の日本帝国が欧米と肩を並べ得るという自負でもある。殖民地台湾の視点から見ると、日本への同化は欧米への同化であり、日本統治期に日本文学に学ぶことは帝国日本への同化であると同時に、殖民地台湾が自主的な近代化を進めるための一つの方法だった。つまり、台湾文学青年らが日本文学を近代化のための一つの方法と見なしていたと言えるのであり、文学的模倣は近代化のための模倣でもあった[39]。

こうした比較的理論的な研究の他に、中島利郎、河原功、下村作次郎、黄英哲等の学者が編纂出版した『日本統治期台湾文学、日本人作家作品集』（緑蔭書房、1998 年）六巻、「日本統治期台湾文学、台湾人作家作品集」（1999 年）、六巻がある。このうち五巻は日本語の作品で、別巻は中国語の作品である。また『日本統治期台湾文学集成』（2002-2003 年）全 20 巻は、日本統治時代の最も重要な作家を網羅していると言える。歴史的な理由から日本の学者の大多数はこの時期の台湾文学研究に注力しており、多くの史料の整理と研究の成果が出版されている。その中でも比較的重要なものは、上述の二種類の作家の作品集のほか、さらに以下のものがある。中島利郎、 河原功、下村作次郎の編集した『日本統治期台湾文学研究文献目録』（2000 年）、そして中島利郎著『日本統治期台湾文学研究序説』（2004 年）である。『文献目録』の中には、主に台湾人作家の「張文環、龍瑛宗、呂赫若の著作目録と研究文献目録がある。日本人作家では西川満、濱田隼雄、坂口零子、中山侑等の四人で、「日本戦後台湾文学関係研究文献目録」と「日本統治期主要文芸雑誌総目録」はこの領域における関連研究資料の集大成と言う事ができよう。中島教授はまた「日本統治期台湾文学研究小事典」（2005 年）を編纂しており、同書の写真史料による台湾文学小史は簡明にして要を得ており、使用に便利で学者必携の研究参考ハンドブックといえる。

英語による研究では、阮斐娜教授が最近出版した学術書『帝国陽光下：台湾与南洋日本殖民地文学

[39] 藤井省三『台湾文学この百年』、東方書店、（1998 年）

(Under an Imperial Sun: Japanese Colonial Literature of Taiwan and the South)』(University of Hawai' i Press、 2003 年) がある。阮教授は台湾出身で両親も日本の殖民統治を直接経験し、カリフォルニア大学バークレー校の日本文学博士、現在はコロラド大学東アジア言語文化学科の教職にある。同書は文化や学術領域を超えた観点から、殖民地台湾と南島の文学、言語、文化の情境において、殖民帝国と被殖民者の関係、特に言語は帝国統治の手段であると同時に、被統治者が自己のアイデンティティーを表現する手段であることについて検討している。著書で論及しているのは、西川満、楊逵、呂赫若、皇民文学作家の周金波と陳火泉の小説家や、戦後に台湾人が日本語で帝国主義を批判し続け、二巻の『台湾万葉集』の出版したことなどのポストコロニアル現象である。本書には 30 頁に及ぶ参考文献が挙げられ、確かな引証をつけて緻密に立論されており、高度な学術水準を有している。作者が独特の文化的背景と学術上の訓練を有していることで、このような重要な研究成果を生み出すことができたのであり、日本統治時代台湾文学研究の重要な里程標ということができる。

（七）先行研究の補足と反論

1.異文化先行研究の補足

上述の本論文の異文化の理解と共生の問題意識と関連する研究成果を見ると、これらの台湾文学の研究の大部分は文学作者個人の思想や文学組織団体の発展、または文学作品の内容が持つ意義を検討するものであり、はたまた植民帝国と被植民者の間の関係等についての検討するものである。関連する検討のテーマと異文化の理解と共生の概念は無関係ではないものの、正面から異文化接触の研究を行ったものではない。さらに今までの異文化研究では、単に政治地位の平等と異文化に関する議題を研究したが、政治地位の不平等に対し、植民国と被植民地国間における植民統治政治の不平等異文化の接触の問題に関する研究が殆どなかった。ゆえに本論文の、異文化の理解という概念異文化先行研究の不足を補足するものである。

2.漢詩の考察は植民地統治に対する反論

詩社を中心とする考察は、日本および台湾という二つの異文化がの要素を際立たせることができる。もともと台湾には中国の伝統下にある文化人が存在しており、日本統治時代以降に来台した日本人の多くが漢学の素養を持っていたため、双方が詩社を組織し、互いに接触や各おのの異論が生まれたのである。従来の研究では植民統治側からすれば、初期の日本台湾統治において、文人との唱和は篭絡と言える植民政策であった。実際には日本文化と台湾文化の間には同じ中国文化の要素があったとし、これを無視された。初期の日本統治台湾における異文化の視点から、台湾古典文学の漢詩及び詩社を探求することはなかった。本論文では、これまでの植民地異文化研究に対する反論と補足をおこなっていくものである。

3.中国文化は異文化とみなす新たな視点

1920 年代、台頭しはじめた台湾新文学運動を中心に、台湾文学の本質について台湾人が考察し始めたことで勃発した新旧文学論争、郷土文学論争、台湾語文の論争等を見ることができる。これらは日本という異文化から衝撃を受けた結果である。結局のところ、この台湾新文学運動で日本という異文化が如何に理解され、如何なる変化と共生を生み出したかを論じているのが本論文の特色の一つである。台湾

文化は日本文化の衝撃を受け、1920 年代台湾文化啓蒙運動に加え、さらには中国自身の新文化運動で台湾文化に対して新しい異文化の発信源となった。台湾において如何に旧中国文化を新中国文化に変えたのか、そして同時に日本文化及び中国文化の衝撃を受けて、如何に台湾的特性を持つ台湾新文学に変貌していったかを論じたものである。

4. 強制的に受け入れた政治的不平等下の異文化

皇民文学の検討では、政治的な強制力の下、日本文化が如何に台湾文学の発展に衝撃を与えたかを浮き彫りにする。皇民化体制下、植民当局は漢文を廃止し、漢文白話文文学に存続の余地を与えなかった。そのため、台湾人作家の日本語作品、いわゆる「皇民文学」が大量に出現することになったが、ここが皇民化政策以前と大きく異なる状況である。そして、この「皇民文学」が如何に日本文化の影響をあいまいに表現し、同時にある種の台湾意識を表したかを考察することは、台湾文学史上における特殊性を明らかにするものと考える。また、この時期は台湾文学史の総合的な研究が開始された時でもあり、この文学史の著述を考察することで、異文化の理解と共生の方向から台湾文学史を総合的にすることがで検討きるとともに、これまでの植民研究と異文化研究の不足にも補足できれば幸盛の至りである。

日本植民地に関するこれまでの台湾の論文は政治・植民地・戦争といった観点から論じているものが多いが本論文では一方的な中国民族主義、植民主義、後植民主義を取り除き、台湾文学から見た日台間の異文化理解と多文化共生の視点から論じてみた。尚、台湾文学史からは異文化への抵抗・理解・共生・融和・再生が、如何に発生したかをも論じる。これが本論文のもっとも特色である。

第二章 詩社日中台文人の唱和

第一節　日本殖民地時代以前の台湾漢詩の発展

台湾と日本は、古くから異なる政治体制の下で発展してきたが、東アジア文明の発展という過程においては中国という漢文化圏の影響を等しく受けている。台湾は主に明の鄭成功の時代から、中国文化が大量に輸入され、中でも言語や文学に関する分野では、中国の漢詩や、漢詩と共に詩社が発展を遂げている。

台湾の漢詩と詩社の発展は、一般的には台湾古典文学の範疇に属するものであるが、同時に漢文学の産物でもあり、明の鄭成功時代に起源を発するものである。台湾に関する記録は、それまでの中国の文献、例えば三国、隋、宋、元、明代の典籍にもが見られるが、これは歴史的な史実を記載したもので文学作品ではない。台湾最古の古典文学は 1602 年（明・万暦 30 年）に遡る。沈有容の倭人征討に随従して台湾に来た陳第は、台湾に留まること二十日余りで台湾古典文学とされる「東番記」を記述しており、これは中国人の記した台湾に関する最初の地理書とされている。だが陳記の「東番記」は漢詩作品ではなく、台湾で実際に漢詩が作られ、詩社が組織され始めるのは明の鄭成功時代以降である。

明の鄭成功時代は台湾文学の黎明期であるが、それは明朝遺民の文人が遺民詩と移民詩を持ち込んだことや、鄭成功の死後、鄭経が陳永華の協力を得て台湾で学問を興し、中国文化の下で台湾現地の文人の育成を始めたことなどに起因する。この時代の遺民詩では、1661 年にオランダ人を駆逐し台湾を東都として台湾に政権を築いた鄭成功（1624―1662）自身の漢詩があるが、彼は「復台」の中で「開闢荊榛逐荷夷、十年始克復先基。田横尚有三千客、茹苦間関不忍離。（荒土を開墾し、オランダ人を駆逐し、十年を経てようやく礎を築き得た。開墾を共にした多くの同胞は中国から渡台し、この地で苦心を重ねた。この地への愛着は捨て難いものがある。）」[40]という一文を残しており、十年を費やしてようやくオランダ人を駆逐し台湾を回復し、荒漠たる小島であった台湾が反清復明の基地となったとしている。このほか 1662 年に鄭成功が死去し政権を継承した鄭経は、その遺作『東壁樓集』に 479 首の詩を収めており、これも遺民詩の重要な作品として位置づけられている。他にも、鄭成功父子と共に渡台した朱術桂、徐孚遠、王忠孝、辜朝薦、李茂春、盧若騰、辜朝薦、李茂春、沈光文等もみな学識豊かな文人であり、台湾で多くの詩文作品を残している。彼らはいずれも亡き祖国を偲び、際限ない郷愁と苦悶や憤りに満ちている。この種の文学は流寓文学とも呼ばれた、遺民文学、流亡文学、郷愁文学である。

台湾文学はこれらの文人の影響の下で発展してきた。中国文化の漢詩が台湾に持ち込まれ、そして先の文人達が詩社を組織し、漢詩の創作活動を開始した。鄭成功時代の詩社は、現在の台南で成立した「海

[40]鄭成功、鄭経『延平二王遺集』、世界出版、（台北、1957 年）、46 ページ

外幾社」がその始まりであり、「海外幾社」は鄭成功に伴い渡台した徐孚遠らが創立したものである。詩人賴子清は、「海外幾社は明代台湾唯一の詩社であり、また台湾詩社の興りである事はほとんど知られていない」。と述べており、ここからも海外幾社は当時台湾唯一の詩社であり、台湾最初の詩社団体であったことが分かる。会員には徐孚遠、張煌言、曹従龍ら名を連ね、何れも鄭成功の渡台に随従した中原の人々で、「海外幾社六子」と称していた[41]。

鄭成功時代には流寓文学が台湾に中国文化をもたらしたほか、鄭経が陳永華の協力を得て学問教育を興し、台湾における中国文化の担い手を育成し始めている。鄭成功の渡台後、台湾は制度の創設期であり、また鄭成功自身がオランダ人駆逐の 1 年後に死去したこともあって、教育施設は十分ではなかった[42]。だが後継の鄭経が自ら統治に当たらず、統治に関する重要事項は参軍兼勇衛の陳永華に任せたため、陳永華が各政務を担当する上で「崇尚儒雅、與民休息（文化人を尊び見習い、民衆に休息を与えるを以って国を富ます）」[43]としたため、それまでの文教施策が次第に実を結び、台湾に更なる中国文化をもたらす事となった。

陳永華の文教施策はまず地方制度の改制と共に実施され、1664 年（明・永暦 18 年）には東都を東寧とし、昇天興、万年県を州に、また澎湖と南北路に安撫使を設けて、官吏を各地に駐屯させた。そして地方制度の確立後の 1665 年、陳永華は速やかに孔子廟を建設し学校を設置することを提案した。いわゆる孔子廟の祭祀と学校教育を結びつけた「廟学制」である。陳永華は孔子廟の建設の過程で、明倫堂を設置して学校教育の場とした。これは孔子廟の祭祀と学校教育をという 2 つの要素を含む廟学の場として、歴代の廟学制の基本構造となった。孔子廟の完成後、鄭経は各地に学校を設立して中国の儒学者を招き、民間の子弟の教育に当らせるよう再び命じている。

地方の廟学制と学校のほか、陳永華は明代の科挙制度に倣って儒学生を選抜し、太学に送って教育を受けさせた後、官吏として登用した。陳永華は「両州三年両試、照科、歳例開試儒童。州試有名送府、府試有名送院、院試取中、准充入太學（天興・万年の 2 州では 3 年間に 2 度試験を実施する。州試験に合格した者は府学に進み、府試験に合格した者は学院へ進む。学院試験に合格した者は太学で学ぶ事が出来る）」と定めている。鄭成功の太学生時代は、「仍按月月課、三年取中式者、補六官内都事、擢用陞轉（依然として毎月試験が実施される。3 年に 1 度の試験に合格した者は、六官の内の都事に任命される。）」[44]としている。漢民族以外に先住民も陳永華の設立した社学教化により中国文化を受け入れ始めた。先住民は元々文字を持たず、オランダ、スペイン時代に西洋教育を受けていたが、鄭成功父子の来台後は漢民族の強烈な文化的影響により、中国の儒教文化を受け入れ始めた。こうして陳永華の主導のもとに孔子廟、そして学校が設立され、中国儒教の文化は次第に台湾に広がっていった。

---

[41]賴子清「古今台湾詩文社（一）」、『台湾文献』、10 巻 3 号、(1959 年 9 月)、79 ページ
[42]連横『台湾通史』、幼獅文化、(台北、1978 年)、213 ページ
[43]沈雲『台湾鄭氏始末』、台湾省文献委員会、(南投、1995)、60 ページ
[44]江日昇『台湾外紀』、世界書局、(台北、1985)、236 ページ

中国儒教の文化は鄭成功時代に台湾へ伝わったものの、鄭成功が台湾を統治したのはわずか 22 年間（1661-1683）に過ぎず、台湾本土の文人の育成は実を結ぶには至らなかった。中国文化の漢詩や詩社に発展の兆しが見え始めたのは、清の台湾統治が始まってからである。清が台湾を統治した 212 年間（1683-1895）の初期においては、鄭成功時代の教育施設が継承されていたが、台湾本土の文人育成に関して言えば、台湾本土の文人の数が康熙・雍正の時代に渡台した役人や文人より少なく、台湾文学の発展にとっては中国から渡台した役人や文人こそが主な活動者として、儒学、県学、書院、義学を以って中国文化の普及につとめ、地方志の中の芸文志の編纂に力を注ぎ、高尚な文化的精神を伝えたといえる。こうした役人と文人が中国文化を普及させたと同時に、台湾文学へ比較的大きな影響を与えたものが、その個人が記述した台湾見聞録である。これが台湾文学に対して与えた影響は、本節で言及する漢詩を以って言えば、1692 年に分巡台廈兵備道兼理学政に任じられた高拱乾が編纂した『台湾府志』に見られる。詩という形式を用いて台湾八景、つまり「安平晩渡」、「沙崑漁火」、「鹿耳春潮」、「鷄籠積雪」、「東溟暁日」、「西嶼落霞」、「澄台観海」、「斐亭聴濤」といった台湾府の八か所の景観が表現されている。清代初期には来大した役人と文人による文学表現のほかには、本土の文人によるものが少なくないが、著名な文人としては、王璋、郭必捷、陳文達、李欽文、陳慧等が挙げられる。これら台湾本土の文人の多くは科挙出身者で、残した文学作品、中でも漢詩は大部分が方志の芸文志に収録されており、その大多数は八景詩である。

清の康熙・雍正年代の漢詩の発展については、作家個人の創作以外に、鄭成功時代の文人らの集団的活動である「海外幾社」が継承された後、さらにもう一つの詩社「東吟社」が生まれている。「東吟社」については、沈光文「東吟社序」の記述によると、1683 年から 1684 年の間に趙蒼直らと共に詩社を創設し、当初は「福台閒詠」と称し、1684 年に諸羅県令の季麒光が加入した際に「東吟社」に改名したとされる。

台湾においては、康熙・雍正年間に中国文化の礎が築かれ、乾隆・嘉慶年間から台湾文学活動が盛んになった。清統治時代の台湾の漢詩作者の構成を全体的に見てみると、次の二つに大別される。まず、外部から渡台してきた人物で、齊体物、舒輅らのように任を受け渡台し官職に就いた者、陳夢林、藍鼎元、謝琯樵、査元鼎、梁成旃らのように来台して幕客となった者、黄佾、陳淑均、呂西村、林維丞、林豪、楊浚、呉子光らのように招聘されて教育、修志等の編纂事務を担当した者、郁永河、施世驃、鄒貽詩のように公務のため渡台した者、蕭竹、王育菁らのように観光のため渡台した者などである。次に台湾本土の人物である。これには沈光文、陳元図らのような鄭成功の旧臣、および鄭成功以後に中国から来台した人々の子孫があてはまる。こうした創作に従事した台湾本土の人物は、いずれも科挙階層に属している。また漢詩の題材も戦争、歴史、風景、風物、漢民族の習俗、先住民の習俗、詠懐、その他など、創作動機も心情表現、民俗記録、課士の論文、政治批評、または詩文のやりとりなど、次第に幅広いものとなっていった。

乾隆・嘉慶年間の後、漢詩の創作活動は益々勢いを増したが、それは詩社の発展においても見ること

ができる。清統治時代の台湾詩社は主に台北、竹塹、中部、南部の 4 つの地域に集中していたが、最初に発展した南部、特に台南府城では文人の学識が豊かで、文芸を尊ぶ気風が濃厚であった。丘逢甲、許南英、汪春源、施士洁など、この地域から選ばれた文人たちもそれぞれ詩社を組織し活動していた。例えば引心文社は 1809 年に設立され、後に台湾書院と改められ、科挙の試験課題である詩文を中心に陳廷瑜をその指導者に立てて活動し、また章甫、陳震曜らの姿もあった。崇正社は 1878 年に成立、許南英、陳望曾、施士洁、汪春源らが詩友となった。斐亭吟社は 1889 年に成立し、唐景崧が中心的指導者であった。浪吟詩社は 1891 年に成立し、許南英、蔡国琳、胡殿鵬らが主な参加者だった。その他にも東社、南社、中社、西社、北社等があった。南部の詩社全体の特色は、詩文の活動と科挙が密接に結びついていることであり、文学集会は教育的な意味合いを強く擁し、活動地点は祠や廟と関わりのある場所であった。

一方、台湾中部には私塾や文人の活動拠点があった。神岡の呂家が招聘した彰化の挙人、陳肇興と嘉応の挙人、呉子光、烏日の貢生、楊蘭馨等が呂家で教育に当たったことは有名である。このように清代後期に台中の文人たちが筱雲山荘の呂家を拠点に育っていったが、当地の詩文の活動は主に科挙を教育するものであったため、1745 年に白沙書院、1811 年に主静書院、1823 年に興賢書院、1824 年に文開書院、1845 年に鰲文書院、1869 年に文英書院、1887 年に磺渓書院、1889 年に宏文書院が設立されたように書院に集中した。書院以外の詩社としては、彰化で蔡醒甫が発起人となった「荔譜吟社」（光緒 16 年）が挙げられるが、ここでは台湾で盛んであった詩鐘[45]が取り入れられている。またこの外に鹿港では「蓮社」という詩人の組織もあった。

竹塹地方でも詩文の活動は非常に盛んであったが、それは同地で科挙の合格者が増加していったことによる。活動は嘉慶・道光年間から次第に盛んとなり、光緒年間にはピークに達し、同一家族から複数の科挙合格者が現れるようになった。例えば鄭用錫家は 21 人、李錫金家は 9 人、林占梅家は 6 人などである。また、文学を尊ぶ風潮が高まると、文酒会も盛んなものとなった。1851 年（咸豊元年）に文人の鄭用錫は「晩年築北郭園自娯、頗有山水之楽。好吟詠、士大夫之過竹塹者、傾尊酬唱、風靡一時、至今文学猶為北地之冠。（晩年に北郭園が修築され、自然を愛でる喜びができた。竹塹を通る士大夫と酒を飲み、詩を読むことが流行しているが、竹塹の文学が一番素晴らしい）」と詠んでいる[46]。ほかにも 1849 年（道光 29 年）に作られた潜園があるが、これについては林占梅が「築潜園於西門内、結構甚佳。士之出入竹塹者無不礼焉、文酒之盛冠台北。（潜園は西門に作られた潜園はすばらしく、竹塹の文人はみな称えている。酒を飲みながら詩を吟じる宴は台湾の北部が最も盛んなのだ）」と詠んでいることからも、

---

[45]清代には子弟の対聯の能力を養成するために、「詩鐘」と呼ばれる教育活動が出現していた。これは対聯を学習する初期の段階で、時間制限を設けて詩をよむ文字の遊戯であり、線香一本をたく間に一聯または多聯を作る。線香が消えれば鐘が鳴るため「詩鐘」と呼ばれた。対聯ができれば律詩の中の聯句として遊戯は終わりとなる。

[46]鄭用錫は「晩年築北郭園自娯、頗有山水之楽。好吟詠、士大夫之過竹塹者、傾尊酬唱、風靡一時、至今文学猶為北地之冠。（晩年に北郭園が修築され、自然を愛でる喜びができた。竹塹を通る士大夫と酒を飲み、詩を読むことが流行しているが、竹塹の文学が一番素晴らしい）」と詠んでいる。列傳六，連横『台湾通史』、34 巻(南投、台灣省文獻委員會)、PP.961-969
http://140.125.168.74/literaturetaiwan/WenYi/05/01/05_01_02.aspx?did=22248

竹塹地方の文酒会と文学の発展には密接な関係があったことは明らかである。こうした情況の中で、同地では詩社の活動も盛んになっていった。例えば竹城吟社は道光・咸豊年間に鄭用錫が竹塹七子の鄭士超、鄭用鑑、郭成金、劉藜光、鄭如松等と共同で、潜園吟社は 1849 年（道光 29 年）に林占梅が潜園を建てた際に組織したものである。斯盛社は 1857 年（咸豊 7 年）、鄭用錫の孫、鄭景南が科挙に合格し、詩文の才を磨くために設けたもので、北郭園吟社は 1886 年（光緒 12 年）に鄭如蘭が組織した詩社である。竹梅吟社は 1886 年、蔡啓運が竹、梅二社を合併して組織されたもので、作品集『台海撃吟集』を残している。

最後に台北地方では 1851 年（咸豊）以降、板橋で事業に成功した大家族林家が邸宅を落成した際、謝穎蘇、呂世宜、陳夢山、莫海若等の文人墨客が前後して招かれた。林家は当時まだ科挙合格者を出していなかったものの、台湾の文人たちを招いて文芸を表現させ、台北地方の文壇における重要な家となっていった。林家の子孫と呂世宜等は詩文の創作に積極的に従事し、新竹の鄭用錫の「北郭園」、林占梅の「潜園」文酒会は何れも盛況だった。台湾に居住した文人と中国本土の文人の結社については、唐景崧が 1893 年に創設した「牡丹吟社」が最も有名である。これは台湾文学史上初の全台湾に影響力を及ぼす詩社となり、発起人の唐景崧をはじめ、渡台した士大夫や、林鶴年、林景商（輅存）、施士洁、林仲良、郭賓石、林啓東、黄宗鼎、丘逢甲、汪春源等の台湾本土の詩人、百人余りが社友となった。台北の文学はこの大規模な詩社の出現で繁栄を極めたといえる。また『偷閒録』と『太古巣聯集』を著した台北の陳維英は、詩文と対聯に長けていたが、門人の張書紳は楹聯（エイレン）に、また大稲埕の挙人、陳霞林（1834―1891）も対聯[47]に秀でていたことなどから、台北は楹聯文学が非常に発達していたことがうかがい知れる。台湾古典文学も地理的には南から北に、西から東へと発展を遂げており、早期には南部にしかなかったものが次第に台湾全土へと広がり、各地に文学の園が開花したのである。

前述の日本統治時代より前の台湾における漢詩と詩社の発展を見ると、台湾が中国文化の影響を受けたのは日本に比べ晩い。だが相対的に見れば、台湾における中国文化の漢詩と詩社は中国本土からの延長であり、言語においても漢詩の創作に従事した文人も同言語、同民族の中国に由来している。一方で日本は中国文化を受容した時期がかなり早かったとはいえ、言語と民族の観点から見れば、中国文化は伝来した異文化であるがゆえに、中国文化の漢詩と詩社の発展に関しては、日本もまた異文化理解と共生の過程を経てきたといえよう。

異文化である中国文化に対して、日本文化の理解と共生は古代から始まっている。そもそも日本の漢文とは、漢文学と称される学問分野を構成する。漢文学とは、中国に発達した文化を研究する学問であるため、内容的には文献・文化遺跡から社会現象までをも含み、漢字を基本として全ての分野を対象とした総合的な漢文学である。従って日本の漢文学を広義に解釈すれば、詩文や思想のみならず、芸術・技芸・生活様式なども含んだ、日本における中国文化の展開を総体的に見ることになる。その中で漢文

[47]王松『台陽詩話』上巻・台湾省文献委員会、（南投、1994 年）、7 ページ、91 ページ

と言えば、専ら漢字を媒介として、日本人に因って書かれた漢詩文や史書、儒教の解釈や諸子の読解などを指す。

日本が中国の異文化の影響の下で、10 世紀前後から日本の詩作文化を徐々に発展させている。日本の漢詩文は菅原道真から始まり、唐詩の模倣の段階を脱して日本独自の漢詩を発展させたが、それは主に、菅原道真が唐文化の影響を減らすために遣唐使の廃止を提唱したことによる。そのため 10 世紀以降、日本の漢詩文は次第に衰退し、国風文化の興隆がこれに取って代わった。国風文化は日本の漢詩文が仮名文学の時代へと発展したことの表れであり、また中国文化を日本式に消化し、その結果として仮名文字の発明と国風文化の興隆させたものである。仮名文学（国文学）が登場した代表的な作品には、日本最早期の勅撰和歌集である紀貫之の『古今和歌集』、日本に現存する最古の物語『竹取物語』、日本最早期の日記文学である紀貫之の『土佐日記』、日本最早期の和歌物語『伊勢物語』、宮廷生活や自然風物等の感想を記録した随筆散文である清少納言の『枕草子』、貴族社会の愛と苦悩を描写し日本古典文学の高峰と称せられている紫式部の『源氏物語』などが挙げられる。

明治時代の台湾統治前からの漢詩の発展史については、台湾における漢詩の発展を振り返ってみると、日本および台湾間の漢詩が実は同じ中国文化の要素を有していることがわかる。だが日本が早期に中国文化を理解し、共生しながら日本独自の古典文学体系を生み出したのに対し、台湾は比較的遅くに中国文化の影響を受け、同一の言語、民族の移植として、共生の問題を理解し得ることが難しかった。そのため、台湾は日本の統治時代に入ってから、漢詩の視点から日本、台湾間の異文化の理解と共生の問題に直面し、融合または抵抗という現象を見出すことができたといえよう。

第二節　詩社の組織と日本殖民地文人の交流

台湾の日本統治時代について、漢詩を以って日台間の異文化の理解と共生に目を向けると、そこには既に融合と抵抗という２つの現象を認めることができる。だが従来の漢詩関連の先行研究は、異文化理解及び共生という面、民族主義の「反抗史観」あるいは殖民理論の特異性をまったく無視している。故に本論文では漢詩と詩社を例に挙げ、日台間の異文化接触後の現象をさらに追求してみることにする。

従来の民族主義的精神による「反抗史観」に基づく研究や評価は、台湾文学の作家の作品に過度な反日的色合いを帯びさせるものであった。例えば廖一瑾はその『台湾詩史』において、「文人の抗日は甲午戦争から光復まで止まることなく続けられた。文人はその気勢みなぎる筆力を以って心中の不満を表現し…各地の知識層は中国伝統文化の保存のために、私塾および詩社を設立して民族意識を呼び覚ました」[48]とし、また例えば聞樵はその「漪蘭吟社」という文章で、彼らは「一生絶え間なく」、「漢学の没落は堪えがたく、故に詩学を提唱し、提唱によって国家的に重要なこの文化を大衆に広めることができる」[49]と

[48]廖一瑾『台湾詩史』、文史哲出版社、（台北、1999 年 3 月）、293 ページ
[49]聞樵「漪蘭吟社」、『台北文物』、4 巻 4 号、77 ページ

いう文化意識を持ったとしている。これらは何れも漢詩の早期の先行研究における民族主義史観である。近年、新史料の発掘と整理が増加していることにより、この種の研究はやや検討や修正が行われている。しかるに、黄美娥のような学者は、『北台第一大詩社−日治時代的瀛社及其活動』において、なお漢詩社の存在が必然的に「漢学の保存」という民族主義的意義を有したことを所与の前提としており、瀛社の組織した「漢詩文研究会」が漢詩文の読み方は中国語の発音でなく国語を用いるとしたことに言及して、「この様な漢詩文の読み方の新方式は、果たして漢学の保存に肯定的な効果や意義があったのかと疑わざるを得ない」[50]。としている。これらの関連研究は、何れも異文化理解と共生という面を無視しているものである。

この他、殖民理論の特異性から日本統治時代の台湾文学の漢詩というテーマを扱うに当たっても同様の現象が見られる。例えば黄美娥は、『日、台間的漢文関係：殖民地時期台湾古典詩歌知識論的重構与衍異』の中で、「『漢文』の語義に含まれる漢字、漢文学、漢文化、漢文教育等は相互に交錯し重なり合っているため、実際には言語（漢字）、文学（漢詩文）、文化（漢学、儒学、儒教）の三系統の問題を指している。三系統間にも流通、転用の現象があることは言うまでもない」。としている[51]。この他にも黄美娥は『差異/交混、対話/対訳：日本統治時代台湾伝統文人的身体経験与新国民想像（1895~1937）』の中で、社会的な影響力のある台湾人人士たちが漢文、漢詩により殖民政策への支持を表明した作品は、同時に漢文学を書くことで殖民社会における殖民統治者との距離を縮め、台湾人を次第に殖民へと引き入れたとしている[52]。また、柳書琴は『『風月報』中的同文論述：殖民主義附身的悲劇』の中で、日本の台湾に対する言語政策は「日本語同化主義」精神を主として、「漢語同文主義」をその手段に用いて漢文を書かせ、現代的な印刷出版と読書が有する影響力により、台湾殖民社会の下層における伏流を作ったと説明している。

これらは民族主義と殖民主義理論の漢詩文に関する観点であり、この他にこれら２つの観点を結び付ける研究がある。例えば学者の李郁蕙は、帝国殖民主義が殖民地を拡大する一方で、再び血縁を主要な要素として考えることはできないとし、殖民統治者が血統民族主義と言語民族主義の他に種族の純粋性に内在する排他性、あるいは言語の包容性を強調し、殖民地人民が日本語の学習を経ていかに日本人となるかを学ぶことを呼びかけ、「日本語は日本人の精神的血液」とし、漢文の「同文」を以って、文字と意味の上での共通理解と融合を促し、殖民者は言語学習という過程を経て、言語共同体という国家民族の理想を展開させようとする。これにより殖民主義においては、日本語の「同化」と漢文の「同文」の間に密接な関係があることになる。

前述の観点にはその限界があるものの、それでも文化的観点からの研究が存在する。川路祥代は『殖民地台湾文化統合与台湾伝統儒学社会』において、文化統合の観点から殖民者と被殖民者による儒学交渉の問題を検討した[53]。歴史的背景から、漢文は帝国殖民者と台湾被殖者が共有する文化資産となってお

---

[50]黄美娥「北台第一大詩社−日治時代的瀛社及其活動」、『古典台湾：文学史・詩社・作家論』、265−273 ページ
[51]『台湾文学研究集刊』、（2006 年 11 月）、1−32 ページ
[52]『中国文哲研究集刊』、（2006 年 3 月）、81−119 ページ
[53]川路祥代「殖民地文化統合與臺灣傳統儒學社會（1895−1919）」、成功大学中文研究所博士論文、（2002 年）

り、日本殖民者は漢文を通して形成されたコミュニティやその浸透性を巧妙に応用し、時により、物事を都合よく処理できるかどうか、また被殖民者の適応能力、儒学時代の新たな境地を展開、発展させていけるかを試すものとなった。張明権は『同文政策下の台湾漢詩壇（1931-1945）』において、918 事変以後の日本帝国と台湾総督府の「同文」政策の相異や修正の過程を検討し、「在台同文主義」、「在華同文主義」、「自己同文主義」を挙げて、「同文政策」の分裂と再編を論述した[54]。上述の多数の関連研究において、殖民地に元来存在していた文化的要素と、殖民者が持ち込んだ各種の政策は相互に歩み寄るものであることや、少数の殖民者と多数の被殖民者が共に描き出す複雑な殖民地社会の外貌を知ることができる。

文化統合の観点は、殖民地が異文化の要素の下で有する複雑な外貌を明らかにしたが、しかし、かえって殖民者統治者の役割とその同文政策を強調するばかりで、被殖民者がいかに対応したかという面を重視していない。よって、詩社に参加することで漢詩の創作に従事した文人から見ると、文人の個人間の差異は相当に大きかった。日本の言語同化政策と漢文同文政策を支持する中にも日本出身の漢詩創作者が含まれ、さらにまた殖民者の同化同文政策を支持しない文人もあった。故に漢詩創作に従事する 2 種類の文人は、消極的な不反応、あるいは積極的な創作活動で抵抗を示すという、異文化理解と共生という両方の特徴的な面を持っていたのである。

日本が台湾を統治し始めて後の日台間には、漢詩創作の方面における異文化理解と共生の一つの側面として、台湾文人の消極的な抵抗が挙げられる。この種の文人の中では『台湾通史』の著述で知られる連横が最も代表的である。例えに、連横と林幼春の贈答詩を挙げるが、この林幼春と連横は平素から友好的であり、彼が連横に贈った 1 首の詩にはこうある。

> 按劍隋侯世莫前、干將補履亦徒然。人間真有禽填海、天上原無蠹化仙。歴劫神鰲淪禹績、
> 忍寒老鶴話堯年。孤山一掬冰霜涙、不敢憐君祇自憐[55]。

（隋侯や干將の時代はすでに過ぎ去る、剣で靴を補っても意味がない。世に小石で海を埋めようとする鳥は確かにある、天上に蠹虫が仙人に化けることはない。 難を遍歴した鼈甲は禹の功績を称え、極寒に耐えた老鶴は堯の時代を語らう。孤山で氷霜の涙を拭き、君を哀れに思い敢えず、己を哀れるばかりである。）

林幼春の詩の首句は隋侯珠を例えとし、隋侯珠は非常に貴重なものであり、暗中に投ずれば烱烱と光を放つのだが、これを取ろうとする者はなく、皆黙って見守るのみであり、良い物はかえって疑念を招きやすく、干将が天下第一流の宝剣を鋳るとしても、現実の生活においては、一銖銭で買う錐の便利さにはるかにかなわないと述べている。ここに表現していることは、ふさわしい用途に巡り合えない物の

---

[54]張明権「同文政策下的台湾漢詩壇、(1931-1945)」、静宜大学中文所碩士論文、(2008 年)
[55]この詩は「東雅堂」、林資修の「南強詩集」に収録、(台中、林培英、1964 年)、29 ページ
或いは題は「贈連剣花」、頼柏舟編「鷗社芸苑」第四集、(嘉義、鷗社印行、1995 年)、130 ページ

悲哀であり、その個人の境遇の比喩であり、最後には人間の成功はただ塵土に等しいとして自ら慰める以外にないものであり、寒梅樹の下で酒を飲んで生涯を終えるに及ぶものはないというものであった。林幼春の詩への返答として、連横は一首の律詩を書いた。その詩の内容は、

黄金何處築高台？已死燕昭老郭隗。射虎屠龍原易事、掞天闢地有奇才。一生肝膽酬巾幗、千古文章保劫灰。三十功名塵與土、且持尊（今作樽）酒對寒梅[56]。

（黄金の高台はどこで築く？燕昭王も老郭隗もすでに故人となり「燕昭王と老郭隗は春秋戦国時代の賢人で、人材発掘に精を出した」。虎を射ることも龍を斬ることも元来は簡単なことで、天地を開くには奇才がいる。一生の度胸を尊敬する女性に捧げ、千年の文章が難を逃れ、灰にならず。三十の功名に土と塵、盃を手にして寒梅に乾杯。）

連横の返事は、燕の昭王は既に死し、郭隗は老いて幼春には虎を射、龍を葬るに至るほどの智略があり、そしてその書くところの文章は非常に優れている。乙未の変により漢文化の伝統は未曾有の災難に遭遇し、また個人の才学を述べる文章も既に灰燼に帰しており、如何にすべきなのか。これは正に「三十功名塵与土」ではないか。そして樽酒寒梅はさらに幼春の詩の最後の「孤山一掬冰霜涙」に呼応し、連横の酒を飲み隠居し、志節を全うし、個人の主体性の自由を保つとの意思を示している。

この他にも、連横はまた収蔵する図書をひっくり返った巣の下の卵の危うさになぞらえている。連横は「櫟社席上有懐林癡仙頼悔之二兄」で、「焼かれた図書は既に跡形もなく消え去り、清らかな秋の日が風雨に荒らされている」。として詩中に図書の損壊を述べて、儒教の伝統が世の変化において崩壊したことを表現し、また彼の過去の生活様式もが消滅したことを隠喩している。連横は、既に破損した書は既に破損したのだ、未だ破損していない書も役に立たないとして、伝統文人が共に直面している困難な状況や、その解決の道は図書の用途を新たに捜すしかないということを隠喩で表している。

連横は詩作により、異文化が台湾を統治する状況下において、その精神が制約を受けるという心情を消極的に表現した。そして台湾文化自身が発展させてきた「擊缽吟」詩に対して、彼は強烈な反対意見を表明していた。連横はかつて、「20 年前、余はかつて台湾詩界革新論を『南報』に掲載し、擊缽吟の非詩であることに反対した。『中報』記者の陳枕山はこれを見て大いに憤り、論を著して批判し、櫟社の諸氏はこれを助けた。余は年少で血気盛んであり、これに反論し論争すること数日、世間を大いに騒がせた。林無悶が出てこれを仲介した。その翌年、余が台中に滞在する折に無悶によって櫟社へ迎え入れられ、枕山と相まみえることができた。枕山の道義の文章は、余の敬慕するところである。詩界の革新は、それぞれが自己の主張を持ち合わせているが、これによって我ら 2 人の感情が損われることはない」。と述べていた[57]。連横はかつて前後 2 度にわたり『台南新報』漢文部を担当したため、彼の「擊缽吟」への反対は主として『台南新報』「漢文欄」を通して伝統詩界「擊缽吟」に批判を提出するものであった。「擊缽吟の作品集に反対し、これを全く詩とは見なさない」。というその反対意見は櫟社の詩人、例えば

[56]この詩は連横は林幼春の詩への返答、「劍花室詩集」に収録で詩名は「酬南強」、台湾省文献会、（南投、1992 年）、111 ページ、
[57]連横『雅堂文集』、台湾省文献会、（南投、1992 年）、294 ページ

陳枕山等の『台湾新聞』「漢文欄」上での反論を引き起こし、台湾文壇の最初の論戦となった。

連横は『台南新報』紙上で台湾本土の漢詩を発展させるべきとの主張を積極的に発表し、また『詩薈』により、いつまでも殖民統治者に従属する立場でありたくないとの意思を示した。連横の出版した『詩薈』は 1924 年 2 月創刊、1925 年 10 月停刊で、全部で 22 期刊行され、その創刊理由は『詩薈』の発刊の序文に見える。「私は詩壇の一員である。先人らの功績を思い起こし、我が朋友を心に思い、ここに『詩薈』を刊行する」。また『詩薈』発行の主な目的は 2 つである。まず 1 つめは先人の功績を称え、前人の遺稿、遺書を続々と刊行する。2 つめは我が友を思い、現代文学を振興し、また話題の作家の作品を刊行することである。総じて連横は時代の新旧の交替、漢学の衰退、伝統文化教育の未完に感ずるところがあり、奮起して志を遂げる。趣旨はここに台湾の文運を振興することにあり、「興」、「観」、「群」、「怨」という詩教の核心をもって奮起し、台湾詩界を隆盛へと導くことである。連横の挙げた例から見て、彼と日本の殖民統治者との関係は良好であり、『台南新報』漢文部を担任したものの、漢詩の創作において、彼は復古をその基調とし、日本の文人と更に融合しようという所はなかった。実際、台中の櫟社社員や彰化の洪棄生等は何れもみな妥協せず、異族統治に抵抗する精神を呈している[58]。

連横の例は消極的な反応、または抵抗の一例であるが、日本の殖民統治下の台湾では、漢詩と詩社の発展において、殖民統治者の殖民政策上の翼賛に由来するものがあり、また日本の漢詩の創作に従事する文人の参与があって漢詩と詩社を発展させ、日台異文化間の理解と共生のにおける積極的な融合現象を生み出すこととなった。

日本統治時代の漢詩と詩社の発展における殖民統治者の政策上の翼賛によって、1937 年の皇民期の開始以前、漢文の使用には全く圧力が加えられていなかった。漢詩と詩社は日本の台湾接収下でも発展を継続できたが、その主な理由は日本殖民当局が言語の同化政策を実施する一方で、漢文やとりわけ台湾で漢文を伝授する主要な機構である書房を全く弾圧しなかったためである。1895 年に清朝が台湾を日本に割譲する以前、台湾の人口は約 300 万人であった。割譲後は台湾人が競って中国に渡ったため 1896 年の調査では台湾の人口は約 260 万人に過ぎず、時局の変化による一時的な人口の急減がみられた[59]。このような人口規模において、1897 年の全台調査によれば書房の数は 1,127 箇所、学生数は 17,066 人だった[60]。日本統治時代初期に伝統書房が既に有していた。日本の殖民当局は教育体系がまだ整備される前に国語伝習所、続いて国語学校が設立された。その目的は直接に社会指導層とその子弟を取り込み、将来の同化教育の種子とすることであった。そして日本統治時代初期に教育を担当したのは民政局に隷属する学務部で、教育政策を主導したのは伊沢修二学務部長だった。彼の仕事の間口の広さ、多方面にわた

---

[58]許俊雅『台湾写実詩作之抗日精神研究 1895-1945 年之古典詩歌』、国立編訳館、(台北、1997 年)

[59]呉文星「近代台湾的社会変遷」、『大学校院通識教育巡迴講座全国性通識教育巡迴講座歴史領域講座講稿』、(1993 年 2 月)、1-10 ページ

[60]『台湾教育沿革誌』下、981 ページ

書房の数：臺北県 93 箇所・淡水支廳 23 箇所・基隆市廳 31 箇所・新竹支廳 151 箇所・宜蘭支廳 40 箇所・臺中縣 111 箇所・彰化支廳 134 箇所・苗栗支廳 39 箇所・雲林支廳 25 箇所・埔里社支廳 3 箇所・臺南縣 138 箇所・嘉義支廳 73 箇所・鳳山支廳 160 箇所・恆春支廳 23 箇所・臺東支廳 1 箇所・澎湖島廳 81 箇所。

生徒の数：臺北縣 2,142 人・淡水支廳 445 人・基隆支廳 508 人・新竹支廳 2,341 人・宜蘭支廳 629 人・臺中縣 1,562 人・彰化支廳 2,276 人・苗栗支廳 644 人・雲林支廳 436 人・埔里社支廳 48 人・臺南縣 1,828 人・嘉義支廳 1,043 人・鳳山支廳 1,940 人・恆春支廳 283 人・臺東支廳 22 人・澎湖島廳 919 人。

って残した業績の多さには驚嘆すべきのがあるが、米国留学中にグラハム・ベル（A.Graham Bell）の視話法を応用して吃音矯正法を編み出したことはつとに知られるところである。台湾における伊沢修二は、教師・学者としてよりも、教育行政家として敏腕を振るった。伊沢修二の台湾在任期間はわずか 2 年あまりと短かったが、その間、国家教育主義に立って、台湾の日本化のため「台湾学事系統略図」を作成し、その構想をつぎつぎに実施に移していった。伊沢修二は 1896 年 5 月には「国語伝習所」が設置された[61]。台湾の書房の発展については、日本殖民当局は 1898 年 7 月 28 日に「台湾公学校令」と「台湾公学校官制」を公布後[62]、1898 年 11 月 10 日に「書房義塾に関する規程」を公布した。この規程は課程を慣例に基づいて構わないこと、ただし日本語や算数等の教科を併設し総督府が承認した教科書を必修とすること、さらに書房が定期に報告し教務は監督を受けることを定めていた[63]。公学校が初めて設置された時には学校数は 76 箇所で児童数は 6,136 であった[64]。当時の殖民当局はすぐには旧式の書房を弾圧することがなかったため、1898 年のうちは書房と学生の数は逆に増加し、それぞれ 1,707 箇所、29,941 人となっていた[65]。だが、1904 年になると公学校の学童数が 27,464 人になっており、書房の学童数の 21,661 人を上回るようになる[66]。このような急進的な変化には 6 年の時間を要している。ただし、漢文の使用に関しては公学校にも漢文科が設けられ、さらには 1937 年以前に伝統的書房は圧力を受けなかった。故に、漢文を書く能力を持ち漢詩の創作に従事した台湾人は 1937 年以前の台湾においてなお伝承を継続することができた。

当時は日本殖民統治者が言語の同化を実施する一方で、漢文は何の圧力も加えられていなかったが、その主な理由は殖民初期において漢文が書面での日台間の意思疎通の媒介となったことであり、また統治者も漢文という中国文化の要素を共有しており、知識分子の文人階層を掌握したからである。この状況下で台湾の漢詩と詩社は非常に大規模な発展を遂げた。日本統治時代に伝統詩社の数が大幅に増加したことにつき、黄美娥は主要な理由として以下を挙げている。（1）外在的要因。これには 1、日本人の助力、2、社会環境の安定、3、新聞雑誌による伝播、が含まれる。そして（2）内在的要因。これには 1、詩歌に没頭して自らを書き残すこと、2、漢文との繋がりを維持すること、3、詩文の技術を磨くこと、4、身分を高め名声を得ること、5、詩文を通して友好や親睦を深めること、が含まれた[67]。上述の黄美娥がまとめた各要因は、日本と台湾双方の文人の共通の要素を含んでいる。そして実際、日本統治初期の日

---

[61]『日本語教育史研究序説』、8-9 ページ
[62]『台湾教育沿革誌』上、223 ページ
[63]『台湾教育沿革誌』下、974 ページ
[64]『台湾教育沿革誌』上、408 ページ
[65]『台湾教育沿革誌』下、983 ページ
1898 年書房の数：臺北縣 382 箇所、宜蘭廳 31 箇所・臺南縣 129 箇所・臺東廳 4 箇所・嘉義縣 256 箇所・台中縣 335 箇所・新竹縣 280 箇所・澎湖廳 95 箇所・鳳山縣 195 箇所。
1898 年書房の生徒：臺北縣 8,510 人、女 27 人・宜蘭廳 726 人・臺南縣 1,889 人、女 30 人・臺東廳 71 人、嘉義縣 4,127 人、女 5 人・臺中縣 4,890 人、女 3 人・新竹縣 5,200 人・澎湖廳 1,646 人・鳳山縣 2,823 人。
[66]『台湾教育沿革誌』上、、408 ページ、1904 年公学校の数：153 箇所、児童数 23178 人。
『台湾教育沿革誌』下、984 ページ、1904 年書房の数：1,080 箇所、生徒：男 21,426 人、女 235 人。
[67]黄美娥「日治時代台湾詩社林立的社会考察」、『台湾風物』、第 47 巻、第 3 期、（1997 年）、68-83 ページ

本と台湾の文人は共通の中国的要因のもと、日本人が始めて台湾を占拠した時（1895 年）には日本の官僚によって、台湾に関する漢詩作品が作られた。例えば郭水潭が「日本人が台湾で文学を開始した第一人者」と位置づけた森鴎外は、総督府陸軍軍医部長の地位で来台し、横川唐陽軍医とはかつて征台の戦の軍旅中に互いに詩文を応酬し吟詠の作があった。1896 年、日本の明治時代に漢詩壇を主導した森槐南は、伊藤博文総理大臣とともに視察のため来台した。彼の作品である「丙申六月巡台篇．随行記事」は七言の長篇の古詩であり、森槐南はその後も台湾で水野大路、土居香国と互いに詩を応酬した。伊藤博文もまた「台北旅館喜雨」の七言絶句、「台湾巡視中作」の七言律詩等の作品があり、これらは日本人が台湾を描写した最も早期の漢詩となった[68]。

日本統治初期の日本の官紳文人と台湾詩人の間の詩文の唱和、日本の当局的色彩の強い新聞に、その盛況を見ることができる。例えば明治 29 年（1896）6 月 17 日創刊の『台湾新報』では、7 月 11 日第 5 号に「文苑欄」が設けられ、土居香国の「続征台集」6 首の詩作、志賀遮莫の「志懐三章」七言律詩 3 首を掲載している。当時、既に台湾人と日本人の漢詩は同紙「文苑欄」に登場しており、この年の 9 月 13 日、22 日には水野遵民政局長と土居香国等が台紳の陳洛、李秉鈞、劉廷玉、黄茂清等と「官紳同宴」として共に詩作を行った。その後 10 月 3 日第 30 号では、有陳洛の「龍山寺観月会跋」（駢文）がある。10 月 6 日第 32 号には「無底湖子林隆」の「訪土居香国志詞宗賦呈」、土居香国「龍山寺官紳大会席上卒賦呈諸公」等の詩作がある。

この他、明治 31 年（1898）5 月 6 日創刊で当局の声を代弁する『台湾日日新報』にも「文苑欄」が設けられ、専ら来台日本人と台湾文人の伝統的詩作を掲載した。その第 1 号は鄭幼佩の「北郭園啓吟社序」で、そこには櫻井勉新竹県知事が新竹で行政に当たり、2 年後に「廃されていたもの全てを再興し、人民もこれを崇めること」として、詩を復興するために吟社を組織したとある。このほか岡本韋庵の「台湾史詩」七言四首と漢文の解説があり、その内容は清代中期の台湾開墾を説くものである。5 月 8 日第 3 号の一面には「平楽文讌」との記事があり、その内容は苑裏の蔡啓運参事官、新竹県の呉朝宗参事官、また鄭育臣、曾省三という 2 名の秀才、そして梁鈍庵や林紹堂等が、大稲埕の平楽遊酒肆に赴き、李石樵、翁星樵、陳淑程らを招いて、宴会を開いたというものである。5 月 20 日の『台湾日日新報』「文苑欄」には、「比志島将軍送別会」と題する詩作を掲載、比志島は混成守備隊第 3 旅団長となり、この送別会の参加者は、日本人が磯貝蜃城、石母田石仏ら、台湾人は羅秀恵、蔡国琳、蔡夢熊、陳脩五、趙鍾麒、陳渭川、陳雨臣、曾馥笙、李嘯耕らであった。この送別会の詩作において、主に来台日本人と台湾人が共に漢詩の伝統的表現を用いて「平乱」の将軍の功績を称え、間接的に抗日を否定し、殖民当局による台湾統治を受け入れる構えを見せている。

上述の明治 31 年（1898）の内容から、表面的には、日本の殖民当局と台湾の上層文人階級の間には既に暗黙の了解があったかのようであり、相互の訪問、酒宴、同題の作詩により、一種の官紳が寄り添い、同志が共に楽しむ雰囲気が存在していた。この他、以後に来台した日本の官僚と文人らもまた詩社を組

[68]羊子喬「巻四、論述．日僑与漢詩」、『南瀛文学家-郭水潭集』、台南県立文化局出版、（新営、1994 年）、370-372 ページ

織し、漢詩の交流活動を行った。主なものは以下の 3 つである。

(1) 玉山吟社：1896 年成立。加藤雪窓、水野大路、土居香国、白井如海、伊藤天民、岡本葦庵、館森袖海らから成る 20 人余りで結成。その後中国から来た章太炎、台湾人の李石樵、陳淑程、黄植亭等が加わった。章太炎には「寄梁啓超」、「餞歳」、「玉山吟社席上即事」等の詩作が伝わっている。

(2) 淡社：時代的には玉山吟社、穆如詩社の中間に位置するが、文献不足により年代を特定し難い。館森袖海、中村櫻渓、小泉盗泉らが中心となって台湾人と共に詩社を組織し、その他に尾崎泉、日下峰蓮、伊藤壺渓らの 3 人の詩人の名前があり、1910 年の『台湾日日新報』の瀛社の活動にしばしば登場している。

(3) 穆如詩社：1899 年に成立。主な構成員は児玉源太郎、籾山衣洲、館森袖海、内藤湖南、中村櫻渓、小泉盗泉、尾崎秀真であり、この詩社は児玉総督を代表とする吟社であり、日本人統治階級の組合である。

日本人の漢詩創作、あるいは台日人士間の作品の詠み合いは、以下の幾つかの例で説明することができる。例えば台北市南門外古亭庄、日本統治時代の児玉町は、明治 32 年（1899）に第 4 任総督の児玉源太郎ここに「別荘」1 棟を新築したのだが、実際は茅屋に過ぎなかった。児玉はその質実剛健の精神を表現しようとして、無理をして作詩をした。児玉源太郎総督は公休でよく日本人の御用漢詩人と作詩をし、『南菜園唱和集』等の詩集数冊がここから生まれている。児玉は別に「藤園主人」と号し、「乙亥六月結廬於南城古亭荘名曰南菜園偶作一絶」がある。

古亭荘外結茅廬、畢竟情疏景亦疏；雨読晴耕如野客、三畦蔬菜一牀書[69]。

（古亭荘の外に萱の小屋を建てる、情緒も景色もやはり別格；雨に読書、晴れに耕す田舎者の如く、三坪の野菜畑と床に散らした本の数々。）

別の例では、後藤新平民政長官は台北に書斎を所有し、その外には台北で最も古い鳥松 2 株が高く聳え立ち、枝や葉が密に茂っていたため「鳥松閣」と名づけた。明治 37 年（1904）10 月、日本人の木下新三郎、館森万平、台南文人の羅秀恵が後藤新平作の二首七言絶句「鳥松閣偶題」を掲げ、台湾全土に向けて詩を募った。体、韻にこだわらず全てを作者の意のままとし、採録も自由に行い、更に原作者の手による原稿を直接採用した。明治 39 年（1906）に尾崎秀真がこれを編纂し『鳥松閣唱和集』とした[70]。この詩集の中には、数首の桃園の詩人の作品が収録されている。例えば簡楫の詩は、

松下婆娑一老雄、縱横議論氣如虹、朝廷指日需樑棟、經始淩烟計畫中、積翠凝青夏日天、

---

[69]王詩琅『日本殖民地体制下的台湾』、衆文圖書 、（台北、1980 年）、210-211 ページ、種村保三郎著、譚繼山訳、陳昱校訂『台湾小史』、251-253 ページ

[70]施懿琳『鳥松閣唱和集』、許雪姫編著『台湾歴史辭典』、遠流、（台北、2003 年）、864-865 ページ

炎威赤地正司權、平泉小集饒佳趣、鳥語松風意快然[71]。

（松の下に老雄が生きている、経緯を論破し勢いは虹の如し、朝廷（国）は間もなく棟梁を必要とし、天を凌ぐ計が立てはじめた、真夏のなか、翠が積もり、青が濃くなり、威厳たる炎帝と中国大地の司法を正す、平泉の小集（著書）はなかなか面白く、鳥の鳴き声や松林を通る風は気分爽快）

大正10年（1921）10月23日、瀛社の主催により稲江の春風得意楼の旗亭で台湾全土の詩社による撃鉢聯吟大会が開かれ、翌日午後に田健治郎第8代総督が招待された。この会の86名の詩人は東門の官邸で茶会を開き、その席で田健治郎総督も七言絶句1首を披露している。

我愛南瀛景物妍、竹風蘭雨入詩篇。堪欣座上皆佳客、大雅之音更蔚然[72]。

（南日本の景物の美しさを愛し、竹林の風、蘭に当たる雨は詩文になる。座上の客は皆良き人で実に嬉しい、品のある音楽も良く聞こえる。）

田総督はこの詩で詩友と唱和し、この茶会では詩篇を得、後に鷹取田一郎が同年11月に刊行した『大雅唱和集』に収録された。田総督の漢詩については桃園吟社の簡朗山が1詩を唱和している。

長春草木競鮮妍。有裴同庚衛武篇。此日三台齊飽德。一吟一詠一陶然[73]。

（年を通して青々の草木が美を競い合い、同じ年の裴氏が著した衛武の文章がそうである。此日三台齊飽德、一吟一詠一陶然。 この日にお茶三杯たっぷり味わい、吟味、朗読、気分良し。）

簡朗山は『詩経』を引用し、すがすがしく茂る緑竹を喩えに用い、衛の武公が高貴な君主でありながら、人徳修業に励む精神を詩人が賛美することに興を発した。簡氏は詩句の中で、竹の美しく茂る様をもって魏の武公の徳を形象化し、田総督の賢明さと徳の高さに喩えている。その詩中の「一吟一詠一陶然」は田総督の「座上佳客」と巧みに響き合い、官紳らによる詩歌の宴の様子を表している。

その後、第9代の内田嘉吉総督が大正13年（1924）、この年の勅題「新年言志」に応えた作品、

東閣官梅旭影新、未成何事又迎春。微臣畢竟無他願、惟為天朝深愛民[74]。

（東閣にある殿様の梅が旭の中で初々しい、何こともできずに春を迎える。ほかに願うことは無く、国が民を愛することを祈るばかり。）

---

[71]尾崎秀真『鳥松閣唱和集』、台湾日日新報社、（台北、1906年）、45ページ
[72]『台湾日日新報』、7686号、（1921年10月25日）、7687号（1921年10月26日）
[73]鷹取田一郎『大雅唱和集』、台湾日日新報社、（台北、1921年）、6-7ページ
[74]鷹取田一郎『新年言志』、台湾日日新報社、（台北、1924年）、1ページ

は台湾全土の詩人の唱和を獲得した。また他には、呉衮臣の作品として、

今年甲子始翻新。旭日和風萬象春。分得屠蘇錢幾個。買来藝譜課農民[75]。

（甲子の今年は新たに変わり始め、旭や和む風に世の中が春の如し。節句で屠蘇の銭を頂き、農民の文化の書物を買ってあげた。）

台北瀛社の招きにより台湾全土の詩社の詩友が初めて連合吟会を江山楼で開いた翌日の大正 13 年（1924）4 月 26 日、内田嘉吉総督は台湾全土の詩家 170 余名を東門の官邸に招いて茶会を開き、その席で自らも次の 1 首を作った。

盛薫風鈴閣捲窓紗。曉著輕衫掬翠霞。我愛詩人忠厚意。林園此日供清茶[76]。

（薫る風が鈴を鳴らし、窓のカーテンを翻る。朝から薄服を纏い、霞の翠を掬う。詩人の温厚や誠さを愛し、今日は林の園で清茶がお持て成された。）

茶会の時に詩人らは次々にこれに唱和し、総督はその都度そちらに目を向け、その後に共に記念撮影を行い、宴会は盛大なものとなった。

大正 15 年（1926）、第 11 代の上山満之進台湾総督が就任してから、東京の漢文教師、国分青厓が台湾を訪問した。彼らを盛大に歓迎するために、上山は台湾における重要な台湾人及び日本人詩人を総督府官邸へ招いて詩会を催し、この時の詩作を『東閣倡和集』にまとめた。上山満之進総督はまた昭和 2 年（1927）3 月 21 日、「全島聯合吟会」の詩人を総督府官邸に招き会合を開いた。当日、詩友は総督の瑤韻で七言絶句 1 首を作った[77]。

前述の漢詩を媒介として、日台文人の間には融合するに足る背景と可能性があった。事実上、異文化の衝撃の下で、前述の連横らを除いては、消極的であるかまたは抵抗する文人の間にも、日本の側に立って文化を論じ、また漢詩を用いて表現をする台湾人も日本の国民性を養うべきだとする見方も存在した。その中の代表が魏清徳であろう。魏清徳は 1886 年、新竹の書香の家に生まれ、父は「啓英社」を設けて人材を育成すること数十年、日本統治時代に新竹公学校と総督府国語学校師範部を卒業し、中港地方の公学校で教師となり、台湾の第 2 回普通文官試験に合格した。魏清徳はその家庭環境から、幼時より詩文に長けており、師範学校に入学した際も参加詠霓吟社の活動に参加した。1910 年には瀛社の創立会員に加わり、謝雪漁の後継として推薦され第 3 代社長となった。その後、漢詩文方面の傑出した業績により、日本の漢学家であり『台湾日日新報』主筆の尾崎秀真からその能力を認められ、1910 年から特別に招かれて台湾日日新報の記者、編集、漢文主筆となり、長期にわたり漢文や漢詩の編集作業に携わ

---

[75]鷹取田一郎『新年言志』、台湾日日新報社、（台北、1924 年）、19 ページ
[76]郭水潭「日僑与漢詩」、台北文物季刊』、4 巻 4 号、（台北、1956 年）、105 ページ
[77]猪口安喜編『東閣倡和集』、凸版印刷株式会社本所分工場印刷、（東京、1927 年）9 ページ、10 ページ、17 ページ

った。

魏清徳は『台湾日日新報』に入ると重用を受け、日本統治を支持する漢詩を頻繁に発表している。また毎年元旦と天長節には古文で慶賀の文章を綴っており、例えば1910 年5 月6 日に発表した作品「招魂祭」は、日本が台湾を綏撫する過程で国のために犠牲となった軍人警察官やその家族の鎮魂歌として、魏清徳の複雑な心象や気宇壮大な筆力が覗える。国のために命を犠牲にした軍人警察官の偉大さを克明に表現しながら、彼らの壮烈な犠牲があってはじめて殖民地台湾の安居楽業がもたらされたと結論づけている。その詩は、

> 方今國際隆文明。殖民進歩世所驚；同仁一視施萬物。飛潜動植皆得生。而父而母而妻子。闔家無恙仰昇平[78]。

（今日の国際社会では文明が起きた。殖民の進歩は世を驚かれた;仁を平等に万物に与え。飛ぶ潜る動植物は皆生かされた。父母や妻子も恙無き。昇平の世を仰ぐ。）

1913 年7 月30 日魏清徳は明治天皇の一周忌に天皇の功業を称える追悼詩を発表している。明治天皇が平和を尊び、継承した大正天皇も仁孝で世に聞こえていることを詠い、明治天皇が在位中に台湾、樺太、韓国等の国土を得た功績は不義の殖民拡張であるという批判には同意できないとして、次のように書いている。

> 宸躬至仁重平和。忍以闢土易干戈。後先兩役仁義著。亞東大局保全多。南獲台灣北樺太。西併三韓地一帶。同仁日月不偏照。一視雨露無私霈。群僚謹敬奉厥旨。感以殖民惹誤會。今上丕承仁孝聞、宇内愛戴如冬日。政界面目更翻新、國體精華重結實。聖明在上垂嘉猷、海隅推本溯源流。幸逢大正紹明治、乾坤億萬歳千秋[79]。

（皇帝の恩沢は仁の極まり、平和を重んずるもので、開拓を以って戦を換えた。前後の両役人は仁義著しく、東アジアの大局を多く保たれた。南は台湾、北は樺太を獲得、西には、朝鮮三国の地を併合した。仁を日や月のように偏りなく平等に照らし、雨や露を私欲なし同一視に注ぐ。閣僚は謹んで聖上の旨を敬い、殖民地支配の誤解を和らぐ。今は上の仁政話を良く耳にする、天下人は東の太陽を愛すように上を愛し。政界の顔が更に新しく変わり、国体が精鋭集い、結果を重視。天皇は上で良き仁政を垂らし、海の隅まで本流を推進め。幸いに大正も明治の治を引継ぎ、乾坤（世の中）が億万歳の年になる。）

また、魏清徳はこの他に国旗を掲げる紀元節、天長節の光景を前に、慶賀の詩も発表している。

---

[78]魏清徳「国語学校運動会行」、『台湾日日新報』、971 号、(1904 年11 月26 日)

[79]魏清徳「去年本月本日 明治先帝升遐萬邦哀吊四海縞素今際週年謹賦長句一篇用追聖徳表哀思之意云爾」、『台湾日日新報』、4724 号、(1913 年7 月30 日)

1911 年2 月に発表した「恭賦紀元節」は日本の殖民統治を支持する一面が十分に表現されており、その全文は次の通りである。

> 有豊葦原瑞穂國。聖子神孫帝不極。維皇神武興東征。奄有内外群醜平。橿原垂拱仁易暴。舍孕光熙慶洗兵。爾復相傳二千五百年七十載。隆隆朝旭仰神京。富士之嶽高且秀。新高之山出其右。六合一家盡同仁。遙遙嵩呼祝萬壽。版圖此日益恢大。南至台灣北樺太。執盟牛耳主東亞。玉帛衣裳萬國會。畝旁山上卿雲章。畝傍山下國威揚。只今明治昭々代。正見皇祖列宗樹值之深長[80]。

（豊葦原に瑞穂国があり、聖なる神帝の子孫は永遠なり。天皇の神の兵士が東征し、内外をカバーして憎い群れを平定。橿原は簡単に暴力を仁義に換えた、光熙年に懐妊して戦に勝利した軍を祝った。あれから二千五百七十年まで代々伝わり。旭は隆々と神の都を仰ぎ、富士の岳は秀で高し。新たな山が右の方に出現、六つの民族が同じ仁政を受ける。遥々万歳を呼び上がる。国の面積は今日になって大きくなり、南は台湾北は樺太。東アジアを牛耳る盟主である。万国会議に鮮やかな衣装で臨んだ。畝傍山の上に祥雲が広がり、山の麓は国の威力高揚。只今明治の良き時代が続き、見えるのは先祖のご加護末永くあれ。）

1911 年中国の満清帝制が転覆すると、魏清徳は11 月3 日に「天長節恭賦」を発表し、その中で中国が共和制を樹立する過程における社会の動揺や不安を用いて、日本が天皇制を維持することの正当性を主張し、天皇が台湾で施している仁政を根拠に日本帝国を賞賛している。

> 鄰邦風鶴正惶々。宇内皇威八表光。濟卹賜金憐水害。聖明在位與天長。山廻富士朝宮闕。日麗扶桑識帝鄕。鯤島卽今安堵甚。菊花時節快稱觴[81]。

（隣邦は風が強く、鶴が不安にの泣く。わが国は天皇の威厳が八方に光を照らす。水害に金銭を賜り援助し、聖なる君主の即位は天の如き長し。富士を囲む山々は朝廷を拝む、ベトナムや中国も日本の恩を知り。鯤の島は今も無事に違いなし、菊の悲しい季節でも乾杯して祝賀する。）

このように魏清徳が詩作で日本皇国の万世一系の歴史とその国体の精神を称揚するのは、台湾人に日本帝国の立国精神を理解させ、そして忠君愛国の国民性を養うためであった。日本の国民性を養うこの種の詩作は1918 年9 月2 日から『台湾日日新報』で続々と掲載されており、こうした漢文作家の同化に対する意欲が十分に表れている。

> 左八望　藜
>
> 蓬島朱櫻蒸曉日、葦原青草暢春風。

---

[80]魏清徳「恭賦紀元節」、『台湾日日新報』、3536 号、(1910 年2 月11 日)
[81]魏清徳「天長節恭賦」、『台湾日日新報』、4009 号、(1911 年11 月3 日)

左十一望　藜

豐原秀茁青人草、吉野靈鍾武士花[82]。

左十七陳金波

篤信從風滋煎藥、積誠向日抒心葵

十八効顰生

文人品格富山雪、武士精神玄海潮[83]。

（左八望　藜

蓬島の紅桜は旭日を醸し出す、葦原の青い草は春風を浴びる。

左十一望　藜

豊かな野原が青い草を育て、吉野の魂が侍の花を咲かす。

左十七　陳金波

自然の流れに従えば、煎薬に良いと信じきっている、誠に太陽に向かう心はひまわりのように伸びやか。

十八　効顰生

文人の品格は富士の雪、侍の精神は玄海の潮）

『台湾日日新報』の運営には当局の影響の痕跡が見られるものの、それでも漢文作家が国民性を表現する道具として、漢詩文の地位を積極的に築こうとしたことが見て取れる。

上述の日本殖民統治者が 1937 年に漢文の使用を禁止するまでは、異文化との接触という観点から見ると、日本文化と台湾文化は等しく中国文化の要素を有していたものの、統治者の交替という政治的な要素があったため、台湾における漢詩の発展には微妙な変化が起きた。異文化である日本の統治に対し、消極的で無反応または抵抗という手段をとったものもいれば、本心からあるいは統治者が背後で動いていたかは別として、殖民統治を支持する漢詩を作った台湾人作家もいた。そのため異文化との接触下において、日本の殖民統治者である官吏や作家は自然に本国の文化を支持するようになり、台湾現地の作家たちは政治力が文学に大幅に介入したり、個人で密かに漢詩の創作を行ったりしていた初期のころには、個々の作家の漢詩作品に抵抗や融合を表現していた。その後政治力権力が誇示されるようになると、

[82]『台湾日日新報』、6627 号、(1918 年 12 月 1 日)
[83]『台湾日日新報』、6630 号、(1918 年 12 月 4 日)

台湾の作家は完全に制圧され、自主的に同意する、あるいは大きな反発を示すようになっていった。次節ではこうした状況における漢詩について検討していく。

第三節　皇民化政策下での抗日と「漢体和魂」の詩作

日本統治時代に、日本は異文化支配者として台湾統治を開始した。この異文化は台湾人よりも一層レベルの高い政治支配的な要素を備えており、この種の日本統治時代の政治支配は、異なる基準により複数の時期区分ができる。第一は台湾総督府の施政の変遷に基準を据え、前期武官総督期（1895 年-1919 年）、文官総督期（1919 年-1937 年）、さらに後期武官統治時期（1937 年-1945 年）に分ける方法である。第二は台湾住民の反抗運動に基準を置いて、1915 年の西来庵事件を境に前後両期とし、前期を武装抗日運動期、後期を政治抗日運動期とする見方である。第三はこれら 2 種類の見方を総合して、第一を漸進主義時期とし、1915 年の西来庵事件を区切りに始政（漸進主義）期（1895 年-1915 年）と同化（内地延長主義）期（1915 年-1937 年）、皇民化期（1937 年-1945 年）に分かつ見方である。

日本の政治支配については、上記の 3 番目の分類法が最も一般的で、この時期区分において漢詩は異文化と接触する状況下にあり、その漢詩の発展と関係があったのは漢文教育であった。日本統治時代の漢文教育は第一節で論じた書房の他、台湾総督府による学校教育において、その漢文政策の重視すべき過程は大体以下の通りである。1897 年 10 月 31 日に「国語伝習所規則中改正」が公布され、国語伝習所乙科課程に漢文課を増設することが規定された[84]。1898 年 8 月 16 日には「公学校規則」が公布され、漢文は読書課に配され、毎週 12 時間とされた[85]。1904 年 3 月 11 日の「公学校規則改正」公布では、作文、読書、習字等各教科が国語課とされ、漢文課は独立して 1 科となり、毎週 5 時間と改められた[86]。1907 年 2 月 26 日「公学校規則中改正」公布では、5、6 学年の漢文課の授業時間数は毎週 4 時間に短縮された[87]。1912 年 2 月 1 日「公学校規則中改正」公布により、3、4 学年の漢文課の授業時間数は週 5 時間から 4 時間に短縮された[88]。1918 年 3 月 31 日公布の「公学校規則中改正」では、漢文課の時間が一律週 2 時間に短縮された[89]。1922 年 2 月 6 日「台湾公立公学校規則」が公布されたが、これは「台湾教育令」の「日台共学」という新措施に応えるためであり、全ての漢文課は週 2 時間の「随意科」（選択科目）とされ、地方教育を所管する官庁が状況を見て漢文課を廃止した[90]。1937 年には公学校の漢文課が完全に廃止された[91]。

台湾における漢文教育の一切が、日本政府の支配下に置かれていたという点についてみると、漸進主

---

[84]『台湾教育沿革誌』上、197 ページ
[85]『台湾教育沿革誌』上、229-233 ページ
[86]『台湾教育沿革誌』上、259-260・271 ページ
[87]『台湾教育沿革誌』上、278-282 ページ
[88]『台湾教育沿革誌』上、314-315 ページ
[89]『台湾教育沿革誌』上、323 ページ
[90]『台湾教育沿革誌』上、356・380 ページ
[91]『台湾教育沿革誌』上、388 ページ

義期と同化政策期は直ちに漢文を廃止することはなかったにせよ、漸進的に漢文の教育を縮小させていった。さらに同化政策の日本語教育のために、台湾人の漢詩創作における中国文化の要素は失われ、日本語的色合いの強い思考様式へと変わっていった。この異文化との接触のありかたは、一般的にみられる公平な立場でのそれとは異なり、日本から来たこの異文化は、その背後に政治的要因による強力な圧力が備わっていたのである。

日本の強力な統治政策はその日本語文化を支持しており、1937 年から漢文教育の廃止が始まったが、それ以前には漸進併存政策をとっていた。漸進政策期においては、第二節ですでに触れたように、日本から来た異文化に対し、漢詩創作はすでに同化と抵抗という 2 つの傾向が表れている。1937 年以後の皇民化期に至ると、日本の殖民政府による強力な政策によって漢詩創作における抵抗が減少するという傾向は見られず、むしろ一層強い反発傾向が表れた。また一方、アイデンティティーを日本に求める異文化の漢詩創作は 40 余年の同化教育の後、日本という異文化にアイデンティティーを見出す漢詩創作にも増加傾向が認められ、またそれに対する認識もより深いものとなった。

まず皇民化期におけるアイデンティティーを日本という異文化に求める漢詩創作においては、漢文を復興すべきとしながらも、同時にこの復興を日本への報国の手段としており、これにより文人には一種の矛盾した心理傾向が現れた。この例としては、台北鷺洲吟社の鄭金柱がしばしば全島に詩を募るやり方で文章報国運動の理念や創作の方向性を呼び掛けており、その「提唱吟詩報国感賦」3 首作品では、吟詩報国運動の 3 つの創作の主軸を示し、その中の「提唱吟詩報国感賦･その二」では、「東アジアの安定策を実現し、一心に文武に励む」ことを強調している[92]。そのほかに呉雅齋も組詩「教読有感」4 首において、漢文と報国という 2 つの事柄の関係について論述している。

> 國事蜩螗日益喧。奈無權柄振元元。新興東亞需文字。漢學担任不憚煩。
>
> 具有丹心報國家。愧無長策枉咨嗟。幸逢運會興東亞。需用人才十倍加。
>
> 圖謀報國愧無能。虚度韶光感不勝。願展微誠培後起。朝乾夕惕自兢兢。
>
> 調和東亞太平風。漢學無成不建功。我願官民同一志。相將研究体宸衷[93]。

（国の情勢に不安が増しても、庶民を振興させる手立てはなし。新興の東アジアには文字が必要とし、漢学を担当して面倒を恐れず。真心で国に報う。残念なのは、長期的な策がなく唯ため息しかできず。幸いにスポーツ大会に逢い、東アジアを新興させ、必要な人材は十倍まで増加。国に報いたいが、才能の無さに恥ずかしく、光陰が過行き感無量。微々たる力で人材を培いたく、己の行いに慎み。東アジアの太平の風を和ませ、漢学ができなければ功が奏せず。官民一体で志が貫けることを願い、研究を行いながら聖上の意向を汲み取る。）

---

[92]鄭金柱「提唱吟詩報国感賦」、『詩報』、第 189 号、(1938 年 11 月)、19 ページ
[93]呉雅齋「教読有感」、『詩報』、第 229 号、1940 年 8 月)、8 ページ

この 4 首の作品は、意義においては首尾一貫して完璧な理念を伝えている。第 1 首は国家の政局が日増しに混乱するが、特に権力を持たない身では、一般人民の苦しみを救えないことを嘆いている。また東アジアの政局の振興や、共通の文化に頼みを求める必要、さらに漢学がこの責任を担うに足ることを強調している。ここで作者は当局者の施政が至らぬことを嘆き、かつ漢学が新興東亜の要であることを主張し、そしてまた作者は、台湾において漢文の存在は軽んじられていると考えていることを明らかにしている。

皇民化期の台湾文人は異文化の殖民統治下においても中国文化の伝統に従順で、中国文化の漢文を復興すべきだと考え、しかしまた一方では殖民統治下において、漢詩を利用して国に報いることも提唱した。ここでいう報国の対象とは日本であり、漢文の母国である中国ではない。殖民統治下における台湾文人の矛盾した感情を、一種の「漢体和魂」という漢詩に見出だすことができる。

台湾文人の矛盾した感情による漢詩創作の他にも、台湾文人が日本という異文化に更なるアイデンティティーを求める心理が、むしろ反対に、漢文の母国である中国に日華親善の政策の実践を要求している。例えば 1935（昭和 10）年、彭子信の「乙亥之春口占」の 1 詩には、このような漢詩がある。

其一

東方君子國。皇極立其基。世界平和日。宜知有日支。

其二

日支親善策。相互在無私。黄色同人種。居心不可疑[94]。

（その一

東方君子の国、天皇がその礎を築いた。世界は平和のなか、日本をよく知ることもできた。

その二

日本の親善策は互いに私心が無いことにある。同じ黄色の人種なので、相手を疑ってはならず。）

この詩では、日本は平和を愛する国家で、もしも世界平和を求めるならば、日本と中国の努力に頼むことと知るべきであるとしており、作者は東アジアの平和は日本と中国の相互提携にかかっていると主張する。これは日本の対華外交宣伝のなかの「日華親善」の言論に呼応したものと見ることができる。

このほか、黄漢琦の「非常有感」1 詩も、同文同種の基礎の上に立ち、日華親善協力と、白人種によるアジア侵略への共同した対抗を呼びかけている。

---

[94]彭子信『風月報』、第 8 期、(1935 年 6 月)、2 ページ

同種同文骨肉親。江山自古属黄人。西蠻若敢窺東土。奮勇共同拳一伸[95]。

（同種同文、骨と肉のように親しみ、国土は昔ながら黄色人種のものである。西洋の蛮人が東の領土を覗き、怒って共に拳を出そうではなかろう。）

この詩は日華両国が同文同種の国家であること、また一般の兄弟のような親密さを持つべきであると強調している。尤瑞の「黄色人種団結詞」の１作にも同様の呼応した部分がある。

真有道。堪誇扶桑帝聖明。黄種聯盟願早成。一般東半球兄弟。乗時両國要和平。連絡相依不用疑。即當協力禦西夷。亦好團團除共黨。可安民命固鴻基。同文雅結萬年業。東亞欲興共投資。山林土木應墾殖。永遠通商大適宜。堂堂握手從頭敘。棠棣根深各自知[96]。

（やはり道はある。日本の帝は賢明さを誇るべきである。黄色人種の連盟が早く結成することを願う。東半球の兄弟たちの皆さん、時代に乗じて両国の平和が実現できる。互いに助け合い、疑わず、力を合わせ西洋の夷人を防ぎ、ともに共産党を除く。）

この詩はまず日本天皇の輝くばかりの聡明さと人徳を誇り、続いて日満華三国の「善隣友好」、「共同防共」を述べ、さらに焦点を「経済提携」へと向けて、東亜三国が興隆を望むならば、必ずや相互に投資、開拓、通商をする必要があるとして、「同文同種」の日満華三国が兄弟のように協力するべきであると奨励している。

「漢体和魂」の漢詩は日台間の異文化について、「同文同種」の主張、また共通の中国文化である漢体漢詩を用いることで、日本国家の精神を表している。そして 1937 年の日中戦争勃発後の東アジア情勢の発展に伴って、日本が大東亜共栄圏の理念を煽りたてたことにより、母国とする日本にアイデンティティーを求める精神を表現するために、台湾の文人の漢詩作品中においても大東亜共栄と日本の戦争を助勢する詩作が現れた。大東亜共栄の理念を助勢する詩作では、黄啓棠「興新亜洲」の１詩が西洋的思想のもたらす害毒を一掃し日本文化を立て直す観点から大東亜共栄の意義を論じている。

亞洲欲得日興隆。應把異端一掃空。再振精神敦國俗。重施德育矯民風。

白人奸計同心禦。赤色思潮協力攻。務使宏開新面目。平和永建半球東[97]。

（アジアは振興する日を欲しがる。異端をきれいに一掃すべし。精神を振興させ伝統文化を厚くし、道徳や教育を再び施し、風潮を正すべし。白人の姦計を心を一にして防ごう、共産思想を力あわせで攻めよう。必ず真面目を広く切り開き、東半球の平和をとわに建てるへし。）

---

[95]黄漢琦『詩報』、第 141 号、(1936 年 11 月)、7 ページ
[96]尤尤瑞『風月報』、第 91、92 期 8 月号上下合併巻、(1939 年 8 月)、32 ページ
[97]黄啓棠『風月報』、第 81 期 3 月号上巻、(1939 年 3 月)、33 ページ

この作品は日満華三国連盟の立場から、黄色人種の連盟が心を同じくして協力し、白色人種の侵略に抵抗すべきこと、および西洋的思想の弊害を受けた世の是正を求めており、そして作者の期待する新しいアジアとは、東洋思想を核心的価値とする黄色人種による連盟だとしている。

王恵卿は「新年雑詠」の１詩において、善隣友好と経済協力による大東亜共栄の理念をうたっている。

一年轉眼又佳辰。聖戰迎茲已四春。肉彈炸開新楽土。天聲叫醒舊黎民。也應經濟謀黄種。

不合膏腴饗白人。日出東方花醞釀。共欣淑氣遍風塵[98]。

（あっという間に新たな一年を迎えた。聖戦が激しさを増しながらすでに四回の春になり。肉弾が爆破で新楽土を開き、天の轟きが旧時代の庶民を呼び覚ます。黄色人種の発展を考えるべき、白人に富を分けようとする試みに同調せず。東に日が昇り花を咲かし、良き風潮が世に渡ることを共に喜び。）

この詩は白色人種をアジア経済利益の外に排除すること、白色人種のアジア略奪に対して抵抗することを主張し、同時に作者は日華提携に相当楽観的な見通しを持ち、これにより「共欣淑気」、すなわち日華が運命を共にすることを示し、日華提携への熱烈な支持を表している。黄景岳の「共栄圏」1 詩はさらに大亜共栄への支持を示す代表例である。

秩序翻新奠肇基。亞東民族洽融時。善隣友好欣携手。具眼同憂解笑眉。

桎梏鎖除酬夙願。美英人逐慰心期。平和指日歡聲湧。德化南方雨露滋[99]。

（秩序が新たに換え、良き礎を築き、それは東アジアの民族が仲良く融和の時。善隣友好して手を携え、目には共に憂い笑みを浮かぶ眉。足枷が解かれ、願いが叶う、米国と英国人を追い払い、心が慰められた。平和が訪れに近し歓声が沸き、南方を徳化し雨や露を潤い。）

この作は日本が東アジア民族間の感情和睦のため、そして東アジアの新秩序のため基礎を築いており、今や黄色人種の民族は相互に友好を保ち、すすんで手を取り合って提携すべきで、そして当初は東アジアの将来を憂慮していた者も今では皆笑顔を見せているとしている。これは大東亜共栄の理念がまもなく達成されることを説明し、東亜共栄圏の政治的な理想を宣伝する作品である。また同時に、当時の漢体和魂の漢詩の創作が、日本当局の宣伝に追随する特色を持っていたことを見て取ることができる。

大東亜共栄の理念についての詩作は、例えば海楼の「星洲陥落有感」の１詩は、日本当局の日本軍勝利の宣伝に追随する作品である。

---

[98]王恵卿『風月報』、第 101 期正月号下巻、(1940 年 1 月)、26 ページ
[99]黄景岳『詩報』、第 267 号、(1942 年 3 月 7 日)、15 ページ

攻陷昭南帝國兵。白人喪胆遍球驚。三軍電撃施威武。萬載民生楽共榮。

英米從茲權勢淡。日中自此感情宏。蔣君屈服思同種。東亞群黎享太平[100]。

（昭南を攻落する帝国の兵士、白人が正気を失い、驚きが地球を巡らせた。三軍の電撃戦闘は武威を高揚し、万年の民生が楽々共に栄える。米英が弱体化して権勢が弱くなり、日中はこれから感情が深し。蔣介石が折れて同種のことを考え、東亜の人々が太平の世を楽しむなり。）

この作品は、日本軍の強大な軍事力と迅速な行動力でシンガポールを陥落させ、数限りない人々が共栄圏で幸せに生活していること、そして蔣介石に対して、黄色人種の団結の問題を考えて、偏屈にならずに、東アジアの人々に平和と幸福をもたらすよう促している。

1939（昭和 14）年に子襄が発表した「戦時有感並早望東亜平和」の組詩も、戦時における日本の東アジアの盟主としての抜きん出た立場をうたい、中国と日本との提携を勧めている。

日本支那共歯脣。豈容外侮競侵頻。若非東國賢際在。四百餘州白種人。

瓜分未盡賴強隣。何事支那白種親。頑蔣專行排日策。恩人顛倒作仇人。

支那政府已更新。彼此欣然結善隣。東亞平和今日始。千秋萬歲永相親。

深望華人早自新。休隨頑蔣陷迷津。同文同種宣親善。共作昇平東亞民[101]。

（日本と中国は共に歯と唇の如し、外敵が競い合って頻繁に侵略することを許せない。東に賢明な国が四方に無ければ、四百余りの州は白人の世界になる。分割が尽くされぬのは、強い隣人がいるからだ。頑固な蔣介石がもっぱら反日政策を行い、恩人を逆に仇に見なす。中国政府はすでに更新され、互いに喜んで善隣の仲を結ぶ。東亜の平和は今日で始まり、千秋万歳互いに親しむ。華人も早くして新たに変わってほしい、頑固な蔣介石に従わず迷路に陥ることなし、同種同言語で親善を伝え、共に伸びやかな東亜の民になれ。）

この詩は、日本と中国が相互に依存する利害関係にあり、外国人が中国に侵入することを許さないとし、中国が白色人種の侵略を受けないよう、日本が保護してきたことを主張している。

異文化理解と共生の下での「漢体和魂」の漢詩において、その最も重要とするものは文化精神レベルに至り、根本的にアイデンティティーを日本文化に求めるとした精神的内容である。劉旭初の「感懐」1詩は、日本が東洋文化を保持している点を重視し、東洋伝統文化の規範となるべき真髄は日本に残されているとする。

---

[100]海楼『詩報』、第 269 号、(1942 年 4 月 3 日)、12 ページ
[101]子襄『詩報』、第 193 号、(1939 年 1 月 21 日)、3 ページ

東洋道徳粋扶桑。肇國精神與旭光。親日纔堪榮漢族。依洋難免受災殃[102]。

（東洋の道徳は日本が最も優れ、良き国の精神は朝日の如し。親日が深まれば漢民族が栄え、西洋人に依っていけば災いを免れず難に遭う。）

この詩は、日本が朝日のごとく四方を照らしていることを礼賛し、このため日本との相互の友好のみが漢民族の栄華を取り戻す唯一の途であるとし、また中国が西洋文化に侵され伝統的な道徳価値を喪失したことを暗に風刺している。

呂岳三は「教育雑詠」の１詩において、大和魂を忠孝の道と解釈している。

楽也吾天職。時艱教愈尊。將承家國輩。培植大和魂。法妙精誠熱。躬行奪化工。教成忠孝士。萬卷自霊通[103]。

（我仕事は楽しくて天職である。時代が厳しいとき、教育をもっと尊ぶべし。国家先人の後を引き継ぎ、大和魂を培う。制度が好し誠意が熱し、粉砕の想いで天工を獲得。教育を果たして忠心の侍となり、万巻の書物に自然に読み解く。）

この詩は、教育とは大和魂を養うためのもので、同時に「大和魂」を忠孝の道だとしている。さらに儒教道徳と日本精神を合わせることで、大和魂を組み込む教育目標を達成できるとし、これらの教育理念の源は「教育勅語」の忠孝の道の重視にあるとした。

張春華も「国民精神総動員」の１詩で、忠孝の道とは日本国民精神であると解釈している。

濟時有策萬人驩。擁護邦家百世安。子孝臣忠天職盡。芻蕘聊表寸心丹[104]。

（救済策があれば万人が喜び、国を擁護し世代安定。親孝行並びに忠臣は天職を尽くし、愚見を以て寸志を表す。）

この詩は、日本皇民である台湾人はその身を皇民化運動に投じ、国民意識の育成を重要視すべきであるとしている。

呉雅齋の「国民精神」1 詩は、さらに国民精神と「教育勅語」、および忠孝の道の三者を関連付けている。

職域奉公志要誠。理當取義捨其生。欲知國體精華在。上下咸遵勅語行[105]。

（各業界が奉公して志を誠にし、生を捨てでも義を取るべし。国家の精華はどこにあるかというと、上下皆が勅の語の尊重すべし。）

---

[102]劉旭初『風月報』、第 84 期 4 月号下巻、(1939 年 4 月)、21 ページ
[103]呂岳三『詩報』、第 143 号、(1936 年 12 月)、4 ページ
[104]張春華『詩報』、第 170 号、(1938 年 2 月)、7 ページ
[105]呉雅齋「國民精神」、『詩報』、第 261 号、(1941 年 12 月 5 日)、17 ページ

この詩は「国民精神」の内容を、公の職務においては真摯に務めて私欲にとらわれることなく、戦線の作戦においては命を捨てて忠義を尽くし国のために犠牲となる、このような尽忠報国の意がすなわち勅語に従うことであるとしており、日本精神をうったえた作品であるといえる。

台湾文人の「漢体和魂」の詩作には、日本人の作品もある。例えば1942（昭和17）年の服部轍（担風）作の「大日本国体詩」4首の内容は、忠孝の道をもって日本の国体精神を解釈するものである。

> 曠古曾無氛祲侵。歴朝寶祚仰君臨。服膺唯有一忠字。一億忠臣共一心。大義無親存典型。
> 七生報國德惟馨。本朝自有君臣分。先講忠誠及孝經。正氣凝作富峰雪。丹心發作芳野花。
> 神州美風冠世界。孝子自出忠臣家。胎教皇民承至誠。先天真性此孩嬰。呱呱落地顧忠義。
> 世俗誤為求乳聲[106]。

（昔ながら戦がやってこなかった、歴代の国運は君臨を仰ぐ。ただ忠という字を肝に銘記、一億の忠臣が一心になる。大義には私心を無くすことが範例であり、七生報国をして徳は特に好し。本朝に当然ながら君主と臣の区別があり、忠誠をまず語り、のちに孝行。正気は富士の雪の如き、真心が香る野の花を咲かす。神州の美風が世界一、親孝行は忠臣の家柄である。幼いから帝国の民に誠さを教えこみ、この子は生まれながらの真性の持ち主。生まれてぎゃーぎゃーと忠義を叫び、世にはこれがお乳を強請る泣き声に聞き間違えた。）

この詩は、天皇の政治が輝かしくある理由として、その根源が日本の文化的特質で最も重要な「忠君」の理念にあるためで、「忠君」思想をもって「孝順」の観念を育てるべきと主張している。「教育勅語」の忠孝の核心的な価値である教育目標は、日本皇民の胎教の時期から開始せねばならず、忠誠愛国の気風を継承し、子どもが生まれた時にはすでに愛国の精神を備えているべきだとした。この一日本人の漢詩から、日台の文人間に明らかに異文化の理解と共生、また皇民化という政治的圧力の下で「漢体和魂」の漢詩があったこと、さらに皇民化政策は台湾文人の漢詩作品中に日本的精神性を備えた作品を生みださせ、日本という異文化精神の漢詩作品に転向させたことが見て取れる。

皇民化期以後、アイデンティティーを日本に求め、さらに深く日本という異文化に転向した「漢体和魂」の漢詩であるが、しかし台湾にはそれに対抗する文人の一派が存在し、皇民化政策の下で、日本という異文化による殖民統治にさらなる強い反抗を示す漢詩作品を生み出している。

台湾文人は異文化の理解と共生の下で、皇民化政策による政治的圧力を受け、「漢体和魂」の漢詩を有していた。このような創作はかつて皇民文学、または御用作家と評されたが、その中で最も論争の対象となったのは呉濁流である。呉濁流は『亜細亜的孤兒』、『無花果』、『台湾連翹』等の社会批判の長篇小説で有名となり、晩年には呉濁流文学賞を設立した。鍾肇政はかつて彼を「鉄血詩人」[107]と称えているが、その作品は社会批判的な性質のほかに、日本の殖民地支配を批判する色彩をも含んでいる。だ

---

[106]『詩報』、第271号、(1942年5月6日)、1ページ
[107]鍾肇政『夏潮』、第1巻8期、(1976年11月)

が、その彼でさえもかつては異文化統治の下で、日本統治者を賞讃する漢詩を作っていた。この詩は「祝皇軍南京入城」を題とする擊鉢吟であり、その擊鉢聚会が行われたのは 1937（昭和 12）年 12 月 24 日、場所は苗栗医院近くの涂家宗祠である。その時の擊鉢聯吟詩の中には、当時の呉濁流が競作に参加した作品が含まれている。

饒耕(呉濁流) 〈祝皇軍南京入城〉

忠勇無雙帝國兵、滬城破後又南京。六街旗鼓提燈隊、老幼歡呼萬歳聲[108]。

（勇む帝国の兵士に勝る者なし、上海を破った後南京を陥落。六つの街道側に旗や鼓また燈篭の列、男女老女が万歳を連呼。）

呉濁流の作ったこの詩の詩題と詩句は、確かに相当な皇民的な色彩を帯びてはいるが、だが当時の状況を改めて考察してみると、あるいは異なる解釈が可能かもしれない。またアイデンティティーを台湾に求め、かつ殖民統治に反対する台湾文人にとってみれば、呉濁流のこのような作品は、異文化の理解と共生の下に生まれた一種の矛盾した感情であり、アイデンティティーを殖民統治に求める御用作家とは全く異なるものといえる。また呉濁流の後に出てきた社会批判の強い文学作品の立場から見れば、このような台湾文人は感情の矛盾にはまり、そこから逃れる術を失っていると捉えられる。

日本という異文化の殖民統治における漢詩には、皇民化期以後も、アイデンティティーを日本に求める御用作家と矛盾した感情を抱いた作家が存在し、さらにその「漢体和魂」の作品についても、日本という異文化に対するアイデンティティーへの指向をさらに深化させていた。しかし、台湾にはこれに相反する文人の一派があり、彼らは皇民化政策の下で異文化の圧力が台湾の漢詩に及ぶことに反抗していた。皇民化政策の下で、異文化の漢詩創作に反抗した文人には 2 種類のタイプを見ることができる。そのうちのタイプ 1 は、早期から、自らのアイデンティティーを異文化の殖民統治に対する反抗の中に見出だすという転換を遂げた者であり、もう 1 つのタイプ 2 は日本統治時代の全期間を通じて日本の殖民統治に頑なに反対し続け、かつ漢詩の創作をもって心の奥底にある中国文化への渇望を表現し続けた者である。

早期にアイデンティティーを異文化の統治から反抗に転換した台湾文人の代表に、頼和が挙げられる。このような転換は、異文化の矛盾した感情を解きほどく 1 つのかたちと見ることができ、呉濁流らとはその趣が大いに異なっている。頼和を例とすると、その早期の漢詩創作では、その背景に清国が台湾を日本に割譲したことがあって、一種の文化遺民としての意識が表現されており、しかしまた他方では台、日が互いに融合すべきとの考えをも示している。

頼和のこのような矛盾した感情はその求学の段階、すなわちおおよそ 1913 年から 1914 年の間に、当

[108]王幼華「日治時期苗栗県伝統詩社研究-以栗社為中心」、『国立中興大学中国文学系碩士在職専班碩士論文』、（台中、2000 年）、102 ページ

時まだ二十歳にならない賴和の民族アイデンティティーにおいて、日本政府の支配を全く受け入れていなかった。桃園大嶺崁(現・大溪)を行く際に作った「発大嶺崁」の詩にはこうある。

我本饒平（四縣）客、鄉語更自忘。感然忽傷抱、數典愧祖宗[109]。

（我は本来饒平（四県）の出身で、くにの言葉は特に忘れた。急に悲しくなり、何曲で先祖に詫びるなり。）

このほか、新竹から北埔に向かう際には、この地が 1907 年に北埔事件が発生した場所であるため、「北埔」とする 1 首を書いている。

遠遠人家入眼中、客程已在北埔東。夕陽反照紅塗崁、疑是當年血濺紅。

錯落人烟幾百家、當年聽説尚繁華。而今廢井殘墻外、只有寒蘆猶著花。

警署前庭兀兀碑、居民見慣似忘悲。我來捫石讀題字、不感哀唬只淚垂。

唱亂居然第一聲、憐他膽大又年輕。逃姬不是傾城色、豈為區區小不平。

婦女謙柔總可憐、能從虎口獲全生。非關民族懷偏見、鐵證分明在眼前[110]。

（遠く民家が見え、旅はすでに埔東の北に来た。夕日に照らされ赤くなり、昔の血で染められたかのように彷彿させる。百軒余りの民家がばらなら、聴くと昔は賑やかだった。今は、壁の外に井戸は荒廃、枯れた葦にだけ花があり。警察署の表庭に碑が唐突に立っており、見慣れたせいか住民は悲しさを忘れたようだ。石碑の前へ近づき上の字を読み、悲しみがなく、ただ涙ぐんぐん。勝手なひと声が第一声となり、彼の若しき度胸に同情した。逃げたお姫は町の別品さんではなく、唯の不平のためではあり得ない。順応な婦人をいつも可哀想に思い、虎の口から逃れて生きることができた。民族の偏見に関わらず、その証は目の前にはっきりある。）

「乃知釀乱非民責、為政休教失不平」とするこの詩は、賴和が求学の段階で台湾人民の悲境に対し、すでに深い認識を持っていたことを示している。

賴和の民族アイデンティティーは日本の殖民統治の思想を受け入れることがなかったが、1916 年の「環翠楼送別」という 1 詩では、日台は融合すべきであるという彼自身の考えが示されている。

一生瀟灑寄園林、愛酒又兼愛苦吟。

環翠今宵同諷詠、定軍他日共登臨。

---

[109]林瑞明編『賴和漢詩初編』、彰化県立文化中心、(1994 年)、7 ページ
[110]賴和『新竹高工圖書館館訊』、44 期、(2012 年 3 月)、1 ページ

白沙猶有鴻泥跡、古月何如龍井深。

我替松梅愁不了、倚欄獨賞歳寒心。

酒興詩情老更饒、追隨曾與破無聊。

日台差別吟中撤、汝我猜疑飲次消。

肆口未聞清虜罵、闊肩不似國民驕。

鉢聲此夕敲殘後、萬里相思入暮潮[111]。

（一生田園にて鷹揚をし、酒を愛し兼ねて詩吟に没頭。環翠にて今宵で共に歌え、いつか定軍山の頂きを登ろうと決めた。白砂に鴻の足跡がまだ残っており、古月は龍井ほど深くはない。松梅の心配しても仕方なし、柵に依って歳月の寂しさを楽しむ。酒と詩は年取るほどうまくなり、追い求めつつ、無気力な日々を砕く。日本と台湾の隔たりは詩の中で消え去り、貴方も我も飲んで疑いを次第になくなった。戯言に清朝の罵声が聞こえず、背中にも国民の高慢さなし。鐘の音が夕方に鳴り終えた後、万里の想いが夕暮れに溶け込む。）

この詩の表現しているものは、異なる種族の詩人が詩宴で平等に親睦を交わしあう情景である。このほか、1919 年に賴和は「感懐」という 1 詩で、「文章声誉吾無分、枉作皇朝聖世民」、そして 1923 年に『台湾』4 年 4 号で発表した「最新声律啓蒙」で「蕃和漢、北中南」と書き、この漢詩は全ての民族の融和を意味している。

1916 年から 1923 年の間、賴和の矛盾した感情は、日本の殖民統治に反対し、日台が融合すべきとの思想に転換したほか、また賴和が 1918 年に中国の廈門で医者として働いていた頃に「去国吟」、「元夜渡黒水洋」、「端午寄肖白先生」、「中秋寄在台諸旧識」、「答林肖白先生並和瑤韻」、「同七律八首」等の漢詩を書いており、これらの漢詩には彼の中国文化の遺民としての意識が反映されている。例えば「中秋寄在台諸旧識」の中の何首かの漢詩を例にとると、その内の 1 首は「古月吟社諸公」におくる詩であり、以下のように書かれている。

亂世奸雄起並時、中原殘局尚難知。茫茫故國罹烽火、颯颯西風隕舊枝。

萬里客懷傷寂寞、百年大局費支持。亞歐變幻良宵月、定入樽前感興詩[112]。

（乱世に奸雄が同時に現れ、中原の局面は尚判りづらい。蒼蒼たる祖国は戦火に遭い、強い西の風が古い枝を吹き落とし。万里の故人が寂しさを悲しみ、百年の計に支持を費やす。アジアも欧州は今宵の月が変わりつつ、杯の前に静かに詩の予感を覚える。）

---

[111]林瑞明編『賴和漢詩初編』、彰化県立文化中心、(1994 年)、11 ページ
[112]林瑞明編『賴和漢詩初編』、彰化県立文化中心、(1994 年) 27 ページ

賴和の漢詩が「茫茫故国罹烽火、颯颯西風隕旧枝」と述べた故国とはすなわち中国であるが、しかしながら台湾人はすでに改籍して日本人となっており、ゆえにこの状況についてはただ感嘆あるのみである。このほか「中秋寄在台諸旧識」には、林肖白におくる詩があり、「肖白先生」の1詩にはこうある。

莽莽神州看陸沈、縦無關繫亦傷心。

迴天有志憐才小、填海無功抱怨深。

蕭瑟客途秋復半、淒迷庭院月初陰。

亂離世界良宵景、料定先生有壯吟[113]。

（蒼蒼たる神州（中国）は見るうちに沈んでいく、関係がなくても悲しい。志を天に巡らせても才能の低さに実感、隔たりを埋めようとも功を奏せずに深く自己嫌悪に陥る。悲しげ秋の旅はまた半分過ぎた、悲しい庭園を照らしかけの月と影。乱世の今宵に良き景色、先生にまた偉い詩を歌うのだろう。）

この詩は最初から「莽莽神州看陸沈、縦無関繫亦傷心」と具体的に中国の乱局に対する感情が述べられ、すでに自分は部外者であるが、なお深く悲哀を感じており、「迴天有志憐才小、填海無功抱怨深」と、そのいかんともし難い心情を表現している。

上述の賴和の矛盾した感情においては、日、台がお互いに融合すべきだと認識しつつも、一方ではアイデンティティーを中国に求め、中国の文化遺民であることを自覚している。しかし賴和のこの矛盾した感情は、彼が1918年に廈門に渡って医療に従事した際に、中国の五四運動の衝撃を受け、台湾へ戻った後には積極的に台湾新文学運動に参加した。その後1921年2月に台湾議会設置請願運動に加わり、10月には台湾文化協会に加入し、理事に当選した。中国における経験および台湾文化の抗日の影響というこれらの境遇は、賴和の矛盾した感情を次第に解いていったようで、自身の漢詩の創作はここから日本の殖民統治に反抗する傾向が現れてくる。賴和の日本の殖民統治に反抗する漢詩は、1922年に『台湾文芸旬報』に発表した「亡国奴日記及誰之罪」および「貧民血一篇」の両詩を例とすると、その内容は以下のとおりである。

「亡国奴日記及誰之罪」

悲來獨唱懊儂歌、眼底華嚴幻影多。今日鈞天猶醉夢、何堪重問舊山河。

千古傷心國破亡、呼天欲訴恨偏長。卻憐故國沈淪日、論罪由來究孰當?

「亡国奴日記及び誰の罪」

[113]林瑞明編『賴和漢詩初編』、彰化県立文化中心、(1994年) 29ページ

（悲しむとき一人で悔しい歌を歌い、目の前に華嚴の幻影が多し。今日も天国で酔って夢の如く、旧山河のありようを再び聞き堪えず。千年の悲しみは国が破れて滅んでしまい、天に訴えようとも恨みが長すぎ。故国の沈む日を悲しもうと思いや、結局罪は誰が背負うのであろう。）

「貧民血一篇」

世間階級太分明、處處風波起不平。無數貧民膏血盡、憑誰霖雨濟蒼生[114]。

「庶民の血の篇」

（世に階級ははっきりと分かれており、所々波立って不平が起きる。無数の庶民は富みも命も尽き、誰かが潤ってこれらの命を救済するのであろう。）

上述の詩作や後の賴和の台湾文学史上における業績から、1920 年以後の賴和はすでに自身の矛盾した感情を解き、完全に日本の殖民統治に反抗する創作をしていることが見て取れる。賴和は積極的に台湾新文学に創作に打ち込み、誰もが認める台湾の 1930 年代の文壇のリーダーとなった。『台湾民報』の文芸欄を担当し、また後進の育成に力を尽くして「台湾新文学の父」と称された。そのほかにも彼は積極的に社会改革運動に参加し、何度も投獄された。1941 年に彼が獄中で書いた作品「獄中日記」は、台湾が日本の殖民統治下にあるという重々しい心情を反映している。

日本という異文化による殖民統治に反抗する賴和の漢詩は、早期のアイデンティティーが後期における反抗に転換してゆく過程だが、この他にも日本統治時代の全期を通して日本の殖民統治への反対をつらぬき通し、漢詩の創作をもって心の深層にある中国文化を慕う感情を表現し続けた人々がいた。このようなタイプの台湾文人は、中国文化としての漢詩を守るため、日本統治時代にも詩社を結成している。

これらの詩社は、本章で述べたような、日本人が加入していたり、またはその背後で殖民統治者が支持していたような詩社とは異なっている。彼らは日本の官紳とは唱和せず、中国文化の漢詩の創作にのみ従事し、日本という異文化による台湾統治に反対する心境を表現した。こういった詩社の代表的なものとしては 1902 年創立の「櫟社」が挙げられ、櫟社と台北の「瀛社」、「南社」は並び称された。当初の発起人は林癡仙、林幼春、賴紹堯らであり、その後の主要な社員には陳槐庭、蔡啓運、呂厚庵、陳滄玉、博鶴亭、林献堂、荘太岳、連雅堂、林仲衡らがいた。同社の中心的な社員は林幼春、蔡恵如、林献堂らであるが、彼らは日本統治時代に台湾文化協会、台湾民報社、台湾議会設置請願運動などに加わった抗日陣営の主要なリーダー達でもあり、この一点において台北瀛社の親日的な様子とは鮮明な対比を成している。

台湾民族運動の重要なリーダーは、櫟社の重要な社員でもあった林献堂であり、その一生は非武装の抗日に奔走するものだった。彼の漢詩からは、台湾が日増しに困難な状況になっていると感じる懸念と

---

[114] 賴懶雲『台湾文芸旬報』、第 10 号、（1922 年）

苦悶を感じ取ることができる。例えば「述懐」の１詩にはこうある。

> 虚生六十年、于世無少益。中年曾奮發、蚊負空努力。韜晦及今茲、終日惟飽食。不才反自全、自喩以樗櫟。憶自墜地初、家門多淑德。頭角頗崢嶸、丰姿亦岐嶷。親朋殷屬望、鵬程謂無極。十五方志學、輿圖忽改色。扁舟航海行、風雲告急迫。伯母及諸姐、幼弟亦在側。暫居晉江城、聊以避不測。思親時望雲、悲來不能抑。買棹復歸來、甘旨侍朝夕。擾攘始漸平、載戢干戈役。地方行新政、舊習頻改易。人才雖登用、庶務多未識。其時纔弱冠、勉盡桑梓責。冠履常倒置、詩書雜簿籍。新犢耕荒園、駑馬騁沙磧。終非能適任、六年解轅軛。施政每偏重、不脱愚民策。交通與水利、誰説非利澤。教育則何如、故步如疇昔。民權重自由、言論加逼壓。未廿久雌伏、一奮沖霄翮。糾合諸同志、上書請變革。臺灣宜自治、議會應採擇。帝京冒風雪、歴訪官紳宅。力説重民意、猜疑未能釋。或憫其愚蒙、或視為叛逆。成敗一任天、犠牲何足惜。奔走二十年、此心徒自赤。問君何所得、所得雙鬢白[115]。

（六十年を空しく過ごし、世にも役立てなかった。嘗ての中年は頑張ったが、蚊のような微々たる力で努力を無駄にした。嘗胆忍耐今日に至り、食うだけで一日を終えた。才能がなくてもすべてに手がけ、自らをニワウルシの楢（才能がないこと）に喩える。生まれたときのことを思い出し、家門には徳の厚い人が多い。出だしが良くて奇才のようにも見え、姿も凛として岐の嶷（秀る峰）の如し。親類や友は厚く期待を寄せ、未来は計りきれないほど極まりなし。十五歳から学問を志し、地図の色は突然変わった。小船で航海をし、風雨が状況の緊迫さを告げた。叔母や姉たち、また幼い弟も側にいた。晋江の町に身を置き、不測を避けようとした。親族を思うとき雲を眺め、悲しくて耐えられなかった。棹を買って（機会を得て）再び戻り、朝から晩までご馳走を夢見る。混乱が収まり始め、武器も締まられた。地方は新政を試行され、旧習も次々と変えていった。人材は募集されたが、庶務の多くは分からず。あの時は私が若年であるため、故郷の一員の責務をぎりぎり果たした。帽子と靴をよく顛倒させ、詩書と浅い本を雑に出した。若い牛に廃園を耕させ、年取った馬が砂地を馳せるようなものだった。結局適任にあらず、六十で職を退いた。施政毎に重く偏り、民を欺く政策から脱しておらず。交通と水利は利益と富に利しないとは誰が言ったの？教育はどうだ？またもや昔のような古き歩き方ではなかろうか？。民権は自由を重んじ、でも、言論には高圧がかかった。長き窮屈に耐え切れず、奮起して立ち上がった。同士達を集め、上申して変革を訴えた。台湾は自治に適し、議会は（これを）採択すべしだ。風雨にも関わらず上京し、官僚や郷紳の自宅を歴訪した。民意の大事さを力強く説いたが、猜疑は払拭できなかった。愚人と思われていたか、或いは反逆に見なされていた。成敗は天意に任せ、犠牲しても惜しまず。奔走して二十年、この心は自然に純粋になった。何か得たかといえば、髪の毛が白く変わったことである。）

林献堂のこの詩は自己の年少時から60年来の感慨のほかに、日本の統治に対しても多くの批評を加え

[115]林献堂『数位典蔵与数位学習聯合目録』、(1960年)
http://catalog.digitalarchives.tw/item/00/58/fd/c9.html（2013年3月16日）

ている。例えば「施政毎偏重、不脱愚民策」と日本の愚民化政策を批判し、また交通、治水、教育、言論などの統治政策に対しても批評を行い、「糾合諸同志、上書請変革、台湾宜自治、議会応採択。」としている。この詩は、林献堂の一生の足取りと経歴を詳しく叙述し、さらに日本の統治に反抗する心情を表現したものである。

このほか、例えば「感懐」の１詩では、台湾が皇民化期に入った後、林献堂が漢詩を通して間接的に日本殖民政府の圧迫を訴えている。詩にはこうある。

久將壯志付東流、閒夜無端起百憂。

麥穗黃時飛鳥雀、蔗花開遍沒田疇。

人情翻覆誰能料、世路崎嶇願未酬。

斜倚杖藜樓畔立、遙看富士獨凝眸[116]。

（大きな志は特に昔から捨て去った、静かな夜に理由なき憂いが起きる。
小麦の穂が黄色になったとき雀が飛び回り、砂糖黍の花が咲き乱れ、田端を覆い尽くした。
人情がころころ変わり誰もや予測できぬ、世に道が険しく、願いが叶わず。
杖アカザを手にして建物の畔に佇み、一人で富士を遠く眺めていた。）

この詩「麦穂黄時飛鳥雀、蔗花開遍没田疇」は、日本政府が強制的に食糧を取り上げたことを非難しており、台中州が「米穀供献報国運動」を推進しているのは、まさに田の鳥たちが農民の苦労の末の実りを盗むようなもので、農民の生計は日増しに苦しくなっている。そして民主運動の過程において人間の裏表をよく見聞きしたことから、人の心は変わりやすく予測し難いもので、またこの厳しい人間世界で望みを実現することはできず、今やただ建物の傍らのアカザによりかかり、遥かに富士山を見つめるのみ、としている。また「静和園看牡丹」の１詩は、

我亦延賓鑑賞來、春風紅紫共徘徊。洛陽未識今何似？江互於茲正盛開。

漫詡風流欺弱柳、敢誇富貴笑寒梅。託根得地無妍醜、免被奔騰鐵騎摧。

（僕も客らについて見物しにきた、春風に赤や紫が共に交錯。洛陽の今は何に似ているのだろう？川もここで合流し花が満開。花は色鮮やかに翻し柳の繊細をいじめ、富や貴族を誇り、寒梅を軽んじ見る。根に託し適した土壌を得て醜くも美しくもない、狂う戦禍に巻き込まれずできた。）

詩が述べているのは、中国唐代の国力は強大で文化は栄え、日本の文化には中国から伝来したものが

[116]林献堂『数位典蔵与数位学習聯合目録』、(1960 年)
http://catalog.digitalarchives.tw/item/00/58/fd/58.html (2013 年 3 月 16 日)

多い。現在は日本が比較的強大であるだけで、それゆえ「漫詡風流欺弱柳、敢誇富貴笑寒梅」として、日本人は一時の強大さを笠に着て、他人を侮ったり中国を嘲笑すべきでないこと、中国は将来まさに花開くがごとく、正しい場所に成長すれば容姿の優劣や善悪に係わらず、いかなる強大な武力にも敗れることはなく、最後には再び強大な国家となるとしている。そしてこれも林献堂の心にある中国に対する思慕の念を表している。

これらは、櫟社における林献堂に代表される日本統治に反抗する漢詩の表現であるが、日本による異文化統治に反対した詩人は、櫟社以外にも少なからず存在した。だが本論文では最後に、1942 年になって正式に櫟社へ加入した葉栄鐘を例に挙げ、一つのまとめとしたい。

葉栄鐘は 1900 年生まれの鹿港人であり、1918 年に恩師の施家本の紹介で霧峰の林献堂から資金援助を受け、日本に留学した。その後は長く林献堂の秘書を務め、1920 年に林献堂の推し進める議会設置請願運動に参加し、その時から政治活動に参加し始めた。1930 年には「台湾地方自治聯盟」の書記長となり、1931 年に黄春成、賴和、荘遂性らと雑誌『南音』を発行した。1935 年には『台湾新民報』通信部長兼論説委員となった。1940 年 2 月、日本に派遣されて『台湾新民報』東京支局長となり、1941 年 11 月には台湾へ戻って『興南新聞』（『台湾新民報』を改題）の台中支局長となった。1943 年 2 月には日本に徴用されフィリピンで『大阪毎日新聞』特派員とマニラの新聞社『華僑日報』の編集次長となった。1944 年に台湾へ帰り、『台湾新報』の文化部長兼経済部長となった[117]。葉栄鐘の経歴から、彼が林献堂の影響下で台湾民族運動に参与し、その後は新聞社での仕事に従事し、日本政府に徴用されたとは言え、なおその文化的な抗日の姿勢を保持していたことがわかり、また漢詩作品からもその一端を窺い知ることができる。葉栄鐘の詩作をここに数首挙げてみる。「寄懐天南並似稲江諸友」その 1

> 憨氣凌霄處、君真是我曹。論交崇古侠、談學蔑時髦。地窄龍蛇困、天昏魑魅暍。山河須整頓、後起責難逃[118]。

（馬鹿正直さは雲の上を凌ぎ、君子は我輩以外にあらず。議論に熱心で古代の義士を崇め、学を重んじ流行ものを軽視。地が狭く龍蛇の動きが制限され、暗い世のなか、魍魎が喘ぐ。山河（国）は立て直すべき、後輩はその責任を免れず。）

この詩は「憨気凌霄」を同志であることの判断基準としており、言外に「楽莫楽兮新相知」という狂喜や高尚さを含んでいるが、このような「憨気」の実質的な内容は結局のところ何であろうか。以下の数句に、一歩踏み込んだ解答がある。親交の面からみれば、心から互いを理解し合った忠心を尊ぶ侠気であり、学問の面からみれば、篤実で一時の流行に流されないものである。そして暗い時代についても感ずるところがあり、ひとりよがりにその身のみをもって満足し、その身は目下「手狭な土地で状勢の

---

[117]戴振豐「葉榮鐘與台灣民族運動(1900-1947)」、政治大學歷史研究所、(台北、1999 年)
[118]葉栄鐘「数位典蔵与数位学習聯合目録」、http://catalog.digitalarchives.tw/item/00/29/4d/6f.html（2013 年 4 月 2 日）

不穏な状態」にあっても、我々は龍蛇が困難に遭うのと同様であり、殖民統治者の強権が魑魅魍魎の如く横行するとも、台湾の未来はまさに改革が待たれ、これが後継者としての自分の避け難い責任なのだ。

1937 年 7 月に日中戦争が勃発し、日本の軍部には気勢が満ち、台湾の言論の自由は縮小した。当時、葉栄鐘は台北の『台湾新民報社』におり、時代と人間の心に殺伐としたものを感じ「寄遂性兄」を作った。

凄迷風雨怯清絅、病後漸知惜此躯。曲筆陥人謠市虎、假威到處逞城狐。

看天忍涙知無益、末世危言亦太迂。一策傳君須記取、鋒鋩歛盡學糊塗[119]。

（低迷な風雨が清らかさを遮り、病気の後漸く分かったのは自らの体を惜しむべき。間違った筆は人を世のデマに陥れ、虎の名を借りて狐が城中であっちこっち威張る。天を仰いで涙を忍ばせ、無益を知りとも、末世の噂はあまりにも行き過ぎた。一策を君に伝え、覚えてほしい、それは、出る杭が敲かれるから、分かっていても知らんぶりにせすべし。）

首句の「凄迷風雨」は、中日戦争の勃発以降、日に日に苦しくなる情勢の暗喩である。3、4 句は「三人成虎」、「狐假虎威」の故事を引用して、人々の心が荒んだことを批判している。この作は、1936 年に起きた「祖国事件」で林献堂が『台湾日日新報』の激しい攻撃を受け、日本人のごろつきに侮辱され、さらにまた日本の警察が常に些細なことを理由に台湾人を拘束したり、台湾人を当局の政策に従わせて「反動言論」を禁止していることに感じて作られたものであるかもしれない。葉栄鐘と荘垂勝の 2 人はいずれも、濃い民族意識を有する学識高いエリートであり、感慨の深さは想像に難い。「看天忍涙」のいかんともし難い感情や圧迫、この「末世」に生きるにあたって「危言」を収めなければならない苦悶や憤り、悲しみ、その中の複雑な感慨とあらゆる困難はただ良き友人のみが理解できる。ゆえに、詩の末尾の「鋒鋩歛尽学糊塗」という消沈した語気で、良き友にいかにして乱世にあって自己を維持するかを悟らせている。言外には憤りの感情を感じられる。

最後、葉栄鐘が林献堂を追悼したこの 2 首の漢詩をもって、台湾文人の日本という異文化の統治に対する反抗の心情を示す。

功業寧須記、三臺盡口碑。滄桑資閲歴、憂患是生涯。孽子孤臣恨、池魚檻虎悲。書成長太息、庸筆負深期。（其一）

（功業を銘記すべき、政府上下の口コミは良し。履歴に豊富な経験が精彩で、一生において国を憂い。忠臣であっても重視されないことを悔やみ、池の魚が囚われた虎を悲しむ。本はできたとも長いため息を漏らし、才能のない筆は皆の期待を裏切った。）（その一）

---

[119]葉栄鐘「数位典蔵与数位学習聯合目録」、http://catalog.digitalarchives.tw/item/00/29/4d/6f.html（2013 年 4 月 2 日）

争取民權日、流言播四郊。分庭抗異族、團結籲同胞。羅網漫天布、晨鐘特地敲。初懷雖不遂、心血豈徒抛（其二）[120]。

（民権を勝ち取る日、噂は八方に広がる。陣地を構え分け外敵に抵抗、嘆く同胞を団結する。網羅を内外を巡らせ、朝の鐘を特に鳴らすべし。初願いは叶わなくとも、心や血をただでは投げ捨てべからず。）（その二）

この最後の 2 首の詩からは、異文化の理解と共生という側面において、日本という異文化の統治の下で、台湾の一部の文人たちが日本の殖民統治を受け入れることなく、「孽子孤臣」の思いで中国文化の象徴である漢詩を守り続け、日本文化による徹底的な同化を避けたことがわかる。ゆえに葉栄鐘は、「贈虚谷兄」の 1 詩中の「作詩何必拘工拙、一線能延便是功」、「斐亭風雅久灰塵、誰障洪流策鼎新」の句で陳虚谷と互いに励ましあい、我々は懸命に漢詩を書かねばならない、これは文化の命脈を繋ぐ偉大な活動なのである、としたのだった。彼らにとってみれば、漢詩を書くことは文化の抵抗の象徴であり、暗黒の時代における一筋の光であったのである。

[120]葉栄鐘「数位典蔵与数位学習聯合目録」、http://catalog.digitalarchives.tw/item/00/29/4d/6f.html（2013 年 4 月 2 日）

第三章　台湾新文学運動の興新と発展

第一節 台湾新文学の興起

漢詩を通じて日本統治時代の異文化の理解と共生について考察すると、台湾の文人は中国伝統文化のアイデンティティーを生み、さらに日本という異文化アイデンティティーに統治された漢詩を生み、また中国文化と日本文化の間を徘徊する矛盾した感情の漢詩も生んでいる。確かに日本と中国の間には、漢字によって創作する漢詩という共通の形式が存在していたため、日本と台湾の文人は漢詩を通して唱和、あるいは漢詩の表現を通して異文化にアイデンティティーを求め、あるいは抗うことができた。だが小説、散文、新詩等、漢詩以外の文学でも、台湾文人は日本の殖民統治の影響や、日本と台湾文人間で先天的な資質として身につけた母語の影響による制限を受けており、このため漢詩以外の文学の創作では、台湾文人の小説、散文、新詩等は中国の新文化運動の白話文学とは異なる発展を見せる一方で、日本人が日本語で創作する現代文学とも異なる発展も見せることになった。台湾文人が 1920 年代から生み出した、こうした創作活動は、一般的に「台湾新文学運動」と称される。

「台湾新文学運動」は一種の文化現象であり、萌芽期は定かではないが、おおむね 1920 年代に始まったと言われている。台湾新文学運動の台頭に関して、黄得時は新文学運動の萌芽期を具体的な根拠に基づき見出すことは困難だとし、それは「1920 年から 1922 年は創成期に過ぎず、世の関心はみな政治、社会に集中しており、文学に注意を払う余裕はなかった」ためだとしている[121]。黄得時のこの説は、以下で新文学運動の台頭の要素について検討するが、台湾新文学運動の創成期は 1920 年から 1922 年としており、また葉石濤は、台湾新文学運動の発展の時期区分について「台湾新文学運動の段階を確定することは極めて重要な事である」としている[122]。台湾新文学についての認知や理解は様々で、台湾新文学史の時期区分にも異なる見方がある。台北帝国大学講師の島田謹二が 1941 年 5 月『文芸台湾』2 巻 2 号に発表した一篇の論文「台湾文学的過去、現在和未来（台湾文学の過去、現在、未来）」は最も早く台湾で作られた文芸作品の時期区分で、台湾新文学分を 3 期に区分している。

1、1895 年（明治 28 年）の台湾割譲から日露戦争後の 10 年間で、旧文学である漢詩漢文の最盛期であり、日本人と台湾人の両者が旧文学を推し進めた。

2、1905 年（明治 38 年）以後、昭和初期までの約 25～26 年間で、漢詩、漢文に代わり俳句、短歌、新体詩が次第に主体となった時期である。同時期の中国新文学革命は台湾にも影響を及ぼし、台湾人にも白話文を用いる運動があったが、優れた作品は生まれなかった。

3、1931 年（昭和 6 年）のおおむね満洲事変（九一八事件）から 1941 年（昭和 16 年、同論文の発表

---

[121] 黄得時「台湾新文学運動概観　上」、『台北文物』、3 巻 2 期、（1954 年 8 月）、13-15 ページ
[122] 葉石濤「台湾新文学運動可分為幾個階段？（上）」、『台湾文学入門』、（高雄、1997 年）、20 ページ

時）の 10 年間で、台湾文学には相当程度の発展があり、台湾人の日本語も向上し、日本語の作品があらわれた。ただ、これらの日本語作品は高品質という程度までには成熟していない[123]。

島田は台湾が創造した文芸作品を 3 つの時期に区分したが、その解釈には、日本の内地の台湾に対する興味の深浅、台湾在住者の文化教養の程度、一般読者階層の文芸に対する態度、作品が発表された舞台と読者の質や規模、作者の素質という 5 つの基準を設けている。区分された各期は確かに特色が明確に記述されている[124]。だが詳しく見てみると、島田は台湾の文学を日本文学の一環と捉えており、日本人の台湾文学の活動を重視、中国新文学と台湾新文学の関係を軽視しており、また台湾新文学が民族解放運動の中で担った重大な使命は顧みておらず、ただ台湾の文学を単に外地文学として見ているに過ぎない。このため葉石濤は、島田のこうした統治階級の日本人文学を主体とする思考方式は紛れもない「外地文学論」であり、台湾新文学を見下した、事実上「歴史の動向に反する謬論」だとしている[125]。

台湾人である王白淵はどのように時期区分を行っているだろうか。彼は台湾新文学運動史を 2 段階に分けている。第 1 期は白話文の文学期であり、第 2 期は日本語の文学期である。このような区分について葉石濤は、王白淵は台湾人を主体として台湾文学を検討しているものの、使用言語により台湾新文学を区分し、時期、思想的背景を考慮しておらず、簡略に過ぎる区分法であると指摘している[126]。

台湾新文学運動の時期区分の問題については、いかなる文化的な要素をもって時期区分の基準とすべきかという問題と係わってくるため、台湾文学史の記述という問題に関して本論文では第 3 章で掘り下げる。ここでは、葉石濤が日本統治時代の台湾新文学史の時期と区分を論じた『台湾文学史綱』で、台湾新文学を段階に区分する。

1、揺籃期：1920－1925　1920 年の『台湾青年』創刊から 1925 年に賴和が第一篇の散文「無題」を『台湾民報』に発表するまでの 5 年間で、この時期は新文学運動の作品は少ないが、60 年余にわたり台湾文学で示された問題が凝縮されている。そのうち新旧文学論争の言語改革、台湾語の文章と郷土文学といった課題は、戦後台湾文学が展開される中で、次第に解決されている。日本統治時代の資産階級が信奉した米国のウィルソン大統領の弱小民族の自決論しかなく、本土自決や農工主体の社会主義改革を指向する主張が一貫して統合されず、台湾文学を形成することもできないという悪夢は 80 年代中期まで続き、その影は今も消失していない。

2、成熟期：1926－1937　1926 年の賴和の「鬥鬧熱」、楊雲萍の「光臨」が『台湾民報』に出現してから 1937 年の総督府による全面的な漢文使用禁止、楊逵主編の『台湾新文学』の停刊、日中戦争の発生の一年に至る期間であり、この時期は、中国語による作家の創作は豊富で優秀な作品が多く、台湾新文学運動の 10 年の黄金時代を形成している。大部分が写実主義によって、主に台湾農村の疲憊や各階層の

---

[123]島田謹二編、葉笛訳「台湾文学的過去、現在和未来(上)」、『文学台湾』22、159-166 ページ
井手勇『決戦時期台湾的日人作家与「皇民文学」』、(1996 年 7 月）を参照
[124]島田謹二「台湾文学的過去、現在和未来(上)」、『文学台湾』22、159 ページ
[125]葉石濤『台湾文学入門』、春暉出版社、(高雄、1997 年)、20-21 ページ
[126]葉石濤『台湾文学入門』、春暉出版社、(高雄、1997 年)、22 ページ

民衆の生活の困難を反映した作品となっているが、社会的な観点が強く、さらに中国の30年代文学の影響を受けており、作品に深みや奥行きが生まれず、さらに芸術性や美学性も探求されておらず、時には粗雑な意識形態をも露呈している。方言を過度に使用し、台湾本土的な性格を現す上では有効な表現であるとしても、状況が変遷した後では理解が難しくなる。この時期は後期になると、日本語作家が徐々に台頭し、日本語文章の技巧や作品の表現方法によって日本語文壇の標準を目指すようになった。新世代の日本語作家は西洋や日本文学のエッセンスを吸収しながら、台湾本土的な性質をますます強め、表現も多彩なものとなり、写実主義の基本的な書き方として西洋現代小説の多元的な技巧を採用し、現代小説的な懐疑精神や合理主義に富むようになった。日本語作家の出現により、中国文化の部分的な影響から抜け出し、台湾新文学を近代から現代に前進せしめたのである。

3、戦争期：1937－1945　1937年から1945年の台湾光復に至るまでの約8年間である。この段階で出現した日本語新作家はほとんど見られない。20歳前後の何人かの作家はまだ世間との関わりも浅く、日本の帝国主義の教育の影響を深く受けており、民族や歴史にいささかの認識があるとしても、確固とした抵抗精神を欠いている。彼らの作品はいずれも耽美的で現実逃避的である。楊千鶴の「花開時節」、葉石濤の「林君寄来的信」、「春怨」等である。1945年に日本が無条件降伏を受け入れ、暗黒の永き50数年の日々は過去のものとなり、台湾は解放された。台湾新文学運動の名誉ある歴史的な使命は、その多災多難で困難な歴史を終え、台湾の作家が真理のために奮闘して止まない、不屈の抵抗精神を有することを十分に明らかにした[127]。

葉石濤の観点による時期区分は、その時期区分ごとにみられるたくさんの文化的な要素をすでに示しているが、その中でも日本の殖民統治が持ち込んだ異文化的な要素が主なものであり、新文学運動の台頭と台湾人民の文化抗日の活動は、相互に密接な関係がある。そして、日本本土内部で明治維新ころから開始した言文一致運動[128]も台湾文人の新文学運動に影響している。その他にも1918年、第一次世界大戦後に米国のウィルソン大統領の打ち出した民族自決論、さらに中国の五四運動以後に興った新文化運動が、いずれも台湾新文学運動の台頭に重要な影響を及ぼしている。数多い異文化要素の中で、本節の台湾新文学運動は中国語による創作が主となっており、このため台湾人民の文化抗日の活動、さらに中国の新文化運動という二つの異文化要素から台湾新文学の台頭を分析することとする。日本の言文一致運動については、台湾新文学運動の日本語作品の分析に際して同時に検討することとする。

台湾人民の文化抗日の活動におけるの異文化要素については、廖漢臣がかつて台湾新文学運動について触れており、その台頭の理由に、「一方で日本人青年が構成し、一方では省籍の青年が主体となり構成し推進した文学運動が、主観的、客観的な各種条件の制約を受け、性質上それぞれ異なっていた……だ

---

[127] 葉石濤『台湾文学史綱』、文学界、（高雄、1999年）、28-29ページ、38ページ、58ページ、66-67ページ

[128] 言文一致運動（げんぶんいっちうんどう）は明治初期に始まり、言文の一致を主張し、言語と文章の一致により、自由かつ正確に思想、感情を表現できる文体の改革運動で、同運動は二葉亭四迷・山田美妙・尾崎紅葉らの作家が試みた後で次第に普及した。この運動は、日本語の言語と文学の近代化を促進し、現代の日本語の口語文となり、また日本の現代文学の起源ともなった。

が大まかに言えば、前者が提唱したのは一種の幇間文学であり、後者が提唱したのは一種の民族革命文学ということができる」としている[129]。廖漢臣の言うところの新文学とは、台湾青年を主体とする民族革命の文学を指している。この新しい文学運動の発展は台湾文化協会の機関紙、『台湾民報』の前身である『台湾青年』と密接な関係を有しており、ゆえに一般には台湾新文学運動は1920年の『台湾青年』の創刊後と認識されている。その主な理由は、日本が台湾を統治した後に言論、集会、結社や出版等は台湾総督府の統制するところとなったため、それにより新民会が日本で『台湾青年』を創刊した後、自然と新文学運動が作品を発表する場となったことにある。

『台湾青年』は台湾新文学運動を推し進める先鋒となり、台湾人が文化抗日あるいは体制内抗日で異文化の殖民統治に反抗したことと密切な関係があった。1915年の「西来庵事件」は日本統治時代における台湾人の最後の大規模な抗日武装蜂起であり、この後に武装抗日運動は消滅する。これにとって代わったのが各種の社会運動の拡大であり、そのお主なものは当時の国際思潮の影響を受けていた。1918年、第一次世界大戦が終わり、米国のウィルソン大統領が唱導した「民族自決」の理念の影響が波及し、世界各地で列強に虐げられた国家や殖民地に、民族復興あるいは独立を求める運動が紛紛と拡大した。この他にも、レーニンが主導したソ連の革命が成功して（1917年）最初の共産国家が成立し、革命を輸出して世界各国の貧しく圧迫された農工階級が団結して政府を倒すよう鼓舞した。殖民地である台湾の知識分子もこの思想の影響を受けて次々と各種のグループを結成し、政治や社会運動に身を投じていった。

当時の日本は世界の民主主義思想の影響を受け、また政党政治に向けて動き出していたため、国内には比較的にリベラルな社会的雰囲気が満ちており、これを「大正デモクラシー」と呼んでいる。日本の知識分子は、台湾人が殖民地にあって受ける各種の不公平な待遇に関心と支持を示した。当時日本に留学した台湾の学生は、この民主主義思想の刺激を受けて抵抗を始め、1920年代の台湾社会運動のさきがけとなった。1920年代、東京にいる台湾人留学生は約2400人で、当時の「民族自決」、「社会主義」、「自由民権」等の新たな思想を吸収し、台湾の政治改革を先導する先峰となっていた。1920年、日本に渡った台湾人の知識分子の青年100余人が「新民会」を組織し、林献堂を会長として雑誌『台湾青年』を創刊し、台湾の政治改革を進めた。改革運動はまず「六三法撤廃運動」を推進し、この法案が台湾総督に与えている立法に関する特権の取消しと、台湾に日本内地の法律の適用を要求した。

「新民会」は同時に台湾が特殊性をもつことから日本の帝国議会が台湾に独自の議会を設けることを認めるよう主張し、ここに「台湾議会設置請願運動」を展開し、1921年から14年間、毎年請願を提出する運動を続けた。これは台湾の民衆が社会運動でもって体制下における民主的な権益を勝ち取ろうとすることの始まりだった。台湾の留日学生が「台湾議会設置請願運動」を推し進めるに当たり、台湾島内では蒋渭水らの先導によって1921年に「台湾文化協会」（略称「文協」）が成立し、文化啓蒙の運動を展開した。「文協」は、会報の発行や読報社、講演、勉強会、文化劇等といった各種の文化活動を通

[129] 廖漢臣「新舊文学之爭― 台湾文壇一筆流水帳」、『台北文物』、3巻2期、（1954年8月）、26-27ページ

じて、民間人の知識を啓発して社会文化を改革し、殖民統治への反抗を表明し、そして民族解放の目標を追求するといった目標により、当時「台湾は台湾人の台湾」、「台湾は世界の台湾」等のスローガンを打ち出した。後に「文協」は、内部の会員の活動方針をめぐる対立を起こして分裂した。1927 年、右派が分派して「台湾民衆党」を組織した。

1923 年、日本に渡った台湾民族運動のメンバーは東京で『台湾民報』を創刊し、台湾人民のために声を上げる言論機関として、そして 1927 年には『台湾民報』は正式に台湾で週刊として発行され、また後に増資を行って再編し『台湾新民報』となった。1932 年には日刊となって総督府の発行許可を得、民衆の代弁者としての報道媒体として、当局の立場を代表する『台湾日日新報』と渡り合った。『台湾新民報』は折につけ総督府の報道検閲の制限を受けたものの、なお政治を批判し、世論を反映する役割を果たしていた[130]。

台湾新文学運動の台頭は、台湾人が文化抗日をもって異文化による殖民統治に反抗する一環であったほか、前述の台湾文化啓蒙運動もその中の重要な要素である。台湾文化啓蒙運動は日本による殖民統治下で生まれた、異文化の理解と共生に関する全面的な台湾新文化現象であり、これらの現象には文学、映画、音楽、演劇、映画、美術、展覧会、体育、建築、服装、新聞、媒体、教育等が含まれた。例を挙げると、1900 年に台湾に映画が入り、初期には「活動大写真」又は「活動幻灯」と称していた。1905 年に日本人の高松豊次郎が社会写実映画を持ち込み、1910 年代以後は総督府に映画部門が増設され、映画の製作と宣伝、放映および教化を行い、民衆の大多数は巡回上映で映画に触れた[131]。この他に台湾で最初のレコードとレコードプレーヤーは 1910 年から日本蓄音機商会により台北で販売が始められ、台湾音楽の録音製作業務が展開していった。1925 年には一九二五年廉価版のレコードが現れてレコードの普及が始まり、日本音楽の他に歌仔戯、山歌、採茶歌等があった。1929 年に飛鷹レコードが最初の台湾語の流行歌「烏猫行進曲」を発売し、この他に 1928 年に設立されたコロムビアレコードは、他のレコード会社を買収して、1932 年に清国上海映画会社の「桃花泣血記」のために台湾語レコードを録音製作した。この、歌仔戯出身の純純（本名劉清香）が歌った最初の台湾語の流行歌の売れ行きは好調であった。この他、日本統治下の教育で西洋音楽理論を学んだ音楽界の人材が育成され、これらの台湾人音楽家は台湾語歌謡の創作を始めた。有名な作曲家に鄧雨賢、作詞家には李臨秋、陳君玉があり、歌手は純純の他に愛愛（簡月娥）、林月珠、王福らがいた。多くの不朽の台湾語のクラシック歌謡、「雨夜花」、「望春風」、「白牡丹」、「四季紅」等はいずれもこの頃にあらわれた。

日本統治初期の新たな殖民統治者が持ち込んだ日本式と西洋式の服装の流行と、旧慣の尊重や「纏足廃止」運動の影響で、台湾の服装には自主性や多様化の様相があらわれていた。皇民化期以前には中国式、日本式、西洋式、さらには中洋折衷の服装までもが見られた。閩南と客家系の服装はスタイルや生

---

[130]陳翠蓮「日拠時期台湾文化協会之研究：抗日陣営的結成与瓦解」、国立台湾大学政治研究所修士論文、(1986 年)
[131]黄建業編『跨世紀台湾電影実録 1898-2000』、文建会、(台北、2005 年)

地が類似しており、閩客の差をはっきりと区別することは難しかった。一般的に、男性は日本統治初期には依然として清朝の服装であり、富裕者や地方の有力者は絹の長袍と馬褂を着て、一般民衆は普段はシャツやズボンが多く、仕事をする時は頭に頭巾や編み笠をかぶった。1910 年代以後は洋装に西洋式の帽子を合わせるのが一般化し、少数は日本式の服装をしていたが、高齢者は依然として伝統的な服装であった。閩客の女性の服装の変化は比較的に大きく、和服や洋装がかなり流行し、1920 年代にはベルボトムのズボン、30 年代には「ワンピース型旗袍」が流行した。そして女性の婚礼衣装もウェディングドレスが鳳冠頭飾にとって代わる「中洋折衷」スタイルとなった。

絵画では西洋、東洋絵画の技法と思想が台湾に導入され、過去の臨摹という模写、師弟、父子相伝で伝承されたスタイルが打破され、学校教育や画会の交流、展覧会等を通したものとなった。中でも、学校教育で台湾人画家を育てた二大揺りかごと言うべきものが東京美術学校と師範学校だった。東美と台湾学校の美術教育は、日本画と印象画風油絵という新しい様式で台湾人画家に写生の観念をもたらし、そして台湾人画家も日本政府が主催する絵画展を通して、その新絵画スタイルの成果を披露した。最も早期の台湾人画家として黄土水が 1920 年に「山童吹笛」（石膏作品）で第 2 回帝展に入選している。帝展とは、1919 年に文部省が設立した「帝国美術院」下に設けられた「帝国美術展覧会」であり、全部で 10 回開かれた。帝展は文展の後継であり、文展は 1907 年に東京美術学院の正木直彦、東京大学の大塚安次と黒田清輝らの主導により文部省が主催した展覧会で、合計 12 回開かれ、1918 年に終了した後は帝国に引き継がれた。黄土水は雕塑で帝展に入選しており、絵画で正式に入選したのは陳澄波の 1926 年の「嘉義街外」（油絵）で、その後は陸続として廖継春、陳植棋、張秋海、李石樵らが帝展に入選している[132]。

台湾は 1927 年に帝展に倣って第 1 回台湾美術展覧会を開催、1936 年まで計 10 回開かれ、一般には「台展」と略称された。台展では西洋画と東洋画の 2 部門を設け、半公式の性格をもち、入選すればすぐに画家に対する評価に繋がったため、台湾人の画家は競って参加した。第 1 回台展西洋画の特選は、陳植棋、廖継春が分かち合った。東洋画部では台湾人の水墨画家はいずれも排除され、台湾人画家では陳進、郭雪湖、林玉山の三人の画家が選に入り、台展三少年と称された。1937 年に日中戦争が勃発して台展が中断され、1938 年の展覧会は台湾総督府文教局が直接開催し、「台湾総督府美術展覧会」とされ、略称「府展」として 1943 年まで 6 回開かれた。

日本統治時代の各種の新文化現象には、なお幾つかの新しいタイプの娯楽があった。たとえば日本の都市計画の歓楽街のように映画館があるほか、西洋画、東洋画の絵画展、喫茶店、日本料理店等があり、またその中の台北の条通区は今もなお台北のナイトライフの中心となる地域である。また波麗露珈琲館や黒美人大酒家は、今に至るまでその店名が続いている。この他にも日本は新たな賭博要素のある娯楽も持ち込んだ。主なものとして、馬券を発行する競馬で、さらに今日のロトに似た当時富籤と呼ばれた

---

[132] 謝里法『日據時代台灣美術運動史』、藝術家出版社、（台北、1998 年）

宝くじがあった。そして台湾の伝統娯楽活動も初期には何の制限受けず、廟会の活動や、北管、南管、乱弾、歌仔戯、布袋戯、文人の詩社、茶館、露天商等はいずれも台湾民衆のレジャー活動であり続け、皇民化期に至って抑圧を受けるようになった。

台湾新文学運動の台頭は、日本の殖民統治下の政治面において文化抗日を進め、そして文化啓蒙運動を行う一環であった。また新文学運動と文化啓蒙下の映画、音楽、服装や新しいタイプの娯楽等の文化は、互いに密接な関連性をもっていた。

台湾のこの種の文化啓蒙は、日本という異文化に対する理解と共生が生みだした現象であるという他に、台湾文化のルーツは中国文化にあったが、しかし日本の殖民統治により隔絶されたため、これにより中国文化が台湾から見て一種の異文化となったということがある。よって歴史的ルーツと血縁上の親近性から、台湾新文学運動の台頭のもう一つの重要な理由は、中国文化に対する思慕の情に由来するものであった。

台湾新文学運動の提唱者の一人である黄朝琴は、かつて自身らが台湾で新文学運動の流れに投じた主な理由を述べている。

> 民国 11 年（1922 年）に私（黄朝琴）と早大の学友、黄呈聡氏が祖国（中国）に戻り短期の旅行と考察を行い、国内で「五四運動」後の白話文の普及の状況、そしてまたこれが国民知識を高める上で大きな影響力を持つことを目の当たりにした。ここで我々は台湾の文化運動も白話文を用いなければならないと考えた[133]。

黄朝琴の回想録からは台湾の新文学運動が中国の五四新文学運動と密接な関係があったことを見てとれる。中国の五四新文学運動の時、胡適は『新青年』（2 巻 5 号、1917 年 1 月）に「文学改革芻議」を発表、そして陳独秀が『新青年』（2 巻 6 号、1917 年 2 月）で「文学革命論」を提唱し、中国新文学運動の影響下において、黄朝琴と黄呈聡の二人は雑誌『台湾』を舞台として、正式に台湾の新文学革命運動を展開した。そしてこれは「漢文」の文学改革であって日本語の文学改革ではないこと、またこれと日本の台湾統治方針は相反するものだとしたが、実のところは台湾の文化抗日の一環に属するものであった。

黄呈聡らが提唱した台湾漢文の新文学運動について、「論普及白話文的新使命」の中で彼はこう言っている。

> 我らの台湾の文化を振り返ると、今もなお遅遅として活動がなく、進歩も見られないが、その原因はどこにあるのだろうか。私は、我々の社会には普遍的文(体)で民衆が容易に本や新聞を読んだり、手紙や本を書いたりすることが難しく、このため世界の情勢を知ることができない。社会の裏面は暗黒で、民衆が愚鈍になると、社会は機能できない。これこそ

---

[133] 黄朝琴『我的回憶』、黄陳印蓮出版、(1981 年)、11 ページ

が進歩の無い原因である。ここにおいて私は、この種の文字の普及のために、我々の同胞と共に努力し、この文(体)を普及することを一つの新たな使命とする。しかも急がねばならない。……

概してこの白話文は、文化普及の急先鋒である。よって今後はこの素早い方法で普及し、我々の同胞が自らの立場となすべきことを理解することによって、我々の社会は発展することができる。これは非常に容易なことである。なぜなら、我々の同胞にはすでに幾らか漢文を学んだことのある人がとても多いためで、常日頃中国の白話小説を好んで読んでいれば、この精神を現在の中国で新たに刊行される各種科学や思想の書に投じて、結果的に我々の見識を広めることができるのである[134]。

黄朝琴と黄呈聡らが提唱し始めた台湾新文学運動は、明白に中国の五四新文学運動との関連性が指摘されているが、中国に源流をもつ台湾文化は、この新文学運動を進めるに当たり、当時の台湾文人の言う「祖国」の協力を得ることがかなわなかったため、中国に対して不満があった。例を挙げるならば 1907 年当時、後に台湾文化啓蒙で貢献の大きい富紳の林献堂は、日本の奈良で梁啓超に出会い、林献堂は梁任公に殖民地台湾に対する見方を聞いた。任公は林献堂に対し、「中国は今後 30 年、台湾人の自由獲得を支援できる力をもたない。ゆえに台湾の同胞は決して軽はずみに行動して無意味な犠牲を出すべきではない。アイルランドの英本国に対する手段に倣うのが一番良い。日本の中央政府の要人との結びつきを利用し台湾総督府の政治を牽制し、台湾人を強く弾圧することができないようにすべきだ」。と述べた[135]。梁啓超のこの談話は、林献堂やその後の台湾の抗日運動に対して大きな影響を与え、林献堂らの目には革命には望みがなく、中国も台湾を支援できず、台湾各地の抗日運動もまた次々と日本の鎮圧にあい、特に 1915 年の西来庵事件以後は、林献堂らは台湾人に文化を改革するよう指導し、政治と社会の面において流血のない改革運動を行った。この他に、1926 年に台湾新文運動の基礎を作った一人である張我軍は、日本の社会主義者、山川均の『弱小民族の悲哀』（1926 年 5 月 16 日から『台湾民報』第 105 号～115 号に連載）を翻訳した後、出版されたばかりの『台湾民報』第 113 号から 116 号を持って魯迅を訪問し、「中国人はみな台湾を全く忘れ去ったかのようだ。誰も問題にしようとしない」と、悲憤して魯迅に訴えた。このことは魯迅に非常に深い印象を与え、魯迅は八か月後に痛切な調子で回想している。「私は当時、切り付けられたような気がしてやや苦しかったが、口では『いや、そういう訳ではない。本国は滅茶苦茶で、内憂外患で常ならぬ事が多く、余裕がないのだ。だから台湾の事情は後回しにせざるを得ない』と言った」[136]当時、横暴な日本帝国主義に直面することは、確かに台湾人と中国人の共通の歴史的な宿命であったが、中国に余裕がなく、台湾で主体文化意識が確立されようとする時、な

[134]黄呈聡「論普及白話文的新使命」、『台湾』、第 4 年第 1 号、(1923 年 1 月)、12-25 ページ
[135]葉栄鐘『台湾人物群像』、晨星出版有限公司、(台北、2000 年)、84-85 ページ
[136]藍博洲『日拠時期台湾学生運動(1913-1945)』、時報文化出版、(台北、1993 年)、263 ページ

お中国から来た伝統文化を必要とし、中国文化に源流をもつ資源でもって現実の文化改革を推し進める必要があった。五四と台湾新文化運動のつながりをこのように考えて初めて台湾新文学運動が形成された原因を知ることができる。

中国の五四運動の頃の新文化運動は、日本の統治下から台湾を直接救うことはできなかった。そのため 1920 年代の台湾の新文学運動における台湾文人は中国新文化に対する理解を改めることになった。そして中国文化は台湾にとって文化の源ではあったものの、この時にはすでに別の形となった異文化であり、台湾新文化の構造に改めて影響を及ぼすものとなっていた。台湾新文学運動の創始者、黄朝琴を例に挙げると、彼は台湾自身で新文学運動を推進する方法、いわゆる「漢文改革論」を提唱している。それは、漢文にも文語体の文章にも弊害が積もっており、文化水準を高め、教育を普及させ社会を改造するためには漢文の改革が急務であるとし、多数の国民に短期間で文章力を身につけさせるための方法として、次のようなものを挙げている。

> 第一に、東京に数年いるが、同胞に対して日本語の文を書かないこと。第二に、私の手紙は今後、全て白話文を用い、古法にこだわらず人に笑われることを恐れないこと。第三に、常に白話で自分の意見を発表すること。第四に、白話文講習会の教員となること。自分は事情を十分に把握していないが、後に必ず深く研究して白話文の必要性を宣伝し、台湾に志を同じくする人があり講習会を希望すれば、自費で赴いて手伝いをしたいと思う[137]。

黄呈聡の提唱したこの白話文運動は、言語や文字の運用の改革に過ぎないとは言え、台湾新文学運動で最も革命性のある出発点となった。黄朝琴が「漢文改革論」を発表した目的は、元来は台湾人民が等しく漢字を用いることができ、白話文を次第に普及させ、それにより漢文化を保存し民族意識を高め、更に日本が台湾で実施している日本語同化教育に抵抗したいというものである[138]。黄呈聡と黄朝琴の二人が発表した文章はその後大きな影響を及ぼし、台湾雑誌社が 1923 年に『台湾民報』の月 2 回刊への増刊を決定した際、その発刊の説明で白話文の採用を決定した理由にもなっている。

> 平易な漢文、又は通俗の白話で世界の事情を紹介し、時事を批評し、各界の動静、国内外の経済、株式や米、砂糖の推移を報道し、文芸を提唱し、社会を指導し、家庭と学校を連絡するなど……本誌（『台湾』）とともに台湾の文化を啓発する[139]。

白話文運動の提唱により台湾新文運動が台頭し、台湾の新文学を構築するために旧文学の打倒が叫ばれた。このため北京に留学していた張我軍は 1924 年、まず「致台湾青年的一封信（台湾青年への手紙）」で台湾の旧文人を批評、避難し、続いて「糟糕的台湾文学界（最悪の台湾文学界）」で旧文学を真っ向から攻撃した。これは当時混乱状態にあった台湾の文壇に爆弾を投下するのに等しい行為であり、台湾

---

[137] 黄朝琴「続漢文改革論」『台湾』第 4 年第 2 号(1923 年 2 月)、28 ページ
[138] 黄朝琴「我的回憶」、黄陳印蓮出版、(1981 年)、13 ページ
[139] 「増刊『台湾民報』広告」『台湾』第 4 年第 4 号(1923 年 4 月)、表紙

新文学の新旧文学論戦もここにその幕が切って落とされたのである。

第二節　新旧文学、台湾語文と郷土文学論争

1920 年代に白話文運動が提唱されたことが台湾新文学運動の幕開けとなり、その後旧文学論争、台湾語文論争と郷土文学論争等を引き起こすことになった。これらの論争における双方の主張は互いに密接な関連があり、その発生時期はいずれもおおむね 1937 年の皇民化期以前である。よって本節においては、個々の論争の発端と主張について、異文化の理解と共生という角度からさらに検討を行うほか、その論争下で生み出された台湾新文学の作品中で、異文化が台湾に対して有した意義や含意を、以下の一節でさらに詳しい分析を行う。

台湾新文学運動とは台湾文化啓蒙運動の一環であり、この文化啓蒙運動は日本の異文化統治に対する抵抗という性質を含むものであった。新文学運動の出現もまた文化抗日運動の重要な一手段となるものであり、こういった状況における新文学運動の提唱と文学作品の発表は、文化啓蒙運動に関連する出版物内にあらわれてきたのである。台湾文化啓蒙運動とは、台湾武装抗日運動の失敗後、台湾の有志が体制内の改革へと方向転換したもので、板垣退助による台湾同化会設立の計画も受け入れている。しかし、この同化会は 1915 年（大正 4 年）治安を乱すものとして、日本殖民当局によって解散させられた。これに懸念を抱いた台湾人は、他に活路を見出だすことを画策し始めたのである。その中でも最も重要なものが、1915 年に東京在住の台湾人留学生が設立した「高砂青年会」と称する同郷会である。これは後になって「東京台湾青年会」へと改称している。1918 年に第一次世界大戦が終了した後、「民族自決」の民主主義思想や社会主義思想が湧き起こり、日本へ留学中の台湾人学生は、この思想の影響を受けて殖民地である台湾が受ける様々な不公平な待遇に対して意識を向けるようになった。1918 年には林献堂が、林呈禄、蔡式穀、蔡培火、石煥長、彭華英、黄朝琴、陳炘、呉三連ら東京に居住する 20 余人の台湾人留学生を集めて「啓発会」を創立し、殖民体制である『六三法』廃止への運動をもって台湾人留学生に対する政治的な啓蒙運動を展開、殖民地台湾の行く末に強い懸念を抱くようになっていった。後の 1920 年 1 月、蔡恵如の奔走によって「啓発会」は「台湾新民会」へと拡大され、林献堂を会長、蔡恵如を副会長として一層積極的な活動へと乗り出し、台湾の政治改革と台湾人民の思想啓発を目標に掲げた。「新民会」の設立時には、「新民会」の主張を広くアピールするための機関誌の創刊が提案され、1920 年に東京で雑誌『台湾青年』が創刊されている。

雑誌『台湾青年』の創刊後、日本、中国、さらには第一次世界大戦後の民族自決の異文化因子らが、『台湾青年』誌上で台湾新文学運動の先駆となる主張を行っている。1920 年に陳炘が文語文で『台湾青年』創刊号上に発表した「文学与職務」は、新文学運動における最初の理論的な文章であると言える。彼は、文学には「文化啓発、民族振興」の職務があると考えていた。それゆえ、中華民国の新潮流である「白話文」に倣って「言文一致」の文体を用いることで「拘泥法式、注重文面、句分駢散、辭貴古奥」

といった難解な「死文学」を捨て去ることを主張したのである。現在のところ、「文学与職務」は最も早期に殖民地の文化改革を集中的に検討し新文学の観点を鼓吹・提唱した作品の一つとされている。陳炘自身は文学的な背景をもった人物というわけではなく、当時は慶応大学理財科に在籍していた。しかしながら、二十年代の新知識、新思想の洗礼を受ける機会を有した知識分子であり、社会的な政治・文化的問題に対して非常に強い関心を抱いていた。陳炘はこの文章中において、文学者の根本的な職務とは「積極的に時代の使命を担い、困難な状況に陥っている民族文化を革新し救済することである」。と、明確に提議している。これと同時に陳炘は伝統古典文学の自然の風物を詩に読み、のんびりした文学的心理にも批判を向けている。陳炘が述べるところの文学の職務とは、「文学者、乃文化之先駆也。文学之道廃、民族無不与之俱衰。文学之道興、民族無不与之俱盛。故文学者、不可不以啓発文化、振興民族為其職務也。」であった。形式を追究するあまり空虚なものとなった科挙の作文に対し、陳炘は「真摯な情感」、「高尚な思想」をその基本とすべきであるとし、さもなくば文学は「無霊魂脳筋」の「死文学」に陥るだろうとした。またさらに、台湾が将来、中国で推し進められている白話文の文体改革の方向に進み、言文一致を実現してくれることを期待するとした。真に活きた文学とは、敢て職務を担う文学なのである。「当以伝播文明思想、警、醒愚蒙、鼓吹人道之感情、促社会之革新為己任、始可謂有自覚之文学也。」陳炘の文においては、文学の意義とは次第に個人の安心立命や情趣の表現から、時代、そして社会に介入するものへと転換している[140]。

台湾新文学運動が成長を開始した頃、台湾の文化啓蒙運動も発展をみせていた。雑誌『台湾青年』と同時期の 1920 年、台湾では蒋渭水が台北に「文化公司」を設立、そしてその目的は海外ニュース、雑誌や書籍の閲覧を広く普及し、世界の文化と民族問題の研究を奨励することにあった。日本の雑誌『台湾青年』と台湾の「文化公司」の進めた文化啓蒙工作は、ほどなくして「台湾文化協会」設立の序奏となった[141]。1921 年、新民会が日本の帝国議会に対し、台湾に自治議会を設置すべく要求する運動すなわち台湾議会設置請願運動を開始した際、台北で「大安医院」を経営して 5 年目になる蒋渭水は、請願の趣意書が「自らの主義と大いに合致するものである」[142]として、直ちに台湾島内民族運動の指導団体の組織を計画した。同年 7 月には林献堂を訪ね、その組織に関する打ち合わせを行い、交渉のために奔走、10 月 17 日になり台湾文化協会の設立大会を開催し、林献堂を総理とした。台湾文化協会の「趣意書」はその設立の理由を説明している。「方今之文明、物質万能之文明也。現在之思想、呈混沌険悪之状態也。近時之機運、建設改造之秋也。」このほかに設立の目標を、「吾人於此大有所感、即糾合同志、組織台湾文化協会、以謀台湾文化之向上（発達）。総言之、即相互切磋道徳真髄、振興教育、奨励体育、涵養芸術趣味、使之穏健発達、期能実行以致之。」と説明している。「趣意書」の述べる理由と目標には歴史の潮流という大きな背景が存在しており、実際に設立後に数多くの行動へとつながっている。文化協会

---

[140]陳炘「文学与職務」、『台湾青年』、1 巻 1 号、(1920 年 7 月)、41-43 ページ
[141]史明『台湾人四百年史（上)』、(台北、1998 年)、473-474 ページ
[142]黄煌雄『蒋渭水伝－台湾的先知先覚』、(台北、1992 年)、23 ページ

設立の趣意は、旧来の道徳が喪失した一方で、未だ新たな道徳が成立していないという、道徳の存在が不明瞭な時期を憂えたことにある。しかしながら、台湾文化を高めることを目標とし、民族主義は掲げず、また旧道徳文化を全面的に否定する態度をもとらないというもので、台湾文化啓蒙運動には、台湾が異文化を反映した後にあらわれた各種の新文化の意義が全て含まれているのを見て取ることができよう。

台湾文化協会に代表されるような文化啓蒙運動内の新文学運動には、さらに文化啓蒙の持続的な発展を伴っていた。先に述べた陳炘に続き、1921 年には甘文芳が雑誌『台湾青年』に「実社会と文学」（「現実社会与文学」）を日本語で発表、文中は文学が応分に負担すべき時代的使命について述べたほか、当時の旧文学がすでに形式に流れている点を批判し、さらに文学の改革を呼びかけている。甘文芳は文学と現実社会が切っても切れない関係であることを強調、旧文学の弊害を批判している。甘文芳はその結論で「この切迫した時勢からの要求と現実生活における苦境の下で、この種の有閑文学―風雅な娯楽にふけることはもはや不要であり、道楽じみたざれごとでしかない」[143]。と述べている。この一文は新旧文学の差異について、新文学は実用的であるのに対し、旧文学は暇つぶしの娯楽であると説明するものである。

続いて 1922 年には陳端明が『台湾青年』で「日用文鼓吹論」を発表しており、これも白話文を提唱する重要な文献である。彼は、文中で文語文の三大弊害を詳らかに指摘している。

> 夫現代文（指文言文）之弊害、在乎以難知為能、競尚華麗、卻没真意是也。…第一、不得十分発表自己之思想。第二、至今数千年間、古人所遺雑言巧語者不可勝数、学之既難、又不得普及、是文化停滞之原因。第三、善守古事没卻進取之気象、為民国元気喪沮之本。……何以改革？在鄙人之見、即廃累代積弊、新用一種白文、使得表露真情、諒可除此弊[144]。

（古典文言の弊害は、理解しにくいことにある。言葉の華麗さを競い合っても本当の意味はないのである。…第一は、自らの思想を十分に表せないこと。第二は、数千年から今に至り、古人が残した雑な単語や巧みの言葉は数知らず、学びにくいだけではなく、普及もできず、結局は文化停滞の原因となった。第三は、慣わしをうまく守っても進歩の気配が見られず、中華民国の元気を喪失させる元になっている。…どうやって改革する？拙者の考えでは、歴代の蓄積した弊害を廃止し、新しい現代文を用い、真情を表現すれば、弊害は除けると思う。）

このため、陳端明は言文一致の日用文（白話文）の使用と、華美にして不実の現代文（文語文）を置き換えることで、文化の普及や知能の啓発が可能となるだけでなく、更に国民団結の観念を育成し得ると主張した。彼は、古くからの文字に固執すると、自らの思想を表現するのも困難で、革新的な精神を

---

[143]甘文芳「実社会と文学」、『台湾青年』、3 巻 3 号、(1921 年 9 月)、33-35 ページ
[144]陳端明「日用文鼓吹論」、『台湾青年』、3 巻 6 号、(1921 年 12 月)、33 ページ

欠失することになると考えたのである。当時の文明各国は言文が一致するが、台湾はそうではない。日用文改革の方法は、一種の白文を用いることである。白文の利点とは、普及の容易さと時間の節約、国民団結の観念が育成できることである。陳端明は白話文普及の重要性を指摘しながら、その「日用文鼓吹論」は古文で書いている。しかしながら、白話文使用の主張を行っており、これは明らかに旧文人に対して声を上げようとする意図によるものだった。

台湾の新文学運動は、1923 年に雑誌『台湾』が黄呈聡の「論普及白話文的新使命」と黄朝琴の「漢文改革論」を掲載するに至って、ようやく白話文運動を重視するようになった。雑誌『台湾』は 1922 年 4 月 10 日、『台湾青年』が改称して『台湾』となったものである。葉栄鐘はこの時の白話文運動について、黄呈聡の「論普及白話文的新使命」と黄朝琴の「漢文改革論（上）」による努力が、白話文を台湾に導入する先触れになったと見考えている[145]。また葉石濤は、陳端明を最も早い時期に白話文普及の重要性を指摘した論者と見ている[146]。黄呈聡と黄朝琴の主張についてはすでに簡単に触れたが、黄呈聡は「論普及白話文的新使命」中で、白話文は中国国内の複雑な方言に取って代わって、国内の言葉を統一しうるものであると主張している。そしてドイツ、イギリス、フランスなどといった海外の情況を見て、海外では日常的に用いる言語が、実際の生活において新聞の文字に反映されているが、台湾で学ぶ文語文とは、生活と切り離されたもので、その上教育も普及していない。すなわち白話文が普及することによって、台湾の文化や教育水準も向上するとしている。黄朝琴は「漢文改革論（上）」の中で、中国の教育体制が漢文の暗記とその理解に偏っていることに反対した。黄朝琴は、白話文とは漢民族の民族意識をその根底に抱く文化運動だと考え、「現在、私信で古詩をやり取りするほかは、みな言文一致の白話文を使用し、官話が標準的な新体白文となっている」と述べている。黄朝琴と黄呈聡は文語文に対して一様に反対し、白話文を提唱する先駆的な学者となったのである。

台湾新文学運動においては、雑誌『台湾青年』と『台湾』が文化啓蒙運動の重要な出版物となり、以降、1923 年には『台湾民報』が、1930 年には『台湾新民報』が、それぞれその運動の中心へと移り変わっていった。『台湾民報』と『台湾新民報』は、雑誌『台湾青年』と『台湾』の後継である。『台湾民報』は 1923 年 4 月 15 日に創刊、その前身は 1920 年 7 月 16 日創刊の『台湾青年』であり、その後は時勢の変遷と台湾本島の文化的な需要に応えて、『台湾青年』は改編して台湾文化協会の機関誌となり、1922 年 4 月 10 日には『台湾』と改称した。その後再び白話文を提唱して、1923 年 4 月に半月刊の『台湾民報』が増刊され、その際、林呈禄が編輯局長と責任者を兼任し、黄呈聡を発行人、そして東京赤坂区台湾雑誌社を発行所とした。1927 年 8 月 1 日にはようやく日本当局の許可を得、第 167 号からは台湾での発行を開始した。『台湾民報』は、創刊号から第 7 号までは白話文のみを用いた半月刊であったが、1923 年 11 月 11 日の第 1 巻第 9 号からは「季刊」に改められた。その後、1925 年 7 月 5 日の第 59 号か

[145]葉栄鐘『日拠下台湾政治社会運動史（下）』、（台中、2000 年）、372 ページ
[146]葉石濤『台湾文学史綱』、文学界、（高雄、1999 年）、21-22 ページ

ら、『台湾民報』はまた毎週日曜日発行の週刊となり、8 月 26 日の第 67 号発行時にはその発行部数はすでに 1 万部を突破し、台湾島内において第 3 位に位置づけられる新聞となっていた[147]。日刊部数拡大のために 1930 年 3 月、台湾民報社は台湾新民報社と合併、3 月 29 日発行の第 306 号からさらに『台湾新民報』と改称し、1932 年 4 月 15 日から日刊発行の許可を獲得した。1937 年、新民報の発行部数はすでに 5 万部を突破していたが、しかし日本当局が台湾で皇民化政策を推進したことにより、『台湾新民報』も同年 6 月 1 日から中国語版の発行が廃止となり、1941 年 2 月 11 日にはさらに『興南新聞』と改称、1944 年 3 月 26 日には台湾総督府が新聞統合政策をとったことにより、その他 5 社の新聞と合併して『台湾新報』となったのである。『興南新聞』は 1944 年 3 月 27 日に林呈禄の「停刊之辞」を掲載し、『台湾青年』から始まった台湾人民の知能を啓発する出版物としての名誉ある使命を終えたのである。

台湾新文学運動は、最も重要な『台湾民報』期に入った。その中でも重要なのが、張我軍が起こした新旧文学論戦である。1924 年 4 月 21 日、張我軍は『台湾民報』で「致台湾青年的一封信」を発表し、その中で漢詩の弊害を痛烈に批判したため、台湾新旧文学論争の幕が切って落とされることとなった。張我軍は次のように述べた。

> 諸君はなぜ有用な書を読まず、実際に社会に応用しないのか。日々もっともらしい漢文だけを読むことしか知らず、詩の押韻の奴隷となっているのか。また、八股文を語って先人に代わり悪臭を残しているのか（台湾の漢文など、真に文学価値のあるものを見たことがない、かつ改革を考えず、糞の中で百年も千年も転がりまわるばかりで、全身糞まみれになっただけである。）名を世に出したいと欲し、詩翁だの、詩伯だのと自分で名乗って騒ぐばかりである[148]。

この文章の後、1924 年 11 月張我軍はまた「糟糕的台湾文学界」を発表して旧文学への攻撃を正式に開始し、当時の混乱に満ちた台湾文壇に爆弾を投下した。張我軍はこう述べている。

> ここ数年来、台湾の文学界は大変に盛り上がっていると言えよう！有史以来の盛況ぶりは、各地の詩会の多さを見ても、詩翁、詩伯は至る所にいる……しかしながら詩会創設はとにかく創設し、詩を作るのはとにかく作り、一般人は文学に対してとにかく興味をもつが、しかし満足のいく作品を生み出せないばかりか悪臭すら漂いだし、一掴みの文士らの面子は残らず潰された。さらには多くの有望な天才を埋没させ、活発な青年を陥れてしまった……眠ったままの台湾の文学は、永遠に世界の文壇の外に捨て去られる。その上、台湾の一部の文士らは埋もれたされこうべを懐かしみ、自ら墓守の番犬となり、そこで数百年前

[147]蒋渭水の「五個年中的我」は以下のように記している。「大正 13 年 4 月の警務局調査によれば、島内の日刊新聞の毎日発行部数は『台湾日日新報』18970 部、『台南新報』15026 部、『台湾新聞』9961 部」。『台湾民報』67 号、45 ページ
[148]張我軍「致台湾青年的一封信」、『台湾民報』、2 巻 7 号、（1924 年 4 月 21 日）、10 ページ

の古典主義の墓を守っている[149]。

張我軍は以前の詩社を批判し、彼らが作る詩には独創性がないとしている。また日本の明治、大正時代の文壇から登場した多くの文壇の戦士を高く評価し、欧米にも劣らないとした。さらに台湾文学の目的は自らの売名であり、この習慣は次世代の青年に影響を及ぼすと述べている。張我軍は、真の文学とは何かを理解すべきであり、それを理解して初めて文学の真の意義をとらえられると考えていた。

張我軍の台湾新文学に関する主張に対し、台湾文化協会の会員である王敏川は、1924 年 12 月 1 日に「奨励漢文的普及」を発表し、声援を送った。王敏川は、漢文を普及させる必要性を主張しながらも、白話文を用いなければならないとし、時代の求めに応じた。王敏川は、漢文を提唱する理由は 3 つあるとした。まず第一に、東アジア平和の使命を維持し日華親善を媒介するため、漢文で繋がらなければならない。第二に、台湾人が仮に中国、東南アジア、フィリピン等へ発展を図った場合、漢文に頼らねばならない。第三に、日常生活には必要不可欠である、というものである[150]。

張我軍は、王敏川から声援を受けた後の 1924 年 12 月 10 日、新文学の主張について発表を行い、「為台湾的文学界一哭」中で、「台湾には一名の大詩人がいる。彼は詩の雑誌を手掛けた人物である。当時私は詩学に対して非常に関心があったため、彼を一目見られなかったことが大変遺憾なのである！なぜなら私は、この大詩人は必ず何か詩と一般文学に対する妙論をもっていて、私の見聞を広めてくれることと期待していたからだ」。と述べている[151]。

1925 年 1 月 1 日、張我軍は旧文学を糾弾する圧巻の作、「請合力拆下這座敗草欉中的破旧殿堂」を発表した。その文中で、「台湾の文学は中国文学の一支流である。何らかの影響を受けて本流に変化が生まれれば、支流も自然とその影響を受け変遷してゆく、これは必然の道理である」。と指摘している。張我軍は、台湾旧文学とは中国旧文学が残した災いの元であるとみなし、それによって中国の文学革命を紹介し、胡適の「八不主義」を解説した。第一に、中身のない文学を作らない。第二に、無病呻吟の文学を作らない。第三に、基準となる古典書籍を用いない。第四に、陳腐な紋切り型の決まり文句を用いない。第五に、対句に重きを置かない。第六に、文法に沿わない文学を作らない。第七に、古人に倣わない。第八に、俗話俗字を避けない。また、陳獨秀の三大主義で、第一に、貴族文学を覆し国民文学を造り上げる。第二に、古典文学を覆し写実文学を造り上げる。第三に、山林文学を覆し社会文学の意義を造り出す、とした[152]。張我軍は中国文学革命の意義を説明し、台湾新文学が「国民文学」、「写実文学」および「社会文学」の路線へと発展するべきだと暗示している。同時に、台湾は中国の道を歩むべきで、新文学が旧文学に勝るとしたのである。

張我軍の旧文学批判に対し、旧文人も 1925 年についに反撃を開始した。1925 年 1 月 5 日『台湾日日

---

[149]一郎「糟糕的台湾文学界」、『台湾民報』、2 巻 24 号、(1924 年 11 月 21 日)、6 ページ
[150]王敏川「奨勵漢文的普及」、『台湾民報』、2 巻 15 号、(1924 年 12 月 1 日)、1 ページ
[151]一郎「為台湾的文学界一哭」、『台湾民報』、第 2 巻 26 号、(1924 年 12 月 11 日)、10 ページ
[152]張我軍「請合力拆下這座敗草欉中的破旧殿堂」、『台湾民報』、3 巻 1 号、(1925 年 1 月 1 日)、5 ページ

新報』において「悶葫蘆生」の署名を用い、「新文学的商権」と題した一文で張我軍の論点に次のように攻撃を加えた。「台湾之号称白話体新文学、不過就普通漢文加添幾個了字、及口辺加馬、加労、加尼、加矣、諸字典所無活字、此等不用亦可之文字。[153]」これに対し張我軍は1925 年1 月21 日、『台湾民報』に掲載された「掲破悶葫蘆」の文章で、旧詩人を攻撃した。張我軍は漢文学を理解する必要があり、いわゆる漢文学とは「一般に用いられる中国の文字で書かれたもので、詩や文の韻の有無に関わらず文学性を具えるもの、それらはみな中国文学である」。としている。したがって台湾新文学は当然中国文学の範囲内であるが、しかし台湾新文学とは新しい中国文学を指しており、漢文が廃れて良いということを指すのではない。張我軍は、新旧文学の分類とは白話と文言の間にあるのではなく、内容と形式の両面にあるべきで、全ての白話文が新文学というわけではないと考えていた[154]。このとき張我軍は、台湾新文学改革を「検討」するかどうかは討論に値せず、現在討論すべき「検討」とは如何に改革するかであるとし、台湾新文学の改造は当時の中国の白話文で書かれた詩文を多く読むことが必要であると考えたのである。

つまり、新文学運動の一派の主張に対し、旧文人の主張とは、白話文は旧式文に取って代わるには力不足であるというもので、彼らの多くは白話文の運用に疑問を抱いたのだ。旧文側の主張は、例えば鄭坤五の「致張我軍一郎書」にあるように、張我軍の提唱する北京白話文には特殊なところが特になく、台湾が元来使用していた一種の平易文はこれに近いものであるため、これにあえて手を加える必要はないというものであった[155]。またこのほか、例えば張純甫の「致羅鶴泉書」では、創作と閲読両方の観点からみて白話文は非常に長たらしく、簡潔に書くことが非常に難しい。その上見る者の眼力と時間の浪費であり、旧式文と比べると相当に「不便」であると説明した[156]。

新旧文学の論戦は1925 年にいたってもなお続いた。1925 年2 月21 日、張我軍は『台湾民報』の学芸欄でまた「文学革命運動以来」を連載し、この文中に胡適、陳獨秀らの中国文学革命運動の文章を引用した。これを通して文学革命の経過を描写し、白話文は時勢の向かうところであり、活きた文学、そしてこれが中国文学を創造する唯一の手段とみなしている。さらに文学運動から今後の中国文学の発展動向を総括し、四つの注意すべき点をあげている。第一に、白話詩はすでに良い成績を呈しており、今後10 年のうちに中国詩界は輝かしい成果を上げることは必至である。第二に、短編小説にも優れた作品が生まれており、最も注目すべきは魯迅で、彼の短編小説は4 年前の『狂人日記』から最近の『阿Q 正伝』に至るまで、いずれもすぐれた作品である。第三に、白話散文も進歩があり、ここ数年散文において注目すべき発展はなんと言っても周作人らが提唱する「小品散文」である。この類の小品は、平淡な談話を用いながら意味深く、時には稚拙でもある。この類の作品の成功が滑稽だというが、しかしこのよう

---

[153]悶葫蘆生「新文学之商権」、『台湾日日新報』、第8854 号、(1925 年1 月5 日)
[154]張我軍「掲破悶葫蘆」、『台湾民報』、3 巻3 号、(1921 年1 月21 日)、2 ページ
[155]鄭坤五「致張我軍一郎書」、『台南新報』、第8244 号、(1925 年1 月29 日)
[156]張純甫『張純甫全集　第4 冊』、新竹市立文化中心、(新竹、1998 年)、58-59 ページ

に「美文は白話を用いることはできない」という迷信を徹底的に打破したのである。第四に、戯曲と長編小説の成果は最も悪い。恐らくこれは文章の長さによる難度が高いためであろうが、長い時間をかけて切磋琢磨することで優れた作品は生まれる。上述の四つの観点を見ると、張我軍は中国新文学の発展に関して、すでに相当な理解があることがわかり、その当時までの優秀な作家と作品をはっきりと指し示している[157]。

旧文人については、陳福全の「白話文適用於台湾否」に見られるように、当時の台湾のいわゆる白話文とは、「方言訛り」と「官話」が混ざりあったものであるため、目にしても文として成立せず、読んでも声にはなりえない。ましてや官話は台湾人のほとんどが理解できず、方言訛りも各地で異なる。台湾人は如何にして理解するのか。したがって白話文を台湾において使用したいのであれば、言語の統一を先になすべきであると提言した。さらに新聞記事のような簡単で分かり易い文体を直接用いることをも提案し、これを白話文の「くどさ」に勝るものだとしたのである[158]。

1925 年 8 月 26 日、張我軍は再び新文学運動に関する発表を行った。その最も重要な部分は、最後の理論確立についての文章である（新文学運動の意義）。文中では、これまでの台湾の旧文学はいずれも「ニセ文学」、「死んだ文学」であり、「真文学」、「活きた文学」は存在しないとしている。そのため彼は文中で、胡適の「国語的文学、文学的国語」の 2 つの文学主張を超えた、「白話文学の確立」と「台湾言語の改革」を挙げている[159]。

また、1920 年代の新文学運動では、台湾の漢文白話文学の形成を促した。ここでの白話文学は中国の北京語を主体としている。しかし台湾内部の方言には、閩南語や客家語、原住民などその他の言語があり、その内閩南語の使用人口が最も多い。そのため日本や、新しい異文化となった中国、また台湾本土の文化啓蒙および新旧文学論争の影響のもと、閩南語を主体とする文学にも新しい理解と共生が生まれ、これが台湾話文運動または郷土文学論争と呼ばれるようになった。

台湾話文運動もしくは郷土文学論争と呼ばれるその主たるものは 1930 年代に発生したが、早くは新文学論争が始まった頃、蔡培火が台湾話文のために新しい文字を確立しようと提示していた。蔡培火は 1923 年 12 月に「新台湾的建設与羅馬字」という文を著し、主として当時の社会における 2 つの傾向を解説した。その内容とは第一に、民族自決主義があり、官民協同の理想が独裁専制の政治に取って代わったこと。第二は、社会主義があり、労働階級は利害共同調和を力の限り主張し、資本主義における経営者による労働者の搾取情況を改善すること、である。日本当局は文字によって民衆の思想が統一されることを望み、言語統一を推進しはじめた。民衆に対して強制的に国語、つまり当時の日本語を学ばせたのだ。しかしひたすら無理矢理に暗唱するだけの学習方法では、新しい世代の青年らの論理的思考能力の低下を引き起こす。そこで蔡培火は、過去にイギリス人宣教師が布教のため台湾にもたらしたローマ字を使

[157]張我軍「文学革命運動以来」、『台湾民報』、3 巻 6 号-10 号、（1925 年 2 月-5 月）
[158]陳福全「白話文適用於台湾否」、『台南新報』、第 8432 号、（1925 年 8 月 15 日）
[159]張我軍「新文学運動的意義」、『台湾民報』、67 号、（1925 年 8 月 26 日）、20 ページ

用すべきだとし、中国のアモイ語を基準に、その声韻表示を修正したローマ字を24個の文字としたのである。そしてこの方法こそが本島精神の啓発と文明の創造を実現する最も有効かつ唯一の手段であるとした[160]。

また連温卿は、1920年代におけるもう一方の台湾語を改革しようとする主張を行った。連温卿は「言語之社会的性質」で、言語は社会性質との関連が必須であると述べた。社会が変われば、言語も変わらねばならないというものである。自らの言語を保存する必要がある一方で、また他国の言語を取り込むことは不可能で[161]、現在、世界の傾向として言語を統一することは必須であるが、言語問題と民族問題は無関係であり、「社会問題」の面から考えるべきであるとした。連温卿はまた「将来之台湾語」中で、中国の文字とローマ字はいずれも物の形をかたどって生まれたものと示している。連温卿は殖民地の言語統一、そして殖民地支配国による強制的な言語統一に反対し、被殖民地側の言語を尊重すべきだと強調した。台湾人は台湾語を改革すべきである。連温卿は台湾語の改良方法について3種類挙げている。第一に、音韻学を研究し当て字を無くす。第二に、基準となる発音が必要である。第三に、文法を確立することである。連温卿の考え方から見ると、彼は台湾話文の体系確立を着想していたようである[162]。

1920年代、台湾話文に関してすでに関連する主張があらわれてはいるが、当時の新文学運動の焦点が新旧文学の白話文論争にあったため、さらなる発展はみられなかった。新旧文学が一段落してから後、台湾話文運動は郷土文学運動と並行して新たな進展をみせた。

1930年8月、黄石輝は『伍人報』において、まず郷土文学の主張を呈した。黄石輝は『伍人報』で「為什麽不提倡郷土文学」をテーマに、台湾民衆を主体として彼の文学的観点を詳しく説明した。

> あなたは台湾人、あなたが頭上に戴くのは台湾の空、踏みしめるのは台湾の地、目にするのは台湾の情況、耳にするのは台湾の情報、時に刻むのもまた台湾の経験、声にするのは台湾の言葉、それゆえあなたの雄健な文筆、花の様な彩筆でもって、台湾の文学を書くべきである[163]。

黄石輝はこの中で、台湾文学を一定の時間意識と空間意識の上に定義づけている。いわゆる時間意識とは、彼の述べるところの台湾の歴史経験である。そしていわゆる空間意識とは、黄石輝が明確に指し示している台湾という環境、台湾の物事、台湾の言語である。台湾文学をはぐくむ現実的な条件を確立した後、彼はさらに詳しく論じた。

あなたは多くの人々を感動させる文芸を書きたいか？多くの人々の心にあなたと同じような感覚を生

---

[160]蔡培火『新台湾の建設と羅馬字』、張漢裕主編『蔡培火全集六台湾語言相関資料（下）』、財団法人呉参連台湾史料基金会、（台北、2000年）、209-214ページ

[161]連温卿「言語之社会的性質」、『台湾民報』、2巻19号、（1924年10月1日）、13-14ページ

[162]連温卿「将来之台湾話」、『台湾民報』、2巻20号、（1924年10月11日）、11-12ページ
連温卿「将来之台湾語（続前）」、『台湾民報』、2巻21号、（1924年10月21日）、11ページ
連温卿「将来之台湾語（続）」、『台湾民報』、3巻4号、（1925年2月1日）、14-15ページ

[163]黄石輝「怎様不提倡郷土文学」、《伍人報》、第9号-第11号、（1930年8月16日-9月1日）、中島利郎「1930年代台湾郷土文学論戦資料彙編」に収録、春暉出版社、（高雄、2003年）、1ページ

みだしたいか？したくない？ならば言うことは何もない。もしもしたいなら、あなたが支配階級の代弁者であれ、苦しむ大衆の指導者であれ、あなたは苦難にあえぐ大衆に対して文芸を作っていかねばならない。郷土文学の提唱に立ち上がり、郷土文学創設に立ち上がるべきだ[164]。

台湾新文学の一つの重要な概念である「郷土文学」は、ここに正式に提起された。つまり台湾文学は適切な時間と空間意識を基礎として造り出されたものである以上、このような文学はなおさら具体的な大衆が対象となるべきである。黄石輝の考える大衆とは苦難にあえぐ大衆のことであり、つまり農民や労働者を主体とするもので、文学がもしもこのような大衆を対象とするならば、創作の言語は彼らの言語をもちいてざるを得ない。このような文章が黄石輝の言うところの台湾話文である。異文化の殖民地社会において、作家が自分の土地や言語に立ち戻って文学創作に従事するということは、文化主体を再建する意味が自ずと含まれる。

1931 年 7 月、黄石輝は引き続き『台湾新聞』に「再談郷土文学」を発表し、作家は台湾白話文を造り上げるべきであるとの主張を堅持した。彼の台湾白話文に関する主張は、すでにある漢字を基礎とした上に台湾語を表現し、もし用いる文字が無い場合には「代替文字の採用」あるいは「新字の創作」を行うことで、その目的としては台湾読者に文学の内容を容易に理解させることであった。「なぜなら我々の書くものは我々が最も近しい人に見せるもので、遠方にいる人に特別に見せるものではない、それゆえ、我々が最も近しい言語と物事を用いて、つまり台湾語で台湾の物事を描写する。」と彼は述べている。このような主張を広く受け入れてもらうために、黄石輝は文中で「郷土文学研究会」を組織する構想を掲げている。黄石輝は「苦難にあえぐ大衆を対象に文芸を創作する」ことに対して、3 つの主張を行った。それは第一に、台湾語で各種文芸を書く。第二に、台湾語の音を多く読む。第三に、台湾の事柄を描写する、というものである。彼の郷土文学論では、内容において台湾の物事を反映し、形式において台湾語を使うという二重の問題を同時に含んでいることがわかる。また彼が挙げたさらに具体的な試案では、一、郷土文学の効用、二、描写の問題、三、文字の問題、四、言語の問題、五、読者の問題、六、基礎問題、七、結論など、7 項目にわたって意見を述べており、彼の技術面の造字問題、教科書編纂問題、教育問題などみな詳しく書き述べている情況から見ると、彼の台湾話文確立に対する明確な立場というものが理解できる[165]。

黄石輝の郷土文学観が最も強烈であることに呼応したことに関しては、郭秋生に勝るものはない。郭秋生はその使用したペンネームに芥舟、TP 生、KS、街頭写真師などがあり、小説と散文の創作に長けた。郷土文化論戦の期間中、精一杯黄石輝の立場を支持した。1931 年、郭秋生は『台湾新民報』で「建設台湾白話文一提案」を発表し、作家は市井の人々から言葉の素材を探し出して取り込むべきだと提案した。

---

[164]黄石輝「怎樣不提倡郷土文学」、《伍人報》、第 9 号-第 11 号、(1930 年 8 月 16 日-9 月 1 日)、中島利郎「1930 年代台湾郷土文学論戦資料彙編」に収録、春暉出版社、(高雄、2003 年)

[165]初出は『台湾新聞』、1931 年 7 月 24 日から 8 回連載で、発行できず、河原功編葉石濤訳「台湾新文学運動的展開－日本統治下在台湾的文学運動」『台湾文学』1-3 期、(1991 年 12 月-1992 年 3 月、6 月）を引用

だから吾輩は言う、当面の仕事は歌や民謡を吾輩が決めた原則にのっとり整理することである。その後また「環境に恵まれない」大多数の同胞らに還元すれば、路傍の薬売りたちは、確実に先生になれる。牛飼いたちも自然と伝道師となって普及しはじめる。すべての非識字者たちにとっては、仕事の合間には慰めとなり、可能なかぎり読み書きができるようになり、家庭教師になることができる[166]。

郭秋生の文学概念は、識字能力の低い者だけでなく、非識字者をも対象としている。彼は台湾文学を確立するには、目下の仕事は民謡、童謡を整理し、同時にそれを媒介として最下層の民衆と交流をもつことであると考えた。そのため、郭秋生の重点は知識の啓蒙に集中したものであり、文学芸術を向上させるものではなかった。

郭秋生は中国白話文の使用に反対し、台湾で用いられている台湾話文の使用を主張した。郭秋生の理由とは、中国白話文は台湾話文を記録したものではなく、台湾人が使用するのは台湾話文である、というもので、彼は中国歴代王朝の言文乖離として「ついに台湾話文が大衆の言語を文字へと変換し、識字という目的を達成した。」と、例にあげた。台湾話文の必然性を確認した後、郭秋生は台湾話文の構築を開始した。その第一歩は台湾話文の定義づけである。「何を台湾話文と呼ぶのか？この主題に一言言うなら、それは台湾語の文字化である！」として台湾話文を定義づけし、その後には筆記の問題があった。台湾話文の筆記は、漢字、新字、ピンインなど多くの系列に分かれており、郭秋生は漢字を台湾話文の文字化の道具にすると主張した[167]。台湾には固有の漢字があるのだから、この漢字になんの味わいがなくとも、今なお漢民族の言語を表す記号なのである。理論上、簡単で書き易いピンインを難解な漢字に代用できたとしても、しかし実際は、おそらく簡単な作業ではないだろう。よって台湾人は、固有の文字である漢字を手放してはならず、また固有の漢字で台湾語を台湾話文に記さざるを得ないと主張する[168]。台湾話文の文字化運動の普及には、普遍化はもちろん必要な作業であり、言語の伝達手段としての文字をいくつかの形式で推進可能である。郭秋生は「書籍を編纂して公的な学校の教材とすることには望みが無い」として、歌謡が最も実行可能な普及方法とした。それゆえ吾輩の当面の仕事は、歌や民謡を吾輩が決めた原則にのっとって整理し、その後また「環境に恵まれない」大多数の同胞らに還元することである。

黄石輝と郭秋生の主張は、廖育文（廖漢臣）、林克夫からの質疑をまねき、1931 年内に郷土文学と台湾話文等に関連する主題で、合計 30 編余りの文章討論がなされた。これがすなわち 1930 年代の郷土文学論戦である。

---

[166]郭秋生「建設台湾白話文-提案」、『台湾新聞』、1931 年 7 月から 33 回連載、中島利郎「1930 年代台湾郷土文学論戦資料彙編」に収録、春暉出版社、（高雄、2003 年）

[167]郭秋生「建設台湾白話文-提案」、初出は『台湾新聞』、1931 年 7 月 7 日から 33 回連載、中島利朗「1930 年代台湾郷土文学論戦資料彙編」に収録、春暉出版社、（高雄、2003 年）、47-48 ページ

[168]郭秋生「建設台湾白話文-提案」、初出は『台湾新民報』、1931 年 8 月 29 日、9 月 7 日に 2 回連載、中島利郎「1930 年代台湾郷土文学論戦資料彙編」に収録、春暉出版社、（高雄、2003 年）、92 ページ

郷土文学論戦において、まず黄石輝に対して反論したのが育文であった。育文は「給黄石輝先生—郷土文学的吟味」の中で、「先生が台湾話文を用いて文章や詩を書くことに反対するのは、俗かどうか、上品かどうかということではない」と強調しているが、この文は台湾話文の粗く下品な言葉遣いを巧みに例にとっており、それが暗に指し示しているものは言うまでも無く明らかであった。

> 而先生所在指的価値也不知道是在指什麼価値？若説言語能夠完就言語的職能就是価値、那末〈老太婆〉裡的「大人呵！索子來解開啦！要活活縛死麼？不解？好！我就來哭哭出気。我苦喂！我苦喂！…」…先生、爾也説這有価値麼[169]？

（先生のおっしゃる価値は何を指しているか分かりません。言語が言語の役割を果たせば価値があるとおっしゃるのであれば、この文章に、お婆さんは、「殿様、鎖を解いてよ。縛り付けて死なせる気かい？解いてくれない？なら、泣いて気晴らしするよ。じゃあ泣くよ、苦しい苦しい苦しいよ…」…先生、その文章も価値があると言えますか？）

育文の主張に対する黄石輝の反論は、粗野な言葉にも文学的価値を認められる可能性があるというものであった。

> 育文先生が引用した伍人報の「老太婆」の中の一段落に…これは低俗で価値のないものとされているが、実はそれは彼の間違いである。本来、どのような言語であれ、作家の筆を経たものは文学的価値が生まれる可能性がある。…もし俗っぽい言葉をひたすら取り除いていったら、どんな文芸になるのだろうか[170]？

台湾話文の使用を反対している廖漢臣のその最も主たる理由とは、彼が「台湾語はまだ幼稚である」で文学の手段として用いるには力不足と考えているためで、これにより中国の白話文を使用すると主張したのである。そして彼が郷土文学に反対したのも、郷土文学をヨーロッパの田園文学と勘違いしたことにある。そのため彼は反対意見として「歴史に必然的な社会価値を目的とした文学——つまりいわゆるボリシェヴィキのプロレタリア文学である」と主張している[171]。廖漢臣の観点から見ると、実際彼は郷土文学の性質において黄石輝と同じであり、いずれも平民大衆のいわゆるプロレタリア文学に注目している。ただ廖漢臣は中国の立場に立っていたため、台湾話文の使用に反対したのである。

廖漢臣の後、林克夫の「「郷土文学」的検討—読黄石輝君的高論」、また点人の「検討「再談郷土文学」」、「検一検「郷土文学」」は基本的に廖漢臣の観点から抜け出していない。つまりは郷土文学論戦の中の反対の一派で、郷土文学を支持しながらも郷土文学の性質上、反対の一派は郷土文学を中国文

---

[169]毓文「給黄石輝先生-郷土文学的吟味」、初出は『昭和新報』140、141 号、1931 年 8 月 1 日、8 日、中島利郎編「1930 年代台湾郷土文学論戦資料彙編」に収録、春暉出版社、(高雄、2003 年)、67-68 ページ

[170]黄石輝「我的幾句答辯」、初出は『昭和新報』1931 年 8 月 15 日、22 日、29 日に 3 回連載、中島利郎「1930 年代台湾郷土文学論戦資料彙編」に収録、春暉出版社、(高雄、2003 年)、72 ページ

[171]毓文「給黄石輝先生-郷土文学的吟味」、初出は『昭和新報』140、140 号、1931 年 8 月

学における各地方の郷土の文学とみなしていた。そして台湾郷土文学の提唱者はすでに中国を異文化とみなし、自主的な郷土文学の確立を目指したのである。このような情況のもと、いかに台湾話文を用いるかがもう１つの論争の焦点となった。

台湾話文は郷土文学論戦中のもう１つの戦場となった。郷土文学を支持することはイコール台湾話文を支持するということなのかどうか、林克夫は黄石輝に反対する文章の中でこう述べている。

> 「郷土文学」を提唱するなと言っている訳ではない、私は「郷土文学」提唱に賛同する一人である。例えば各国どこでも「郷土文学」があるように、この「郷土文学」はぜひとも必要で、また必然的のものでもある。ただし私が言う「郷土文学」とは、黄先生が提唱するような「郷土文学」というわけではない…[172]

林克夫は、ここで彼の支持する郷土文学と黄石輝の違いを指摘し、彼は台湾話文の使用に反対して次のように述べた。

> 私の意見というのは、再構築された台湾白話から台湾文学を造りだすことに反対しているに過ぎない。もし中国白話文が台湾社会に普及すれば、庶民は中国語が理解でき、中国人も台湾文学を理解できるようになる。これで双方ともに都合がいいではないか！[173]

林克夫の立論から見ると、彼は「郷土文学」を支持するものの、中国国内の各地方の郷土文学を台湾の「郷土文学」として扱っている。確かに「郷土文学」の定義上多数の解釈が存在するが、果たして台湾内の各郷土を中国の郷土の一つとみなしていいのだろうか。このような疑問に対し、黄得時は郷土文学の範囲をはっきりと示している。

> それならば台湾の郷土文学とは何なのか。私の個人的な見解にもとづいて現在有するものとしては、次の三種である；（1）先住民族（蕃人）の踊り、その際歌われる歌。（2）台湾人（広東人、福建人）の歌仔（山歌、小唱、童謡…）（3）歌仔戯[174]。

黄得時の定義から見ると、台湾の郷土文学は中国白話文および文言文に決戦状を叩きつけ、台湾現地の白話文の地位を確立した。そして、台湾話文とは庶民が使用する言語であり、台湾庶民の言葉に近接するものであることを強調した。この定義と黄石輝の思想は非常に近く、台湾で最も多くの人々に使用されている言語を主とするところが共通している。

> プロレタリア文学は苦難にあえぐ民衆が対象なのか、それとも前衛部隊の兵士が対象なの

---

[172]克夫「(郷土文学）の再検討-讀黄色石輝的高論」、初出は『台湾新民報』、1931 年 8 月 15 日、中島利郎「1930 年代台湾郷土文学論戦資料彙編」に収録、春暉出版社、(高雄、2003 年)、76 ページ
[173]克夫「(郷土文学）の再検討-讀黄色石輝的高論」、初出は『台湾新民報』、1931 年 8 月 15 日、中島利郎「1930 年代台湾郷土文学論戦資料彙編」に収録、春暉出版社、(高雄、2003 年)、79 ページ
[174]黄得時「談談台湾郷土文学」、初出は見つけないで、中島利郎『1930 年代台湾郷土文学論戦資料彙編』に収録、春暉出版社、(高雄、2003 年)、322 ページ

か。もしも前衛部隊の兵士が対象であるなら、もちろん郷土文学など必要ない。しかも彼らが切に必要とするものは戦術上の理論、経済問題、政治問題、民族問題、世界の革命情勢の調査、レポートなどであり…狭義の文学において必要なものとはいえない。ゆえに私は、プロレタリア文学の対象は、我々の周囲にいる苦難にあえぐ民衆であると考える。それならば、プロレタリア文学を主張する者は、郷土文学に反対すべきではない。

黄石輝の郷土文学の定義とは、苦難にあえぐ民衆を主体とし、そこから形成されたプロレタリア文学も自然と民衆の使用する言語を主とすることから、台湾話文が使用されることは必然だというものである[175]。

黄得時と黄石輝は大胆にも台湾文学の範囲を描き出した。これは、漠然とした定義の郷土文学と比べても比較的明確なものである。しかし、このような区分も依然として、これら台湾の「郷土」文学の系統を中国の地方文学内に収めるか否かについては解決することができなかった。なぜなら台湾話文を支持すると同時に、台湾話文の記号問題に直面するのは必至であり、郷土文学論戦から台湾話文の戦場を作り出すこととなってしまう。その言語系統の複雑さは文学中心理念のそれをさらに上回るため、郷土文学を支持するか反対するかに関わらず、言語的要素が加わった後、各々の論点は錯綜したのである。これは、殖民地の台湾人として祖国と殖民地という現実に直面した際、異文化の要素が台湾人のアイデンティティに分裂と焦慮を生じさせたあらわれなのかもしれない。

台湾話文の記号問題に関して、早くは1931年7月、黄石輝は廖漢臣が「我的幾句答弁」を発表した際、すぐさま台湾話文が中国語または日本語に成り代わって台湾人の書き言葉となることは間違いないと発表した。彼は次のように述べている。

台湾は一つの別天地であり、政治的な関係で中国の北京語を使うことはならない。民族的に（歴史上の経験から）日本の標準語（国語）で支配してはならない。これは明らかな事実であり、誰が五州十八省に分けろと言ったのか[176]。

黄石輝は郷土文学の記号に関わる問題で、言語は台湾話文を用いて行うことを提唱した。その理由は、台湾話文は広く台湾庶民が使用する言語で、中国語（文言文や白話文またはその他方言）とははるかに異なり、また日本語使用者よりも多いためである。

また台湾話文の記号問題については、郷土文学論戦中のまた一つの論戦の焦点となった。台湾話文の記号問題上、黄純青はアモイの発音をもって基準を作ると主張し、言文一致、読み方の一致、文法の重視、言葉の整理等から始めるとした。同時に文字の取捨選択において、黄純青はまた漢文を台湾語の伝

---

[175]黄石輝「郷土文学的検討-再答毓文先生」、初出は不明で、中島利郎「1930年代台湾郷土文学論戦資料彙編」に収録、春暉出版社、(高雄、2003年)、110ページ

[176]黄石輝「我的幾句答辯」、初出は『昭和新報』142-144号1931年8月15日、22日、29日3回連載、中島利郎「1930年代台湾郷土文学論戦資料彙編」に収録、春暉出版社、(高雄、2003年)、69-73ページ

達手段とすることに同調した。台湾話文の発音は黄純青の分析によれば 5 種類あり、それはそれぞれ泉州、漳州、客家語、福州、広東で、また彼は日本語の使用者区分を大和族とした。原住民の使用するオーストロネシア語族の高砂族は台湾話文から外したが、しかし仮に今日であれば、このように台湾話文の使用族集団を直接指し示した場合、民族融合への感情を害することになるだろう[177]。このため、黄純青は台湾話文の筆記媒介に対して漢字表記の採用を主張し、「言葉より文章を重視する」という見解を示した。そして黄純青は台湾話文の使用を支持する立場上、台湾話文と白話文を併用するという折衷案を提示したのだ。

黄純青の主張に対して、郭秋生は明らかに賛成を示さなかった。郭秋生は「読黄純青先生的「台湾話改造論」」で黄純青に応え、彼は台湾漢族人口の 84%は福建人で、「実際福建人の使用する言語は早くに成立しており、台湾の標準語を作るとして、もし台湾語のみを指すというのであれば、誰もがあれは福建語であると知っているのだ」とした。また台湾話文自体は、各地のわずかな発音の違いという問題はあるものの、漢字の萌芽期において新字の増加を受容したのである[178]。この点に関する黄石輝の立場は郭秋生と一致していたため、黄純青の新字を造るべきでないという主張に対して反論し、黄石輝は「もし新字の創作を拒否するのであれば、言文一致という事業は成功しない」として、黄純青の主張するアモイの発音を台湾話文の基準発音とすることに懐疑的な姿勢を保ち、「アモイ語を基準とするのは、私は不適当であると思う。もしただ訛りだけの問題ならば、わざわざ「アモイの発音」を掲げる必要はない」とした[179]。

台湾話文で使用する記号の問題は、台湾の文人の間でも討論が続けられていた。郭秋生は、台湾話文普及の最良の方法は、歌の整理作業を進めることであり、歌を伝達の手段とし、また新字の普及が民間の教育を推し進めることとなる。そして歌を収集した後、最善の方法でもって新字の読み方を明記するという[180]。頼和と言えば新字創作に対して、その必要性はあるものの、止むを得ない情況においてのみとしている。新字の創作について、頼和はある程度の必要性はあるが、それは既成文字の中から「発音」と「意味」の両方ともで通用するものが探しだせないときにやむを得ず作って使用するもので、もしも既成文字の中で意味は通るが発音が合わない文字があった場合には、やはり既成文字を使い、傍らに注釈をつけるのが普通であると考えていた。そのほか、例えば「厚」の字について、頼和はこの「厚」の文字には「彼得其情以厚其欲」の意味があり、改めて左が「糸」右が「乎」から成る文字（発音は「乎」、意味は「給」）などを創作する必要はない、といくつかの新字に対して異なった見方を示した[181]。また

---

[177]黄純青「台湾話文改造論」、初出は『台湾新聞』、1931 年 10 月 15 日から 28 日まで 14 回連載、中島利郎「1930 年代台湾郷土文学論戦資料彙編」に収録、春暉出版社、（高雄、2003 年）121-143 ページ

[178]郭秋生「讀黄純青先生的（台湾話改造論）」、初出は『台湾新民報』1931 年 11 月 7 日、14 日に 2 回連載、中島利郎「1930 年代台湾郷土文学論戦資料彙編」、春暉出版社、（高雄、2003 年）、159-167 ページ

[179]黄石輝「讀黄純青専制的（台湾話改造論）」、初出は『台湾新民報』1931 年 11 月 7 日、14 日に 2 回連載、中島利郎「1930 年代台湾郷土文学論戦資料彙編」に収録、春暉出版社、（高雄、2003 年）、147-152 ページ

[180]郭秋生「説幾條台湾話文的基礎工作給大家做参考」初出は『南音』、1932 年 1 月 1 日、中島利郎「1930 年代台湾郷土文学論戦資料彙編」春暉出版社に収録、（高雄、2003 年）、223-225 ページ

[181]頼和「台湾話文的新字問題」初出は『南音』、1932 年 2 月 1 日、中島利郎「1930 年代台湾郷土文学論戦資料彙編」春暉出版社に収録、（高雄、2003 年）、249 ページ

『南音』の第1巻4号で、賴和が挙げた漢字一文字問題に対する郭秋生と黄石輝の回答が同時に刊行された。郭秋生も、「厚」の文字は通用するためこれに同意するが、「しかし『被』に内在する意義と比較すれば、やや不自然なきらいがある」と述べている[182]。また黄石輝も「可能な範囲内で、既成の文字を使用する方が良い」と述べている。しかし新字創作の可能性も排除してはおらず、例えば「没会」は一つの文字であるとか、「不」の下に「能」という新字を造りだすとか、あるいは「没」の文字で代用するなどといった提案をし、さらに次のような主張をも行っている。

> 可能な範囲内で、既成の文字を使う方が良いだろう。また中国の白話文の中で使われる新代字について、我々は可能な範囲内でまたなるべく採用するべきだ。…

「个」の使用をやめ「的」を用いるのは理にかなっており、台湾話文と中国話文に大きな隔たりを持たせない意味がある。中国人が採用する新代字と固有の意味の合う旧字を探し、台湾語に読み換えることが最もよいのである[183]。

上述の台湾文人数名の観点から考えると、台湾にとってすでに異文化となった中国文化をいかに取捨選択し活用するかなど、台湾の中国文化に対する理解と共生が顕著にあらわれている。この情況、つまり台湾話文の使用記号に共通の認識が得られない情況下で、中国白話文を使用するという主張は依然として存在していた。例えば、越峰は中国語の発音と文字を普及させても、中国白話文を普及させるに及ばないとして、こう述べた。

> 中国白話文は台湾言文一致の文学ではないが、しかしそれでも私はこれが台湾語に最も近しい文学であると信じている。特に我々台湾人の手による作品は、可能な範囲内で、中国人の作品よりもさらに台湾化する。…種々の台湾の言語とかけ離れた言葉は使わなくてよい。…中国白話文はその字に意味が存在するため、漳泉であれ、広東人の描いた文学であれ、我々はどれも見て理解することができる[184]。

台湾話文で使用する記号の論争から、同様の主張をする台湾話文の一派内にすら主張の隔たりがうまれたことが見て取れ、いかに問題をさらに細密化、個体化するかが問題の焦点となった。そのため林鳳岐の「我的改造台湾郷土文学的提案」は、郷土文学は一方では白話を主張する者があり、また一方ではローマ字等の言葉の発生を主張している者がある。はっきりしていることは、郷土文学の伝達手段、つまり中国白話文またはローマ字を郷土文学という主題に組み込んで討論をしているということである、

---

[182]郭秋生「台湾話文的新字問題-給賴和先生」、初出は『南音』、1932年2月22日、中島利郎「1930年代台湾郷土文学論戦資料彙編」に収録、春暉出版社、(高雄、2003年)、267-268ページ
[183]黄石輝「新字問題」、初出は『南音』1932年2月22日、中島利郎「1930年代台湾郷土文学論戦資料彙編」に収録、春暉出版社、(高雄、春暉出版社、(高雄、2003年)、269-271ページ
[184]越峰「對（建設台湾の郷土文学的形成芻議）」、初出は『台湾新民報』1933年9月5日、9日に2回連載、中島利郎「1930年代台湾郷土文学論戦資料彙編」に収録、春暉出版社、(高雄、2003年)、335-336ページ

と指摘している[185]。また台湾が台湾話文を提唱する際、その大部分はすでに中国白話文の使用から除外されているため、新字の問題はもう一つの戦いの場となった。しかしその文字の多さから、それぞれの例外がいまだ出来上がってもいない通例を破壊する可能性があり、このこともなぜ新字問題を討論するかという問題であり、大勢で始終一字ごとに討論を行い、ある音に対してはたしてどの字をあてれば最も適切に表せるのか、往々にしてある者が一つの文字を提議すれば、確実にさらに多くの反対意見が出るのである。その上新字の創作は別の難題を派生させ、たとえ新字が台湾話文の発音と意味に合っていたとしても、識別の難易度は逆に高くなる。このようにして、台湾話文により台湾人の非識字者の問題を解決するという初志は失われていった。台湾話文で提唱されている中において新字の使用がもう一つの難解なテーマとなってしまったため、台湾話文と郷土文学は依然として未解決の問題であり、いずれの人々も相手側を説き伏せることができなかったのである。

この時期の文学討論を総括すると、新旧文学論戦から始まり黄石輝と郭秋生が引き起こした台湾話文と郷土文学論戦までは、台湾文人らの新文学の活路に対する関心は、言葉で表しがたいほど強いものだったと言える。すべての言論は重要な 2 つの論点にまとめることができる。第一に、文学は現実から離脱して存在することは不可能であり、作家は社会の脈動を感じて生活の中から文学の題材を掘り出すべきである。第二に、言語と文字の使用は多くの民衆に配慮するべきで、新旧文学、郷土文学、民間文学、大衆文学などの名詞があらわれるも、そのいずれもが言語使用の問題に波及するものである。新旧文学、台湾話文と郷土文学論戦など、これらの論争のいずれもが具体的な結論は得られなかったものの、しかし少なくとも全ての作家は、読者である大衆が新文学発展の主要な要素の一つであることに気づいている。そのため台湾文人は具体的な文学作品上で、作家らは彼ら個人の異文化に対する理解をもって、異なる含意をもつ台湾新文学作品を生み出していったのである。

第三節　相互理解と共生における新文学の意義

台湾の新文学運動は日本統治下において、日本による資源の収奪と統治を目的として輸入された文明を目の当たりにし、台湾の新文学運動作家は新しきを貴きとすることはなく、反対に啓蒙主義の理性の真髄を掴み、新旧文学の消長に関して討論と批判を行った。本節では、台湾新文学作家の小説作品中に描き出される殖民地化への抵抗、民族問題、文化論述、社会主義などをとおして、台湾の文学作家がどのようにして思想の啓発から始め、異文化の衝撃に直面してそれに対処し、また一方で台湾の旧文化を見つめ異なる見解を提げたのかについて詳しく検討を行う。このような異文化に対する対処と再認識は、実のところ日本による台湾統治が終結するまで続いたが、皇民化期以前は日本殖民地統治にアイデンテ

[185]林鳳岐「我的改造台湾郷土文学的提案」、初出は『台湾新民報』1933 年 12 月 5 日、中島利郎「1930 年代台湾郷土文学論戦資料彙編」に収録、春暉出版社、(高雄、2003 年)、185-186 ページ

ィティを見出だす新文学作品は決して多くなく、皇民化期の皇民文学の登場を待ってようやく日本の異文化にアイデンティティを見出だす深みのある作品があらわれた。皇民文学の運動は次の章でさらに分析を進める。

台湾新文学運動が台頭するようになった要因の一つに、啓蒙思想のもと台湾新文化運動の一環として、台湾の武装抗日期の後に、体制内で日本の殖民統治に反対する運動が進められたことがある。この要因のもと、台頭した台湾新文学運動から生み出された文学作品の中にあらわれたのが、日本による殖民統治に対する抵抗であった。

日本による殖民統治への抵抗を意味する新文学作品は、張我軍の「駁稲江建醮与政府和三新聞的態度」の中でこのように批判されている。

> 建醮（道教の大規模な祈祷行事）の一件に関して先に述べたように、一種の迷信的な行事であり、これは鋭敏な政府当局や才知にたけた言論界の諸君らが当然理解していることである。言うまでも無く、迷信とは人々にとって毒となるものである。可哀想な我々台湾人は毒薬を飲んで自殺を図り、そして我々の政府と言論はあちら側に立って拍手喝采を送るのだ。嗚呼！

彼らは台湾人の血肉が飛び交うのを楽しみに腰を下ろして見物しようとし、そして愚かな漁師らはその本意を察することもできない。むしろ反対に身に余るその待遇に驚き喜び得意満面で、どのような結末に至るのかも知らないのだ。全く愚かで哀れでなものである[186]。

蒋渭水も「可悪至極的北署之態度」の一文において、民間人の催す盛大な祭りに対する総督府の対処の意図が計り知れないと指摘している。

> あのような迷信は文明各国で否定され、一掃されているものである。我々台湾がこのような下賤な風俗を打ち崩すことを、官庁は支持するべきである。さもなければ中立の立場を守るか、公明正大な態度でそれを監察するべきである。それなのに一方だけを擁護するなどとは、警察は「漁夫の利」の「漁夫」にでもなろうと言うのか。対岸から火事を眺め、よい景色だと口にするなど、良心があるのだろうか。ゆえに私は断言する。醮委員をする者は憎らしいが、北署の憎らしさには及ばない。醮委員をする者は残忍であるが、北署の残忍さにはかなわない！[187]

張我軍と蒋渭水の作品からみて、殖民政府が民間信仰の盛大で無駄な活動を支持するのは、祭りでの争いを利用して台湾人を分裂させ、殖民統治へ抵抗するエネルギーを消耗させるために他ならない。そ

---

[186]一郎「駁稲江建醮與政府和三新聞的態度」、『台灣民報』、2巻25号、(1924年12月1日)、5ページ
[187]蒋渭水「可惡至極的北署之態度」、『台湾民報』、2巻5号、(1924年12月1日)

して張我軍や蒋渭水のほかに、前非「対於建醮之感言」[188]簡順福「就此回的建醮而言」[189]剣如「対於稲江建醮的考察（上）、（下）」[190]等が、次々と建醮での浪費、そしてそれらを指示する総督の態度に対し不満を表した。殖民地政府が台湾の民間信仰の迷信を支持することに対して反対したのは、1921 年の台湾文化協会の成立後、台湾の知識人が台湾文化を向上させんがため、文明国家として台湾の科学的で進歩的、そして文明的な文化を打ち立てようとしたためである。しかし日本総督府はこの迷信の問題において、厄払いに取り合おうとしないばかりか、むしろこれを煽り立てる態度をとったため、知識人は日本総督府が本心から台湾をひとつの文明社会として改革しようとしているわけではないことに気が付いた。

台湾の知識人が進歩する文明を追い求める立場に立って日本の殖民統治を批判したものとして、頼和の「鬪鬧熱」があり、この小説の中ではこう触れている。

> 「嗚呼！」老人は感慨深く言った。「あの時代、地方自治の権力と機能は、今のようにきれいさっぱり剥奪されてはいなかったし、大きな権威があったものだ…」

「棋盤辺」の中ではさらに痛烈に日本総督府統治の文明といううわべの現象を風刺している。

> 「もう大人なのだから、いつもいつも騒がしくしないで、おとなしくしなさい！」保正、本物の保正である、すこしばかり威厳がある[191]。

「后車路の便所があふれ出している、保正、おまえ食えるか？」甲は彼に一言切り返した[192]。

頼和の小説は、日本が文明的な台湾を打ち立てるという嘘を暴いたのだ。またこのほか、楊逵は「模範村」の中で、役所から賞を授与された模範村と農民の感覚には雲泥の差があることを直接的に指摘している。

> この一面の田畑の中に、一丈分広い道路が碁盤の目のように広がり、その中を南から北へ、また一本のさらに二丈広い産業道路が貫いている。これらの道路は現代文明がもたらした恩恵である。もし大雨や洪水が起こって道路が崩れれば、村の 300 人の保甲民らは出動待機していなくとも役所の命令一つで、ただちに動員が可能で、またたく間に元通りに平坦に修理される。村では実に名誉なことだと誇りに思っている。
>
> 三年前、至る所に「牛車通行禁止」の立て看板が立てられていた。現在、こんな時代遅れの運搬道具はほとんど廃れてなくなってしまった。そして、トラック会社が急激に繁盛し

---

[188]前非「對於建醮之感言」、『台湾民報』、2 巻 24 号、(1924 年 11 月 21 日)
[189]簡順福「就此回的建醮而言」、『台湾民報』、2 巻 25 号、(1924 年 12 月 1 日)
[190]劍如「對於稻江的考察（上）・（下）」、『台湾民報』、2 巻 24 号 25 号、(1924 年 11 月 21 日)（1924 年 12 月 1 日）
[191]頼和「鬪鬧熱」初出は『台湾民報』68 号、(1926 年 1 月 1 日)、頼和著・林瑞明編『頼全集（一）：小說卷』に収録、前衛出版、(台北、2000 年)、37－38 ページ
[192]頼和「棋盤邊」初出は『台灣民報』68 号、(1926 年 1 月 1 日)、頼和著・林瑞明編『頼全集（一）：小說卷』に収録、前衛出版、(台北、2000 年)、118 ページ

てきた。

こんなことだから、ずっとこの村の派出所で苦労を重ね功績を上げた木村警官は、あっという間に巡査部長に昇格した。…

これは当然のことながらこの村にとってはこの上ない栄誉である。…

劉見賢自身は、自らを田畑を所有した中農で、みなのように生活に困窮してはいないが、ここ数年様々な名目の寄付が突如として増え出したため、彼も自身の生活が苦しくなったように思えてきた。その上、一様に苦悩し絶望的な表情ばかりを見ていると、自分も腐りきってしまったように思え、憂鬱になってしまう。当然のことながら資産家たちが納めた寄付金は、遅かれ早かれ他の場所から何倍の金にもなって返ってくる方法ができるに違いない。しかし、中農以下の者が金を寄付してしまえば、ほとんど永久的に戻ってくることは無いのだ[193]。

楊逵の小説が指摘した殖民地政府の施政方針は、殖民地支配国の需要を最優先に考えることであり、その恩恵を受ける者は殖民地の人々ではない。彼らはむしろ労働力を提供するうえ、またさらに余計な寄付がある。裕福な者には関係ないだろうが、しかし貧しい人々だけでなく、やや余裕のある中農でさえ生活が苦しくなることもある。こういったことから、小説では殖民統治者が殖民地の人々の幸せを考えているわけではないことを批判している。

このほか、蔡秋桐も「王爺猪」の小説の中で、日本の殖民地政府が台湾人の財産を力づくで奪い取る「侵略」の本質を明らかにしている。

彼らは征服者であり、力さえあればよいとする-実のところ何ら偉ぶれることなどない。力などはちょっとした偶然であり、他人の弱みに付け込んで得ただけのものである。彼らはいたるところで搾取を行い、あるものは何でも奪い取る。これはただの強奪、虐殺、盲従である絶望に打ちひしがれる人に対しては常にそうである。細かく考えてみれば、世界を征服するというのは実のところ何も良いことなどない。往々にして皮膚の色が違うか鼻が自分たちより若干平たい人を奪い取ることである。ただ信念を支えに我々を救いあがなうしかない。征服の背後にある信念とは、わざとらしい口実ではなく、真の信念である。それに加えて信念に対する私心のないの信仰—それを打ち立て敬うことができ、またそのために犠牲となれるものである…[194]

蔡秋桐の殖民地政府の収奪の本質に対する批判により、小説「王爺猪」の保正を利用し、そこでＳさまが軒先につるして干している百本もの腸詰を見ながら、その数の多さに彼の心中に疑念が生じ、心内でこの腸詰のいきさつを思い巡らせた。

どの家も、数年ごとに王爺にお供えする豚を準備してきた。その時になれば裕福な家も貧

---

[193]楊逵「模範村」彭小妍主編『楊逵全集５巻小説巻（Ⅱ研究中心籌備處）』、國立文化資産保存、（台南、1999 年）、100－106 ページ
[194] Joseph Conrad（康拉德）著・鄧鴻樹訳『黑暗之心』、聯経出版(台北、2006 年)、9－10 ページ

しい家も関係なく、大小問わず、各戸が仮に 1 頭ずつ豚を絞めるとすると、家ごとに一斤分を作って献上する。おお！適当に数えていても、腸詰が足りなくなるわけがない…[195]

なぜ各戸それぞれが腸詰を準備しなければいけないのか。それは王爺の祭に先立つ保甲会議で、S さまが王爺の祭で絞めなければいけない豚と羊の数を保正に前もって調査するよう求めたためである。S さまはさらに、祭ではなるべく費用を抑えて国防のための献金にまわすようにと法令で発布し、さらに祭当日には各戸に出向いて、勝手に豚や羊を殺した者がないかを調べ、違反者には罰金を科すと前もって告げた。しかしながらこの法令発布は偽りであり、調査の罰金こそが真実であったため、各戸で腸詰が S さまに収奪されていった。蔡秋桐はここで S さまの家につるしてある腸詰と王爺の祭に関連性があることを暗示させ、帝国が収奪のために作り出した観念は偽りで脆く、効率が悪いと指摘した。これにより殖民地支配国の「帝国至上」の神聖神話を打ち崩したのである。

王爺公の豚が S さまの腸詰に姿を変え、その所有権の移行が殖民支配者の定めた法律をとおしてみると、先進的で堂々たる禁止令であるかのように見える。しかし実際は、殖民支配国がその収奪という本質を満足させるための道具であり、この階級差のバランスを失った法律を通して殖民地の人々のエネルギーは次第にかき消され、されるがままの帝国への生贄となってしまった。よって蔡秋桐はさらに一歩踏み込んで、抑圧される人々を締められる豚にたとえ、人々は王爺公に向かって懇願する。

嗚呼！王爺公よ！見えますか。聞こえますか。もしあなたがこの弱者の抵抗できない悲鳴が聞こえたとしたら、あなたの心はそれに耐えられるのか。人はあなたを聾の王爺と呼ぶが、その耳は本当に聞こえないのか。苦しみ叫ぶ声、苦しみ泣く声、この愚かな豚でも、命を落とす日が近いことを知っている。それなら万人が王爺と呼ぶあなたには、ほんのわずかな慈悲の心もないのか[196]。

殖民地である台湾の人々が力の限り叫んでも、殖民支配国の収奪は依然として避けられず、殖民地の人々は生贄となる結末となった。蔡秋桐は小説『王爺豚』をかりて王爺公の祭の物語を通し、殖民支配国の殖民地の人々に対する絶対的な統轄支配の関係を露呈したのである。殖民支配国が定める法律とは、支配国が統治を行うためのただの道具に過ぎず、殖民地法における台湾人民とは、殖民地帝国、殖民地法の生贄でしかなかったのだ。

台湾新文学運動に内包されるものは、日本の殖民統治に対して抵抗した新文学作品のほか、当時の啓蒙時代の下で、社会文化の論述が表現した台湾旧社会の改革に対する希望もあった。そのなかでも旧社会改革のテーマにおいて、女性の地位が改めて見直され、女性というテーマも当然のことながら新文学

---

[195]蔡秋桐「王爺豬」初出は『台灣新文學』、1 巻 3 号、(1936 年 4 月 1 日)、張恆豪『台灣作家全集：楊雲萍、張我軍、蔡秋桐合集』に収録、前衛出版、(台北、2004)、252 ページ

[196]蔡秋桐「王爺豬」初出は『台灣新文學』、1 巻 3 号、(1936 年 4 月 1 日)、張恆豪『台灣作家全集：楊雲萍、張我軍、蔡秋桐合集』に収録、前衛出版、(台北、2004)、256 ページ

家らが注目する焦点の一つとなったのである。

楊守愚は小説『瘋女』で、彼が女性というテーマに関心を寄せていることを表現した。この小説『瘋女』の女性主人公である紫鳳は、容姿端麗で、性格は優しく純粋、品行方正、聡明で少しばかり詩書をたしなみ、裁縫にも長けている。古い時代の女性の基準からいうと、才色兼備の乙女である。当時の台湾は、依然として旧社会の道徳観念下にあったため、紫鳳は母親に従い縁組をすることになった。しかしその相手とは、非情な性格でまともな職にもつかず、一日中飲んだくれて賭博を打ち、女と遊び、また暴力をはたらき暴言を吐くといった無頼漢であった。しかし、紫鳳は元来「嫁ぐ」という言葉を耳にするだけで、恥ずかしさに頬を赤らめるような人物であったため、彼女にとっては自分の婚姻に対し「反対などできず、反対する力もなかった」のである。しかし、偶然にも婚約者の内情を知ってしまい、この婚約から逃れたいと思うが、紫鳳の母親は娘の真の幸せの為に何かするということはなかった。

将来の婚姻生活への恐れから、紫鳳は憂鬱で納得もできず、食事は喉を通らず眠ることもできなかった。苦境の泥沼から抜け出すことを望み、心の中では母親に婚約解消したいともちかけたかった。しかし、道徳観念に縛り付けられ、また不誠実からくる羞恥心に牽制された彼女は、自分の運命をただ恨むしかなかった。紫鳳は最後に気がふれたが、しかし母親の話によると、瘋女鬼を怒らせたからだという。

> 「誰が知っているというの。でも何日か前の夜、彼女はぼさぼさの髪の女の鬼を見てしまったといっている、それから憂い慄き病気になってしまったんだ[197]。」

しかし、男性側は彼女が文明に毒され、心に他に愛する者がいるため狂ったふりをして婚約破棄をたくらんでいると思い込み、故意に婚期を早めた。紫鳳の母親と婚約者の家族らの反応から見ると、紫鳳はいずれの援護も得られていない。紫鳳は運命の悲劇から逃れることはできず、ついに気がふれてしまう。それは、彼女が道徳観念という鉄の鎖にしばられ、自由を獲得できなかったためである。楊守愚は、紫鳳が道徳観念に追い詰められる様子をこのように描写している。

> 彼女は母親へ婚約解消を言い出したくないわけがなかった。しかし、恐ろしい顔つきで鉄の鎖を手にした道徳観念を前にして、彼女のどこから勇気がわいてくるというのか。さらに、誠意の無さから生み出される羞恥心が彼女を牽制した。たとえ言ったとしてももう間に合わない。今となってはもはや覆水盆に返らずである。それゆえ、彼女は自分の不運を恨むよりほかない[198]。

紫鳳の心の中の「不誠実さから生まれる羞恥心」は「植え付けられたもの」であり、これは台湾の古き時代が遺した遺産である。性格が形成される過程において、彼女は完全に受身であり、「反対などで

---

[197]楊守愚「瘋女」初出は『台灣民報』291 期、(1929 年 12 月 15 日)、施懿琳『楊守愚作品選集（上)』に収録、彰化県立文化中心、(彰化、1995 年)、38 ページ

[198]楊守愚「瘋女」初出は『台灣民報』291 期、(1929 年 12 月 15 日)、施懿琳『楊守愚作品選集（上)』に収録、彰化県立文化中心、(彰化、1995 年)、43 ページ

きない、反対する力もない」女子であると言い聞かされ、彼女の心は最終的に彼女の思想の道徳観念という枠組みに飲み込まれてしまった。

> 精神異常者と狂人は大きな存在となった。その意義は曖昧で混沌としている。威嚇と嘲笑の対象であり、この世の無理性な狂気でもあり、また人々の可哀想なお笑い種でもある[199]。

気が狂った紫鳳は人々の見世物となり、裸で髪を振り乱し、手に火叉を持って屋根の棟に跪き、ひっきりなしにあちこち走り回った。見物の人々はわめき、見物し、ひそひそと紫鳳のかわいそうな情況を笑いの種にした。紫鳳の狂った行動と周囲の「正常」な人の行動は、その趣きが大きく異なり、それは彼女の心中と道徳観念に対する迷いからくるものである。彼女は心の中で、時代が良しとする道徳観念を省みずに婚約を拒否したかったがかなわず、外に現れた行動は「時代が良しとする」ものとは異なる精神異常者のそれであった。このような精神に異常をきたした状態は、社会のしきたりにより定義され、社会のしきたりの生け贄となる。

このほか、翁鬧の小説『戇伯仔』は啓蒙時代の新文学を表現し、台湾旧社会の民間信仰に対する再認識をしている。『戇伯仔』は冷静かつ客観的なタッチでとうとうと描かれる、農村の低い身分の小人物の物語である。『戇伯仔』の物語の中で、戇伯は穴だらけのボロ袋のような陰鬱な稲わらの小屋に住んでいる。彼の農作物はいつも不作で、バナナは萎縮病に罹り、ニワトリはジフテリアを患い、人でさえも眼病を患い重病となってしまう。戇伯仔自身は眼病を患っており、8 年前に亡くなった彼の父親は盲人で、また彼が働く干物屋の同僚は片方の目が特別に小さいため、人から「独眼竜」と呼ばれていた。戇伯仔は、自分が男やもめの孤独な身であることを意に介さず、積極的に眼病を治療したいと考える。

医療費を工面するため、戇伯仔は「少しの心づけを受け取るたび、彼は注意深く竹筒の中に貯めていった」のである。やっとのことで貯めたお金で、町の眼科医に手術を依頼しメスを入れたが、医者は巡査に捕まって連行されてしまい、戇伯仔の眼病は依然として少しも良くなる気配がなかった。戇伯仔は健康で正常な目を望んだが、ここで経済的および政治的要素により頓挫してしまう。この二つの抵抗はいずれも殖民統制者の操作と制御によるものである。

最後に戇伯仔は、新しく祀られた土地神にただ助けを求めるしかなく、人々がいなくなった深夜 12 時を過ぎてから、彼は一人孤独に真っ赤な廟の前に佇んだ。

> 廟の中の香とろうそくは、なおも赤々と燃えている。金紙銀紙を燃やした灰は堆く積まれている。老伯仔は香を供え、両手を合わせ深々と祈りを捧げた。
>
> 「神様お願いします、私の目を治してください。」

---

[199]楊守愚「瘋女」初出は『台灣民報』291 期、(1929 年 12 月 15 日)、施懿琳『楊守愚作品選集（上)』に収録、彰化県立文化中心、(彰化、1995 年)、11 ページ

「もしも治ったなら五牲は用意できませんが、きっと三牲を用意してお礼にやって参ります。」

辺りに人がいないのを幸いに、老伯仔は勇気を振り絞り声に出して祈った。

「すみません、神様、今日はお供え物を持って参りませんでした、大変失礼いたしました。」

そして、老伯仔は持って来た一束の銀紙を燃やした。紙の灰は天空に舞い上がっていった。それは神に捧げるお金である[200]。

土地神とは、台湾の民間信仰の中でも農業や土地を守る神で、毎月二度の参拝を受け入れる。台湾の人々の生活の一部であり、台湾文学作品の中にもよく登場する。民俗信仰は実際に問題を解決できるわけではない。しかし深夜に老人が一人で神と対話をし、供え物の準備はないものの、敬虔な信仰心をもって祈りを捧げ、たとえ一束の銀紙でも神をたのしませ。戇伯仔が燃やした銀紙の灰は、炎の光の中で天へと舞っていくが、これは老人が深く寂しい殖民地という闇夜の中で、民俗信仰に見出だした一筋の光とわずかな温もりであり、たったこれだけのことであっても、頼れる者がいない彼の心の慰めには足るものであったのだ。

このほか、台湾新文学運動における民俗テーマや文化論述の作品に関して、再び許丙丁の『小封神』を例にする。『小封神』の中で、許丙丁は諧謔的なタッチと世相を多く盛り込むことをとおして、伝統的漢文化の迷信的な行為を排斥しようとした。許丙丁の『小封神』は、「滑稽童話」をメインテーマにペンネームを「緑珊盦」とし、1931 年 3 月 26 日から 1932 年 7 月 26 日まで『三六九小報』にて連載された。内容は、昔話の語り口調になぞらえた長編小説で、全編にわたって台湾語で執筆されている。小説は、台南市内の寺院の神仏が主な登場人物として描かれている。小上帝は人間界を守ることとなったが、現地には既に一階級上の上帝がいたため、僻地に引き下がるも捧げられる香やろうそくは少ない。ある日、彼の部下の康と趙という 2 人の元帥が、天上聖母の手下の千里眼と順風耳と賭けをするが敗れてしまい、上帝爺は全てを失った怒りのもと、間違って魁星を縛り付けてしまう。この誤解により、全ての神々は渾身の力を振り絞り、互いに権力を争い乱戦となるが、物語はここから展開し始める。

また読者の興味を引くため、許丙丁は『小封神』の中で、時事や新しい事物を反映した内容を織り込んでいった。例えば「自転車驚走三太子」、「雷震子力賽飛行機」等や、また「四大金剛看五穀王」、「報司爺見色失醋」等といった、地元の物語を描写した段落は、読者の共感を得た。小説中では混沌とした多彩な文語体で表現され、「快落籠」（急いては事を仕損じる）、「抜鹿角」（遊廓で金を払わず女遊びをすること）、「吊猴怨」（ひどい目に合わされた者は、その恨みを深く長く抱き続ける）、「棹頂提柑」（供物台のみかんを取ることから、非常に簡単なことのたとえ）「歩罡踏斗」（道教の儀式中

[200]翁鬧「戇伯仔」初出は『台湾文芸』、2 巻 7 号、（1935 年 7 月）、張恆豪『台湾作家全集：翁鬧、巫永福、王昶雄合集』に収録、前衛出版、（台北、1990 年）、45 ページ

の歩法）、「軟土深掘」（土が柔らかくどこまでも掘れることから、相手を騙し続けることのたとえ）、「食果子著拜樹頭」（果物を食すには木を拝む、何事にも感謝を忘れないことのたとえ）、「竪高楼看馬相蹧」（高みの見物）、「四大金剛看五穀王」（高みの見物）、「大佛躘躘走、佛仔車糞斗」（物事が困難なため大仏は早々に去り、小仏はそのことを知らず奮闘し続けること）などのことわざや俗語が用いられるほか、近代の事物の日本語の漢字、例えば「自転車」、「飛行機」、「専売特許」、「馬力」、「出張所」等を多く取り入れたり、音から訳した当て字「莫兒比涅」[201]、「扶轤拍喇」[202]などを用いたりした。そして、古典の漢詩文や格言の中から「君子居無求安」（君子は安居を求めない）（論語）、「錦城絲管日紛紛、半入江雲半入雲」（錦城の糸管日に紛紛、半ば江風に入り、半ばは雲に入る。）（唐詩）、「人無害虎心、虎有傷人意」（自分は他人を傷つける気はなくとも、他人は自分を傷つけることもある）（古いことわざ）、「是非只為多開口、煩惱皆因強出頭」（口は災いの元、功績をあげようとでしゃしゃり出たことがかえって悪い結果へと転じてしまい自ら悩みの種を生み出してしまう）（昔の賢文）等の文句を引用した[203]。

諧謔に富み、題材が台湾人に馴染みの深い神や仏であることや、物語もまた日常生活によくある巷での出来事であったことから、『小封神』は1930年代に『三六九小報』で発表されて以降、一般大衆からの支持を獲得し、当時の老若男女の話のタネとなった。連横は1932年に、とり集めた題材が台湾の人情や事物の描写にうまく合致しているという点から、『小封神』にかなりの高い評価を与えた[204]。そしてこれが、台湾新文学運動における郷土文学「我ら台湾の風土と、人情、歴史、時代を背景に」、「面白くかつ有益」な「大衆文芸」の概念に呼応したのである。許丙丁は、『小封神』を執筆した動機と目的について、次のように語っている。

> なぜ人は敬虔に仏を崇めるのか、庶民は誠心誠意神に額づくのか。このように大胆不敵に神や仏を好き勝手に冒涜して、死んだ後地獄に落ちて、歯を抜かれ舌を切られる刑が怖くないのか。…私は仏教徒の中でも迷信を排斥する革命者である。…近代社会がすでに原子力の時代に入っているにも関わらず、我々の古き都はどうであろうか。依然として鬼を信じる悪しき習慣を守っている、では問うが…三百年来の民族精神は一体どこにあるのか。…（中略）私は郷土観念が非常に深く、最も愛するものといえば、それは郷土だといっても良い。自ずと自分の郷土の不合理で時流にそぐわない事物や理は、時代と共に改善し、時代と共に発展することを希望する！…（中略）『小封神』はほとんど、地方性のある台湾方言に偏っていて、俗語は自然と多くなる。郷土の民俗についても自由に書きつらねたので、読者が読んでも非常に自然で、あたかも共感するようである。冷静になってみれば、

---

[201]中国語は「嗎啡」。日本語の「モルヒネ」はオランダ語の「morphine」、「morfine」を借用したもの。張光裕『台語音外来語辞典』雙語出版、（台中、2005年）、940ページ
[202]中国語は「螺旋槳」。日本語の「プロペラ」は英語の「propeller」を借用したもの。張光裕『台語音外来語辞典』、1253-1254ページ
[203]許丙丁「小封神」、呂興昌『許丙丁作品集（上）（下）』、台南市立文化中心、（台南、1996年）
[204]連横「雅言（18）」、369報、（1932年、3月3日）、4ページ、呂興昌『許丙丁作品集（下）』に収録、台南市立文化中心、（台南、1996年）、579ページ

ともすると『小封神』の中で自分の影を発見するかもしれない。そしてこらえ切れずに、声を出して大笑いし…腹を抱えて笑い…微笑し…苦笑いし…憂い哀しみの中に、あるいは喜びの境地にひきこまれる。

許丙丁は、彼の深く愛する郷土が、理性的で時代の精神に合致した道へと進むことを望み、神仏の冒涜へのとがめも甘んじて受けるとした。風刺的で諧謔に富んだ作風を用いて、世の人々が神聖で不可侵であるとみなす神々の性格を擬人化し、現実世界における迷信のおろかさを風刺し、また現地独特の言語文化に溶け込ませることで読者の共感を得たのである。

許丙丁は『小封神』の中で、諧謔的なタッチと世相を多く盛り込むことをとおして、旧来の漢文化の迷信的な行為を排斥しようとし、また彼のその他の詩文作品においても、盛大な祭りや鬼神を重んじ人を軽んじる観念に対する反対が見いだせる。許丙丁は、府城台南の現地のことわざや慣用句、そして神仏の物語等といった民間の文学を利用し、また庶民大衆がよく知る「擬話本」の形式で著述した。これにより、同じ社会の規範や集団としての記憶を有する読者らは、ただ自分たちの生活体験に依りさえすれば、物語をすぐ理解するに至ったのである。これがすなわち台湾新文学運動における、台湾話文と郷土文学の概念下の作品である。

最後に、本文は台湾新文学運動下での社会主義に関する論述を見ていく。本文の前ですでに、台湾新文学は社会と政治運動の影響下で発展してきたものであることについて述べたが、そのうち台湾新文学を発表する重要な場となった『台湾民報』は、1925 年前後に社会主義理念を宣伝するような記事を掲載し始めた。例を挙げると「台湾的農民運動」、「労働者的自覚」、「重大之台湾農民運動」、「弱小民族的奮起」等であるが、この種の社会主義の台頭と資産階級を中心とした議会設置運動、保甲制撤廃運動、悪法撤廃運動など、それぞれが失敗に帰したのには密接な関係があり、このため台湾新文学にも社会主義の影響を受けた作品が現れた[205]。

台湾における社会主義の台頭と 1927 年以降の台湾社会の一連の変革事件とは関係がある。前述した台湾文化を啓蒙する台湾文化協会は 1927 年に分裂し、社会主義を主張する連温卿や王敏川らが主導権を握り、新文協と名を改めた。これにより、社会主義的な見方がある程度その機関誌『台湾民報』に浸透し、そしてもともと右派に属していた林献堂、蒋渭水、蔡培火らは台湾民衆党を結成した。このほか農民運動、労働運動、台湾共産党も次々に設立され、台湾左翼の社会、政治運動が積極的に展開された。このような情況のもと、左翼社会運動は日増しに空前の発展をみせ、この過程において社会主義理論の需要はさらに強まり、社会主義思想の宣伝、発揚、展開が日々切実となったことから、これらの声に応える新聞や雑誌も機運に乗じて現れた。例えば、1928 年 5 月に新文協により創刊された『台湾大衆時報』、1930 年上半期の『伍人報』、『台湾戦線』、『明日』、『洪水報』、『赤道報』、『新台湾戦線』などのプロレタリア雑誌は、台湾プロレタリア文芸運動の前触れとみなされ、これらの雑誌は文学と社会主

[205]陳芳明『殖民地台灣－左翼政治運動史論』、麥田出版、(台北、1998)、193-213 ページ

義思想が結びつくきっかけを与えた[206]。

しかしながら、台湾の社会主義運動は日本本国の右翼国家主義の発展により、殖民地台湾における階級闘争を中心とした民族運動はすぐに総督府の監視を呼び、1931 年前後になると左翼メンバーのほとんどはいずれも検挙、逮捕された。しかし左翼政治運動に対する総督府の圧力は、反対に社会主義運動を主張するメンバーらを台湾新文学運動の方向へと転換させた。

社会主義思想下の台湾新文学は、1931 年には台湾の日本左派青年平山勲、上清哉、藤原泉三郎、別所孝二、林耕三らが、王詩琅、張維賢、周合源、徐瓊二、廖漢臣、朱点人、頼明弘らと共同で文芸団体「台湾文芸作家協会」を設立し、機関誌『台湾文学』を発行した。この協会は共産主義思想研究の性格を持ち、彼らは「新文芸の探求ならびに台湾においての確立を目的とする」ことを掲げ、マルクス主義に立脚した台湾の自主的文学の成立を主張、また同じくプロレタリア文学の理念を堅持した日本人らと協力し、殖民地の人々の苦難の心情を体験するという側面から問題を考え[207]、同時に組織の活動展開をそのよりどころとした。協会の機関誌『台湾文学』は、目標を「新文芸確立への邁進」、「文芸の大衆化への邁進」に定めた。しかし『台湾文学』は、総督府に内容が反動的であるとみなされたため、創刊号から刊行禁止の運命をたどる[208]。

台湾総督府による社会主義および左翼プロレタリア文芸運動の抑圧のため、左翼文学は右翼運動のメンバーらと共同で発展を求めざるをえず、左翼と右翼が結びついた初めての団体が 1931 年秋に結成した「南音社」である。「南音社」は「過去島内における各種雑誌の寿命が長くないことをかんがみ、我々会員は創作において日本人に痛罵を浴びせたいところであるが、最も望ましいのは、一触即発の状態で直接敵の急所に攻め入ろうとしないことである。検閲者の神経を逆なでして無意味な犠牲を払うより、いかに含みをもたせた書き方をして読者に胸のすく思いをさせ、そして検閲者を呆然とさせるか、これが賢明であろう。もし特殊な理由があるとすれば、それはここには含まれないものである」[209]。として、ここからおちついた歩調で出発し、党派にこだわらない無私の精神を強調したが、その目的は総督府の検閲と監視を避けることであった。この情況において、機関誌『南音』は一部の左翼進歩、批判的観点をもつ作家の作品および評論、たとえば頼和の『帰家』、『惹事』、周定山の『老成党』、赤子の『擦鞋匠』などといった批判性の高い小説を掲載することにより、ある程度の左翼傾向を呈することができた[210]。

1932 年に至り「文化形体により、民衆に民族革命を理解させる」という趣旨のもと、左翼メンバーらは文化団体「台湾人文化圏」を設立し、同時に機関誌『時報』を発行した。しかし、いくらもたたないうちに台湾総督府による瓦解にあった。1933 年には、蘇維熊、施学習、王白淵、劉捷、呉坤煌、巫永福、

---

[206]施淑「文協分裂與 30 年代初台湾文芸思想的分化」、『兩岸文學論集』、新地出版社、(台北、1997 年)、15 ページ
[207]警察沿革誌編纂委員会　王詩琅訳『台灣社會運動史：文化運動』、稲郷出版、(台北県、1988 年)、520 ページ
[208]河原功著　葉石濤訳「台灣新文學運動的展開－日本統治下在台灣的文學運動」、『文學台灣』、1-3 期、(1991 年 12 月-1992 年 3 月-6 月)。
[209]奇(葉榮鐘) 「発刊詞」、『南音』、創刊号、(193 年 1 月 1 日)
[210]黄郇城 「談談「(南音)」、『台北文物』、3 巻 2 期、(1954 年 8 月)

張文環らが、日本で合法の文芸団体「台湾芸術研究会」を組織し、目標を「偏狭な政治と経済による拘束に絶対服従することなく、距離をおいて問題を見つめ、台湾人にふさわしい文化的な新生活を創造する」と定めた。そのとおり同組織は煽動的な比較的強烈な言い方を抑え、合法であるかどうかについてかなり慎重に考えた。その機関誌『福爾摩莎』は、日本の台湾人留学生が文学運動に参加する一つの標識であり、3 号の発行で終わりを告げたが、台湾の郷土文学論争に注目し、王白淵、呉希聖らの作品を掲載した[211]。

「台湾芸術研究会」の発足および『福爾摩莎』の発行は、台湾文学界に刺激を与え、これにより 1933 年 10 月、台北の文人らも「台湾文芸協会」を組織、同会は台北の左翼文学青年である郭秋生、廖漢臣が発起人となり、黄得時、王詩琅、朱点人、蔡徳音、徐瓊二、陳君玉、林克夫、呉逸生、黄青萍らを中心メンバーとし、総督府の監視と抑圧を避けるため、同会は自由主義の呼びかけを協会の基本精神として掲げた。しかし、ほとんどの会員が強烈なプロレタリア文学運動の性格を有していたため、1934 年に発行された機関誌『先発部隊』は総督府の目に留まり、第 2 期からは『第一線』と改名することを余儀なくされた。『先発部隊』は、まずこれまでの文学運動が、改革面における積極性と努力が十分でなかったことに対して反省をし、鮮明な目的意識を具えたプロレタリア文化と文学運動の展開を提唱した[212]。

東京の「台湾芸術研究会」と台北の「台湾文芸協会」が設立した後、1934 年 5 月「台湾文芸聯盟」が台中で設立され、台湾全土の文人が一堂に会する統一文学運動の門が開かれた。その設立大会開催決議で全国各地に支部が設けられ、機関誌『台湾文芸』が月刊で発行されることとなった。全国的な文聯設立の後、東京の「台湾芸術研究会」は吸収合併され、「台湾文芸協会」も会員に自由に加入することを許可したため、文聯は左右翼文人を網羅した文芸組織となり、計画的に文学運動の展開を開始した。しかし、文聯の組織は左翼、右翼など各派の文人を内包していたため、『台湾文芸』は一旦掲載する作品、評論、文芸理論等を選ぶ原稿審査や編集の作業段階に進むと、さまざまな異なった主張が林立するという事態に直面し、『台湾文芸』の発行時には衝突が生まれた[213]。

文聯の内部衝突という事態は最終的に分裂に至った。濃厚な社会主義思想を有し、文学の政治的機能を主張する楊逵は、文聯の文学運動では左翼政治の目標を貫徹できないとして、彼と右翼文人である張星建との間で編集権の問題から衝突が生まれ、文聯内部の分裂を表面化させ、最後に楊逵は不満を呈して文聯を離れた。文聯離脱後の楊逵と彼の夫人である葉陶は、「台湾新文学社」を設立し、頼和、楊守愚、呉新栄、郭水潭、王登山、頼明弘、頼慶、葉栄鐘および高橋正雄、田中保男らを主要メンバーとし、1935 年中日 2 ヶ国語同時掲載の機関誌『台湾新文学』を発行した。『台湾新文学』は総督府の監視から逃れるため、創刊号に「本誌はいずれの団体にも属さない機関であり、本誌は台湾全土の文芸愛好者の共通の舞台である。誰もがこの舞台で発表する権利を有しており、同時に誰もが支持する任務を有する」

---

[211]施學習 「台灣藝術研究會成立與福爾摩莎創刊」、『新文學雜誌叢刊 2』、65-71 ページ
[212]施淑「書齋、城市與鄉村-日據時代的左翼文學運動及小說中的左翼知識份子」、『兩岸文學論集』、50-83 ページ
[213]林瑞明「日本統治下的臺灣新文學運動-文學結社及其精神」、『文訊月刊』、29 期、(1987 年 4 月 1 日)、35-50 ページ

と公示したものの、『台湾新文学』はその本質上、依然として左翼文芸雑誌の性格を具えていたため、内容は次々と総督府の黒塗りや販売禁止の処分を被った。1937 年台湾が皇民化期に入るまで、同雑誌は合計 15 期を発行した[214]。

台湾の新文学運動下での社会主義思想の左翼文学は、日本殖民帝国からの反対と抑圧のため、台湾での発展はきわめて困難であり、特に皇民化期に入った後はさらに全面的に禁止されることになった。しかし皇民化期以前、社会主義思想の左翼文学は依然として台湾の新文学運動の重要な一部であり、特に賴和と楊逵はその中でも特に代表的な人物であった。

賴和は小説『阿四』の中で、彼の文化協会に対する初期の期待、そして最終的には批判を行ったその原因を表した。小説『阿四』の主人公は賴和の化身であると言え、阿四と賴和は共に医者である。物語の内容は、阿四が日本の病院勤務で差別を受け、台湾に戻って開業するも常に法律という目が自分を監視していると感じ、このような窮屈な感覚は、東京の台湾人青年が社会主義の思想を台湾に持ち込んでから、長い間心の中で不公平に感じている原因が、統治者と被統治者との間の越えることの出来ない階級の不平等から来ていると、はたと悟る。小説にはこのように書かれている。

> ある夏休み、東京の留学生は講演隊を結成し、台湾民衆の文化向上のため僅かながらも力を尽くそうと考えた。しかし、支配階級側は固陋な思想に支配され、庶民は無知蒙昧で統治し易いと思っている。もし彼らがいわゆる民権や正当な要求というものを知り、官民はもともと平等であると知れば、彼らの統治に不都合が生じる。支配階級らは威厳を掲げるのに慣れ、一般市民らを蹂躙するのに慣れてしまったので、この講演隊に対してあらゆる面で妨害を行い、なんとしても講演隊には民衆に向かって口を開かせてはいけなかった。しかし支配階級はこのとき、法の尊厳を顧慮したため、理由無く講演団体を解散させるわけにいかず、ただ無知な百姓らを脅すか、あるいはあれらのいわゆる御用紳士に知らせて、あらゆる講演できそうな場所を、一切講演隊に貸し出すことを許可しなかった。そのため講演隊は台北に戻っても、いたるところで壁にぶち当たった。後にこの情報をひそかに探りあて支配者側に抗議したが、支配者は全く勇気なく彼らの非合法的な干渉を否認したため、講演隊はただ台北に留まり、暫くの間なす術がなかった[215]。

賴和は、この東京台湾青年会の台湾での講演活動を述べた文章の中で、「支配者」、「階級」などの社会主義の名詞を用いたが、これらの言葉はマルクスの階級闘争と生産関係の理論から来ており、賴和が東京の留学生と交流した際、社会主義思想の影響を受けたことが分かる。また上述の講演において、台湾総督府の抑圧を受けた台湾人民は、遠路数十里の道のりを越え文化協会の講演を聴きに訪れており、賴和は「彼らにいくらかの慰めと、人生における長い道のりにおける幾ばくかの明るい導きを与えたい」

---

[214]楊逵「臺灣文壇の近情」、『文學評論』、2 巻 12 号、(1935 年 11 月 1 日)
[215]賴和「阿四」、林瑞明編『賴和全集（一）：小說卷』に収録、前衛出版、(台北、2000 年)、269 ページ

[216]とした。庶民らは、文化協会の講演者を救世主とみなし、彼らは講演者の前で彼らが受けた苦痛を口々に訴えた。物語の中で賴和の分身である阿四は心の中で、これら庶民の意識では、文化協会の講演者は必ず彼らの憂いを分かち合ってくれると思っているため、個人では苦しみを訴える機会を逃してしまうことを恐れて先を争って訴えかけてくる、というように思い、この切実で首を長くして待っていた庶民らを前に、阿四は責任の重さを深く感じ、気持ちが落ち着かない。小説中では下のように記している。

> 阿四はこのような情況を目にして、心を落ち着けることができない。民衆がこんなにも崇拝し、信頼し、期待しているのに、もし彼らが実際に幸福を得られず、苦痛の根源だけを知ってしまえば、その不公平に対する憤りは増す。そして解決方法を与えてはやれない。間違いなく彼らを失望させ、結果的に彼らの哀しみだけを増やすことになる。これはむしろ罪になるではないか[217]？

小説中で阿四が講演台に立つと、静粛な会場には多くの頭が動くのだけが見えた。演台を仰ぐそれぞれの瞳は、いずれも熱い希望の視線を彼の顔へと注いでいる。阿四の心には同情の念が燃え上がり、なんとしても彼らが聞きたいと思っている話をしようとした。しかし、阿四は熱い視線と向き合って、労苦の民衆に対して願いどおり問題解決の方法を提示することが出来なかった。彼はただ現実味のない話だけを語り、民衆にはその場しのぎの慰めだけを与え、未来の希望と喜びを抱かせて帰路につかせた。たとえそうではあっても講演台に立つ阿四は、その心中では依然として演台下の民衆らと同じく救いを感じられず、無力感を感じていた。

賴和は小説『阿四』の中で、講演を通して自らの反省と文化協会に対する批判を行った。賴和は文化協会の運動のやりかたには限界があると察し、同時に講演を通して殖民地政府による抑圧の現状を示すほか、もし民衆の苦しい生活を改善できる積極的な方法を提供することができなければ、民衆は無力感が増すばかりであると悟った。賴和は小説を通し、講演によって宣伝を行い、人々に生活の苦しみの源が殖民政府の抑圧から来るものであることを理解させているが、このような方法が本当に人々の求めている助けなのであろうかと問うている。その答えは否であり、それは賴和が講演宣伝はただ階級の不公平と抑圧、搾取を掲げるだけで、プロレタリアートが苦しみの根源を知りえれば、彼らの不公平に対する憤りを増長するだけで、彼らの実際の生活状況を変えることは出来ない、と考えていたからである。民衆は憤りのあまり、もし文化協会の知識人らが彼らに解決方法を示すことができない場合、彼らにはさらなる失望と怒りを与え、さらなる苦痛と、無力感と悲哀を感じさせることになる。これが賴和が心中で懸念していたことである。よって賴和の考えたこととは、文化協会の啓蒙方法で、社会主義思想を用いて批判を加えることだったのである。

もう一つの代表といえば、楊逵の小説『霊籤』である。『霊籤』は一人の知識人による一人称の視点

---

[216]賴和「阿四」、林瑞明編『賴和全集（一）：小説卷』に収録、前衛出版、（台北、2000 年）、274 ページ
[217]賴和「阿四」、林瑞明編『賴和全集（一）：小説卷』に収録、前衛出版、（台北、2000 年）、275 ページ

から、ある困窮する隣人がおみくじを解説する様子を敘述する物語である。主人公の隣人である林効夫婦は、高雄で薪を拾い販売して生計を立てる無産階級である。夫婦は二人とも税金や、過剰な義務的労働、小作料などを滞らせたことのない、法を守る善良な市民であった。しかし勤勉さ、法の遵守は彼らに安定した生活をもたらすというわけではなく、半年の内に林効の三人の子供は栄養不良のため病気になり次々と亡くなってしまった。林効の妻はなんの助けもなく、神に救いを求めるほかなく、主人公に彼女がひいて来たおみくじの解説を頼む。解説の時に、林効の妻は恐る恐る主人公の顔を見つめているので、主人公は仕方なく繰り返し「これからは良くなる、これからは良くなる」と言った。しかし、林効の妻は心の中で不安を残しつつも、自分自身に主人公が解説したおみくじの内容を無理やり信じこませた。

林効の妻が帰った後、主人公とその妻が林家の困窮状況について話す際、やっと本当の解釈について触れる。

> 「どうしてかってまだいうのか？私は彼の子供はほとんどが世話もできずに死んだと思っていた。生まれて二ヵ月で赤ん坊に米汁をやって、五ヶ月でイモを食わすっていうのか？……これでどうやって助けられるのだ？どんな丈夫な子供でもすぐに駄目になってしまう。それに、子供の傍で寝てやる時間がわずか二、三時間だって？……二、三時間しか寝る時間がないから、横になれば死人のように寝てしまう、どうやって子供の面倒を見られるんだ？昼間に至っては、忙しさのために傍らに放ったらかしだ。今回死んだのは肺炎のせいだって？……栄養状態も悪くて、胃腸も悪くて、風邪ばかりひいて、もうすぐ死ぬという時になって、死亡証明書をもらうために医者に診せる、どうやって生かしてやれるというんだ？……」
>
> 「問題はここにある、彼らはこれまで公のことを滞らせたことはない。けれどももっと多くの時間を子供の世話に割かなければ、それに金にだってもう少し余裕がなければ、おみくじなんて頼りにならないと思う[218]。」

主人公のこの話は、子供の死亡原因が貧困から来るものであるとしており、勤勉に仕事をしても衣食に代わることはなく、公のことを滞らせたことがなくても基本的な生存権利の保障は受けられない。これが子供の栄養不良による病気の原因であり、その上経済的困窮で医師の治療を受けることも出来ない。ここで楊逵は、無産の労働者らがなんとか生存することすら困難である実情を述べようとしている。

そして林効の妻はおみくじの解説を聞き終わった後、もともとおみくじに対して深く信じ疑わない姿勢を持っており、彼女は「神が言ったのだから……間違いはないはず……」と語るが、しかし林効の妻は１ヶ月後再び流産してしまい、その時彼女は「浮かぬ顔で一言も発せず、まるでおみくじへの信仰が

---

[218]楊逵「靈籤」彭小妍編『楊逵全集第 14 巻：資料巻』、彭小妍主編『楊逵全集資料巻（Ⅱ研究中心籌備處）』、國立文化資産保存、（台南、2001 年）、169 ページ

破滅したようであった」[219]。彼女のおみくじに対する信仰の破滅は、まさに主人公がおみくじを解説した時の宗教信仰に対する観点を肯定しており、つまり主人公は、人の世間に対する観察と認識は泥人形の偶像よりはるかに勝ると考えていたのである。

楊逵はこの小説の中で、社会主義の無産者の物語をもって、無産階級家庭の貧困は階級の不正義から来るものであると批判し、資本家と殖民政権の二重搾取の下では、無産の労働者らが何とか生存することすらも困難であるとした。また一方で、おみくじの解説をする過程で台湾社会が盲信する信仰についても批判している。社会主義は宗教を批判しており、宗教は抑圧された民衆を解放することが出来ないばかりか、反対に一種の精神的抑圧となり、労働者を搾取される立場と肯定することになる。しかしながら「重圧人数の宗教的抑圧は社会における経済的抑圧による産物の反映」であり[220]、よって楊逵はこの小説の目的は宗教信仰を放棄することであり、そうすることにより現実社会の不公平な制度の中から解決の道を探し出すことが出来るとしている。

台湾新文学運動の内包を見渡すと、異文化の殖民統治下において、台湾は異文化統治を反省する啓蒙運動を生み、啓蒙運動の思想のもと、武装抗日から体制内で日本殖民統治に反対する運動に切り替えた。この一つの要素の下で台頭した台湾文学運動は、その創作された文学作品内容において、まず初めに現れたのが日本殖民統治に対する抵抗であった。このほか、台湾新文学運動にも、民俗テーマ、文化論述に関する作品も生み出され、社会主義論述に関する新文学も激しく動き出した。台湾新文学運動の内容には、日本の殖民統治に対して抵抗する新文学作品のほか、啓蒙時代における社会文化の論述もみられ、台湾旧社会に対する改革の希望が表現された。その中で、旧社会に対する変革のテーマには女性の地位の再考察も含まれ、女性というテーマも注目の一つとなった。これら数々の新文学の内容は、いずれも台湾新文学運動が殖民統治のもとで生み出した異文化に対する新たな理解と共生であり、同時に一種の台湾本土文化の反省と再生でもあったのだ。

---

[219]楊逵「靈籤」彭小妍編『楊逵全集第 14 巻：資料巻』、彭小妍主編『楊逵全集資料巻（Ⅱ研究中心籌備處）』、國立文化資産保存、（台南、2001 年）、169-170 ページ

[220]列寧著 楊逵譯「社會主義與宗教」、彭小妍主編『楊逵全集資料巻（Ⅱ研究中心籌備處）』、國立文化資産保存、（台南、2001 年）、738-741 ページ

第四章　皇民化時期の台湾新文学

第一節 言語の転換と皇民文学の出現

日本の異文化が台湾を殖民統治した時代、台湾文学史という視点から異文化理解と多文化共生という現象をみつめると、1937 年の皇民化期以前、台湾本土の文人は台湾本土の啓蒙思想のもとで、本土の台湾新文学運動を生み出した。その中には新旧文学論争、台湾話文運動、郷土文学運動が含まれており、この新文学運動の内容は社会文化の論述、民俗のテーマ、社会主義思想なども包括していることが分かる。しかしながら、この台湾新文学は日本異文化による殖民統治の理解と再生に対し、1937 年に日本殖民政府が皇民化政策を実施した後、皇民化政策には漢文廃止が含まれたこと、また殖民地政府が文学を国家政策の宣伝の手段とする要求が日増しに強くなったことによって、台湾新文学運動の種は完全に消滅しなかったものの、皇民文学の台頭につながっていった。皇民文学とは一体何か。皇民文学はどのように興ったのか。皇民文学の実態は何か。どのような異文化理解と共生の意義を表すのか。これを本章における検討の要点とする。

皇民文学の台頭は、無論皇民化政策の実施から触れねばならない。何義麟の研究によれば、「皇民化」という言葉が最も早く登場したのは、1936 年の台南州『社会教育要覧』[221]であるとされ、この言葉が強く主張する社会教育の目的とは、台湾人を忠実で善良な日本人民に同化することである。何義麟は、「皇民化」とは台湾人を忠実で善良な日本人民に同化することと考えている。この定義でさらに説明が必要なのは、「皇民化」という言葉は日本語から来たものであり、「皇民」という言葉の日本語のそもそもの意味は天皇の民であって、この名詞の由来と日本近代史の発展には密接な関係がある。日本の天皇は万世一系と称するものの、古来より天皇が実際に政権を掌握していた時間はそれほど多くなく、近世は幕府の将軍が実権を掌握し、天皇はただの象徴的な見せかけの役まわりでしかなかった。明治維新の際、立憲等の手段によりやっと天皇の地位が認識され、日本人も明治維新後になって新しい段階の皇民化の過程を歩み始めている。[222]

台湾は日本の殖民地として、その殖民統治政策が元来の同化政策によってさらに発展し「皇民化」政策となった。ここで「同化」と「皇民化」の問題に関して、一歩踏み込んだ解釈が必要である。台湾人学者の許極燉は「“同化”は台湾人の生活様式を日本人と同化させるだけである、（中略）本来同化という言葉は早くは 1911 年、当時の総督府の内務局長である亀山理平太が主張したことがある。ただ、総督府だけは台湾人が異民族であるととらえ、法と政治の制度上、宗主国とは違いがあった。このため、

---

[221]台南州『台南州社會教育要覧』、台南州共榮會、（台南、1935 年）
[222]何義麟「皇民化政策之研究―日據時代末期日本對台灣的教育政策與教化運動」、台北中國文化大學日本研究所修士論文、（台北、1986 年）4-7 ページ。

総督府の対台湾政策は一貫して非同化の“異化”差別という方針であった」[223]。としている。そしてもう一人の学者である陳培豊は、日本統治下の台湾の「同化」とは一般的な殖民地学上で言うところのAssimilationとは一致せず、近代日本の国家原理－国体－を模倣、運用ならびに適当な改造を加えた結果出来た一種の統治政策であるとしている。陳培豊は、「同化」という言葉の出所は19世紀の欧米による殖民地政策の中のassimilationからで、その基本精神とは殖民地統治を本国施政の延長とするものであった。一方で暴力、殺戮による統治手段をなるべく排除し、被統治者の文化、社会組織の特殊性を最低限に抑えることであった。もう一方で、殖民地現地の住民に対し血縁、精神、思想上の同質化を図り、彼らを統治者の社会価値体系の中に溶け込ませた。また同時に、施政者も本国人民と同様の参政権をこれら被統治者に与えた。暴力による統治の排除し、精神的な服従と征服に対しての重要視および統治者と現地住民間の融合政策という方針等から見ると、台湾の「同化」政策とassimilationは確かにある程度の共通性はある。しかしながらassimilationと台湾統治の実際的なの内容や特徴にはやはり距離があり、全く同じというわけではなかった。assimilationには統治者と現地住民間の結婚を奨励し、民族融合という政策意図を達成しようとしているが、しかし学校教育を通じて「台湾児童の日本児童への改造」や「日本人への改造」を試みるという精神的な傾向はなかったのである[224]。

上述した「同化」に関連する定義に基づき、本文は、「皇民化」政策とは日本が台湾で実施した同化政策の究極的な表現であり、同化の程度の上での問題であるとする。そして「皇民化」は殖民地の人民を同化し完全な日本人にすることを意味している。したがって、「皇民化」は日本が台湾で実施した同化政策であり、日本の国家体制の特殊性からあらわれた特殊な名詞であるため、日本が台湾で実施した同化政策の段階においてすでに皇民化の意図が含まれていたが、名詞の使用という点において、1937年になって正式に公に使用され、同化の程度が確認されたのである。

「皇民化」の定義を理解した後は、皇民化は突然登場した政策というわけではなく、同化から皇民化という過程をたどったということが分かる。この過程は日本が50年にわたって台湾を統治したその初期に、一連の北埔事件、林杞埔事件、土庫事件、苗栗事件、大甲事件、西来庵事件、霧社事件などを幾度も経験し、台湾の武装民族抗日運動がほとんど終息した後、日本の殖民地政府が次第に採用し始めた同化政策である。1936年に、台湾総督に就任した小林躋造は「皇民化、工業化、南進基地化」という台湾統治の三大政策を公示した。そして1937年の日中戦争の勃発は、皇民化運動が全面展開する重要な引き金であったと言える。日中戦争の勃発後、日本の近衛内閣は1938年に「国民精神総動員計画実施要綱」を発表し、戦争と国防経済体制確立の必要性や、日増しに拡張する戦争規模に対応するため、殖民地の資源を利用しなくてはならず、このため台湾も日本の戦争計画の一端に治められることとなり、台湾総督府は「国民精神総動員本部」を設立し、皇民化運動の推進を全面的に加速した。1939年に小林躋造台

---

[223] 許極燉『台灣近代發展史』、前衛出版社、(台北、1996年)、422ページ

[224]陳培豐「重新解析殖民地台灣的國語「同化」教育政策－以日本的近代思想史為座標」、『文化研究月報』25期、2003年3月25日2003年3月25日、インターネット版http://www.cc.ncu.edu.tw/~csa/oldjournal/25/journal_park166.htm 、2010年12月10日

湾総督は、台湾で「皇民化」、「工業化」、「南進化」を推進することを正式に発表し、[225]「皇民化」殖民政府の台湾に対する正式な殖民政策となったのである。正式に皇民化期へ突入した後、小林総督は「皇民化」の政策目的をこのように示している。

> 皇民化運動を通じ、つまり「皇国精神強化運動」の略称であるが、台湾人を真の日本人へと改造する、すなわち「神国日本の南の玄関の民」とする[226]。

「皇民化」とは台湾人を「皇国の民」に作り上げることで、台湾人に殖民国へ対する忠誠心を抱かせ、日本の戦争のために忠誠を尽くさせるためである。教育とは、この目標を達成する手段のうちの一つであった。皇民化の具体的な施行項目については、漢文欄の廃止、台湾語放送の中止、日本語推進の強制、改名、先祖の位牌の焼却、神宮大麻の奉祀、寺や廟の撤廃、神社の建立、皇居遥拝、旧正月の撤廃、台湾戯劇の禁止（布袋戯や歌仔戯など）、初等教育の義務化、日本語の日常使用の強化、習慣の日本化（下駄や和服の着用、畳の使用など）と広範囲に及んだ[227]。皇民化運動が推進する項目により、日本が宗教、言語、文化の各方面から、全面的な台湾文化の撲滅を極端に求めており、台湾人の精神改革を意図したことが明らかに見て取れる。

日本という異文化からくる皇民化運動は、台湾文学の発展の影響に対し、最も重要なことは話文普及運動と漢文の廃止であった。まず、話文普及運動についてであるが、日本による台湾の殖民統治初期には、漢文は廃止されていないものの、日本の殖民地政府は「国語の普及」を最も根本的で最も重要な同化戦略とみなしていた。1895 年の台湾総督府始政式後には学務部が設けられ、初代学務部長に任命された伊沢修二は、彼が樺山資紀総督に提出した台湾教育意見書の冒頭で、「台湾教育は、第一に新領土の人民に速やかに日本語を学習させるべきである」と明言している。その原因は、

> 国を得るには民を得なければならない、そして民を得るには人の心を得なければならない。もし人の心を得たければ、まず、互いの意思疎通を図るため言語の力を借りなければならない。……ゆえに今この伝習を設立し、国語伝習の道を開き、施政の利便を図るため、さらに教化の基礎を築く[228]。

伊沢修二の打ち立てた台湾学制の際の構想によれば、主に大きな 2 つの部分に分けられる。１つ目は緊急事業、つまり緊急に構築が必要な事業であり、2 つ目は永久事業、つまり徐々に築き上げる必要のある事業である。緊急事業には 2 種類あり、１つは国語伝習所、もう１つは講習員の育成である。伊沢修二主導の下、1896 年に国語伝習所が設置された際の総督府学務部の意見書内容には、「国語伝習所」の設置は言語の壁による障害を解決して互いの意思疎通を図り、殖民行政の推進を有利にするもの、と明瞭に示されている。緊急事業の遂行と同時に、永久事業もそれに次いで推進され、これには公学校と

---

[225]「本島人の皇民化こそ新台湾建設の第一義　上京の途次　小林総督車中談話」、『台湾日々新報』、(939 年 5 月 20 日、夕刊
[226]近藤正己『総力戦と台湾―日本殖民地崩壊の研究』、刀山書房、（東京都、1996 年）、155 ページ
[227]戚嘉林『台灣史』第四冊、農学社、（台北、1998 年）、1612 ページ
[228]呉文星『治時期台灣的社會領導階層』、五南図書、（台北、2008 年）、 307 ページ

師範学校の 2 種類の体系での設立が含まれる。公学校については、1898 年 7 月 28 日総督府が台湾公学校令を公布し、その附則に「国語学校付属学校および国語伝習所の設備は全て公学校に譲与する」と規定され[229]、澎湖島、恒春、台東の 3 ヵ所の伝習所と 4 ヵ所の分教場を除き、各地の国語伝習所はみな公学校へと転身した。師範学校については、1899 年 3 月に「台湾総督府師範学校官制」が公布され、師範学校は国語伝習所および公学校の台湾籍教師の養成を主とすると規定された。このほか 1896 年には「書房義塾に関する規程」もあり、書房は日本語を順次加えることと規定し、書房を公学教育の補助機関と位置づけた。したがって公学校、書房、師範学校を日本語普及の主要機関とし、「国語普及」教育政策が正式に確立したのである[230]。

1930 年代前後から台湾総督府の諸項目における教育措置からは、数々の準皇民化政策が見てとれる。例えば、1928 年総督府および各地方州庁は社会教育股の設置を始めて社会教育作業の強化を準備し、その重点を日本語の普及に置いた。そして日本国民精神、公民精神の修養と情操教育、また同時に職業に関連する技能訓練と身体の鍛錬を行ったのである。日本語普及について言えば、1931 年総督府は〈公立特殊教育施設規則〉を制定し、国語講習所制度を確立し、経費の補助も行ったことで、国語講習所の生徒数は激増し、1935 年には修業 1～4 年の国語講習所が 1600 ヵ所あまりとなり、修了者数は 10 万人を越えた。その他にも修業年 3～6 ヶ月の短期簡易国語講習所は 750 ヵ所あり、修了者数は 3 万 1000 人を超えている。台湾人の比率から言うと、当時の台湾同胞人口約 480 万人のうち日本語の分かる者はおよそ 140 万人余りで、約 29%を占めている。そして 1933 年、総督府は 10 年内の日本語習得者数の比率目標を 50%に定めている。このほか、1930 年前後には台湾各地で相次いで男女青年団、青年教習所、公民講習所および少年団などの社会教育団体が設立され、皇国精神の植え付け強化を行った。1934 年には台湾教化団体聯合合会が設立、島全体の教化団体の統制機関とした。この状況の下、各地の神社、部落振興会、教化委員、部落集会所、保護者会、主婦会、一般教養の社会教化施設など、いずれも激増の傾向を呈した。1935 年末には「国民精神振興運動」の提唱が行われた[231]。

異文化の言語同化政策の下、漢文は未だ禁止されてはいないものの、台湾は漢文で文学作品を創作しすでに異文化の理解と共生という現象を生み出していた。皇民化期以前の台湾文学における使用言語の異文化への転化現象は、最初に現れたのが台湾語と漢文を混在して用いるという状況であった。日本統治時代の台湾新文学運動では、支持者が漢字を台湾語の表音記号とすることを主張したものの、実際の結果として「純」台湾話文の小説は多くなく、最もよくあるものは漢文小説の中に台湾語を混在させたものであった。例えば、頼和の『帰家』では、その作中に生き生きとした会話がある。

「一個囝仔要去口食日本頭路、不是央三託四抬身抬勢、那容易；自然是無有我們這様人的份額、
在家裏幾時用著日本話、只有等待巡査来対戸口的時候、用牠一半句。」

---

[229]『台湾教育沿革誌』上、224 ページ
[230]Tsurumi、林正芳訳『日治時期台湾教育史』、仰山文教基金会、(宜蘭、1999 年)、25 ページ
[231]井出季和太『台灣治績志』、台湾日々新報、(台北、1937 年)、952－965 ページ

（「一人の子供を日本の職につかせるなら、あちこち頼み込まなくても簡単だ。もともと私たちのような者には機会がない、家の中ではほとんど日本語を使わない、巡査が戸籍調査に来たとき一言二言使うだけだ」）

「你想錯去了、」我想要詳細説明給他聴、「不但如此、六年学校台湾字一字不識、要写信就著去央別人。」売麦芽羹的又搶著去証明進学校的無路用。

（「それは違うよ」私は彼に詳しく説明してやった、「そればかりじゃない、6年間学校に行っても台湾の文字一字としてわからない、手紙を書くのも人に頼まなければいけない」飴湯売りは学校に行っても無駄だとたたみかけた。

「学校不是単単学講話、識字、也要涵養国民性、……」

（「学校はただ講和を聞いて、字を覚えるだけじゃなくて、国民性を養わなければ、……」）

「巡査！」不知由什麼人発出這一声警告、他両人把担子挑起就走、談話也自然終結 232。

（「巡査！」誰が発したのかわからないこの警告で、彼ら 2 人は天秤を担いで去り、話も自然と終わった。

ここでは「頭路」、「無路用」などの台湾語の語彙があるばかりか、すでに日常語となっている「国民性」、「巡査」などの外来語もあり、これは台湾社会全体に殖民者の異文化が侵入してきたための産物であり、同時にこれも殖民地の言語環境における必然的な反映なのである。賴和の小説における表現方法は、台湾話文に呼応したものばかりでなく、現地が共感する書き方でもあった。最初に発表した『一桿「称仔」』を例に挙げる。その中では、

有一個較有年紀的説：「該死的東西、到市上來、只這規紀亦就不懂？要做什麼生意？汝説幾斤幾両、難道牠的銭汝敢拿嗎？」

（ある少し年のとった者が、「くそったれ、市場にいてこんな規則も分からないのか。なんていう商売をしてるんだ。何斤何両といって、お前があいつらから金をとれる気でいるのか？」）

「難道我們的東西、該白送給他的嗎？」参不平地回答。

（「まさか俺らのものをただでくれてやるって言うのか？」不満そうに答えた。）

「唉！汝不暁得他的厲害、汝還未嘗到他、青草膏的滋味。」那有年紀的嘲笑地説[233]。

---

[232]賴和「歸家」、『南音』、創刊号、(1932 年 1 月 1 日)

（「ああ！お前はあいつらの凄さが分からないんだ、お前はまだ奴らに煮え湯を飲まされたことがないんだな。」年寄りはせせら笑いながら言った」。）

『一桿「称仔」』は白話文の小説だが、上段に引用した文には「規紀」、「白送」、「青草膏」などの台湾語の語彙がなおも残っており、これは普段台湾語を話す頼和にとって、この上なく自然な書き方である。このほか、漢文小説に台湾語が混じり合った状態というのは、朱点人の『島都』を例にあげることができる。

「なぜ金を払わないんだ？神様は皆を加護されている……」

「神様？これまで加護を受けたことなどない、もう神に守ってもらわなくて結構だ……」

「これは真剣な話だ、誰がお前の冗談を聞く暇があるんだ、出すのか？」あの頭兄（少し年齢が上の者に対する呼び方）は突然怒り出した。

「出さないよ、だからどうだっていうんだ？」蓁も少し腹を立て、頭兄の体面を顧みない。

「出さない？よし！じゃあお前はここに住み続けられるかな？」

「馬鹿馬鹿しい、家賃を滞らせたことはないんだ、誰が追っ払えるっていうんだ？」

「いいだろう、みてろよ！」頭兄は憤慨して先に出て行った。

「気でも狂ったのか？蓁兄！」書記は二人の顔色が変わるのを見ていた[234]。

上段の引用文をみると、これらの台湾語の語彙を使用することで、小説の登場人物（頭兄、書記、主人公の史蓁）の会話に広がりをもたせるだけでなく、現地が共感を示す展開を作り出してもいる。再び頼和の作品『惹事』の中の一段落を例に見てみる。

皆知らなければならない、このニワトリ達はこの部落の安寧秩序を維持し、この地域の人々の幸福を守っている。あの役所の中の大人（ダーレン、地位の高い人の意味、ここでは日本人を指す）に飼われているものだ。「拍狗也須看著主人（犬を叩くにも飼い主の顔色を窺わなくてはならない）」、このような関係だから、このニワトリ達は特に人々から畏怖されている。役所はこの街道沿いにあり、続いて畑で、畑の中の道を抜けると、役所の横である。道端には、衙門の壁の向かいには草のボロ小屋が一軒あり、貧しい一家が暮らしている。中年の寡婦が一人と幼い男の子と女の子がおり、寡婦は洗濯と繕いものの仕事に

[233]頼和「一桿（稱仔）」、『台灣民報』、92.93 号、（1926 年 2 月 14 日、21 日）
[234]朱點人「島都」、『台湾新民報』、400-403 号、（1932 年 1 月 30 日、2 月 6 日、2 月 13 日、2 月 20 日）

よって、幸福の神に見捨てられた自らの子供らを養っている[235]。

上の文の「厝」、「拍狗也須看著主人」等の台湾語の語彙やことわざなどから、台湾の新文学運動下の作品は多かれ少なかれ台湾話文の語彙を混在させているということが分かる。

台湾語のほか、日本という異文化の下の日本語も台湾新文学の作品の中に登場する。そのうち、陳虚谷の小説『放炮』で、一つの家族が盛大な台湾料理を堪能した後、子供が母親にサイダーをねだる場面がある。

彼は時々カーチャン！と叫び、またサイダー、サイダー。とつぶやいている。

ウンコしたいの？抱っこしておろしてあげる。老牛は言いながら手を伸ばし彼を抱きかかえた。大人と奥サンはみなハハハと笑い、子供は体を揺すりながら「イヤーイヤー！バカ！チンコロ！」と言い声を上げて泣き出した[236]。

この場面において、日本語の分からない老牛は、「サイダー（汽水）」を「放屎（大便をすること）」と聞き間違え、日本語の「サイダー（saidä）」と台湾語の「糞（sai）」という同じ音でもって日本人を面白がらせた。続いて、子供が老牛に泣きながら悪態をつく場面「イヤーイヤー！バカ！チンコロ！（討厭討厭！笨蛋！清國奴！）」の、「チンコロ」は、一般的には「チャンコロ（chankoro）」と言われ、「清国人」「清国佬」の北京語の発音「qingguoren」「qingguolao」の日本語における外来語としての言い方であり、戦前における日本人の中国人に対する蔑称である。引用文に見られる西洋の飲料「サイダー」は、高い身分階級を象徴しており、最も不潔な人体の排泄物である「糞（sai）」との間で偶然にも発音が似通っている。作者である陳虚谷は、この異なる言語間における偶然にも類似した発音を利用して、殖民者の異なる文明を覆す論述の方法としている[237]。

続いて、呂赫若の日本語の小説『牛車』を例に、殖民地である台湾の言語の混在について考察していく。『牛車』は、1935 年に日本の雑誌『文学評論』に掲載された。小説中に、楊添丁が牛車に乗りながら居眠りをして日本人の警官に捕えられる場面がある。

彼の目の前には、大人が恐ろしい表情で立ちながらこちらを睨みつけている。

「喂！幹你老母！（「こらッ。カンニンラウブ！」）」

大人の屈強な腕が振りかざされるのを目にしたかと思うと、彼の頬にはすぐさま平手打ちが飛んできた。

---

[235]賴和「惹事」、『南音』、1 巻 2 号、1 巻 6 号、1 巻 9 号、10 共同刊号、（1932 年 1 月 17 日 4 月 2 日、7 月 25 日）
[236]一村は陳虚谷のペンネーム、「放炮」（上）『臺灣新民報』336 号、1930 年 10 月 25 日、10 ページ
[237]一村は陳虚谷のペンネームである。
（上）『臺灣新民報』336 号（1930 年 10 月 25 日）
（中）『臺灣新民報』337 号（1930 年 11 月 1 日）
（下）『臺灣新民報』338 号（1930 年 11 月 8 日）

顔に焼け付くような痛みが走り、楊添丁はわなわなと震えだした。

「お前は車に乗ってはいけないのを知らないのか？」大人は顔を真っ赤にしながら怒鳴った。

「嗯、我……（「え、俺は-」）」どう言えばよいか分からず口ごもり、楊添丁の頬に再びパシッと音が響いた。

「この牛車はお前のか？」大人はポケットからノートと鉛筆を取りだし、しゃがみこんですぐさま牛車の番号標を書き写した。

「大、大人。一回、赦す、よろしい-」楊添丁は泣きながら大人の方を向き、拱手（胸の前で片手を握りもう片方で包みこむこと）して、お辞儀をした。

彼は番号標を書き写された後にどのような処罰を受けることになるのか、全く分からなかった。

「幹你老母！清國奴！（「カンニンラウブ、チャンコロ奴」）」

大人はノートと鉛筆をしまうと、拱手をしてお辞儀をする楊添丁を見下ろし、きつい罵声を浴びせた後、自転車にまたがって去っていった。

「啊！運氣真不好！該怎麼辦？（「あ、運が悪い。どうしようか！」）」

大人が去って行くのを目で見送った後、処罰の事が楊添丁の心に湧き上がり、心配でどうすればよいのかわからなかった[238]。

引用の会話の中で「大人」は、「カンニンラウブ（幹你老母）」と「チャンコロ奴（清國奴）」という 2 つの言葉を用いて台湾人である楊添丁を罵っているが、ここには非常に強烈な民族差別の意味を含んでいる。「カンニンラウブ」は台湾語の罵り言葉である「幹你老母（お前のかあちゃんを犯すぞ）」の日本読みで、北京語の訛った「チャンコロ」、「チャンコロ奴」も同じく日本人殖民者が最もよく使った台湾人を罵倒する言葉である。日本語のカタカナでもってその音を表した「カンニンラウブ」は、日本語の翻訳をつけず小説の日本語文にそのまま登場させた時、日本人警官の民族と殖民地という面における優位な立場は、この言葉が台湾語の下品な言葉の模倣であるに留まらず、民族的差別の意味合いを具えた権力的な言葉として翻訳される。さらに述べれば、「幹你老母」は現地における罵り言葉で、本来は台湾人の立ち遅れた文化の現れでもあるが、しかしこの『牛車』

[238]呂赫若「牛車」、『文學評論』、2 巻 1 号、132-133 ページ、呂赫若著、林至潔訳「牛車」、『呂赫若小説全集』中訳、81-82 ページ

の中では体罰を加えつつ日本人警官の口から発せられる「カンニンラウブ」が、ある異文化が殖民地においた暴力を明るみに出している。

それに対して、取り締まられた台湾人楊添丁は恐れおののき口ごもってしまい、立て続けに平手打ちを受けた後、ただ一言出てくる助詞を欠いたとぎれとぎれの日本語が「大、大人。一回、赦す、よろしい-」である。これは小説の中で彼が唯一実際に日本語を使用した場面で、そのほかの台湾人との会話では、いずれも台湾語を日本語に翻訳した過程を経ており、楊添丁が日本人警官に対面した際の「え、俺は-」と「大、大人。一回、赦す、よろしい-」という、この二言のみが翻訳されておらず、そのまま「本来の音を重視した」日本語の台詞として用いられている。日本人警官が立ち去った後、楊添丁の独り言「あ、運が悪い。どうしようか！」は日本語小説の中では実際は台湾語での発話であり、日本語小説であるために日本語に翻訳しているだけのものである。ここに至り、台湾新文学における言語の変化に、また別の、さらに複雑な異文化の理解と共生という現象が現れたのであった。

日本統治時代、日本という異文化の殖民統治によって、台湾における新文学運動の登場が促され、また文学表現にとって最も重要な言葉についても、異文化による政治によって同化が刺激された。これにより、漢文文学作品中において台湾語と日本語が混在するという言語の転化現象が現れた。しかしながら、このような現象は政治による皇民化政策、すなわち漢文の禁止により、再び台湾文学を新しい刺激に対応させることとなり、そのため皇民文学の異文化に対する理解と再生が生じた。

漢文の禁止については、台湾総督府が紙一枚でもってすぐさま廃止したものではなく、段階的な過程を踏んで行ったという経緯がある。1937（昭和 12）年 4 月 1 日発行の『台湾時報』第 209 号に掲載された「島内各事情」という欄に、「漢文欄の廃止」に関する報道がある。

> 「島内新聞の漢文欄の廃止」島内の日刊新聞の漢文欄（東台湾新報には当欄なし）は、台日、台湾、台南の 3 紙は 4 月 1 日に廃止、新民報は 4 月 1 日に半分に縮小し 6 月 1 日には全廃とする。この度新聞社は、以下の新聞に対し時勢の流れを考慮して各自漢文欄廃止の協定を結ぶよう通告した。その理由としては、日本による統治も既に 40 年余りとなり皇民化も普及し、文学運動も次第に盛り上がりを見せる今日の台湾において、漢文欄を全面廃止しても差し支えないためと判断したためである。漢文欄の廃止日については、台湾日日新報、台湾新聞、台南新報など 3 社は 4 月 1 日から廃止、台湾新民報は現在の漢文欄 4 ページを 4 月 1 日から半分に縮小させ、6 月 1 日からは全廃とする。その後、日本語欄を拡張し先述の漢文欄と入れ替え、充実した内容でもって報道機関としての使命を貫徹し、また一層の努力を期待する。また読者の皆様にはご容赦およびご理解を賜りたい。昭和 12 年 3 月 1 日[239]

[239]中島利郎著、彭萱訳「日治時期台灣研究的問題點－根據台灣總督府的漢文禁止以及日本統治末期的台語禁止為例」、『文学台湾』、46 期、(2004 年 4 月)、300-301 ページ

以上の「新聞社通告」は、同年5月1日の『台湾時報』第210号に「日刊漢文欄廃止に関する総督談」として掲載された。

> （前略）本来紙面の４分の１、ひいては２分の１を占めていた漢文欄、さらに適当な言い方としては台湾語欄というべきであるが、それに対し内地の言葉と文章による報道を一層拡張させることは、どれも自らの本島統治方針である「本島完全に日本の一部分とする」という立場からすれば、拍手でもって祝福すべきところである。（中略）総じて言えば、日本語、日本語の文章の普及は、総督府の伝統的な政策であると共に、これが真の同化をもたらすと深く信じている。また政策の実現を確信しており、精神面、物質面いずれにおいても本島人民の幸福となるであろう。この度の新聞社による漢文欄の廃止は日本語、日本語の文章の普及化が加速した現れである。総督府の立場からは、もちろんこの機会に官公署内等での日本語常用に力を入れ、ひいては広く民間へ協力を呼びかける[240]。

以上の2つの文章から確認できるのは、1937年の「漢文欄の廃止」ならびに総督府公布の単なる紙一枚の法令による即時実行ではない、当時の各新聞社による「自主」的な決定であったということである。そのため、1936年には「日本語普及」および「国防思想の普及」という目的を達成するため、当時の中川健藏総督と軍官民の権威らで「民風作興協議会」を組織した。この協議会は軍参謀長と総督府文教局による主導で、『台湾日日新報』、『台湾新聞』、『台南新報』等の日系資本の3大新聞社が加わったのであるが、台湾人が創設した『台湾新民報』は除外されており、同協議会の賛成によって漢文欄の廃止が決議されると共に同意宣言が発表された。このため1937年3月1日『台湾日日新報』に「中国語欄の廃止に関する/島内4社の日刊新聞の合意決定」の連合広告が掲載され、『台湾新聞』、『台南新報』、『台湾日日新報』は4月1日より漢文欄の全廃が発表された。また当時の雑誌、新聞などはどれも「台湾新聞紙令」、「台湾出版規則」の規制を受けており、出版物の事前審査には警務局保安課があたっていたため、その他の日報、雑誌は自ずと歩調を合わせるほかなく、これにより『台湾新民報』は4月1日から漢文欄を半分に縮小し、6月1日には全廃したのである[241]。

漢文欄の廃止と公学校漢文科の完全廃止は、いずれも1937年4月に実施されている。台湾総督府が日本語のみをよしとする同化政策を徹底し、皇民化という最終目的を達成するがための結果とみることができる。異なる点は、公学校の漢文科の廃止は政府の命令により実施されているが、漢文欄の廃止は政府側の強制誘導と、新聞社が自ら廃止を進めるという方法で実施されたことである。このような方法は開かれた政府であるという偽りのイメージを生み、同時に統治当局は管理・運用にさらなる柔軟性を得ることとなり、これが『台湾新民報』漢文文芸欄の没落の原因となった。その他比較的差し障りのない

---

[240]「關於日刊漢文欄廢止之總督談」、『台灣時報』、210 号、「(國語普及紙面刷新紀念號)」、1937年4月1日

[241]河原功著　松尾直太訳「1937 年台湾文化、台湾新文學狀況―圍繞著廢止漢文欄與禁止中文創作的諸問題」、(台湾文學史書寫)、國際学術研討会論文、成功大學、(臺南、2002年)、8－14ページ

中国語の通俗文芸誌や通俗小説である『台湾新文学』、『風月報』、『大地之春』等に至っては、漢文を使用し続けたものの、台湾の漢文文学の発展は既に打撃を受けて次第に失速しており、それに替わって日本語の文によって創作された作品が生まれ、同時に皇民文学の登場をもたらした。

皇民文学の登場以前、台湾文壇における漢文の使用状況は、『台湾新民報』を除いたその他台湾の通俗文芸誌や通俗小説は漢文欄の廃止の流れに伴って、1937 年にはいずれも次々と停刊の運命をたどっている。前に触れた台湾新文学後期の 2 つの雑誌『台湾文芸』と『台湾新文学』について、『台湾新文学』の創刊当時、『台湾文芸』と相当な物議を醸したことがあった。つまり、楊逵がもともと『台湾文芸』の日本語編集をしていた際、藍紅緑（陳春麟）の小説『邁向紳士之道』の掲載問題で、編集長である張星建との間に大きないさかいが生じたことである。その原因は両者のイデオロギーの衝突で、楊逵は社会主義思想を持ち、写実主義をもって台湾の歴史と現実の描写に徹底していたことからこの掲載を主張したが、張星建は強く反対した。なぜなら『台湾文芸』はすでに純文芸の傾向を呈しており、同時に内容の希薄な美辞麗句を並べたような戯れの文章が多く見られていたからである。したがってこの確執は両者が台湾新文学運動に対する理想と文芸の大衆化という道の見解の相違から引き起こされたもので、最後には張星建の意見が優勢を占めたが、楊逵は雑誌の路線に対する不満を抱き、最終的に楊逵が台湾文芸連盟を離れ、自ら『台湾新文学』を創設することとなった。

1935 年、楊逵、葉陶夫妻が『台湾新文学』を創設し、楊逵が『台湾文芸』を離れる原因となった小説『邁向紳士之道』は、楊逵の主張の下で『台湾新文学』に掲載されると非常に好評を得た。これが文壇人らに『台湾文芸』の選考基準に対する疑問を抱かせ、同時に楊逵の観点と文学理念の更なる肯定につながった。『台湾新文学』は編集方針において、漢文創作、民間文学の重視、郷土的色合いの鼓吹、芸術の大衆化を実践することを提唱し続け、台湾の貧苦の民衆の生活実態を反映することに基づき、濃厚な社会主義傾向の外に、強烈な民族意識を有した。例えば李献璋編著による『台湾民間文学集』に積極的に協力するなど、いずれも異民族による殖民統治の下で『台湾新文学』が民族文化の保存に対して重視していたことが見て取れる。執筆者においては『台湾新文学』発刊後多くの著名な作家、例えば賴和、周定山、楊守愚、郭秋生、廖育文、王詩琅、朱点人らは、いずれも『台湾新文学』のみを選んで執筆し、『台湾文芸』に対する消極的なボイコットを示した。ここから文壇人らの両誌に対する評価がよくわかる。このほか『台湾新文学』は、新人作家の抜擢を特に重視し、そこで行われた「懸賞原稿募集」は最も大きな公募文学賞であり、応募資格は新人作家に限られた。ここで発掘された作家呉濁流は、彼自身小説家になろうとは考えもしなかったが、処女作である『水月』が思いがけず『台湾新文学』に掲載され、もう一篇の小説『泥沼中的金鯉魚』も『台湾新文学』の公募文学賞に入選したため、これらが大きな奮起する力となった、と第二次世界大戦後に語っている[242]。

『台湾新文学』は創刊後、『台湾文芸』と一種の競争状況に置かれたが、『台湾文芸』は台湾文芸連

[242]陳芳明「臺灣新文學史（5）「三〇年代的文學社團與作家風格」、『聯合文學』、184 期、（台北、2000 年 2 月）、154-163 ページ

盟の機関誌で、文芸連盟には問題が数々あったことと、それに加えて『台湾新文学』出版の打撃を受けたことにより、同誌は1936年8月に停刊となった。一方『台湾新文学』は1936年12月、「漢文創作特集」を出版しようとして総督府に禁止された。日本政府の言論規制の強化がはっきりとわかるようになり、1937年4月、台湾の各新聞雑誌の「漢文欄」の廃止と、盧溝橋事件直前の殺伐とした雰囲気の中、遂に『台湾新文学』も6月に廃刊に追い込まれ、台湾文壇の漢文創作はここよりほぼ一旦停止という状態となった。

台湾文壇が一時期沈黙し、1939年になって台湾在住の日本人作家である西川満、濱田隼雄、中山侑らが集まり「台湾詩人協会」を結成し、台湾人作家の楊雲萍、龍瑛宗らも会員として、同協会はその後一度「華麗島」という名の雑誌を発行している。同年12月に協会は「台湾文芸協会」と改め、さらに多くの台湾人作家の参加を募り、邱永漢、張文環、藍蔭鼎、龍瑛宗、周金波ら台日作家は合計62人となった。1940年「台湾文芸協会」の機関誌『文芸台湾』が創刊され、日本人作家の西川満が編集長兼発行人となった。

しかしその後大政翼賛会が結成され、「地方文化の振興」の理念が示された。地方文化に対する認識の違いは、「台湾文芸協会」会員らの意見の食い違いを生み、1941年5月、張文環、黄得時ら西川満の考えに不満を持つ作家らが協会を離れて別に「啓文社」を設立し、並びに雑誌『台湾文学』を発行した。これは『台湾文芸』に対抗したいという意図があった。『台湾文学』発起人である黄得時はこの両誌に対してこのような評論をしている。

> この2つの雑誌はどちらも台湾を代表する文芸雑誌であるが、両者にはそれぞれ異なる特徴がある。『文芸台湾』の仲間の内約7割が日本人で、同人同士の発展向上を目標として掲げているが、反対に『台湾文学』の仲間の多くは本島人で、本島全般の文化向上と新人養成のために惜しみなく紙面を提供し、真の文学道場となることを意としている。前者は編集において過度に美を追求しているため趣味性が強くなり、非常に美しいようではあるが現実の生活からは逸脱し、一部の人からは見向きもされない。それに反し『台湾文学』は徹頭徹尾、写実主義に徹しているため、非常に野生的で、「気迫」と「強靭さ」に溢れている[243]。

黄得時のこの評論は、『台湾文学』創刊の由来をはっきりと説明しており、『文芸台湾』のように異国情緒ある美感を重視するのではなく、執筆活動が積極的に台湾文化を発掘することを期待し、写実の精神を重視している。葉石濤は『台湾文学史綱』の中でこの両雑誌の特徴に対し、詳細な説明をしている。

> 『文芸台湾』は外地の文学傾向である異国情緒（exoticism）を持ち味とした日本人の文学雑

[243]黄得時「輓近的台湾文学運動史」、『台湾文学』、2期4号、1942年10月、9ページ

誌で、殖民者のイデオロギーを表しており、台湾民衆の現実生活には全く関心がない。その作品は自ずとどれも現実から遊離した産物となってしまう[244]。

『台湾文学』は一部に日本人作家も参加してはいるものの、ほとんどが台湾新文学運動の反日民族解放運動の精神を継承しており、台湾民衆の殖民者による皇民化運動の下での苦悩と抵抗を反映し、同時に戦時中の台湾民衆の苦難の日々を浮き彫りにしようとしている。

2 つの刊行物はこのように自らの理念を持ちつつ互いに牽制し合い、1943 年皇民化運動が盛り上がりを見せている時期、7 月初めに『文芸台湾』は 55 ページという大紙面に陳火泉の『道』全文を掲載し、西川満らはこれを「皇民文学」の代表作として看板を掲げたのである。対して月末には『台湾文学』が負けじと 26 ページに王昶雄の『奔流』を全文掲載した。これは『奔流』と『道』を故意に対比させることで、皇民化運動下の民族意識と抗議精神を際立たせた。ここから皇民文学作品が登場し始めた。

全体的には、皇民化運動により中国語の使用が廃止され、日本語普及の強行と中国語文章、雑誌などの禁止といった政策により、当時の台湾人を徐々に中国語から離していった。当時の知識人たちにとっては日本語が母語となり、日本語の習熟度も中国語をはるかに上回ったことにより、日本語を使用した創作活動は当然のことのようになった。さらに日本による、日本語を用いての読み・書き・聞き・話すの使用を強力に推進されるに伴い、また厳格かつ迅速な皇民化運動によって、戦時体制下において、如何なる文学スタイルや、発刊理念も殖民統治下の政治力における異文化政策の影響を受けざるを得ず、一部台湾の作家らは日本の政策に踊らされ、異文化の皇民文学が出現したのである。

第二節 皇民文学の論争

台湾文学は異文化の殖民統治を受け、1920 年代より始まった啓蒙運動に伴い、新旧文学論争や、台湾話文論争および郷土文学論争などの台湾新文学運動が現れた。この運動は日本の異文化による殖民統治への理解と共生を示すものでもある。しかしながら、台湾の新文学運動は 1937 年に、日本殖民統治者が政治統治を強化するため皇民化政策を実施し、それと同時に漢文の使用を廃止したことで、台湾文壇の漢文創作活動を一旦中断し停滞させることになった。この新しい皇民化という異文化の政治力の下で、いわゆる皇民文学が現れたものの、台湾文人は日本の異文化言語を利用し、台湾文化の主体性の保存を試みた。これによって新しい台湾文学の風貌が生み出され、皇民文学と台湾本土思想文学の間でしのぎ合いが生じ、皇民化期の異文化における台湾文学の発展を促した。

皇民文学という名詞が現れるまでは、台湾文学界は皇民化政策の下で、皇民文学と台湾本土文学という 2 つに発展していった。しかし、皇民化期の台湾において異なる発展を遂げた文学を検討する前に、

[244]葉石濤『台灣文學史綱』、文学界雑誌社、(1998 年)、61 ページ。

何をもって「皇民文学」とするかを考察しなければならない。「皇民文学」という言葉が登場したのは1943年5月であり、西川満が、『文芸台湾』6巻1号に掲載された「文芸時評」の文中で、初めて「皇国文学」を謳い、そこから6巻2号において「皇民文学」という言葉が続いて使われるようになった。さらに1943年7月『文芸台湾』6巻3号に陳火泉の『道』が掲載された時、濱田隼雄がこれを選出した理由について、この作品はこれまでの台湾文学にはない、台湾独自の「皇民文学」であり、また新台湾文学の誕生を予見できると褒め称えている。濱田隼雄の認める皇民文学が持つべき内容と精神は、その説明文の中から見ることが出来る。

> これまでの台湾文学の中で、これほど深く感動した作品は未だかつてない。……皇民となることの心からの熱意を、このように強烈で明白に描写した作品があるだろうか。皇民となる過程における苦悩をこれほど痛切に説いた作品があるだろうか。さらには、これほど自我の中における苦悩との戦いの過程を、これほど明白に現した作品があるだろうか。この道は日本へ続く道だ。……これは確かに、これまでの台湾文学にはなかった作品である。つまり現在の台湾ならではの皇民文学だ。この作品からは新しい台湾文学が予見でき、またそういう意味においてもこの作品は非常に意義深い、すばらしい作品であると考える[245]。

濱田隼雄が認める皇民文学作品の特徴は、台湾人が皇民となる道を強く追求する情景を描写し、その過程における苦悩や甘んじない心を映し出していることである。このような文章であってはじめて「皇民文学」という名誉が称えられる。同年9月『文芸台湾』に掲載された「文芸台湾賞」の広告の内容は次のようなものであった。

> 本社は昭和16年に率先して本賞を設け、本島の文学者が奮起されることを期待し、文学において臣道を実践し、台湾に皇民文学を樹立されることを希望する[246]。

このような文学賞による宣伝方法は、皇民文学を創作する風潮を作りたいという、まさに日本殖民政府の意図を示している。上記の皇民文学という言葉の定義から、後にいわゆる「皇民文学」の作品として括られるものを全体的に見わたすと、皇民文学が指す内容、テーマあるいは思想上の特徴を次のように指摘できる。

(1) 皇民となり、日本国民の心となる道のりを描写した作品。
(2) 従軍志願や戦争勝利の賞賛、予祝を描写する作品。
(3) 南進、増産、団結、日華親善などの積極的な意識を描写する作品。

先に述べた皇民文学の定義は、日本統治時代の殖民地統治者の立場から見れば、もう少し早く提唱されるべきであったものの、戦争末期には日本人から頻繁に唱導され、また「賞賛」の意味を帯びるもの

---

[245]濱田隼雄「小説〈道〉」、『文芸台湾』、6巻3号、1943年8月、142ページ
[246]「文芸台湾賞」の広告、『文芸台湾』、6巻4号、1943年8月

となった。しかしその後は、「皇民文学」という言葉が指す作品は、主に台湾の立場から見て、殖民戦争と皇民化運動に協力する者の作品に対する「蔑視」の意味を含むようになった。このように皇民文学の見解は、文化の立場が異なれば天と地の差があることが分かる。

この「皇民文学」という言葉が生まれる前の、最古の皇民文学とされる作品は周金波の『水癌』である。『水癌』は1941年『文芸台湾』第2巻第1期に発表された小説であるが、台湾に帰省した時、水癌をひどく患った娘を顧みず、相変わらず賭博に没頭する母親への憤怒から、物語が構築されている。物語の主人公である「彼」は日本留学から台湾へ帰り開業した台湾の歯科医で、上記の場面に遭遇し、島民を教育することを心に誓った。というのも「あのような女の身の上に流れる血は、私の体の中にも流れている。見過ごすことはならない、私の血もきれいに洗わなければならない」ため、自分は「普通の医者」をするだけでなく、「同胞の心の病の医者」になるのがさらに重要な任務であると考えるようになった。この小説の中で周金波は「庶民階級」に属し、「教養のない」母親を贅沢で無知で低劣な、道徳、精神レベルの向上が必要とされる、故郷台湾の象徴としており、一方で「畳での生活」、「日本婦人の母性愛」、「子供の生死に関心を持つ歯科医」を教養のある、上品な、道徳水準の高い日本文化と位置づけている。

また「彼」は、故郷台湾が直面し続ける問題に対し、現実的ではない解決方法を思い描いたが、「皇民錬成」運動が加速し、勢いよく推し進められたときに、「彼」は最後には「島民は教育感化することができる、しかも、それは予想以上に簡単に、すばやく成し得るだろう」と信じるようになった[247]。

周金波は日本の視点で台湾をとらえる時、日本より立ち遅れた情景を映し出しているが、その際の周金波の意識の中での「皇民錬成」運動で必要なのは「迷信の撲滅」と「悪習の打破」に限られているが、『文芸台湾』第2巻6期で発表された『志願兵』においては、さらに高いレベルの賛同と精神面の問題へと発展させている。

周金波の『志願兵』は西川満の指導のもとで書かれたものである。物語の主人公は日本留学から帰ってきた「私」と、「私」の義理の弟「張明貴」、そして日本人食品店で働いているため流暢な日本語を話す「高進六」の3人である。物語は「私」が基隆港へ「先進的」な内地日本へ留学して、殖民地当局が推進する「改姓名」と「志願兵制度」に心躍らせ、奮い立って台湾へ戻り親戚を尋ねる「明貴」から始まる。日本で教育を受けた彼は期待があまりに高く、台湾に帰省後、「旧態依然」である台湾を目の当たりにして肩を落とす。彼の言う「進歩」の判断基準は「進六」が強調する建物や広場などの物質、インフラ環境の改善ではなく、主に精神面での改革であった。

物語の主な焦点は、「明貴」と「進六」の間で生じる食い違いである。お互い「日本人になる」ことに対して異議はないが、「如何にして」日本人になるかという点において、その方法論への意見が異なった。「進六」の参加する「報国青年隊」は「神がかり」を選ぶが、「明貴」は青年隊の「拍手の儀式」

---

[247]周金波「水癌」、『文芸台湾』、第2巻1号、(1941年3月)

と「皇民錬成」運動との関係に疑問を投げかける。それに対し「進六」は、「拍手を打つことは、神々により導かれ神々に近づくことだ。至誠神明への祈祷は神人一致の境地に達することを願い、古代の祭りはこの神人一致の理念で、祭典はここから始まったものだ。祭政一致は皇道政治の根源なのだ。……柏手の儀式によって大和魂に触れることができ……、この体験はかつての台湾青年には希うべくもない尊い経験だ。柏手を打つことによって一種の信念が生まれる、信念の問題なのだ。立派な日本人になるための信念だ」と説明する[248]。しかし「明貴」は「進六」の考えに賛同しない。また「明貴」は「進六」の「日本精神」に対する考えにも反論する。「日本精神の注入は君が考えているみたいに神がかりなものではない。日本人なら僕も君もおそらく日本の教育を受けた者なら誰もがなり得るはずだ……。日本人になることがそんなに難しいことなのか、僕にはそう難しいこととは思えない。皇居の二重橋前に額づいてあの厳粛さに感激できればそれで充分じゃないか。靖国神社に額づいて、あのどうにもできない感激が出来ればそれで日本人じゃないか」[249]。

「明貴」が「なにゆえに」日本人になるのかという問題に対して、彼の説明は、「なぜ日本人にならねばならぬか。それを僕はまず考える。僕は日本に生まれた。僕は日本の教育で大きくなった。僕は日本語以外は話せない、僕は日本の仮名文字を使わなければ手紙が書けない。だから日本人にならなければ僕は生きようがない」である。反して「神がかり」の「進六」は、「如何にして」日本人になるかについては、非理性的精神を発揮し、「血書志願」を立てその場ですぐに「皇軍」となることだと主張する。「進六」という庶民階級が見せた莫大なエネルギーは、内地日本人との垣根を越えるばかりか、本島台湾資産階級知識人（例えば「明貴」のような）との距離も越えた。そのため物語の最後に「明貴」は「私」に向かって「進六にあやまってきた。負けてきた。進六こそ台湾のために台湾を動かす人間だ。僕はやはり無力な、台湾のためにはなんにもならない人間だ。頭でっかちだ」。と言っている[250]。

この小説『志願兵』は周金波が長い間日本人になりたいと思いながらも、完全にはなりきれなかった苦悩をかかえて完成させた作品である。この小説から、周金波は「精神」を昂揚させる必要性を十分に悟り、自分の中の矛盾を克服し、日本人から受ける差別や侮辱から解き放たれる新しい道を開いたことがわかる。

周金波の作品に示される「皇民文学」という言葉が現れる前にも、皇民文学の作品は存在していた。これは異文化政治力の皇民化政策に対する理解を示すものであったが、一方で、台湾本土文学も皇民化政策の下で生存の道を求めた。このような台湾本土の作者として楊逵を挙げることができる。

楊逵は先に述べた『台湾新文学』の創刊者で、『台湾新文学』が停刊となった1937年、『模範村』を執筆したが日中戦争の勃発によって、日本が言論統制を行ったために掲載禁止となった。その後、日台文人との間のやりとりが断絶したことはなかったものの、1942年になり三幕からなる戯曲、『父と子』

---

[248]周金波「志願兵」、『文芸台湾』、第2巻6号、(1941年9月)、8-21ページ
[249]周金波「志願兵」、『文芸台湾』、第2巻第6号、1941年9月、8-21ページ
[250]周金波「志願兵」、『文芸台湾』、第2巻第6号、1941年9月、8-21ページ

が『台湾芸術』に連載された。物語は、陳不治に弄ばれ捨てられる女性不纏が、もともと不治の会社で用務員をしていたが、陳不治から梅毒をうつされる。それによって顔が崩れ、その上妊娠中に胎児にも感染してしまい、先天的な知的障害のある男児を出産する。不纏は捨てられた後も陳不治からの手当て金を一切受け取らず、自ら生活に必要な金を稼いだ。体が日々衰弱する中、炊事洗濯の仕事すら出来なくなり、不纏と生計を立てる力を欠いた子は貧民街へと落ち、子は空腹を満たすため芋を盗んでいた。ある日、不纏と子は二人で陳不治の住まいを訪ねる。不纏は病気の治療費を受け取るだけのつもりであったが、不治は顔を合わせないばかりか二人を乞食呼ばわりし、門衛に追い払うよう言いくるめる。偶然この場面を目撃した記者の劉通原は陳不治の本性を暴こうとしたが、不治が娘を嫁にやる約束したことでそれを取りやめた。不纏は病に倒れてこの世を去り、子は悲しみ憤り陳家に火をつけ焼き払う。その際、偶然不治の子供鼎文に出会う。鼎文は門衛から二人はもともと同じ父の異母兄弟であることを知り、父親の私生児であり長い間苦しみを味わった弟の面倒を見ることを承諾する。5 年後、陳家は豪華な新居にて不治の誕生日会を盛大に開いた。席上で二人の記者が、陳不治が自らの私生児を監獄に送った冷酷さや、鼎文が私生児である弟が入獄してからは容赦なく情を断ち切ったことを陰で批判した。最後に元門衛がやっと出獄した子を支えながら現れたとき、鼎文は忙しさを口実に、数枚の札を取り出して門衛に病気でぼろぼろになった弟をすぐに連れて行かせる[251]。

物語中の不纏は労働者の出身で、不治は資本家である。不纏は不治に弄ばれた後酷い目に遭い棄てられる。明らかであるのは資本家の弱い立場である労働者に対する抑圧を象徴し、極めてはっきりとした階級意識があるということである。楊逵はこの戯曲によって資本主義社会の不公平を批判している。良識すらも簡単に買収され、世論もしょせんは錦上に花を添えるのみ、記者も結局は資本家と一緒になって弱者を抑圧する共犯構造に過ぎず、反道徳的な人間を制裁するには至らないのである。

1942 年 2 月、楊逵は皇民化運動が推し進められて以来初めてとなる小説『無医村』を発表する。『無医村』の主人公である劉医師は予防医を志す文学青年で、卒業してすぐに借金をして開業するが閑古鳥が鳴き、重い利息負担に追い詰められる。ある夜更け、突然あわただしく扉を叩く音が聞こえた。夜中にひどい重病人が往診を待っているのかと思う。劉医師は急いで片付け、屍のような男について出かけながら、心中、これが人生の転期ではないかとひっそり期待した。瀕死の病人を助ければ名も上がり、金が入る医者となれる。患者の家に着くと、患者は診察する間もなく、軽く痙攣を起こした後簡単に息を引き取ってしまった。その場にいた家族に尋ねると、劉医師は死者は死亡率の高くない腸チフスであろうと診断するが、家が貧しく医者に診せられず民間で用いられる薬草を乱用し、ついに病状が窮地に陥り手の施しようが無くなったのだ。ここではっと悟る――貧しい人は死亡診断書が必要になった時に初めて医者を呼ぶのである。

---

[251]楊逵「父與子」原文の連載は『臺灣藝術』、3 巻 1-3 号、(1942 年 1－3 月)、彭小妍『楊逵全集』第 1 巻、劇巻、文化保存籌備處、(台南市、2001 年) 23－40 ページ

この外、楊逵は他にも批判の対象がいる。文中で医師の職責について言及する段落がある。

国家は、大事な人民の身体をこう言ふ状態に置いていいものかどうか？

いや、吾々医師にだって責任があるのではないか！医者は職業だ、職業は商売だ、

商売に金にならないこと迄頭を使ふ必要があるかと言ふやうな気持ちでいていいものであるかどうか？

併し実際問題として吾々に何が出来るか？

民間に行はれてゐる所謂民間藥を漏らさず集めて分析し、その含有成分を究明し、

その適應症及ぴ使用方法を集大成しなければならぬ。

そして必要ある場合にそれ〜〜指導して行かなければならぬ。

それが吾々の力でどうすることが出來るか？

が、それは兎も角僻地の無医村が騒がれている時、

この裂町の無医村を人々は何故ほっといて顧みないのであらうか？[252]

楊逵は、医師の専門知識でもって旧来の薬草を科学的に分析し、その成分と治療効果を研究するとともに、実際に人々に使い方を指導して民衆に安価な薬をもたらす、これが医師が貧しい病人のために貢献できることであると考えた。しかし学術的な研究には時間がかかり、研究過程においては多くの人手、物資が必要となり、少人数で負担できるものではない。医師はいかに家計に影響を与えずこれに専念することが出来るか。このことから楊逵は人々を守る重責は政府にあると考え、政府が厚い財力と物資で、民間で用いられる薬草を専門に研究する医師を招聘して、廉価で効果の高い薬を貧しい人々に提供することが望ましいとした。

皇民化期以降、日本の軍国主義と侵略戦争をたたえる作品は枚挙にいとまが無いことを考えると、『無医村』の発表は、楊逵が文学作品を通して当時の文壇への不満と感嘆を表したもので、これは作家としての自己反省と良知である。彼は依然として日中戦争勃発前と同じく社会の最下層で貧困にあえぐ家族に注目していたが、言論統制が日増しに厳しくなったことから、楊逵はそういった条件に符合しつつも良心に背かない創作方法を模索し、以前階級闘争を提唱していた時のような激しい抗議は見られないものの、依然としてその社会主義の階級意識と皇民化の風潮に反抗する抗議精神を押し隠していた。

台湾本土文学の皇民化政策に対する抵抗は、主に張文環が創設した『台湾文学』が主な舞台であった

[252]楊逵「無醫村」、『臺灣文學』、2巻1號、(1942年2月)、彭小妍『楊逵全集』「小說卷」(II)、293-298ページ。

ため、楊逵らの作品も主としてここで発表された。また一方で、西川満を中心とする『文芸台湾』も次々と国策に対応しながら皇民文学の作品を提唱した。皇民化期の台湾文壇は相対する 2 つの勢力に、遂に「糞リアリズム主義」論争が生まれた。

「糞リアリズム主義」論争は 1943 年 2 月に皇民奉公会が主催する第 1 回台湾文化賞が発表されたことに起因し、受賞者は西川満、濱田隼雄そして台湾作家の張文環であった。審査員の一人であった台北帝国大学の工藤好美教授は、授賞式後の翌月発表された「台湾文化賞と台湾文学」の一文において、小説賞を受賞した西川満、濱田隼雄、張文環の 3 名の作品に対して評論を行った。そこでは西川に対してはお世辞で誉めそやし、張文環のリアリズム文学に対しては賞賛を加えたが、濱田の『南方移民村』に対しては多くの批判がみられた[253]。

工藤の批判に対し、濱田隼雄が 1943 年 4 月末に『台湾時報』に発表した『非文学的な感想』である。濱田氏は次のように述べている。

決戦下の文学、特に台湾文学は如何なる方向に進むべきかについてはいろいろな事が云はれてゐる。けれども私には納得がゆかない。戦ひの文学と唱へる人の作品にも、日本文学の伝統をと告げる人の作品にも、私はそれらしいものを十分に発見し得ないのだ。私は自分の未熟がそれを発見し得ないと思ひ、かへりみることをくり返すのであるが、結局するところ。叫びの言葉の新しいにも拘らず、そこにあるものは、文化至上主義的な、従って芸術至上主義的な外国流の、そしてその阿ママ流にすぎない浪漫主義や、暴露趣味の淵から脱却し切れない自然主義の末流に過ぎぬものが多すぎるのである。そこには私の文学を撼り動かすものがあるとは思へぬ[254]。

濱田氏は積極的に「戦争文学」と「日本文学の伝統」に合っている文学だけは、当時の創作すべき作品であると主張し、台湾作家の「芸術至上」の主張などを強烈に批評していた。濱田氏は本島人の作家と読者を又このように批判している。

私たちの文学の中で、特に本島人を描いたものの大部分はかかる意味での、否定的現実のなまな写生に過ぎないことを改めて見直さう。本島人の作家がいつまでも本島人の皇民としての非積極的･非肯定的な面をとり上げる事は末端的な現象でないだろうか。殊に本島人読者層の中からさうしたものへの憤慨の声が聞こえるとすれば、それを卑俗なものとして昂然としてゐる態度は考へるべきであらう。

台湾人作家と読者に対する批判は非常に苛烈であった。「皇民」になることには積極的でなかったことを指摘することだけではなく、「卑俗なものとして昂然としてゐる態度」という言葉は、台湾人が自分の文化を守っていたという証明になるのではないか[255]。

5 日 1 日、張文環は『台湾公論』において「台湾文学雑感」を発表し、台湾文学が消極的であると批評されたことに心を痛めたと肯定したうえで、心痛の本当の原因は台湾文学作品の質の低下にあるとし

---

[253]工藤好美「台湾文化賞と台湾文学」、『台灣時報』、279 号、(1943 年 3 月)、98-100 ページ
[254]『台湾時報 』、280 号、(1943 年 4 月)、74-79 ページ
[255]『台湾時報 』、280 号、(1943 年 4 月)、74-79 ページ

た。ついでに台湾にはいまだかつてまともな文学批判は見られないとさらに皮肉って、濱田隼雄に対する反論とした。最後に文学は現実逃避の精神で作業するのではなく、皇民の立場に立ってその任務を負わなければならないとして締めくくった[256]。

次は、西川満は1943年5月の「文芸時評」にも、また台湾人作家を更に猛烈に批評している。

> このことは特に本島人作家に云へると思ふのである。真のリアリズムは決してそんなものではない。相も変わらず継子いぢめか、家族の葛闘などを後生大事と風俗描写してゐる間に、本島の次代層は勤行報国隊に、志願兵に活発な動きを示してゐる。現実に脊を向けた無自覚なリアリズム作家、何と云ふ皮肉であらう[257]。

西川氏は台湾人作家の作品の風俗描写などを「糞リアリズム」とし、たとえロマンチックな作品があっても、「退廃的なヨーロッパロマンチシズム」であり、欧米の文学手法を採用することにも否定的であった。そして「台湾の作家の「無芸」大食、荒けづりならよいがジャングル以上の混乱「文章」正にこれぢや新聞記者に笑はれるのも無理はない」と、台湾作家のレベルをまるで原始時代のように評している。そして、西川氏は時局を認識せず、ひたすら泉鏡花を模倣することはいけないと主張している。

西川満の「文芸時評」が発表された後、前述のように、世外民という作家（当時の詩人邱炳南か、または邱永漢だと言われる）は興南新聞に『糞リアリズムと偽ロマンチシズム』を発表し、台湾人作家の立場から西川氏の評論を批評した。世外民は日本当時の有名な作家―永井荷風を例としている。

> 荷風が「わたしは自ら文学者たる事について甚しき羞恥を感じた。以来私は自分の芸術の品位を江戸戯作者のなした程度まで引下げるに如くはないと思案した」といふのも要するに文学的真実が社会的制約に禍されて、歪曲せられた事に対する苛責にほかならなかったといへよう。従って文学作品の評価の最も根本的な要素の一は何といっても作者の態度であることは蓋し賛言を要せぬ所であらう[258]。

同じく浪漫派に属した永井荷風と比べ、かつて自ら「浪漫派」と位置付け、このときは「皇民文学家」、「戦争協力」に転じた西川満に対しては、皮肉的な発言である。この世外民の文章が発表されてから、前述のように、ある当時は18歳、『文芸台湾』で『林からの手紙』、『春怨』を発表した新人作家―葉石濤は、敢えて『世氏への公開状』で反撃した。葉氏は世外民の文章に、源氏物語を例とすることを批評している[259]。

葉石濤の文章に対して、他の台湾文人らも投稿で反撃を加えた。雲嶺は「他人のロマンチシズムの是

---

[256]陳千武訳『張文環全集』6巻「隨筆集」(一)、156ページ
[257]『文芸台湾』6巻1号、1943年5月、38ページ
[258]世外民「糞りアりズムと偽ロマンチシズム」、『興南新聞』、1943年5月10日
http://www.japanpen.or.jp/e-bungeikan/guest/novel/nagaikafu.html　2014.5.25参照
[259]葉石濤「世氏へ公開狀」、『興南新聞』、4428号、(1943年5月17日)、第4版

非を論じたり、他人のリアリズムの不採用について触れることで自分の作品を賛美する、こういったやり口は卑怯である」[260]とした。このほか、呉新栄は当時の皇民化運動の論理と語彙を利用し、相手の論理でもって相手の矛盾に反論した。彼は、葉石濤が皇民奉公会文学賞を獲得した張文環の作品の世界観に疑問を持っていると非難した。これは皇民奉公会の権威を侮辱することに値することから、葉石濤が先に疑問を抱くべきは皇民意識を有しているかどうかであるとした。また彼は、台湾の過去の生活を記録することに問題があると批判するのであれば、西川満の『赤崁記』、『龍脈記』もまた非難されるべきではないのかと述べた。また同時に彼は、私はかつて「象牙の塔の鬼」として芸術至上主義を罵倒したことがあるが、しかし「私は思う、このような芸術至上主義も決して悪いわけではない。しかしながら、西川満がいつの間にか「美の追求」を放棄し、「悲壮なる決意」でもって再出発したと噂に聞いている」と書いている。呉新栄はそれにより西川満が耽美主義から皇国文学、文学報国へ転向したことを皮肉ったのだ[261]。

伊東亮（楊逵）もまた〈糞リアロズムの擁護〉を発表して反撃を加えた。楊逵は、文中でリアリズムとロマンチシズムに対する見解を述べ、同時に本島作家が現実を描写するマイナス面を示した。

> 糞の効用を、事新しく真面目にここで論議することは、奇異な話であるかもしれない。だが、糞の効用を、皆は知ってゐるやうでゐながら、真実は忘れかけてゐるのではないかと思われる[262]。

楊逵はみんなが糞でもそれなりの効用があるけれども、しかし、多数の人はただ糞の汚さ、臭さを知り、その真の効用はほとんど忘れかけた。そして、糞についてこういう結論を出した。兼ねてリアリズムとロマンチシズムを論じている。

> …糞なくては米は結実らないし、野菜はならないのである。これがリアリズムなのだ。全くの糞はリアリズムなのである。糞にはロマンスはない。人が顔をそむけ、人が鼻を押へる糞ながら、併し、この糞リアリズムなくして生きて来た人間があったお目にかかりたいものである[263]。

糞には本当にロマンスはないながら、農民に対しては大事なものである。そして、糞がなければ人の糧はうまく結実できなくなる。当時に化学肥料はまだ普及されていなかったからだろう、「天然肥料」はそんなに大事にされた。でも、作者の真の意義は、「現実に直面せよ」ということであろう。

上に述べた糞リアリズム論争の間、ついに「皇民文学」という言葉の誕生と、さらに成熟した皇民文

---

[260]雲嶺「批評家寄せて」、『興南新聞』、(1943 年 5 月 24 日)
[261]呉新榮「良き文章･惡しき文章」、『興南新聞』、(1943 年 5 月 24 日)
[262]伊東亮(楊逵)「糞リアロズムの擁護」、『台湾文学』3 巻 3 期、1943 年 6 月
[263]伊東亮(楊逵)「糞リアロズムの擁護」、『台湾文学』3 巻 3 期、1943 年 6 月

学の作品を成した。「皇民文学」という言葉は本節の始めに触れたが、最も早くに姿を現したのは1943年5月西川満が『文芸台湾』6巻1号に掲載された「文芸時評」の中で、初めて「皇国文学」というスローガンを謳ったのがそれである。続く6巻2号で「皇民文学」という言葉が続いて登場した。それに次いで1943年7月『文芸台湾』6巻3号に陳火泉の『道』が掲載された際、濱田隼雄がこの作品を選出した理由として、この作品はこれまでの台湾文学に無かったもので、台湾独自の「皇民文学」であるため、と記している。皇民文学の発展に対して、1943年7月末に呂赫若が台湾本土意識に満ちた小説『石榴』を発表し、皇民文学に力添えとなる弁明をしている。『石榴』は台湾の農村家族の物語を主題とし、肯定的な視点で捉え、古くロマンチックな日本の伝統や赫々とした大東亜の理想は見られない。翼賛決戦体制もみられず、皇民化した生活の描写もない。そこで繰り広げられているものは完全に台湾の価値観（風俗習慣、生命信仰、家族観、孝悌）から構成されたものと、殖民統治下で貧しい人々が苦しみにあえぐ郷土社会での深い家族愛である[264]。『石榴』のほかに、7月31日の『台湾文学』3巻3号でも時を同じくして王昶雄の小説『奔流』が世に送り出されている。

陳火泉の『道』は、いかにして日本人となるかという道を研究しており、日本統治時代にどのように日本の異文化を理解したかという皇民文学の代表作であるといえる。『道』の主人公である「彼」は、「青楠」という俳号を持つ「台湾製脳」に勤務する社員である。「青楠」は樟脳産業の向上において、画期的で特殊な発明をして貢献を果たす。しかし目の前の日本人の同僚たちだけが次々と昇級し、広々とした官舎に移り住み、特別手当等が支給される。それに対し、彼のような「本島人」社員は赤貧生活しかできず、せいぜい何とか衣食を確保できるのみであり、立派な宿舎などは言うまでもなく望めない。「青楠」は、自分はすでに「卓越した日本人」であると認識しながらも、日常生活においては日本人からの挑発、いじめ、暴力を幾度も受け、会社の長官である廣田主任からは衝撃的な一言すら浴びせられる。主任は「“少しも遠慮せず、本島人は人間じゃないからな！と言った”が、これによって私は束縛から抜け出す道理を悟り、ついに激しさに突き動かされた私はその夜即座に筆を取り、小説『道』を書き始めた」。この内地の日本人が放った「本島人は人間じゃない」という「判決」は陳火泉を傷つけ、昇進の機会を失い、物質的な面でも貧困の境地に陥り、「立ち直り」の機会さえも失わせた。さらに、精神に負った傷は「青楠」（実際は陳火泉を反映した姿である）に、殖民者が認める「人間」の基準にどのように「迎合」するかをさらに思索させ、「皇民」、「日本人」になる方法を問いただすこととなる。

「青楠」は自らの「日本人」としての身分を推考するに、他の「本物の」日本人からは未だ認められていないことから、「精神の系図」の論証をもって「血縁上の種族」の違いを合理化しようと試み、その「体験」を通じ「精神的日本人になる」論証を生み出すのである。

「いわゆる“日本精神”とは、私は日本精神を日本人の――この場合は、私は日本人を生

[264]柳書琴「再剝石榴：決戦時期呂赫若小説的創作母題」、『呂赫若作品研究』、聯合文学、（台北、1997年）

まれながらの日本人、更に平たく言えば、“内地人”と限定するものとして――この日本人のもつ精神として理解したくはありません。この生まれながらの日本人の中にも日本精神を母の胎内に置き忘れてきたようなものがある筈です。対極からみれば、この日本精神とは生まれながらの日本人が持つべき気質であるけれども、遺憾ながらこのような精神を欠くものをしばしば見かけます。忌憚なく申せば、これでも日本人かな、と思はしめるようなものが存在するわけです。それに、生まれながらの日本人ではない――つまり本島人の癖に日本精神など分かるものかと本島人をどこまでも本島人と思いなし、事ごとに大層な権幕を示し、如何にも日本精神専売業者の感を与えるものもいますが、日本精神はそんな偏狭なものではないと思ひます。…日本精神とは何か？尊皇攘夷の精神、これ即ち日本精神と、私は理解したいと思います。『何かあれば、君がために身を捧げる、白々と過ごすことができようか』これが尊皇攘夷の精神です。…討夷、攘夷、その上野蛮民族を取り除くまでは止めない、…これが現代の天皇攘夷であり、野蛮な心を洗う精神、これが日本精神です…。この尊皇攘夷の精神を持ってゐるものこそ日本精神の把持者です。本島人の中にも、朝鮮人の中にも、また満州人の中にも、確かにこの精神を持っているものがいます。たとえ生まれながらでないにしても、それをしっかりと持っているものが、やはりいるものです。」[265]

「血縁」関係の欠如から「青楠」は最終的に「志願兵」に加わることによって、「生まれながらの日本人」に対して「血税」を納め、これにより血縁の「融合」を実現して日本人から認められようとする。彼は詩文「2 月 2 日為志願台湾陸軍特別志願兵而作」の中でこのように述べている。

「私は日本国のこの体内にありながらも、悲しいかな、生まれながらの血は流れていない。本島人の私はただ涙を流しながら自分を励ますばかりだ。今私は天のために楯に取り、勇敢に戦場で死に赴く。命を棄てる覚悟をしたからには欲望はない、ただ皇民となることを願うだけだ。」[266]

上述をまとめると、「青楠」の心の動きは陳火泉の当時の精神状態を反映している。彼は周金波と同様に台湾人の従軍志願を吹聴し、最終的に「皇民」となることを選択する。しかし「青楠」と同じく、彼も殖民者の言う「一視同仁」とはつまるところスローガンに過ぎないということに気付かざるをえなくなる。それは「内地人」と「本島人」の違いをごまかすことはできないということで、もし現実に存在する差別を克服したければ、「皇民の道」へと進まねばならない。その要となるものは「死」であり、つまり「生と死のどちらかを選ぶなら、さっさと死の方に落ち着くばかりである」という。「本島人」か「内地人」か、「台湾人」か「日本人」かに関わらず、死神の前でのみ人は一視同仁となる。台湾人

[265]陳火泉「道」『文芸台湾』、6 巻 3 号、1943 年 7 月
[266]陳火泉「道」『文芸台湾』、6 巻 3 号、1943 年 7 月

は生まれながらの「日本人」にはなれないが、死によって「日本の霊」になることは選択できる。これは、陳火泉が日本の異文化の下でいかに日本人になるかという見解なのである。

『文芸台湾』に陳火泉の『道』が掲載された後、それに敵対する陣営は 7 月末に『台湾文学』で王昶雄の小説『奔流』を大々的に発表したが、『奔流』は戦後の皇民文学研究の中で、議論を呼ぶ作品となった。それは作者が皇民化政策の下、表面的には皇民文学の特色をはっきりと表しつつも、その行間には皇民化に対する批判を忍ばせ、最終的に台湾本土文化の精神を表そうとしたからである。

『奔流』の主人公は名もない医者の「私」、日本語教師の「朱春生」（後に日本名「伊東春生」と改名）、そして「伊東」の従弟「林柏年」らの 3 人である。王昶雄は母と子、師弟との間に、「本島人の私」と「皇民の私」とで複雑に絡み合った信念や感情、当惑を通じて、「皇民化」運動における台湾人のもがき、苦しみ、迷いを表現した。小説では、日本留学から帰ってきた「伊東」が「皇民化」運動の下で、日本国籍の義理の母を本当の母とし、祖国や自らの根本を忘れて生みの父母とは決裂し、彼らの苦しみや生き死には見向きもせず、故郷にある「土臭さ」を取り去ることに力を注ぐ。その言動はすでに完全に「日本化」しており、「皇民の私」の様子を充分に表している。しかし「柏年」は、「伊東」とは全く違った一端をなし、従兄が肉親に対する情や祖国、自らの根本を忘れるといった不品行に直面し、彼に代表される剛毅さや清らかな正義感は、「日本人になる」ことを恥としてはいないものの、しかしそれよりも自分の故郷や血を誇りとする台湾青年の姿である。そのため彼は「伊東」のような「本島人でありながら本島人を蔑む奴」を懸命に打ち崩そうとする。このような意識から日本に剣道を学びに行った後、さらに深い認識を得ることとなる。

> 「私が立派な日本人であればあるほど、立派な台湾人でなければならない。南方に生まれたからといって自分を卑しめる必要はない。ここの生活に馴染んだからといって、故郷の土臭さを蔑むことはない。
>
> 母親がみっともない先住民だからといって、私にとってはやはり限りなく愛おしい。母が見苦しい格好でここへやってきたとしても、ちっとも気後れすることはない。母が胸に抱いてくれるだけで、喜びも悲しみも子供の頃と同じように、すべてなすがままだ」[267]

小説中の「伊東」と「柏年」という 2 人の登場人物は、同じく殖民地の母国へ留学することを選び、また同じように医学校への進学という家族の大きな期待を裏切っていた。前者は大学に進み国語（日本語）を学び、後者は武道専門学校に進み剣道を学んだ。動機と目的は違うものの、2 人とも期せずして「日本精神」を最も表している「文」と「武」に内包される象徴――「日本語」と「剣道」を選ぶ。「伊東」は日本人よりも流暢な日本語を話し、完全に日本人の生活に溶け込んだことで「本島人」との溝を広げ、その上「皇民の私」として自らの務めを果たしている。また「柏年」は、もともとは日本の「国

[267]王昶雄「奔流」、『台湾文學』、3 巻 3 号、1943 年 7 月 31 日

技」とも言うべき剣道に全力を注いで自らのものとし、身体と血でいわゆる「大和魂」につなげようと試みたものの、これまでに南方の自分の故郷を心底軽蔑したことはなく、「本島の私」という純粋な心を抱き続けている。

名もない医者である「私」といえば、もともと「伊東」のように、日本人の生活に溶け込むことをよしとしていた。日本の華道、茶道、剣道、衣服、住まい等大抵のもの、ひいては日本の「冬陽」に至るまで、「私」の目に映るあるいは記憶に残るものは全て美しく、すばらしかった。彼は、自分の内地での生活をこのように形容している。

> 「私が内地で過ごした10年間の生活は、全てが楽しい思い出ばかりではないが、私は真の日本の美を見出した…、憧れよりももっともっと高い理想の精神に触れた私を体験し、根底を揺るがすような出来事だったのが、その期間であった。自分は南方に生まれた一人の日本人であることに甘んじず、なんとしても純粋な日本人にならねばならない。さもなくば心に安寧はない。自ら進んで努力し内地化するのではなく、無意識のうちに内地人の血が私の血管の中に注がれ、知らず知らずのうちに静かに流れるようなそんな気持ちになるのだ。」[268]

「私」は努力して日本人になりきろうとしたが、自分の「不純」な血統を受け入れることができないことから、心中にはいくらかの不安、迷い、卑屈な気持ちが複雑に混ざり合い、さらに故郷台湾の醜態を蔑む自分に対し、心中には時々ある種の葛藤があった。「私」は日本人の心になるのは、無理やり努力してやるのではなく、憧れの心だと考える。理屈から言えば「私」はこのように積極的に日本人になろうとして気持ちを調節しているのだから、「伊東」の日本崇拝の媚びる態度に対して共感を得られるはずである。しかし「柏年」が目の前に現れ「私」ははたと気付くのである。「内地の冬晴れの美しさ」を心に刻み付けるだけで、「故郷の常夏の良さ」を忘れてしまっていたこれまでの自分の数々の行為を責め、「私」が自分の故郷への愛が足りなかったことを痛感した瞬間、「私」は改めて本来の「自我」を取り戻し、立ち戻る[269]。

上述の内容はつまり、『奔流』は「私」が「自己」に対して心理分析を行うばかりでなく、日本殖民統治体制による抑圧問題全体の深いやるせなさにまで及ぶ。そして「伊東」や「柏年」のような数々の台湾人は、日本殖民統治下において、言語、風俗、習慣、生活から人生観、世界観等に至るまで、すべて異文化の衝撃によってもたらされた人格、思想、精神上の苦しみが「本島の私」と「皇民の私」との間の葛藤を形成し、このような異文化が台湾人の間においてそれぞれ違った解釈がなされ、小説『奔流』のような異なる台湾の人物類型が生み出されることとなった。

先に述べた皇民文学作品に対する考察で、皇民文学作品として分類されるのは陳火泉の『道』、周金

---

[268]王昶雄「奔流」、『台湾文學』、3巻3号、1943年7月31日
[269]王昶雄「奔流」、『台湾文學』3巻3号、(1943年7月31日)

波の『水癌』および『志願兵』、また王昶雄『奔流』の 4 編である。そのうち『道』、『水癌』、『志願兵』の 3 編は皇民文学作品での論争が比較的少なく、『奔流』は一度は皇民文学作品とみなされたものの、後世ほとんどの研究者がこれを見直し、これは日本政府による統制の下で、やむを得ず書き著された隠忍の作品であるとされている。ただこれらの作品が後世において評価される際、読者らはそれぞれの解釈をすすめ、異なった見解や論断がしばしば生まれる。しかしこの 4 編の作品から明らかにされる主題というものは、いずれも台湾人が言語や血統の改造を通して皇民となる過程に生じた苦悩や、本島文化に向き合い日本文明を追及するという選択をしたことへの対応方法の描写である。これを一言で表すと、これらの文章は間違いなく当時の台湾人が皇民の道を突き進むかどうか、またその中で生まれる葛藤や苦悩を精確に描写したものである。このような状況を異文化理解と共生という面から観察すると、日本による台湾の殖民統治といった特殊な時代を見出だすことができる。特に皇民化運動の時期になると、台湾人の異文化理解には日本に対する賛美もあり、また民族のアイデンティティ意識にも波及して更に複雑難解さを増したために、日本という異文化は文学において多くの様相を生み出したのである。

皇民文学の論争は 1944 年 5 月まで続き、『台湾文学』が 1943 年 12 月に停刊、『文芸台湾』も 1944 年 1 月に発行を終了した。それに取って代わったのが台湾文学奉公会発行の機関雑誌『台湾文芸』である。以降、台湾文壇台湾本土文化の声はここで途切れ、残ったのは翼賛皇民文学の作品のみとなった。『台湾文芸』は、1943 年 11 月に台湾総督府が台湾文学奉公会の名義で台北で開催した「台湾決戦文学会議」で登場した。その会議では、いかにして作戦進行を応援するかという議題に対して話し合いがなされた。会議中で提示された 2 つの要求のうち 1 つ目は、全ての台湾作家がこの戦争の立場を表明すること、2 つ目は『文芸台湾』と『台湾文学』の 2 誌を合併させることであった。会議において日本人作家の西川満は、自分が編集長を務める『文芸台湾』を政府の作戦を進んで応援すると自ら示し、形勢を訴えた。会議では最終的に全ての作家が必ず国家政策に協力し、共に皇民奉公運動を提唱すると決議されたため、『台湾文学』が 1943 年 12 月に停刊、『文芸台湾』も 1944 年 1 月に発行を終了した。『文芸台湾』は 1944 年 5 月に発行が始まり、1945 年 1 月に廃刊されるまで合計 8 期発行された。大きく雑誌の内容を見てみると、各作家が発表した小説、詩、俳句、戯曲、散文随筆等各ジャンルが掲載されたほか、雑誌の中には開拓特集が組まれていることがわかる。例えば、1 巻 2 号の「台湾文学者総蹶起」、1 巻 5 号の「因応戦果之道」、1 巻 6 号の「献給神風特別攻撃隊」、2 巻 1 号の「必誅･入侵神域的東西」等であり、内容はどれもが文学報国、勇敢戦士をたたえ、卑劣な敵を非難するという主題をとりまくものであった。これらはいずれも雑誌側が戦局の求めに応えたもので、皇国功業を称え民衆が作戦に投じることを呼びかける各種の文章を共同で作り、参加する作家は自発的であろうとなかろうと、全員が政策の指導者に文章で応えなければならなかった[270]。雑誌『台湾文芸』は作家らを体制の中に組み込み、

[270]林瑞明「騒動的靈魂 ― 決戦時期的臺灣作家與皇民文學」、『台湾文芸』、136 期、(1993 年 5 月)、40 ページ

政府の立場に立って執筆を行い、文学で政治に貢献することに応えた。1945 年に戦局が終結に向かうのに伴い、日本は降伏して台湾から撤退し、皇民化運動も終わりを告げ、皇民文学も続くことはなかった。

第三節　台湾文学史の流れ

日本統治時代の台湾は日本の殖民統治下にあり、台湾人の日本異文化に対する理解と共生を台湾文学という側面から観察すると、台湾旧来の漢詩から台湾新文学運動期の新旧文学論争、台湾話文論争、郷土文学論争、皇民化期の皇民文学と台湾本土文学間のしのぎ合いに至るまで、台湾文学史の発展は日本統治時代の各段階で、台湾文人らが自らの文学作品を通して日本という異文化に対して異なる解釈を示している。しかしながら、このように異なる解釈の下で共生する作品あるいは生みだされる新たな作品は、台湾文学史上どのような意義があるのだろうか。この問題に対して、日本統治時代に作家と学者が台湾文学史の著作を通じ、異文化下における台湾文学発展史に対する彼ら自身の見解を示している。この見解は日本統治時代の人々が実際に体験して生まれたものである。こういった体験を経て生まれた台湾文学史と、日本異文化統治を経験していない戦後の学者が著した文学史の最大の相違点は、日本統治時代の台湾文学史に関する著作にある。これらの著作もまた、文学作品の他にも文学の分野で日本異文化を理解することができる出版物である。そのため日本統治時代の台湾文学史の著作の考察については、文学作品以外の別の面すなわち台湾文学史の著作も、文学上の異文化理解と共生の考察を行う重要な切り口となってくるのである。

台湾文学史の著作について、明の鄭成功時代に中国文化が導入され始めてから台湾文学は発展を続け、清朝の統治が始まると文学史の記載がみられるようになった。清朝が台湾を支配し、修史事業が台湾に持ち込まれると、台湾人官吏により編纂作業が行われた。明・清代の文学資料の多くは、地方誌の「芸文志」に保存されたため、これは同時期の台湾文学の研究にとってこの上ない資料の宝庫となった。「芸文志」の編纂作業には台湾征圧の戦い、文治教化の作品が数多く収められている。その中には奏疏や宸翰等の純文学の範疇に含まれないものや、また宦遊人士が国を離れて故郷を想って記した異国情緒溢れるたくさんの詩等もあるが、これら旧来の漢文作者の多くは「台湾文学」の概念[271]を描いていないばかりか、明の鄭成功時代から清代における台湾文学の発展を、中国文化に属した一つのはるか遠い支流としてしか捉えていない。

日本統治時代になり、日本が次第に自国の異文化を台湾に持ち込み始めたころ、日本人伊能嘉矩により『台湾文化誌』[272]が執筆された。そのうち、文学に関する部分は台湾文学の記録のみで、台湾文学独自の性格はみられない。伊能は『台湾文化誌』で、台湾の習慣、方言、風土、気候は中国とは異なり、

[271]高志彬「清修台灣方志藝文篇述評」、『台灣古典文學與文獻』、文津出版社、（台北、1999 年）、33-56 ページ
[272]伊能嘉矩『台灣文化志』、刀江書院、台灣省文獻委員會、1991 再版

人文においても特殊な発展を遂げ、漢詩、小説など文学の内容は台湾現地の風物から題材をとっており、まったく異なった様相を見せている、と強調した。しかし、伊能は早くに逝去したため、この観点をさらに掘り下げることはかなわなかった。このように伊能は独力で『台湾文化志』を完成させたが、その中には地方誌、詩文集等の台湾人による成果も大量に盛り込まれており、さらに自らの歴史家という立場をもって台湾占領以前の台湾文人およびその作品を解釈し、前時代の地方誌よりさらに大きく一歩踏み込んでいた[273]。

日本人の台湾文学の記録に関して、台湾の旧文人は日本による台湾統治の後、漢学の存亡、欧州文化の到来、新学術、新文明の流入等の要因が作用したこと、そしてさらに伊能の『台湾文化誌』が 1916 年に脱稿したことの刺激も加わり、旧文人の焦燥感が高まった。そのため、魏清徳、連横、林石厓ら一部の台湾の旧文人らも台湾の旧文学を整理し始めたのである。その中でも連横は最も代表的である。史家を自負する連横は、1910 年代中期から『台湾通史』、『台湾辞源』、『大陸詩草』、『台湾語典』、「台湾詩乗」等を相次いで編著・刊行し、最も早期に系統立てて台湾史、文学を整理し執筆した史家であり詩人である。連横は、1907 年には「台湾詩界革新論」を出し、撃鉢吟とは戯れの詩であり、詩と呼ぶに値しないと批判した。1908 年『台湾新聞』漢文部編集長に就いてから『台湾通史』の執筆を開始した。1917 年に『台湾詩乗』の資料編集を開始し、1921 年には『台湾通史』下巻および『大陸詩草』を刊行、また同年に『台湾詩乗』を脱稿し、「台湾詩乗」は 1924 年までに『台湾詩薈』に 13 回連載され、2 巻、3 巻まででその後は刊行されなかった[274]。

連横の『台湾通史』は、戦後の民族意識が高まる時代において、彼の歴史的地位を固める代表作となった。また「台湾詩乗」は初の台湾文学史の著作とされ、[275]日本統治時代末期に黄得が編纂した「台湾文学史」の参考資料ともなった。連横の「台湾詩乗」には、「台湾」を著作の題材とする詩が大量に収録され、「詩を以って史と為す」という意図もあった。そしてこの「台湾詩乗」の編纂は、主に当時の新旧文学論争に対処してのことであった。論争の中で連横は新文学に対して明らかな反対をしている。彼は内容を改革しさえすれば、旧文学はなおも啓蒙的で社会改革できる力があるとしている。彼にとっては、先人の詩作品には斉家治国平天下（家を整え、国家を治め、天下を平和に治める）、変風変雅（国家混乱の時代に生み出された作品）ということを婉曲的に諭す役割があり、そのため「台湾詩乗」には朱一貴、林爽文、牡丹社、乙未之役等の事件が述べられている。加えて関連する詩作品も収録され、「詩を以って史を補う」、「詩を以って史を裏付ける」という意図を存分に見い出すことができ、台湾人の「言葉にならない」気持ちが記されている。

このほか連横は、先人らが辺境を開拓し、異民族に対抗した精神を崇め敬っており、また同時にこれ

---

[273]黄美娥「殖民地時期日人眼中的清代台灣文學」許俊雅主編『講座 Formosa：台灣古典文學評論合集』萬卷樓圖書、(台北、2004 年)、197-224 ページ。

[274] 黄得時「研究歴史、振興文学、語源考察-連雅堂先生は台湾文化の三大貢献」、初出は「伝記文学」、30 巻 4 号、(1977 年 4 月 1 日)、現在「連雅堂先生相関論著選輯（下）」に収録、台湾省文献委員会、(南投、1992 年)、79 ページ

[275]吳密察『唐山過海的故事－台灣通史』、時報、(1998 年)、225 ページ

が旧誌から漏れていることを不満としていた。そのため「詩」では、鄭氏の功績および台湾人の清への抗戦を題材にした詩作品も広く集められ、そこには鄭氏を称え清を否定する、という漢人の歴史観が溢れている。その歴史観のもとで、連横は明代の遺民である沈光文、徐孚遠、張煌言、盧若騰ら「忠義之士」の詩作品も多く採り入れ、鄭延平王祠、五妃墓を詠んだ詩もまた取りもらすことはなかった。また清を援け台湾を攻めた漢人の功臣である施琅は、連横の筆では「漢民族の逆賊」と記され、清に抗い数々の戦いで敗れた台湾人烈士も多く収め、清代の正史の誤りを改めている。「鄭成功」は日本統治時代の台湾文人の目には、故国を想い異民族に抗う最も優れた創作の対象として映り、洪棄生、頼和、王松、連横らの作品にはいずれも関連する詩作がみられる。鄭成功とは、文人が故国を追想し世の遷り変わりを憂う、その拠り所であった。そのため「詩乗」には合計 119 首もの鄭氏にまつわる詩が収録され、詩作品全体の 10 分の 1 を上回っている。ここから連横が明の鄭成功を慕い、故国を懐かしむ気持ちの深さが見て取ることができる。しかしながら、「詩をもって史を残す」という目的を過度に重視したためか、詩人の出身背景と詩作品の芸術性は必ずしも主な採用基準とはされず、詩が台湾と関連するものであれば収録し、また台湾と関わりのない作品も収録し、また経歴不明な詩人の作品までも収録している。このような状況において、連横の「台湾詩乗」の台湾文学史における著作上の意義は、台湾漢詩史料の保存を中心に考えられたものだといえる[276]。

連横は個人、民間という身分で歴史を編纂し、かつ漢人を中心とする「台湾詩史」、清代に官修された「芸文志」とは一線を画す詩作品の採用基準と政治的な修辞法を呈した。楊雲萍は、戦後初期に連横の歴史観を「一種の“民族主義”のスタートであるといえる」と指摘している。この「民族精神」は「異民族日本人への抵抗精神」に溢れている[277]。連横の「台湾」に対する叙述の中からは、彼の「台湾」に対する認識を見出すことができ、清代の政府内の歴史編纂者の「台湾」の捉え方、例えば高拱乾や周鍾瑄らが台湾を野蛮で荒れ果てた地と見なしているのとは明らかに異なっていることがわかる。連横は台湾に対する深い郷土愛を表現し、「台湾詩乗」には「台湾」を主題とする詩作品が大量に収録され、「詩を以って史と為す」という意図がみられた。それらの作品では、台湾の自然環境における特色が引き立ち、また台湾人が異民族に対して抵抗する作品が台湾文学を構成するという特殊な現象にも注目した。その形式においても中国、中原を中心とするのではなく、「台湾」を中心とした詩史であるといえ、後世に文学史を記そうとする者に対して非常に啓発的なものであった。

連横は台湾文学史における漢詩史の著作について、それが表すものは台湾新文学運動が台頭する年代、旧文人陣営の一派が旧来の中国漢詩文化を守ろうとした心境であるとした。しかしながらその一方で、新文学運動は異文化の衝撃の下、白話文、あるいは台湾話文を用いて執筆するという主張があり、同時に旧文学に反対する新旧文学論争、台湾話文論争、郷土文学運動が生まれた。これらの主張と論争は、

---

[276]連横『台灣詩乘』、台灣省文獻委員會、(南投、1992 年)
[277]楊雲萍「史家連雅堂」、初出は 1948 年 6 月 26 日、現在は『連雅堂先生相関論著選輯（上）』に収録、台湾省文献委員会、(南投、1992 年)、1-4 ページ

いずれも台湾の主体性を追及した一種の文化啓蒙である。これらの主張から、新文学を主張する者は必ずしも旧文学にひたすら反対するだけではなく、台湾に以前から存在するものの上に台湾の新文学を創造しようとしていたことがわかる。このような状況において、文学史の著作に関して新文学陣営の一派も台湾のかつての文学活動の記録と回顧を開始した。おおまかに述べると、台湾文学遺産の収集と整理は民間文学の収録から始まっている。この民間文学の採集は、およそ 1920 年代後期から 30 年代初期に集中し、そのうち特に主要な採集対象となったものが民謡であった。

現在のところ、最も早くに系統立てて台湾民謡を記録したのは日本人の平沢丁東とされ、1917 年編集の『台湾的歌謡与名著物語』であることが知られている[278]。また、台湾人がこの作業に注目し始めたのは 1920 年中期からで、旧文人が注目し始めた。主な成果としては周定山の「郷土文芸初稿」、鄭坤五が『台湾芸苑』で採録及び編集した民謡採集特集欄「台湾国風」、『三六九小報』の「黛山樵唱」民謡特集欄および民謡、伝説物語の募集活動等である[279]。

旧文人による民間文学の採集活動は新文学者にも影響をおよぼした。そして『台湾新民報』が、この議題を熱く論じ合う舞台となったのである。1931 年 1 月、新文学家の醒民（黄周）は『台湾新民報』で、「整理“歌謡”的一個提議」を発表し、頼和、郭秋生、蔡秋桐らの共感を得た。醒民は文中で台湾歌謡収集の重要性を強く主張し、歌謡収集には 2 つの目的があり、1 つは学術、もう 1 つは文芸であるとした。特に「特殊な情況下」にある台湾においては、固有文化の保存はより積極的に実践すべき目的であるとした。また醒民は、欧米、中国ではともに民俗研究の専門的な団体が設けられ、歌謡は民俗学上の重要な資料であり、台湾において民俗の研究と改良を行うことは非常に意義があることだとした。このほか、彼は民謡が「民族の詩」を生み出せるという考えを提示し、台湾歌謡の整理作業が成功すること期待し、「あるいは憂鬱がその気質となってしまった我ら民族に、民族の詩を発展させられるかもしれない」[280]とした。ここにおいて、新文学家が文化遺産を収集・整理した背景に存在する深い意義が浮き彫りになり、そこには「民族」としての姿とその主体の存在価値を追求するという目的があったのである。

続く 1930 年 8 月、『台湾新民報』において「台湾文学的整理和開拓」というテーマで社説が発表され、この一時代の流れに正式なかたちで反応を示した。文中では、台湾文学整理の範囲には詩歌（童謡や民謡もそこに含む）、戯曲、小説、著述があり、整理方法に関してはこれまでの学者の経験と方法を用いれば、半分の力で倍の成果が得られる、としている。社説では、古いものを整理する以外にも、新文学の創作も非常に重要であり、作家自身の文芸作品が創作されることを期待している、と述べている[281]。

1932 年になり、黄得時は「談談台湾的郷土文学」を発表し、郷土文学には先住民族（生番）の踊りや

---

[278]『六十年前台湾俗文学』、東方文化書局、（台北、1976 年）
[279]黄英哲編集『日治時期台湾文芸評論集雑誌篇第一冊』國家臺灣文學館籌備處、（台北、2006 年）、254-261 ページ
[280]醒民（黄周）「整理“歌謡”的一個提議」、『台湾新民報』、（1931 年 1 月）、345 ページ
[281]「社説：台湾文学的整理和開拓」、『台湾新民報』、（1931 年 8 月 1 日）、375 ページ

その際に唄う歌、台湾人（広東人、福建人）の歌仔（山歌、小唱、童謡…）、歌仔戯の 3 つが含まれるとした。彼は「台湾国風」、『台湾新民報』、『三六九小報』、『南音』で行われた民謡の採録活動を高く評価した。その上、積極的に普及を奨励し、これらの歌仔を現代的、大衆的なものにし、歌仔を小説に、また小説を演劇、映画へと発展させたいとし、ここに台湾郷土文学の黄金時代の到来を見ることができる[282]。同年、葉栄鐘も旧文人ら上の世代に「過去の文芸作品の整理」を呼びかけた。彼は例として、台湾開拓後の詩や史実の収集を例に挙げ、さらに詩であれば台湾人、外省人の作品に関わらず台湾の郷土的色合い－人間味、風俗、歴史、名勝を書き記したものであれば、また史実なら外史や伝承でも古人の事跡や歴史的事実を伝えることができるものであれば充分であるとした[283]。葉栄鐘は、台湾を中心とした台湾らしさのある文芸の歴史構築を主張した。そうすれば何時しか大きな歴史的記憶が構築され、民族が共に想像する効果があるとしている。

『台湾新民報』のほか、『福爾摩沙』も台湾民間文学を整理するという主張を掲載した。その中の作者が「台湾人が有する優れた文化遺産」を指摘したことにより、「これまで気勢の弱かった文芸作品と、現在人々によく知られる民間歌謡や伝説などの郷土芸術を整理、研究する」ことを決心した[284]。このような文芸の理想に合わせて、『福爾摩沙』創刊号には蘇維熊の「試論台湾歌謡」が掲載された。これは体系的、論述的な研究論文であった。

蘇維熊はまず始めに、大正時代には内地日本人により異国情緒あふれる台湾歌謡がすでに収集されていたが、台湾人はここ数年になってようやくこの作業を始めたばかりである、と指摘した。彼は 1931 年の醒民の言葉を借りて、民謡を整理する目的は一つに学術、もう一つに文芸、さらなる高い目的は次第に廃れ行く固有文化の保存であると述べた。蘇維熊のこの文は学術的な目的に偏っており、彼は民謡の研究を応用して非文明的な台湾の伝統習慣を解釈し、また非難している。彼は台湾歌謡の研究とは、内容の研究と形態の研究の 2 つに分けることができるとし、それはつまり字数、句数、韻律等といった形式と、歌謡内容の分類研究だとしている。蘇維熊は台湾民謡を研究する目的とは、「台湾歌謡と世間や風俗との関係を考察することであり、言い換えれば台湾民謡の中に表現される、特に醜悪で改善すべき台湾人の人間模様や風俗などを調査することである。私は自分たちの欠点を遠慮なく暴き出すことになる」。とはっきり示している。このような思考傾向は、1920 年代の社会運動家らの文明啓蒙論述から引き継がれ、文学遺産から民族の魂を探求し、心の平穏を得ようと願ったものである[285]。

1935 年 1 月、「台湾文芸協会」の機関誌『第一線』が「台湾民間故事特輯」を組み、黄得時により「巻頭言」が書かれ、また 14 編の民間故事を収録、朱點人、廖漢臣、李献璋らにより収集執筆された。1936

---

[282]黄得時「談談台湾的郷土文学」、1932 年 7 月 14 日、この文章の作者は最後の註に 1932. 7. 14 台北高校図書館、発表場所は不明、現在は黄得時の『評論集』に収録、台北縣立文化中心、（板橋、1993 年）

[283]葉栄鐘「巻頭言：前輩的使命」、『南音』、（1932 年 2 月）

[284]編集部、涂翠花訳『福爾摩沙』「創刊詞」、『福爾摩沙』1、1933 年 7 月 15 日、黄英哲編集『日治時期台湾文芸評論集雑誌篇第一冊』に収録、國家臺灣文學館籌備處、（台北、2006 年）、51 ページ

[285]蘇維熊著　涂翠花訳「試論台湾歌謡」、『福爾摩沙』1、1933 年 7 月 15 日、黄英哲編集『日治時期台湾文芸評論集雑誌篇第一冊』に収録、國家臺灣文學館籌備處、（台北、2006 年）、53-67 ページ

年、李献璋編著による『台湾民間文学集』が台湾文芸協会と台湾新文学社により共同出版され、これは台湾文壇の一大事となって熱い討論が繰り広げられた[286]。

台湾民間文学の整理作業は、新文学家が台湾人は自らに帰属する文学を創造し、中国からの導入にばかり依存してはならないと深く心に感じたことによる。そのため、収集と記録の過程において、台湾文人が祖先の文学遺産を改めて認識、評価し、またこれからの方向を改めて詳細に観察した。新文学家が民間文学を正面から肯定したその意義とは、台湾人の習慣、伝統を集約することを通じて、台湾文学の歴史を創出することである。しかし、問題は民間からの文学をどのように現代化するかである。あるいはその中からどのようにエッセンスを抽出して再び民間へ還元し、それを受け入れてもらうかということである。これらの問題点に関して、新文学家らは大抵文学、芸術という手段を用いて民間文学の再創出、再利用を行っており、同時に日本から導入した異文化を吸収し、同じ流れを汲む台湾新文学を構築しようとした。

台湾新文学家は台湾民間文学の収集と記録において、台湾新文学の形成は台湾本土文化と中国伝統文化および日本異文化等を集め、お互いの融合と理解によって得られる産物であると示した。また台湾新文学運動は30年代に入ると、新文学の成果が累積するにともなって文壇には回顧と文学成果を整理する雰囲気がかすかにみられ、「台湾文学史」は台日作家と学者のいずれにも関心をもたれるテーマとなった。劉捷、楊逵および日本人作家の東方孝義、裏川大無、河崎寛康、中山侑らは、いずれも台湾新文学運動の成果の記録を始めている。

台湾文人の中でも比較的早い時期に台湾文学史の執筆を開始したのが劉捷である。劉捷は「台湾文芸連盟」の中心的人物で、創刊号から数々の評論文を発表した。彼はまず文学史の手法で台湾文学史を著したいという思いを表明した。そのため劉捷が30年代に発表した「文学史」の姿勢を有する論文、例えば「台湾文学鳥瞰」、「続台湾文学鳥瞰」、「民間文学的整理及其方法論」、「台湾文学的史学考察」の4編はどれもが新文学運動を回顧する文章となっている。

「台湾文学鳥瞰」では、1932年から1934年にかけて日刊『台湾新民報』において発表された小説と詩、評論の作者、作品名について述べられ、かついずれの文章の前にもA、Bという記号でもって中国語文、日本語文を明記した。劉捷は、台湾はこれまでずっと政治、法律、宗教によって台湾文化を改革してきたが、この流れを改変したのは東京で成立した「台湾芸術研究会」であると提示している。また彼らは「文学芸術という側面から台湾の文化を高めよう」とし、同会の意図はその機関誌『福爾摩沙』の創刊号、およびその他の文章において、事実上誰の目にも明らかにされており、「真の台湾純文芸を創作」しようと決心した、としている。最後に劉捷はここ2、3年の台湾文学の動きを総括し、中には、同好会の結成や、同好会の刺激のもと作品が大幅に増加した事実なども含まれたことから、彼は台湾文学

[286]劉捷「台湾文学的整理及其方法論」、『台湾文藝』、2巻7号、1935年7月1日、黄英哲編集『日治時期台湾文芸評論集雑誌篇第一冊』に収録、國家臺灣文學館籌備處、(台北、2006年)、257ページ

がすでに黎明期に入ったとした[287]。

「続台湾文学鳥瞰」は、1920 年『台湾青年』期から 1932 年までの台湾文芸活動の様子を検討している。劉捷はこの中で「文学史的方法を応用し、体系的な台湾文学の発展過程を参考資料として作り上げたい」としたが、「文学史的手法」とは何を指すのか。劉捷は、「文学史も一つの歴史であり、仮に全ての歴史と同じく科学的方法により研究や分析を行えば、それぞれがその時代の傾向や、政治と経済の関係を反映することになる」と述べている。しかし「歴史」とは何か。それは手段なのか、あるいはそれ自体が目的であるのか。その真実性はどれほどであるのか。劉捷は、「“現在”は過去と未来が繋がる一部分であり、“過去”はすでに過ぎ去った“現在”である」としている。彼は、過去は現在というわけではないが「正確な台湾観は、まず過去から現在に至るまでを認識することによって初めて将来の予想が決定できる」と強調した。劉捷は、殖民地台湾の知識人にとって「過去」と「歴史」を探し求めるということは、アイデンティティ確立への過程であり、また未来の基礎を構築することでもあり、それらが繋がって成ったものが「台湾」自身の歴史である、としている。このような歴史観からは、外から来た異文化に対する劉捷の理解を見い出すことができ、台湾新文学と民間文学の資料の整理は、外から来た統治者の歴史の延長のために行うものではない[288]。

1935 年劉捷は「民間文学的整理及其方法論」[289]を発表し、同年 5、6 月にまた『台湾時報』において「台湾文学的史学考察（一）」、「台湾文学的史学考察（二）」、「台湾文学的史学考察（三）」[290]を相次いで発表した。これらの主題は「台湾文学の歴史」に関する全面的な論述のように見えるが、これら 2 篇の文章はただ単に台湾の大衆文学、民間文学、通俗文学の発展状況を叙述しただけで、新文学史の意義に対してはわずかに触れただけであった。

以上の考察から、劉捷の台湾文学著作の成果は断片的でなお整理段階にあり、大部分は回顧と整理の性質のみを持ち合わせていた。そして、確固とした歴史観や史述といった規模も具えておらず、台湾数百年の複雑な歴史をまとめるには至らなかったことがわかる。

劉捷の後期の台湾文学史に関する著作は、『台湾時報』において発表された。『台湾時報』は総督府情報部の機関誌である。1930 年代の日本人学者および文人の台湾文学史に関する著作は、事実上、『台湾時報』がその重要な発表場所であった。『台湾時報』は大正 8 年（1919 年）7 月に創刊され、昭和 20 年（1945 年）3 月に停刊となった。その内容は、ほとんど総督や各長官の訓示、各官府の会議記録、重要な政策の説明で、それらはいずれも収録され、また台湾の歴史文化に対する研究調査の文章も掲載された。なかでも最も特徴的なのは、毎期『台湾日誌』を編集して日々の重要な出来事を記載していたこ

---

[287]劉捷「台湾文学の鳥瞰」、『台湾文芸』、1 巻 1 号、（1934 年 11 月 5 日）
[288]劉捷「続台湾文学鳥瞰」、『台湾文芸』、2 巻 3 号、（1935 年 3 月 5 日）
[289]劉捷「民間文學の整理及びその方法論」、『台湾文芸』、創刊号、（1935 年 11 月）
[290]劉捷「台湾文学の史的考察一」、『台湾時報』、197 号、（1936 年 4 月）
「台湾文学の史的考察二」、『台湾時報』、198 号、（1936 年 5 月）
「台湾文学の史的考察三」、『台湾時報』、199 号、（1936 年 6 月）

とである。このほか『台湾時報』も台日作家や学者の論文、文芸作品をしばしば掲載した。1935 年 9 月、同紙の「編輯言」では、「台博会」の開催に合わせて官庁雑誌で次々と博覧会特集号が企画され、台湾総督府情報部の機関誌である『台湾時報』も例外ではない、[291]と述べられた。これにより 1935 年下半期の『台湾時報』では、確かに「台博会」開催の雰囲気が満ち溢れており、台湾の歴史文化の著作は「台博会」宣伝の一部分となり、触媒としての役割を担っていたと言える。

『台湾時報』の中でも、日本人作家数名による台湾文学史に関する著作は比較的重要であった。裏川大無は 1933 年に明治時代、つまり台湾統治初期に台湾で出版された雑誌の概況を紹介している。1935 年 2 月に発表した「台湾雑誌興亡史」では、台湾統治以降の雑誌を全体的に紹介した。この 2 つの文章はおおむね創刊順に、文芸、言語、美術等の種類に分けて列挙され、雑誌出版の状況を説明している。しかし裏川大無は、作品や作家の考察がほとんど皆無であり、研究と言うよりは、歴史資料の整理というのが適当であろう。その上、裏川が列挙した雑誌のほとんど全てが日本人によって作られた雑誌で、その文中から本島人が作ったと区別が付くのは『台湾文芸叢誌』、『台湾詩薈』、『藻香文芸』のみであり、彼の述べる台湾文芸雑誌の主流とは日本人が作った雑誌のことを指しており、台湾文人による雑誌の活気に満ちた発展状況は完全に無視されていたのであった[292]。

もう一人は河崎寛康である。彼はかつて「関於台湾文化的備忘録」という文章を 3 部発表しており、この 3 部では原住民問題、新文学、芸術と関心事、日本語普及問題について考察されている。河崎は、台湾の文学を考察するには「内地人と本島人とを分けて考える必要がある」とした。その理由は、内地人と本島人の「民族性」の違いであり、台湾は殖民地であるため、明白な特殊性を研究するのは明らかに不可能であるためである。その上、彼は日台の文壇環境の違いを認め、台湾文学の主流は本島人の文学活動であるため、両者は分けて考察する必要があるとしている。彼は、内地人の文学を「極めて少人数の集団の自己満足表現に過ぎない」と批判し、本島人による文学の分野については、文化の飛躍的発展における民族の熱意と意志に溢れているとした。それにより河崎は本島人の新文学に対して相当な期待を抱き、『台湾新民報』が文芸問題に対して全く関心を示さないことを批判した。河崎はまた、『台湾日日新報』が取り上げた文芸には台湾の特色が少しもみられず、『台湾新聞』のみが文芸発展に貢献しているとした。最後に河崎は、「本島人の文学における成長過程はさらなる考察を行う必要があり、これに対して体系的な解説をもって考察を進めることは、本島人の文学研究家に残された課題である」と述べている。彼が望んだ台湾人文学家による台湾文学の過程に関する著作は、40 年代初期、黄得時が発表した一連の台湾文学史の文章で、ようやく一部が実現へとこぎつけるのである[293]。

3 人目の中山侑は、志馬陸平というペンネームで、『台湾時報』において「青年与台湾」という題名の一連の文章を発表した。その副題には芸術運動（1 回）、新劇運動（5 回）、文学運動（4 回）とある。

---

[291]「編輯言」、『台湾時報』、(1935 年 9 月)、190 ページ
[292]裏川大無「台湾雑誌興亡史（一）～（七)」、『台湾時報』、(1935 年 2 月-7 月、1935 年 10 月-12 月)、183-188 ページ、191-193 ページ
[293]河崎寛康「関於台湾文化的備忘録（一）～（三)」、『台湾時報』、(1936 年 1 月-3 月)、194-196 ページ

中山侑は1909年台北市の「湾生」で生まれ、早くから熱心に文芸活動に参加した。演劇活動に没頭したことがきっかけで、台湾の知識人である王井泉、張維賢らと親交を深めた。中山侑は、河崎の述べた内地人と本島人の文学を区別すべきであるという意見には賛成したが、河崎の内地人の文学は取り上げるまでもない、と言う観点については否定した。そのため、彼は4回に分けて大正時代以前から1935年に至る在台日本人の文学活動について言及し、考察の対象を現代新詩を中心とした。同時に無産階級文学にも論及したが、その文中には情熱と賛同が満ち溢れていた。中山侑はこの文章で記録のみならず、文学活動の動向と少数の作家の作品についても評論を行った。また台北高等学校の創設に賛成し、昭和初期の内地人文芸界の興隆に大きな貢献を果たした。この一連の文章は、基本的に在台日本人の文学的成果を肯定しているが、彼はたとえ日本人による文学だとしても、殖民地における真の生活状況を著さなければならないと考えていたのである[294]。

最後に比較的重要なのが、東方孝義が1935年2月から毎月『台湾時報』で発表した「台湾習俗――本島人的文学」シリーズの文章である。この合計17編の文章には、文学史を著すだけの意図とボリュームがほとんどすでにあった。これらには旧文学、民間文学、新文学が含まれ、「台湾文学」の定義に対して、東方は次のような説明を付け加えている。「現在の（台湾文学）……漢文学（中国文学を指す）、日本文学があり、また漢文学と日本文学の混合体もあり、西洋文学もある、このような状態だ」。東方が認めた「台湾文学」とは、台湾という土地をその範囲として、そこに含まれる各種言語と異なる民族が集合して形成された多様性文学を指す。日本統治が始まって以来、漢文学は以前の形態を受け継いだ成長をしていない。東方は、1931年前後に思想が確立された無産階級団体と雑誌に対し、これは文学運動が組織化する発端であったが、その内部は日本帝国の国策方針と相容れず、彼らはただ文学というかたちを借りて理想の思想運動を実現しただけであった、ととらえている。30年代に台湾新文学が大きな発展を見せたが、これに対し東方孝義は基本的に肯定的・好意的な態度をとっていた。彼は、台湾新文学運動隆盛の原因は数多くあり、一つ目には日本式教育が生み出した知識階級の成長があり、二つ目には第一次大戦後の自由平等思想、民主主義、民族自決、階級闘争が無産階級文学を生みだしたことだという。またこのほか、1933年、日本文壇の文芸復興の刺激を受けての出版界の繁栄、島内の新聞や刊行物の緩和のいずれもが新文学運動を生み出すきっかけとなった。これを一言でまとめると、「新時代は新しい文化を生み出し、新しい文化は新しい文学を創造した」[295]。これらの観点と本論文の異文化理解と多文化共生の主旨はかなり近い。しかし東方は、新文学家が台湾話文や中国白話文を用いて「郷土色」を表現し文芸の大衆化を追及する、という傾向に対して懸念を示している。彼は、これでは日本帝国の国語政策の推進に不利になると指摘し、総督府にしっかりと考慮するよう注意をうながしており、ここでは日本異文化の本質的な文化血縁の違いがあらわれている。

---

[294]志馬陸平（中山侑）、「青年与台湾（一）～（十）」、『台湾時報』、（1936年2月、3月-11月、1937年1月）、195ページ、197-206ページ
[295]東方孝義の文章は後に出版された、『台湾習俗』に収録、南天書局、（台北、1997年）

皇民化時代より前の日本文人あるいは学者による文学史著作の意識を総括すると、仮に台湾文学に対して親近感または共感度という側面をもって見るとすれば、河崎寛康が最も友好的で、次いで東方孝義、中山侑、裏川大無であるが、彼らの台湾文学の評価がどうであれ、彼らは「台湾」という島に中国や日本とは異なる独自の「台湾文学」が存在すると考えていた。

台湾文学史の著作は皇民化時代にさらに深みを増し、その内とりわけ島田謹二と黄得時による師弟の討論は、日本から来た異文化と台湾本土文化の、それぞれ異なる観点を代表するものであった。台湾文学史に関する島田謹二の著作としては「外地文学論」が最も著名である。対して黄得時は、皇民化時代以前に台湾文学発展の歩みを整理しており、皇民化時代には「台湾文学史序説」、「輓近台湾文学運動史」などの論文を相次いで発表している。これは島田謹二の「外地文学論」に対してのもので、これにより台湾を主体とする論述の提起をし、反応を見せたである。

まず、島田の「外地文学論」は皇民化時代以前にすでにその観点が続々と発表されていた。島田は主に 1936 年 10 月に「南島文学志」を発表し、在台日本人の文学作品の成果を研究し始めている。1938 年元旦に「南島文学志」を再び発表し、1939 年には「佐藤春夫の“女誡扇綺譚”」[296]や「西川満的詩業」等『華麗島文学志』シリーズの文章[297]を相次いで発表した。1940 年 1 月に島田謹二は「外地文学研究的現状」を発表し、[298]このときには、在台内地人文学を研究した『華麗島文学志』がほぼ完成に近づいていた。そして 1941 年 5 月には島田謹二と神田喜一郎が「関於在台湾的文学」を共同で発表、同月また「台湾的文学的過現未」を発表、『華麗島文学志』の結論と見なすことができる。

島田謹二が 1936 年および 1938 年に発表した「南島文学志」は、彼の「台湾文学」史観および研究方法を明らかにしており、この文は彼の著作である『華麗島文学志』の出発点であると見なされている。島田の「台湾文学」観は非常にはっきりとしている。彼は「台湾文学」を 16 世紀以降この島を支配してきたオランダ、スペイン、中国、日本など各国文学史の延長と考えており、「台湾文学」は「台湾にある中国文学」、「台湾にある日本文学」を意味している。すなわち橋本恭子の言う「宗主国中心主義」で、「本島人の文学というものは島田の『台湾文学』の定義の中ではあるべき場所が見つからず、宙に浮いたまま」であり、「本島人の文学は最終的に島田によって、原住民の文学と共に『台湾文学』の枠組みから全て排除されてしまった」[299]。島田のこの文は全編において括弧付きで強調された「台湾文学」が用いられ、しかも台湾の文学に対して疑問と軽視の態度に満ちている。清代の文学について論述された箇所では、島田は「中国文学史という点から述べれば、かつて大した文豪は出ていない。地方文学史としての「台湾文学」が出現したのかということさえも、大きく疑われる」と述べている。島田は台湾文人が創作した文学を中国文学の一つの支流に数え、さらに「すでに出土している作品について言えば、

---

[296]島田謹二「佐藤春夫の（女誡扇綺譚）－」、『華麗島文学志』」、『台湾時報』、237 号、(1939 年 9 月 1 日)
[297]島田謹二「西川満的詩業―『華麗島文学志』」、『台湾時報』、240 号、(1939 年 12 月)
[298]島田謹二「外地文学研究的現状」、『文芸台湾』、(1940 年)
[299]橋本恭子「島田謹二《華麗島文學志》研究-以「外地文學論」為中心-」清華大學中國文學研究所碩士論文、(2003 年)、75-81 ページ

ほとんどの文学の価値は甚だ低く、我々のような複雑で、精緻で、深みがあって立派な“近代文学”に鍛えられた者にとっては目も当てられないものである」と指摘している。民間文学はというと、島田はこれは中国文学の中の「これ以上汚れようのない汚濁した一つの支流で、極めて凡庸で幼稚である」としている[300]。

島田は優位な殖民者の近代知識人の目線で、台湾の数百年来の文学の伝統を軽蔑し、台湾の知識人に声を上げさせた。例えば楊雲萍は 1940 年 1 月 18 日、成立したばかりの「台湾文芸家協会」が催した文芸講演会の中でこのように述べている。

> 台湾文学に関して、台湾には文学など存在しないと言って、多くの人がその存在を否定している。それは彼らが無知なだけであり、つまり認識していないのである。これらの人の中には、台湾にはこれまでに文学などなかったと言う事で自分の見識をひけらかす者までである。我々が分からない、研究していないから、その未知の事と未研究である対象を否定することはできない。台湾文学の厳然たる存在は、ある者の見識のみによって、台湾に文学がないなどと言って否定されてはならない[301]。

「台湾文芸家協会」は日本人が主導する文芸団体で、その講演会には数多くの日本人作家も参加しており、楊雲萍は彼らの面前で、正しい道理で言葉厳格に台湾文学を否定した人らの過ちを指摘し反論した。同時に自分の研究結果は台湾文学の歴史の存在を証明するとして、彼は今後台湾文学史に関する研究の発表をすることも明らかにした。

1941 年 5 月 10 日に、島田謹二と神田喜一郎は「関於在台湾的文学」を共同で発表し、台湾の歴史が始まって以降伝承されてきた文学を鳥瞰し、続いて 5 月 20 日には、島田謹二が「台湾的文学的過去、現在和未来」を発表したが、この 2 編の文章の発表は、台湾文人らの大きな反発を巻き起こした。そのうち、4 ヵ月後に黄得時が『台湾文学』で発表した「台湾文壇建設論」では、黄得時は明らかに島田の 2 篇の文章と対話を行い、その文中で黄得時は、例の軽蔑された箇所や台湾文学の存在を否定した人を強烈に批判したのである。

「関於在台湾的文学」で島田は台湾が日本に属する前の清代の文学を著し、神田喜一郎は「中国文学」の部分を補った。この文章は、かつて台湾を統治したスペイン、オランダ、中国、日本人が残した台湾に関する「外地文学」を叙述の主体としている。そのうち清代の文学に関して、作者は「中国文学史の立場から見ると、これまでに優秀な大家はみられない。たとえ中国地方文学史の一環だとしても、……芸術的価値という側面から見ても、その内容は恐らく空っぽであろう」、「清朝の文芸は取り上げる価値もない」としている。島田は清代の台湾本土出身の文人の文学に対し、道光の時代にやっと鄭用錫、

---

[300]島田謹二「南島文学誌」、『台大文学』、(1936 年 10 月)

[301]楊雲萍著　葉蔡蔡訳「台湾文学之研究」、『台湾芸術』、1 巻 3 号、(1940 年 5 月)、黄英哲編集『日治時期台湾文芸評論集雑誌編第三冊』に収録、國家臺灣文學館籌備處、(2006 年)、8 ページ

林占梅、陳陶村、陳維英らといった台湾出身の文人が徐々に現れ始めた、と認識しているが、「これら数名の詩作品はいまだに中原作家とは一戦を交えるだけの実力もなく、一般的な水準に達したのみである」とした。

「関於在台湾的文学」や「南島文学志」と同じく、島田は台湾の神話、伝説、民謡などの民間文学が、中国の延長線上にある支流で、「これ以上分けることができない極めて混濁した支流」とみなしており、俗っぽく幼稚なものと考えていた。総じて、島田は統治後の本島人の「台湾文学」を「故意に無視」するばかりか、統治以前の清代の文学や民間文学であったとしても、それらを軽視する態度を露にした。その上、清朝に生まれた台湾人を「支那人」と呼び、彼らの文学を「中国の地方文学史」の一環と位置づけ、さらには数百年にわたって海を越え台湾へやって来た漢人が、中国とは既に全く異なる生活様式を形成していることや、現地化、土着化の自己意識すらをも完全になおざりにした[302]。

最後に島田は「台湾的文学的過去、現在和未来」の中で、日本による台湾統治46年間の、在台日本人による文学表現を考察しているが、この文章と「関於在台湾的文学」はほとんど同じであった。島田は文芸に乏しい場所と考え「この地方では未だに文学的才能のある人物の登場と成長はない」と述べ、社会的にも文芸の軽視が習慣化し、「尊重されない場所に優れた作品は生まれない」とした。このような考えから、島田の在台日本人と本島人文学に対する評価はいずれも低く、本島人の文学に対しては「懸念すらうかがわせる」態度を示した。このほか台湾新文学運動に対し、島田は、これは中国白話文運動の影響を受けたもので、北京語と台湾語による2つの創作系統に分類することができるが、「しかし多くは模倣的な作品に留まり、優秀な作品はあまり多くはないようだ」とみている[303]。

島田の評価に対し楊雲萍は、『台湾日日新報』に掲載された「研究与愛」という一文で反論をしている。楊雲萍は、「私の心の中で若干不満に感じるのは、これらの研究者のうち、冷ややかで高飛車な態度、或いは機械的な態度や手法を有した者がいることである。“白話文”すら知らず、“台湾語”を解さないにも関わらず、“白話文”の作品の多くは模倣したものだと断言する。あるいは“台湾の旧習”をようやく研究したというところで、旧習が消え行くことが惜しいと思うことはないと言う」と、楊雲萍は遠まわしにこれらの「学者」に、なるべく好意的な理解と愛、謙虚な態度を維持するよう求めた[304]。

島田の「外地文学論」は楊雲萍ら台湾文人からの反発を呼んだ。最も有名なのは、島田の教え子である黄得時の恩師に対する批判である。黄得時は1932年にはすでに「一九三二年之台湾文学的検討」を発表している。この論文は、初めて今後の文学界において「年度回顧」をする雰囲気をもたらしたと見なされた。その後黄得時は台湾文壇で活躍し、最も注目を浴びたのは1941年以降相次いで発表された「台湾文壇建設論」、「輓近台湾文学運動史」、「台湾文学史序説」などの論文で、台湾を主題とした論述

---

[302]島田謹二、神田喜一郎著　張文薫訳「関於在台湾的文学」、『愛書』14、(1940年5月10日)、黄英哲編集『日治時期台湾文芸評論集雑誌編第三冊』に収録、國家臺灣文學館籌備處、(2006 年)、78-96ページ

[303]島田謹二著　葉笛訳「台湾的文学過去、現在和未來」、『文芸台湾』2巻2号、(1940年5月20日)、黄英哲編集『日治時期台湾文芸評論集雑誌編第三冊』に収録、國家臺灣文學館籌備處、(2006 年)、97-116ページ

[304]楊雲萍「研究与愛」、『民俗台湾』、1巻2号、(1941年5月)、43ページ

でもって島田謹二の「外地文学」論に応えている。

黄得時はまず「台湾文壇建設論」を発表し、島田の台湾人文学活動を蔑視する態度を批判している。文中で、台湾文学の「楽観」と島田の「悲観」的論調を鮮やかに対比させている。島田は台湾文学に対して悲観と軽視を感じており、外地文学はどれもまず内地文壇を沸き返らせ、そうしてからやっと外地に立脚するものであり、つまり台湾の文学はまず帝国中央に認められなければ重要視されないと考えていた。それに反して、黄得時は台湾で文学に従事する人を 2 つに分類し、1 つは「中央文壇に登るため、台湾を足がかりにする人」であり、もう 1 つは「中央文壇は全く気に留めず、台湾で独自の文壇を確立することに専念し、作家はそこで作品を発表することを楽しみとすると同時に、台湾全体の文化を向上発展させようと考える人」である。さらに後者に対し「絶大な敬意」を払っている。黄得時は台湾に根を張ることに賛同し、中央を目標とする文学者ではなかった。彼は、中央文壇を務めとする者は、台湾の現実を顧みず、異国情緒の題材で執筆することしか知らず、唯我独尊、自分勝手になりやすい。この言葉は明らかに、島田を含む『文芸台湾』の集団の、中央を目標とした文芸路線や、西川満の独断的な作風を批判したものである。

「台湾文壇建設論」は文学史論ではなく、文中では台湾文化の価値を軽視した人に対する批判のみで、島田謹二が論じた「台湾文学（史）」の属性問題に関しては触れられていない。当時の皇民化政策が地方文化を振興する時代の気分の中で、黄得時は台湾文化を日本の地方文化の一つとすることに反対してはいないものの、島田、西川満と異なるのは「我々は地方を蔑視していない、一貫して堅固に台湾という大地に根を張りつつ執筆するべき」と強調していることで、台湾はたとえ日本の地方文化だったとしても、「台湾独自の生活や社会があるはず」で、彼は台湾の歴史、地理、教育、風俗、人間味はしっかりと調査研究されるべきであると考えたのである[305]。

1 年後、黄得時は「輓近台湾文学運動史」を発表し、さらに 1 年を隔てて「台湾文学史序説」を発表、この 2 篇の論文では再び「地方文化」について述べられることはなく、「台湾文学史」のページを増やし、台湾文学の自らの主体的位置を確立した。これは黄得時の文学史観における大きな進展であると言える。

1942 年、「輓近台湾文学運動史」の中で、特に台湾新文学運動の突出した成果を高く評価している。台湾人の新文学の成果に対して、黄得時と劉捷は同様に「運動」という側面からとらえており、彼は台湾の新文学は「一つの運動として、多くの人々には昭和 7、8 年の出来事として意識され」、この 2 年後には文学界、文学に関心のない人にかかわらず、文学との関わりをもたらした。黄得時はその原因を 4 つ挙げている。

1. 日本内地の文壇文芸復興の刺激

---

[305]黄得時著　葉蔡蔡訳「台湾文壇建設論」、『台湾文学』、1 巻 2 号、(1941 年 9 月 1 日)、『日治時期台湾文芸評論集雑誌編第三冊』に収録、國家臺灣文學館籌備處、(2006 年)

2. 中国新文学運動の影響

3. 新聞雑誌の発展

4. 時代に共鳴できない知識遊民の現実逃避の現れ

この 4 つの原因に対して、黄得時はメディアの発展について特に強調している。その他の 3 点については掘り下げておらず、『台湾新民報』は 1932 年に発刊後、文芸面を提供し、台湾文学運動の主力となったとしている。彼は当時の『台湾新民報』では日本語および中国語がそれぞれ 1 ページを占め、一つは日本文学の系統をひき、もう一つは中国文学の潮流を継承し、双方の新しい考えの取り込みに務めたと強調している。このほか、黄得時は『福爾摩沙』、『台湾文芸』、『台湾新文学』の雑誌創刊の実情、およびその発刊主旨を説明しており、その中でも台湾文芸連盟の成立および『台湾文芸』創刊号の誕生は、「正式な文芸運動の出発」を表すとしている。また 1934 年から 1937 年の『文芸台湾』と『台湾新文学』が発行された 3 年間を「台湾新文学運動史の一時期とすることができる」とした。

黄得時の「輓近台湾文学運動史」は、ある種の写実的な文学観を呈し、この種の文学観は彼の『文芸台湾』と『台湾文学』に対する評価において表された。黄得時は次のように分析している。

> 『文芸台湾』の同人は 7 割が内地人で、同人同士の向上発展を唯一の目標としているが、反対に、『台湾文学』の同人は多くが本島人で、本島全体の文化向上のために、また新人に惜しみなく場所を開放し、真の文学道場となるよう努力している。そのため前者は、美を追求した結果趣味的要素が濃く、一見すると非常に美しいが、小ぢんまりと整い、その上現実の生活からかけ離れたものであるため、一部からの評価は決して高いものではない。反対に、『台湾文学』は徹底的にリアリズムを貫き通し、野生的で「覇気」や「魁偉」さが行間に満ち満ちている[306]。

黄得時は、『台湾文学』が野性味、覇気、力強さを有しており、これが徹底してリアリズムを貫いたことを肯定し、また彼は本島人のリアリズム新文学に対しても肯定を示した。総括すると黄得時は、40 年代大戦期の張文環、楊逵らの文学と 20 年代の頼和、30 年代までの新文学を繋げ、また殖民者と被殖民者の文学を分け、さらに島田に無視また蔑視された「台湾文学」をみごとに「補填」したのである。黄得時が肯定した新文学運動におけるリアリズム路線は、日本統治時代の台湾文学史に関する戦後の評価にも影響をおよぼした。リアリズム文学は台湾における文学スタイルのひとつというばかりでなく、その中には高度な反帝国、反封建という、文化に抵抗する意識を含んでいる。

1943 年、黄得時の「台湾文学史序説」では、彼の台湾文学史に対する観点が総括されている。黄得時は、台湾が文字による記録を始めてから 300 年あまり、オランダ、鄭成功、清朝への隷属、日本統治を通して台湾文学は政治的影響を受け、文学史の著作も各時代のそれぞれの外来統治者が及ぼす影響に対

---

[306]黄得時「輓近台湾文学運動史」、『台湾文学』、2 巻 4 号、1942 年 10 月、葉石濤の『台湾文学集 2 日文作品選集』に収録、春暉出版社、(高雄、1999 年)

応せざるを得ず、それが波及する範囲は極めて大きいと考えている。そのため黄得時は、台湾が「古来より統一国家を形成したことがない」ことで台湾文学史は大きな政治的影響を受け、それによって台湾文学史は「国民文学」あるいは国家文学史の理論をもって書き著すことが不可能なのだ、とはっきり示している。黄得時は台湾文学が国家文学なのかあるいは地方文学であるのかという本質的な問題を避け、文学史の執筆範囲および作家という問題から検討を始め、それらを5種類に区分している。

(1)　作者が台湾出身で、その文学活動（ここで述べるのは作品の発表およびその影響力、以下同様）が台湾で行われた。

(2)　作者が台湾以外の出身であるが、台湾に長く住み、その文学活動が台湾で行われた。

(3)　作者が台湾以外の出身で、一定期間だけ台湾で文学活動を行い、その後再び台湾を離れた。

(4)　作者が台湾出身であるが、その文学活動が台湾以外の場所で行われた。

(5)　作者が台湾以外の出身であり、さらに台湾に一度も足を踏み入れたことがなく、ただ台湾に関する作品を書き、台湾以外の場所で文学活動を行った。

基本的に黄得時は作家の民族（種族）問題を曖昧にし、どの言語で作品を著したか、国民精神を有するかどうか、という点にはこだわらなかった。その目的は島田謹二が引用した「国家文学」、即ち「国家、国民、国語、国民精神の統一」を原則とする制約を打ち破ることであり、また台湾の史実をもって台湾文学史の執筆範囲を区分しており、区分作業には細心の注意を払っていたと言える。黄得時は「台湾」の「現実」からを起点に、自らを顧みて「台湾」を完全な主体とし、いわゆる中国、日本の「外地文学」、地方文学あるいは「台湾文学」という分類を消し去った。政治に付随する問題から脱却し、台湾という土地で生まれた、本国日本のものとは異なる独特の文学全てを「台湾文学史」に収めた。彼は、「少なくとも台湾文学史を執筆した場合、その文学活動が台湾で行われたものでありさえすれば、原住民であれ日本人であれ、等しく文学史の範疇に含めるべきである」。としている[307]。

黄得時は台湾文学の性質を論述し、また台湾文学史著作の対象と範囲を分けた。島田が台湾文学を切り離して異なる殖民母国文学史の延長に分類したことへの不満がはっきりと分かる。黄得時は台湾の歴史をたどることから始め、台湾文学は清代及び日本文学の特徴とは異なることがはっきりしており、島田が炊き付けた「内地」と「外地」の従属関係の論争に踏み込んでいない。同時に黄得時は、台湾を主体として台湾自身の歴史から台湾の種族、環境、政治の多面性と独自性の様相を認識した。同時に長い歴史的な観点をもって、異民族間の融合、同化は経なければならない過程だとした。したがって台湾は清朝による200年余りの統治を経て平埔族と漢族が急速に融合し、日本による統治時代以降は血縁、文化面においてその識別が困難となった。このような融合から生まれた文学は、すでに海を越えたところの中国文学とは幾分違いが生じており、これが台湾文学の特色の一つにもなった。また、新しい外来異

[307]黄得時「台湾文学史序説」、『台湾文学』、3巻3号、(1943年7月)、葉石濤の『台湾文学集2日文作品選集』に収録、春暉出版社、(高雄、1999年)

文化の統治者が台湾古来の歴史や文化を消し去ろうという状況に直面した際、台湾人は歴史の記憶を求めて立ち上がり、歴史を説明する権利を守らなければならないとした。

つまりまとめると、皇民化期の台湾文学史の執筆については、島田の著作に関して言えば当時の政治社会情勢にさらに彼個人の独自の文学史観が加わっていたため、イデオロギー、文芸的主張、文化や国家民族アイデンティティ等の各方面において、異民族の知識人という生まれもっての立場的制限を脱却することができなかった。黄得時は台湾人という立場を活用して、「地方文化の振興」という新体制が放った文芸活動の空間を巧みに利用し、文壇に現れている文芸報国という風潮の中、文学を文学の本質と自主性に回帰させ、文学そのものから台湾人の精神を探し求めた。黄得時が台湾文学史を執筆する意義は、異文化殖民支配者が台湾文学を周辺化しようとする目的を徹底して阻止することと、同時に台湾文学の特殊性をもって、日本という異文化の下における台湾新文学史の刷新と執筆であった。

第五章　結論

1895 年、日本から来た異文化は、明の鄭成功時代以来中国文化が中心であった台湾を統治した。日本による殖民統治政策の下で、殖民政府は政治的強制力で日本文化を台湾に植え付けたものの、台湾に元来根付いている文化を完全に消滅させようとはしていない。それに加え、文化というものには本来強靭な生命力が備わっていることから、台湾自身の文化は異文化の中でその出口を求め、日本による 50 年間の統治を経て、日台間には異文化理解と多文化共生という現象が確かに生じたのである。台湾文学発展という側面から捉えてみると、抵抗、共生、共感という大きな 3 種類の異なった現象があらわれた。

第一節　日台異文化の親縁性と抵抗

日本文化と台湾の、中国の伝統を主体とした文化はもともと文化の親縁性を持つ。台湾と日本は古来より同一の政治体制下で発展を遂げたことはない。しかし東アジアの文明発展の過程において、同様に中国から来た漢文化圏の影響を受けている。日本文化の中国文化に対する異文化の理解と共生というものは、古代よりすでに始まっていたのだ。日本は中国文化に対する理解が比較的早く、かつ中国文化との共生の下で、日本独自の日本文化体系を作り出した。また、台湾が中国文化の影響を受けるのは日本と比較するとかなり遅い。しかし、台湾が中国文化の影響を受けたのが比較的遅いとは言え、台湾の中国文化は中国大陸本土の延長であり、言語上および漢詩を創作する文人も、みな「同文同種」の中国人であったことから、これはある種の「同文同種」の移植だといえる。そのため、台湾が日本統治時代に突入してからは、日本と台湾間の異文化理解は一種の融合とまた抵抗の現象を見ることができる。

日台間の異文化には親縁性が存在するものの、日本が殖民者という立場で台湾を統治してからは、日本文化に抵抗するという現象があった。台湾文学の漢詩の発展という点から見た場合、それは著作『台湾通史』で有名な連横に代表される。連横のほか、早い時期にアイデンティティを異文化統治に求めることから抵抗へと転換した台湾文人としては、頼和が代表される。このような転換は異文化の矛盾した感情を解きほぐしたタイプと見なすことができる。頼和は初期には民族アイデンティティのために、日本政府のプロパガンダを受け入れられなかったが、その後反日殖民統治からという立場から日台は融合すべきといった思想に転換した。さらに後期になって、頼和は文化面における矛盾した感情を次第に解きほぐし、その漢詩創作は日本殖民統治に対して抵抗を示すというスタイルへと向かっていった。

頼和、連横のほかにも、日本統治時代に日本の殖民統治に断固として反対し、その上漢詩創作で心の奥底から中国文化への傾倒を表現する台湾文人があった。このようなタイプの台湾文人は中国文化の漢詩を維持するため、日本統治時代に詩社を結成した。このような詩社と、日本人が加入し殖民統治者が背後で支持する詩社は異なり、彼らは日本から来た官紳らとは唱和せず、ただ中国文化の漢詩創作を維持することだけに従事した。同時に、日本異文化が台湾を統治することに反対する気持ちも表している。

なかでも 1902 年に創立した「櫟社」が代表的である。彼らにが漢詩を創作し続けたことは、漢詩作品が文化抵抗の象徴でもあり、また文化の命脈を繋ぐ偉大な事業だったためである。

台湾文人が漢詩でもって日本異文化に抵抗したことは、儒学が台湾で深く発展したことと関係がある。台湾では明の鄭成功時代から日本へ割譲される前まで、儒学が 200 年余りもの間伝わって発展してきたため、中国文化はすでに庶民生活に溶け込み、士大夫階級にとっては精神生活の主要な一部となっていた。儒学が庶民生活中に現れているのは、師を敬い教えを守る、親孝行し従順、家庭を重視する、祭祀を重視する等の習俗である。日本に割譲される 1894 年まで、清朝は台湾の最後の地方誌『恆春縣志』を編纂しており、割譲前後の様子が明らかにされている。清朝は終始全力を注いで台湾における儒学教育普及を行っていたため、日本統治時代に至って儒学が中国文化にアイデンティティを求めようとする主な力となった。これは、なぜ漢詩が台湾割譲後も日本異文化への抵抗の現象となって現れることになったのか、という説明でもある。

台湾文学において漢詩が日本文化に抵抗する精神的基礎は、中国明朝末期に清朝へ抵抗する思想構造に近い。すなわち中華民族が異民族による統治を受け入れないという思想である。台湾文人の日本異文化に抵抗するという思想は、呉濁流がその回顧録『無花果』の中で触れている。彼は、幼い頃もし自分の大陸の原籍地が正確に答えられれば、私塾の講師からすぐに褒められ、また講師がよく自分の祖父に対して「悪いことも最後までいけば良い事が訪れる、いつの日か必ず、回復し再興する」と言っているのを耳にした[308]。そのほか、呉濁流の小説『亜細亜的孤独』では、塾講師である彭秀才の部屋に孔子の肖像画が掛けられているところが描写されており、そのうえ、日本人統治の下でよく「文化人は尊敬されなくなった」、「我々の道は減退した」といった類の話がされ、「聖学が没落することを慨嘆した」。年越しの際、彭秀才も「大樹不沾新雨露、雲梯仍守旧家風。（大樹は新しい雨露もその身に残さない、雲梯はなおも古い家風を守る。）」という春聯でその願いを明らかにしている[309]。台湾文化が異民族による統治を受け入れない思想は、日本人もあらかた理解している。例えば、伊能嘉矩が日本統治時代初期の抗日について論及しているが、そこでは「台湾住民のうち漢民族は、大半が日本人に対し民族的な対立感情を抱いている。いわゆる中華民族の臣民が野蛮民族の統治下におかれるという恥辱であろう」。と述べている[310]。この種の抗日思想は、1920 年代に至って知識人らが世界の新思想傾向を吸収して変化するまで続いた。

台湾の古くからの文人は個人のほか、日本異文化へ抵抗するため詩社を結成し、中国文化を繋ぎとめるもう一つの砦とした。この点に関して台湾文学史の著作の中では、連横の『台湾詩乗』が日本統治時代における漢詩の発展を評価しており、『台湾詩乗・自序』の中では「領土に再び手が加えられ、人々は不安に揺れ動き、絶望し憤慨した。自らの祖先が日本人によって踏みにじられてきたという悲しみを

---

[308]呉濁流『無花果』、草根、（台北：1995 年）、10 ページ
[309]呉濁流『亜細亜的孤児』、遠景、（台北、1993 年）、5-12 ページ
[310]伊能嘉矩『台湾文化志』、中訳本下巻、台湾省文献会、（台北、1991 年）、475 ページ

高らかに歌い、堂々たる心意気で意気盛んに、勇気を奮い立たせたのだ。台湾の詩が今このように盛んであるのは、まさに時勢が作り出したものである」。と触れている。この一段落は、台湾割譲が台湾詩の繁栄へとつながり、また台湾詩のなかに「悲歌慷慨」という様式を作り出したことを指摘している。彼はまた『台湾詩乗』の編纂について、詩と史の間に発想があったと述べている。「詩であれ史であれ、盛んになれるし群れになれる。この文章を目にする物は、当時の国政外いかに疲弊していたかを推し量ることができるであろう！」[311]ここでは台湾文人が詩で歴史を書こうとしたかを説明し、漢詩の創作によって困難な時局を記録し、口に出せない胸中や、どうしても言わなければならない事を表現した。これらはいずれも、漢詩の中に何故日本異文化統治に対する抵抗の気持ちがあったかという原因を説明している。

日本統治時代、台湾文学の中の漢詩は日本異文化に対して抵抗しており、中華民族に立ち戻り異民族による統治を受け入れないという思想傾向があった一方で、新文化と対話するきっかけも見られた。殖民地という特殊な環境が、台湾文人らに台湾儒学と旧来の中国文化を積極的に保存しようとさせた。しかし台湾は日本の殖民地であるため、1920 年代に台湾文化の啓蒙運動が始まってからは、台湾文学は日本異文化統治の殖民地という経験し、またひとつ台湾新文学発展に新しい領域が与えられた。

第二節　異文化に対する理解、共生と再生

日本統治時代台湾文学の中の漢詩に日本異文化に抵抗するという現象が生まれたが、日本と台湾の文化の間には共に中国文化的要因による親縁性のため、台湾文学の中の漢詩発展という点からみると、抵抗の現象以外にも、日本異文化統治という新しい体験によって、日本異文化に対する理解と共生という現象も認められた。このような状況は 1920 年に台湾文化啓蒙運動が始まって以降も、なおも発展を続けていった。

本論文の研究によって、日本統治初期の日本と台湾の文人は共通の中国的要因のもと、日本人が始めて台湾を占拠した時（1895 年）には日本の官僚によって、台湾に関する漢詩作品が作られた。例えば郭水潭が「日本人が台湾で文学を開始した第一人者」と位置づけた森鴎外は、総督府陸軍軍医部長の地位で来台し、横川唐陽軍医とはかつて征台の戦の軍旅中に互いに詩文を応酬し吟詠の作があった。1896 年、日本の明治時代に漢詩壇を主導した森槐南は、伊藤博文総理大臣とともに視察のため来台した。彼の作品である「丙申六月巡台篇．随行記事」は七言の長篇の古詩であり、森槐南はその後も台湾で水野大路、土居香国と互いに詩を応酬した。伊藤博文もまた「台北旅館喜雨」の七言絶句、「台湾巡視中作」の七言律詩等の作品があり、これらは日本人が台湾を描写した最も早期の漢詩となった[312]。

---

[311]連横『台湾詩乗』、台湾省文献委員会、（南投、1992 年）
[312]羊子喬「巻 4 論述日僑与漢詩」、『南瀛文学家―郭水潭集』、台南県立文化局出版、（新営、1994 年）、370-372 ページ

この後、日本の官紳文人と台湾詩人の間の詩文の唱和、日本の当局的色彩の強い新聞に、その盛況を見ることができる。表面的には、日本の殖民当局と台湾の上層文人階級の間には既に暗黙の了解があったかのようであり、相互の訪問、酒宴、同題の作詩により、一種の官紳が寄り添い、同志が共に楽しむ雰囲気が存在していた。この他、以後に来台した日本の官僚と文人らもまた詩社を組織し、漢詩の交流活動を行った。主なものは玉山吟社、淡社、穆如詩社である。日本人の漢詩創作、あるいは台日人士間の作品の詠み合いは、いろいろの例で説明することができる。

前述の漢詩を媒介として、日台文人の間には融合するに足る背景と可能性があった。事実上、異文化の衝撃の下で、台湾では1920年代に台湾新文学運動が興っている。この運動の台頭は、日本異文化の刺激を受け、また日本異文化による統治によって、中国文化は台湾にとってまた違った類の異文化となった。この大きな2大異文化の衝撃の下で、台湾に台湾新文学運動が台頭したのである。

初めに、台湾文化の源は中国文化であるが、日本殖民統治によって隔てられた結果、中国文化は台湾にとってまた別の種類の異文化となった。歴史の根源と血縁的な親近性のため、台湾新文学運動台頭の要素は中国文化への思慕からきている。台湾新文学運動台頭という側面から見ると、中国異文化の要素は台湾新文学運動を出現させた原因の一つである。漢民族を主体とする台湾文化はその由来が中国文化にあり、日本に割譲されてからは、歴史の根源と血縁上の親近性から、台湾新文学運動台頭の重要な要素の一つとなった。それはすなわち中国文化に対する思慕から来ている。特に中国の五四新文学運動と台湾新文学運動には密接な関連性がある。しかし、中国を起源とする台湾文化もこの新文学運動が行われている時、当時台湾文人らが言う「祖国」からの協力を得ることはできなかった。

台湾新文学運動は中国から直接協力を得られなかったため、台湾の新文学運動は中国異文化に対して改めて解釈をするという新旧文学の争いが生じた。この論争の中で、新旧文学の陣営は互いに攻撃しあい、新文学側は中国五四新文学の概念をもたらし、また旧文学側は伝統的な中国文化を内包する文学を求めた。新文学側は中国五四新文学の概念をもたらしたが、台湾では中国文学の体系下で発展したわけではなく、異文化の下で台湾話文と郷土文学運動が再生した。

台湾新文学運動は台湾漢文白話文学の形成を促した。この白話文学は中国の北京語が主体となっている。ただ、台湾内部の方言は閩南語、客家話、原住民などその他の言語系統が存在するものの、その中でも閩南語の使用人口が最も多く、そのため台湾本土の文化啓蒙および新旧文学論戦の影響から、閩南語を主体とする文学も新しい理解と共生が見られた。これが台湾話文運動あるいは郷土文学論争とよばれるものである。台湾話文運動あるいは郷土文学と呼ばれる概念は、適切な時間、空間意識を基礎に造りだされたもので、同時に具体的な空間の下での台湾民衆を対象としている。この種の中国異文化に対する再生は台湾が殖民社会の下で、作家は自らの土地、言語へ回帰して文学創作にあたり、自然と文化復興をテーマとする意味が含まれた。新旧文学、台湾話文と郷土文学論争は、具体的な結論を得なかったものの、台湾文人は具体的な文学作品上で、彼ら個人の中国異文化に対する理解でもって、各種の異なる内容の台湾新文学作品を生み出した。そのため1920年代の台湾の新文学運動とは、実際は台湾文人

の中国新文化に対する再理解であった。

中国文化に対する再理解は台湾新文学革命運動へと展開したが、これは「漢文」の文学革命であり、「日本語文」の文学革命ではない。これは日本が台湾を統治する方針とは相反するものであるが、実際には台湾文化の抗日の一環である。しかし、このような抗日の新文学は、殖民体制内で日本異文化を理解した中における、ある種の日本文化との共生および再生による産物である。台湾の新文学運動は日本の殖民統治の下で、日本の資源略奪および統治の便宜を目的として導入された文化に直面して、台湾の新文学作家らはただ新しいものを良しとせず、反対に啓蒙主義の理性の真髄をしっかりと把握し、新旧文化の消長という現象を研究し批判した。台湾新文学作家の小説作品には、殖民者が来たことに対する抵抗、民俗問題、文化論述、社会主義などが著された。これらは台湾文学作家の啓蒙思想を起点とし、異文化の衝撃に対処する一方で、また同時に台湾の旧文化を観察し異なった反省を示した。

台湾新文学運動の台頭とは啓蒙思想における台湾新文化運動の一環であり、また台湾の武装抗日期後の体制内で日本殖民統治に反対を示す運動でもあった。この要素の下で台頭した台湾新文学作品の内容で、まず初めに現れるのは日本殖民統治に対する抵抗である。また、日本殖民統治に対する抵抗を表した新文学作品のほか、当時の啓蒙時代という中で、社会文化の論述において台湾旧社会に対する改革の期待が存在した。その中でも旧社会改革に対する問題は、女性の地位が見直され、女性という主題が新文学家が注目する一つの焦点となった。

また、台湾新文学運動を観察する中で社会主義の論述は、日本本国の右翼国家主義の発展によって、殖民地台湾における社会主義は階級闘争を中心とする民族運動となり、またたく間に総督府の監視下に置かれることとなった。1931 年前後には、ほとんどの左翼関係者が検挙、逮捕された。しかし、左翼政治運動に対する総督府の抑圧は、反対に社会主義を主張する運動家らを台湾新文学運動へと方向転換させた。台湾新文学運動下での社会主義思想の左翼文学は、日本殖民帝国の反対と弾圧により、台湾における発展は極めて困難となり、特に皇民化期に入ってからは全面的に禁止とされた。しかしながら皇民化期以前、社会主義思想の左翼文学は、依然として台湾新文学運動の重要な一部であった。

台湾新文学運動の異文化に対する対応と反省は、日本による台湾統治が終結するまで一貫して続いたが、皇民化期以前は、新文学作品が日本殖民統治に共感を示す作品は決して多くはなかった。皇民化期に皇民文学が登場するようになって、日本の異文化に対して高い共感度を示す作品が見られるようになった。数多くの新文学の内容を総合的に見てみると、いずれも台湾新文学運動は殖民統治の下での、中国というもう一つの異文化と日本異文化に対する再理解と共生であり、また同時に台湾本土文化の一種の反省と再生である。

最後に、中国というもう一つの異文化および日本異文化の再理解と共生に対し、台湾文学史の著書という面から考えると、台、日作家や学者の文学史意識の形成と差異が、台湾文学史に対して異なる歴史的評価と位置づけを生み出し、このような文学史の著書もまた異なった異文化の理解と共生を呈した。

台湾文人作家と学者は、およそ 1930 年代前半から台湾新文学運動を評価し始めている。1930 年代に

台湾文壇に台湾文学史の著作が登場し始めるが、その多くはかつて台湾新文学運動に参加した台湾文人と学者の手によるものであった。その多くは「転換期」、「躍進」という言葉でこの時の文学運動と思想の変化を形容するか、「本格化」または「深化」という言葉でその後の文芸理論と創作の発展を形容した。例えば、楊逵、劉捷、王詩琅らは各々が異なった論述を打ち出した。楊逵は積極的に内地に向けて台湾新文学運動の成果を紹介し、劉捷は1935年に台湾文学史を執筆したいという意向を発表した。彼は「文学史的手法を用いて、体系的な台湾文学の発展過程を参考資料として作り上げたい」。としている[313]。劉捷は、恐らく最も早く「文学史」という意識を明確に呈したであろう台湾人文学家である。彼は実際に、文学史を整理して書き上げるような意味合いの論文を書いているが、結局のところ時勢がそれを許さず、惜しくも彼の台湾文学史を執筆するという願いはかなわなかった。王詩琅は初めて賴和を「台湾新文学の父（或いは母）」と敬意を込めて呼び[314]、この呼称は1943年賴和がこの世を去った後に発行された『台湾文学』「賴和先生悼念特輯」の中で台湾作家からごく自然に受け入れおよび確認され、その後の台湾文学史におけるゆるぎない評価となった。

日本人によって著された台湾文学史については、1930年代にはその多くの日本人が自国の文学である日本文学について討論しているが、しかし台湾本島人による文学を考察する際には、自らの日本文学について触れることは少なかった。これは日本の作家や学者が言うところの「分開討論」である。ただし「分開討論」は、「台湾文学史」は必ずしも台湾、日本人文学を分けて著すということを意味するのではなく、また「台湾文学史」にはその内のどちらかの文学しか内包しないということでもなく、さらに島田謹二の言う「『台湾文学史』を単独で考える必要はない」という文学史観でももちろんない。島田謹二の観点は日本人の中でも相当に「特殊」であり、おそらく「分担研究」では島田の台湾文学観を解釈することはできないであろう。日本人文学史の執筆について、特に島田の学生である黄得時は、島田が日本人としての文学史観を提起した後、台湾人を主体として「地方文化の振興」の新体制が放った文芸活動の空間を巧みに利用し、文壇では文芸による報国の声が響く中、文学を文学の本質と自主性に回帰させ、文学自らに台湾人の魂を探求させた。黄得時が台湾文学史を執筆する意義は、異文化殖民者が台湾文学を片隅に追いやろうとする目的を徹底して覆すこと、同時に台湾文学の特殊性をもって、日本という異文化の下での台湾新文学史を刷新し執筆することであった。

台湾文学史は書き手の立場や国家、民族によって、台湾文学の位置づけの認識と見方が異なり、結果異なった台湾文学史が生まれた。日本という異文化からやって来た殖民者は、被殖民者の文学史に対し、意識的であろうとなかろうと、抑圧あるいは蔑視するような視線をあらわにした。また台湾の文学者は台湾話文、郷土文学、文芸の大衆化、台湾文学の独自性、民間文学遺産の整理、殖民地文学など各種の

---

[313]劉捷著　涂翠花訳「續台灣文學鳥瞰」、『台湾文芸』、2巻3号、1935年3月5日、黄英哲編集『日治時期台湾文芸評論集雑誌篇第一冊』に収録、國家臺灣文學館籌備處、（台北、2006 年）、212ページ

[314]王錦江「賴懶雲論-台灣文壇人物論（四）」、『台灣時報』、201号、1936年8月、訳文は李南衡の『賴和先生全集』、（日據下台灣新文學明集 1）明潭出版社、（台北、1979）、400ページ

問題に関する論議を通じて「台湾意識」が芽生え、台湾式の言語を用いて台湾の社会、風土、人間味、歴史を描写することを強化し、台湾の色合いをさらに加えようとした。彼らは台湾文学の独自性に気づき、他との違いに気付き、自己の共通点を認識し、しだいに台湾文学と呼ぶようになり、さらに進んで集団アイデンティティを構築したのである。台湾人自身による文学史の執筆は、台湾人作家が一種の血統を同じくする歴史の伝統と、総合的な台湾文学史観を確立しようと試み、総合的、自主的な意味を持つ「台湾文学」が徐々に確立し、ついに林瑞明が言うところの「特殊な歴史的条件下で、独自の一派を打ち立てた台湾文学が確立した。殖民帝国である日本文学に支配されるでもなく、漢文を使用した中国文学に括られるのでもない」[315]。

第三節　異文化に同化する台湾文学

台湾文学が日本殖民政府による異文化統治の下、抵抗、理解、共生の文学作品を生み出したほかにも、日本異文化に同化した台湾文学も存在した。そのうち漢詩の発展から見てみると、1937 年以後の皇民化期に至ると、日本の殖民政府による強力な政策によって漢詩創作における抵抗が減少するという傾向は見られず、むしろ一層強い反発傾向が表れた。また一方、アイデンティティーを日本に求める異文化の漢詩創作は 40 余年の同化教育の後、日本という異文化にアイデンティティーを見出す漢詩創作にも増加傾向が認められ、またそれに対する認識もより深いものとなった。

台湾文人は異文化の理解と共生の下で、皇民化政策による政治的圧力を受け、「漢体和魂」の漢詩を有していた。まず皇民化期におけるアイデンティティーを日本という異文化に求める漢詩創作においては、漢文を復興すべきとしながらも、同時にこの復興を日本への報国の手段としており、これにより文人には一種の矛盾した心理傾向が現れた。皇民化期の台湾文人は異文化の殖民統治下においても中国文化の伝統に従順で、中国文化の漢文を復興すべきだと考え、しかしまた一方では殖民統治下において、漢詩を利用して国に報いることも提唱した。ここでいう報国の対象とは日本であり、漢文の母国である中国ではない。殖民統治下における台湾文人の矛盾した感情を、一種の「漢体和魂」という漢詩に見出だすことができる。

「漢体和魂」の漢詩は日台間の異文化について、「同文同種」の主張、また共通の中国文化である漢体漢詩を用いることで、日本国家の精神を表している。異文化理解と共生の下での「漢体和魂」の漢詩において、その最も重要とするものは文化精神レベルに至り、根本的にアイデンティティーを日本文化に求めるとした精神的内容である。

皇民化期以後、アイデンティティーを日本に求め、さらに深く日本という異文化に転向した「漢体和魂」の漢詩である、このアイデンティティーを日本に求める御用作家と矛盾した感情を抱いた作家が存

[315]林瑞明「自序」、『台湾文学与時代精神』、允晨文化実業、（台北、1993 年）、8 ページ

在し、さらにその「漢体和魂」の作品についても、日本という異文化に対するアイデンティティーへの指向をさらに深化させていた。

台湾文学の中で日本という異文化にアイデンティティを求める漢詩については、「漢体和魂」の漢詩以外にも台湾新文学運動が台頭して後、皇民化期になって糞リアリズムの論争に伴い日本の異文化に同化した「皇民文学」が誕生した。

1937 年、日本殖民統治者はその統治を強化しようと皇民化政策を実施し、さらに漢文の使用を廃止させ、台湾文壇の漢文創作を中断、停止状態に追い込んだ。しかし、新しい皇民化という異文化による政治下でいわゆる皇民文学が登場するのであるが、台湾文人は日本語という異文化言語を使用して、台湾文化の主体性を守ろうと試み、ここから再び新しい台湾文学の様相というものが生み出された。このような皇民文学と台湾本土思想文学間でのしのぎ合いは、皇民化期の異文化における台湾文学の発展を生み出した。皇民化政策に対する台湾本土文学の抵抗は、主に張文環が創設した『台湾文学』が中心となっていた。またその一方で西川満を中心とする『文芸台湾』では、臨機応変に国策に対応しつつ皇民文学作品を提唱していた。皇民化期の台湾文壇における 2 つの相対する陣営は、ついには「糞リアリズム」論争を発生させた。

「糞リアリズム」論争は 1943 年 2 月に発生し、糞リアリズム論争期間中に「皇民文学」という言葉、そして一層成熟した皇民文学の作品が現れた。最も早く「皇民文学」という言葉が登場したのは、1943 年 5 月西川満が『文芸台湾』6 巻 1 号に「文芸時評」を掲載したときで、この文章中で「皇民文学」というスローガンが初めて叫ばれ、続く 6 巻 2 号でも引き続き「皇民文学」という言葉がみられた。続いて 1943 年 7 月『文芸台湾』6 巻 3 号に陳火泉の「道」が掲載された際、浜田隼雄がこの文章の選出理由を説明する際、同作品はこれまでの台湾文学にはなかったもので、台湾独自の「皇民文学」である、というように用いている。

事実上、「皇民文学」という言葉の登場以前、早くから皇民文学作品として認識されていたのは、1941 年の周金波の「水癌」および「志願兵」であった。その後 1943 年になり、陳火泉の作品「道」で、いかにして日本人になるかという「道」が探求されており、これは日本統治時代においていかに日本異文化を理解するかという皇民文学の代表作となった。『台湾文芸』に陳火泉の「道」が掲載された後、それに敵対する陣営は 7 月末に『台湾文学』上で大々的に王昶雄の小説「奔流」を発表するが、しかしながら「奔流」は戦後の皇民文学の研究において論議を呼ぶ作品となった。その原因とは、作者は皇民化政策下で表面的には皇民文学の特徴をみせているが、行間には皇民化に対する批判を忍ばせていて、最終的には台湾本土文化の精神を表していることにある。一般的に皇民文学作品の研究において、皇民文学作品として分類されるのは、陳火泉の「道」、周金波の「水癌」と「志願兵」、王昶雄の「奔流」の 4 篇である。そのうち「道」、「水癌」、「志願兵」の 3 編は皇民文学作品としての論議は比較的少ないとされ、「奔流」に関しては一度は皇民文学とみなされたものの、後にほとんどの研究者がそれを撤回し、これは日本政府による規制の下で書かざるを得ないという恥辱に耐えた作品であるとされている。

皇民文学の論争は1944年5月まで続いたが、『台湾文学』が1943年12月に停刊となり『文芸台湾』も1944年1月で発行を終了してしまった。それに取って代わったのが台湾文学奉公会が発行する機関誌『台湾文芸』であり、その後台湾文壇の台湾本土文化の声はここで途切れ、残ったのは翼賛皇民文学の作品だけとなった。雑誌『台湾文芸』は作家らを体制内に組み込んで政府の立場で創作を行い、政治のために文学を役立てたものであった。1945年、戦争が終結するに伴って日本が投降して台湾から撤退し、皇民化運動の宣言も終了、皇民文学も続くことはなかった。

結び　政治的異文化傾向に同化される台湾文学

最後に、台湾文学という側面から日本統治時代の異文化理解と多文化共生の問題を総括するにあたって、一般的な政治的に平等な立場から大分異なうものである。日本統治時代の台湾における日本の政治的立場は不平等なものであったため、異文化理解と多文化共生も非常に複雑な表情をみせていた。そのため、この問題を研究するには、ただ「殖民地支配を行う」側に立って「殖民地化する過程」を考察するのではなく、異文化という立場に立って研討すべきものと信じる。エドワード・サイードが述べたように、「多大な努力でもって宗主国と平等な弁論を行う」べきであると信じる[316]。

文化の発展という面からみれば、日本と台湾は本来東アジア文化圏の一部であった。日本と台湾は共に儒教と漢詩等の文化的資産を有する。ところで終戦前皇民化運動が推進された、これによって台湾人との文化統合がなされ。その目標は台湾文化を教育の発展とは日本殖民地下である台湾にとって色々と複雑かつ矛盾に満ちた産物であった。

[316]エドワード・W・サイード（E. Said）、大橋洋一訳、『文化と帝国主義 1』（*Culture and Imperialism*）、みすず書房、（東京、1998）、226～227ページ

参考文献

文学に関する史料

1. 『台湾日日新報』7686 号、1921 年 10 月 25 日；7687 号、1921 年 10 月 26 日
2. 魏清徳「国語学校運動会行」『台湾日日新報』1971 号、1904 年 11 月 26 日
3. 魏清徳「去年本月本日 明治先帝升遐萬邦哀吊四海縞素今際週年謹賦長句一篇用追聖徳表哀思之意云爾」『台湾日日新報』4724 号、1913 年 7 月 30 日
4. 魏清徳「恭賦紀元節」『台湾日日新報』3536 号、1910 年 2 月 11 日
5. 魏清徳「天長節恭賦」『台湾日日新報』4009 号、1911 年 11 月 3 日
6. 『台湾日日新報』6627 号、1918 年 12 月 1 日
7. 『台湾日日新報』6630 号、1918 年 12 月 4 日
8. 鄭金柱「提唱吟詩報国感賦」『詩報』第 189 号、1938 年 11 月、19 ページ
9. 呉雅齋「教読有感」『詩報』第 229 号、1940 年 8 月、8 ページ
10. 彭子信『風月報』第 8 期、1935 年 6 月、2 ページ
11. 黄漢琦『詩報』第 141 号、1936 年 11 月、7 ページ
12. 尤瑞『風月報』第 91、92 期 8 月号上下合併巻、1939 年 8 月、32 ページ
13. 黄啓棠『風月報』第 81 期 3 月号上巻、1939 年 3 月、33 ページ
14. 王恵卿『風月報』第 101 期正月号下巻、1940 年 1 月、26 ページ
15. 黄景岳『詩報』第 267 号、1942 年 3 月 7 日、15 ページ
16. 海楼『詩報』第 269 号、1942 年 4 月 3 日、12 ページ
17. 子襄『詩報』第 193 号、1939 年 1 月 21 日、3 ページ
18. 劉旭初『風月報』第 84 期 4 月号下巻、1939 年 4 月、21 ページ
19. 呂岳三『詩報』第 143 号、1936 年 12 月、4 ページ
20. 張春華『詩報』第 170 号、1938 年 2 月、7 ページ
21. 呉雅齋「國民精神」『詩報』第 261 号、1941 年 12 月 5 日、17 ページ
22. 『詩報』第 271 号、1942 年 5 月 6 日、1 ページ
23. 頼懶雲「貧民血一篇」『台湾文芸旬報』第 10 号、1922 年
24. 林献堂『数位典蔵与数位学習聯合目録』(1960 年)
    http://catalog.digitalarchives.tw/item/00/58/fd/c9.html、2013 年 3 月 16 日
25. 林献堂『数位典蔵与数位学習聯合目録』(1960 年)
    http://catalog.digitalarchives.tw/item/00/58/fd/58.html、2013 年 3 月 16 日
26. 葉栄鐘「数位典蔵与数位学習聯合目録」
    http://catalog.digitalarchives.tw/item/00/29/4d/6f.html、2013 年 4 月 2 日
27. 黄呈聡「論普及白話文的新使命」『台湾』第 4 年第 1 号、1923 年 1 月
28. 黄朝琴「続漢文改革論」『台湾』第 4 年第 2 号、1923 年 2 月、28 ページ
29. 「増刊『台湾民報』広告」『台湾』第 4 年第 4 号、1923 年 4 月、表紙

30. 陳炘「文学与職務」『台湾青年』1 巻 1 号、1920 年 7 月
31. 甘文芳「実社会と文学」『台湾青年』3 巻 3 号、1921 年 9 月、33-35 ページ
32. 陳端明「日用文鼓吹論」『台湾青年』3 巻 6 号、1921 年 12 月、33 ページ
33. 張我軍「致台湾青年的一封信」『台湾民報』2 巻 7 号、1924 年 4 月 21 日、10 ページ
34. 一郎「糟糕的台湾文学界」『台湾民報』2 巻 24 号、1924 年 11 月 21 日、6 ページ
35. 王敏川「奬勵漢文的普及」『台湾民報』2 巻 15 号、1924 年 12 月 1 日、1 ページ、10 ページ
36. 一郎「為台湾的文学界一哭」『台湾民報』第 2 巻 26 号、1924 年 12 月 11 日、5 ページ
37. 張我軍「請合力拆下這座敗草欉中的破旧殿堂」『台湾民報』3 巻 1 号、1925 年 1 月 1 日
38. 悶葫蘆生「新文学之商権」『台湾日日新報』第 8854 号、1925 年 1 月 5 日
39. 張我軍「揭破悶葫蘆」『台湾民報』3 巻 3 号、1921 年 1 月 21 日、2 ページ
40. 鄭坤五「致張我軍一郎書」『台南新報』第 8244 号、1925 年 1 月 29 日
41. 張我軍「文学革命運動以来」『台湾民報』3 巻 6 号-10 号、1925 年 2 月-5 月
42. 陳福全「白話文適用於台湾否」『台南新報』第 8432 号、1925 年 8 月 15 日
43. 張我軍「新文学運動的意義」『台湾民報』67 号、1925 年 8 月 26 日、20 ページ
44. 連温卿「言語之社会的性質」『台湾民報』2 巻 19 号、1924 年 10 月 1 日、13-14 ページ
45. 連温卿「将来之台湾話」『台湾民報』2 巻 20 号、1924 年 10 月 11 日、11-12 ページ
46. 連温卿「将来之台湾語（続前）」『台湾民報』2 巻 21 号、1924 年 10 月 21 日、11 ページ
47. 連温卿「将来之台湾語（続）」『台湾民報』3 巻 4 号、1925 年 2 月 1 日、14-15 ページ
48. 一郎「駁稻江建醮與政府和三新聞的態度」『台灣民報』2 巻 25 号、1924 年 12 月 1 日、5 ページ
49. 蔣渭水「可惡至極的北署之態度」『台湾民報』2 巻 5 号、1924 年 12 月 1 日
50. 前非「對於建醮之感言」『台湾民報』2 巻 24 号 1924 年 11 月 21 日
51. 簡順福「就此回的建醮而言」『台湾民報』2 巻 25 号、1924 年 12 月 1 日
52. 劍如「對於稻江的考察（上）・（下）」『台湾民報』2 巻 24・25 号、1924 年 11 月 21 日、1924 年 12 月 1 日
53. 賴和「鬪鬧熱」元には『台湾民報』68 号、1926 年 1 月 1 日賴和著・林瑞明編『賴全集（一）：小説卷』に収録、（台北：前衛、2000 年）、37－38 ページ
54. 賴和「棋盤邊」元には『台灣民報』68 号、1926 年 1 月 1 日
賴和著、林瑞明編『賴全集（一）：小説卷』に収録（台北：前衛、2000 年）、118 ページ、
55. 楊逵「模範村」彭小妍主編『楊逵全集 5 巻小説卷（Ⅱ研究中心籌備處）』、（台南：國立文化資產保存 1999 年）、100－106 ページ
56. 蔡秋桐「王爺豬」元には『台灣新文學』1 巻 3 号、1936 年 4 月 1 日、張恆豪主編『台灣作家全集：楊雲萍、張我軍、蔡秋桐合集』に収録、（台北：前衛、2004 年）、252 ページ
57. 蔡秋桐「王爺豬」元には『台灣新文學』1 巻 3 号、1936 年 4 月 1 日、張恆豪主編『台灣作家全集：楊雲萍、張我軍、蔡秋桐合集』に収録、（台北：前衛、2004 年）、256 ページ
58. 施懿琳編『楊守愚作品選集（上）』彰化県立文化中心、（彰化：1995 年）、38 ページ

59. 楊守愚『瘋女』、施懿琳編『楊守愚作品選集（上)』彰化県立文化中心、（彰化：1995 年）、38 ページ
60. 呂興昌編『許丙丁作品集（上）（下)』台南市立文化中心、(台南：1996 年)
61. 奇(葉榮鐘) 「発刊詞」『南音』創刊号、(193 年 1 月 1 日)
62. 楊逵「臺灣文壇の近情」『文學評論』2 巻 12 号、(1935 年 11 月 1 日)
63. 賴和「阿四」林瑞明編『賴全集（一)：小說卷』
64. 楊逵「靈籤」彭小妍編『楊逵全集第 14 巻：資料卷』
65. 列寧著 楊逵譯「社會主義與宗教」、彭小妍編『楊逵全集第十三巻：未定卷』、738-741 ページ
66. 台南州『台南州社會教育要覧』、(台南：台南州共榮會、1935 年)
67. 「本島人の皇民化こそ新台湾建設の第一義　上京の途次　小林総督車中談話」『台湾日々新報』、(1939 年 5 月 20 日）夕刊
68. 賴和「一桿（稱仔)」『台灣民報』92.93 号、(1926 年 2 月 14、21 日)
69. 朱點人「島都」『台湾新民報』400-403 号、(1932 年 1 月 30 日、2 月 6 日、2 月 13 日、2 月 20 日)
70. 賴和「惹事」『南音』第 1 巻 2、6、9 号 10 共同刊号、(1932 年 1 月 17 日、4 月 2 日、7 月 25 日)
71. 一村（陳虚谷）「放炮」（上）『臺灣新民報』336 号、（1930 年 10 月 25 日）、（中）『臺灣新民報』337 号、（1930 年 11 月 1 日）、（下）『臺灣新民報』338 号、（1930 年 11 月 8 日）
72. 呂赫若「牛車」『文學評論』第 2 巻 1 号、132-133 ページ
73. 濱田隼雄「小説〈道〉」『文芸台湾』6 巻 3 号、1943 年 8 月、142 ページ
74. 「文芸台湾賞」の広告、『文芸台湾』6 巻 4 号、1943 年 8 月
75. 周金波「水癌」『文芸台湾』第 2 巻 1 号、1941 年 3 月
76. 周金波「志願兵」『文芸台湾』2 巻 6 号、1941 年 9 月
77. 楊逵「父與子」原文の連載は『臺灣藝術』3 巻 1-3 号（1942 年 1－3 月）彭小妍編『楊逵全集』第 1 巻、劇巻、(台南市：文化保存籌備處、2001 年)、23－40 ページ
78. 楊逵「無醫村」『臺灣文學』第 2 巻第 1 號（1942 年 2 月）彭小妍編『楊逵全集』「小說卷」（Ⅱ)、293-298 ページ
79. 工藤好美「台湾文化賞と台湾文学」『台灣時報』279 号、1943 年 3 月、98-100 ページ
80. 濱田隼雄「非文学的な感想」『台湾時報 』第 280 号、1943 年 4 月、74-79 ページ
81. 張文環「台湾文学雑感」、陳千武訳『張文環全集』第 6 巻「隨筆集」(一)156 ページ
82. 西川満「文芸時評」『文芸台湾』第 6 巻第 1 号、1943 年 5 月、38 ページ
83. 世外民「糞りアりズムと偽ロマンチシズム」『興南新聞』、1943 年 5 月 10 日
84. 葉石濤「世氏へ公開狀」『興南新聞』第 4428 号、1943 年 5 月 17 日、第 4 版
85. 雲嶺「批評家寄せて」『興南新聞』、1943 年 5 月 24 日
86. 吳新榮「良き文章･惡しき文章」『興南新聞』、1943 年 5 月 24 日
87. 伊東亮(楊逵) 「糞リアロズムの擁護」『台湾文学』第 3 巻第 3 期、1943 年 6 月

88. 陳火泉「道」『文芸台湾』6 巻 3 号 1943 年 7 月
89. 王昶雄「奔流」『台湾文學』3 巻 3 号、1943 年 7 月 31 日
90. 醒民（黄周）「整理“歌謠”的一個提議」『台湾新民報』、1931 年 1 月、345 ページ
91. 「社説：台湾文学的整理和開拓」『台湾新民報』、1931 年 8 月 1 日、375 ページ
92. 葉栄鐘「巻頭言：前輩的使命」『南音』、1932 年 2 月
93. 劉捷「台湾文学の鳥瞰」『台湾文芸』、1934 年 11 月 5 日
94. 劉捷「続台湾文学鳥瞰」『台湾文芸』、1935 年 3 月 5 日
95. 劉捷「民間文學の整理及びその方法論」『台湾文芸―創刊号』、1935 年 11 月
96. 劉捷「台湾文学の史的考察一」『台湾時報』197 号、1936 年 4 月；「台湾文学の史的考察二」『台湾時報』198 号、1936 年 5 月；「台湾文学の史的考察三」『台湾時報』199 号、1936 年 6 月
97. 「編輯言」『台湾時報』、1935 年 9 月、190 ページ
98. 裏川大無「台湾雑誌興亡史（一）～（七）」『台湾時報』、1935 年 2 月～7 月、1935 年 10 月～12 月、183-188、191-193 ページ
99. 河崎寛康「関於台湾文化的備忘録（一）～（三）」『台湾時報』、1936 年 1 月～3 月
100. 志馬陸平（中山侑）「青年与台湾（一）～（十）」『台湾時報』、1936 年 2 月～11 月、1937 年 1 月、195 ページ、197-206 ページ
101. 島田謹二「佐藤春夫の（女誡扇綺譚）－」『華麗島文学志』」『台湾時報』、1939 年 9 月 1 日、237 ページ
102. 島田謹二「西川満的詩業―『華麗島文学志』」『台湾時報』、1939 年 12 月、240 ページ
103. 島田謹二「外地文学研究的現状」『文芸台湾』、1940 年
104. 島田謹二「南島文学誌」『台大文学』、1936 年 10 月
105. 楊雲萍著、葉蓁蓁訳「台湾文学之研究」『台湾芸術』、1940 年 5 月
106. 楊雲萍「研究与愛」『民俗台湾』、1941 年 5 月、43 ページ
107. 葉石濤編訳『台湾文学集日文作品選集』、高雄：春暉出版社、1999 年
108. 葉石濤編訳『台湾文学集 2 日文作品選集』、高雄：春暉出版社、1999 年
109. 黄英哲主編『日治時期台湾文芸評論集·雑誌篇』（全 4 冊）、台北：2006 年
110. 呉濁流『無花果』、台北：草根、1995 年
111. 呉濁流『亜細亜的孤児』、台北：遠景、1993 年
112. 劉捷著、涂翠花訳「續台灣文學鳥瞰」『台湾文芸』2：3、1935 年 3 月 5 日
113. 王錦江「賴懶雲論-台灣文壇人物論（四）」『台灣時報』201、1936 年 8 月

英語

1. Guo-Ming Chen & William J. Starosta. 1998. *Foundations of Intercultural Communication*. Allyn & Bacon.
2. Anne Marie Francesco & Barry A. Gold. 2000. *International Organizational Behavior. Prentice*. Hall College Div.
3. Gudykunst W. B. & Kim, M. S. 2003. *Communicating with Strangers: An APP.roach to Intercultural Communication*. McGraw-Hill.

4. Iris Varner & Linda Beamer. 2005. *Intercultural Communication in the Global Workplace*. (Third Edition) McGraw-Hill Ｗrwin.
5. Edward W. Said、 1994 . *Culture and Imperialism*、 New York： Vintage Books.

日本語

（一）専門書

1. 本名信行、竹下裕子、秋山高二、ベイツ・ホッファ編著『異文化理解とコミュニケ-ション 1 ことばと文化』、三修社、1994 年
2. 本名信行、竹下裕子、秋山高二、ベイツ・ホッファ、ブルックスヒル編著『異文化理解とコミュニケーション 2 人間と組織』、三修社、1994 年
3. 上原麻子「異文化間コミュニケーション研究の現状と課題」『異文化間教育』(異文化間教育学会) 10 号、1996 年
4. 石井敏、久米昭元、遠山淳、平井一弘、松本茂、御堂岡潔（編）『異文化コミュニケーション・ハンドブック:基礎知識から応用・実践まで』、有斐閣、1997 年
5. 細谷昌志（編）『異文化コミュニケーションを学ぶ人のために』、世界思想社、2006
6. 石井敏、久火昭元、遠山淳 『異文化コミュニケーションの理論 新しいパラダイムを求めて』、有斐閣ブックス、2001 年
7. チャールズ B. ブリブル『21 世紀に向けて異文化コミュニケーション』ナカニシヤ出版、2000 年
8. 伊佐雅子、池田理知子、灘光洋子、今井千景、吉武正樹、E.M. クレーマー、山田美智子、岩隈美穂『多文化社会と異文化コミュニケーション』、三修社、2002 年
9. 川上郁雄、鳥谷善史、『異文化理解と情報』、東京法令出版、2004 年
10. 奥野健男『日本文学史：近代から現代へ』、東京：中央公論社、中公新書、1970 年
11. 下村作次郎ほか（編）『よみがえる台湾文学：日本統治期の作家と作品』、東京：東方書店、1995 年
12. 中島利郎、河原功、下村作次郎、『日本統治期臺湾文学 文芸評論集 第 1 巻【1920 年･7 月-1935 年･1 月】』、東京：緑蔭書房、2001 年
13. 尾崎秀樹『近代文学の傷痕―旧殖民地文学論』東京：岩波書店、1991 年
14. 尾崎秀樹『旧殖民地文学の研究』、勁草書房、1971 年
15. 垂水千恵『台湾の日本語文学：日本統治時代の作家たち』、東京：五柳書院、1995 年
16. 川西政明『昭和文学史』、東京：講談社、2001 年
17. 神田喜一郎『日本における中國文學Ｉ-日本填詞史話』二玄社、1965
18. 三浦叶『明治漢文學史』、汲古書院、1998 年
19. 上沼八郎『伊澤修二』、吉川弘文館、1988 年
20. 河原功『台湾新文学運動の展開-日本文学との接点』、研文出版、1997 年
21. 中島利郎編・著『日本統治期台湾文学小事典』、東京：緑蔭書房、2005 年

22. 佐藤喜代治編『漢字講座 9 近代文学と漢字』、明治書院、1982 年
23. 張季琳『台湾における下村湖人―文教官僚から作家へ』、東方書店、2009 年
24. 菅野敦志『台湾の国家と文化 「脱日本化」・「中国化」・「本土化」』、勁草書房、2011 年
25. 陳光興／丸川哲史『脱帝国 方法としてのアジア』、以文社、2011 年
26. 安田敏朗『かれらの日本語 台湾「残留」日本語論』、人文書院、2011 年
27. 橋本恭子『『華麗島文学志』とその時代 比較文学者島田謹二の台湾体験』、三元社、2012 年
28. 和泉 司『日本統治期台湾と帝国の〈文壇〉―〈文学懸賞〉がつくる〈日本語文学〉』 、ひつじ書房 、2012 年
29. 河原功『翻弄された台湾文学 検閲と抵抗の系譜』、研文出版、2009 年
30. 『少年の日の覚悟 かつて日本人だった台湾少年たちの回想録』、桜の花出版、2010 年
31. 陳培豊『「同化」の同床異夢 日本統治下台湾の国語教育史再考』、三元社、2001 年
32. 陳千武／丸川哲史『台湾人元日本兵の手記小説集『生きて帰る』』、明石書店、2008 年
33. 竹林貫一（編）『漢學者傳記集成』、関書院, 1945 年
34. 神田喜一郎（編）『明治漢詩文集』、筑摩書房, 1983 年
35. 福島甲子三（編）『近世日本の儒學』、岩波書店、1939 年
36. 牧野謙次郎『日本漢学史』、世界堂、1928 年
37. 市川本太郎『日本儒教史』、汲古書院、1992 年
38. 岡井慎吾『日本漢文学史』、明治書院、1934 年
39. 岡田正之『日本漢文学史』、吉川弘文堂、1954 年
40. 戸田浩暁『日本漢文学通史』、武蔵野書院、1957 年
41. 猪口篤志『日本漢文学史』、角川書店、1984 年
42. 岡井慎吾『日本漢文学史』、明治書院、1934 年
43. 上沼八郎『伊沢修二』、東京：吉川弘文館、1988 年
44. 鷹取田一郎『大雅唱和集』、台北：台湾日日新報社、1921 年
45. 鷹取田一郎『新年言志』、台北：臺灣日日新報社、1924 年
46. 猪口安喜（編）『東閣倡和集』、東京：凸版印刷本所分工場印刷、1927 年
47. 尾崎秀真『鳥松閣唱和集』、台北：台湾日日新報社、1906 年
48. 近藤正己『総力戦と台湾―日本殖民地崩壊の研究』、東京都：刀山書房、1996 年
49. 井出季和太『台灣治績志』、台北：台湾日々新報、1937 年
50. 伊能嘉矩『台灣文化志』、東京：刀江書院、台灣省文獻委員會再出版、1991 年
51. 『台湾習俗』、台北：南天書局、1997 年
52. 伊能嘉矩『台湾文化志-中訳本下巻』、台北：台湾省文献会 1991 年
53. 赤松美和子『台湾文学と文学キャンプ―読者と作家のインタラクティブな創造空間』東方書

局、2012 年
54. 関正昭『日本語教育史研究序説』、東京：養成社、1997 年

（二）論文

1. 松永正義「郷土文学論争（1930～32）について」『一橋論叢』、第 101 巻、第 3 号、1989 年 3 月、PP.352-370
2. 李承機「殖民地期台湾人の「知」的体系一日本語に「横領」された「知」の回路」古川ちかし・林珠雪・川口隆行『台湾・韓国・沖縄で日本語は何をしたのか一言語支配のもたらすもの』東京：三元社、2007 年、PP.40-57
3. 下村作次郎「台湾近代文学の諸相一 1920 年から 1949 年一」関西大学審査学位論文、2004 年
4. 島田謹二「外地文學研究の現状」『文芸台湾』創刊号、1940 年、PP.40-43
5. 藤井省三「「大東亜戦争」期の台湾における読書市場の成熟と文壇の成立：皇民化運動から台湾ナショナリズムに至る道」、下村作次郎ほか（編）『よみがえる台湾文学：日本統治期の作家と作品』。東京：東方書店、1995 年、PP.73-107
6. 和 泉司「日本統治期台湾文壇における「女誠扇綺諫」受容の行方」『藝文研究』第 83 号、2002 年 12 月
7. 岡田 英樹「コメント:殖民地文学研究の横へのつながりを期待する 」『Ritsumeikan studies in language and culture』 13 巻 3 号、2001 年 12 月、PP.51-53
8. 星名 宏修「殖民地へのアプローチ・この十年(2)日本統治期台湾文学研究の現状―1990 年代をふりかえって」『 朱夏』 17 号、2002 年 9 月、PP.111-119
9. 藤井省三「活性化する台湾文学研究―島田謹二『華麗島文学志』から河原功『台湾新文学運動の展開』まで」『Eastern book review』206 号、1998 年 4 月、PP.7-11
10. 楊錦昌「アジアにおける〈国文学〉―台湾の〈日本文学研究〉の一端」『 国文論叢』32 号、2002 月 8 月、PP.26-39
11. 稲本朗「日拠時期台湾における日本語文学―川合三良「出生」と周金波「志願兵」」『 奈良教育大学国文』21 号、1998 年 3 月、PP.12-23
12. 葉石濤 、 藤井省三「私の台湾文学六〇年〔含解説〕」『新潮』99 巻 9 号 2002 年 9 月
13. 李郁〔ケイ〕「『台湾万葉集』を読む―「日本語人」の文学として 」『Bulletin of the Faculty of Education』、 Hiroshima University. Part 2、47 号、1998 年、PP.221-228
14. 李郁〔ケイ〕「《南方》の発見―台湾の日本語文学試論」『 Bulletin of the Faculty of Education』、 Hiroshima University. Part 2 、46 号、1997 年、PP.205-215
15. 黄振原「台湾時代の浜田隼雄―その人と作品」『文学と教育』32 号、1996 年 12 月、PP.17-31
16. 中島利郎」『西川満小説集 1』『同 2』葉石濤・陳千武訳―日本統治期台湾の日本人作家―西川満文学の復権」『Eastern book review』201 号、1997 年 11 月、PP.37-40
17. 中島利郎「日本統治末期の台湾文学 ： 台湾総督府情報課編『決戦台湾小説集 乾之巻/坤之巻』

の刊行」『The annals of Gifu Shotoku Gakuen University. Faculty of Foreign Languages』41 号、2002 年 2 月 28 日、PP.1-21
18. 林水福「日本文学史の不可欠の一章（特集 近代の日本と台湾(1)）『殖民地文化研究 』一号、2002 年、PP.189-192
19. 姚巧梅「殖民地台湾に見る女性像―佐藤春夫「女誡扇綺譚」における沈女と下婢」『社会文学』17 号、2002 年、PP.79-92
20. 柳書琴 、 青木 沙弥香［訳］「官製から民製へ(上)自我同文主義と興亜文学 」『 殖民地文化研究 』7 号、2008 年、PP.214-222
21. 柳書琴 、 青木 沙弥香［訳］「官製から民製へ(下)自我同文主義と興亜文学（特集 朝鮮・台湾・「満洲」」『 殖民地文化研究』8 号、2009 年、PP.201-210
22. 垂水千恵「台湾人プロレタリア作家楊逵の抱える矛盾と葛藤について 」『國文學 ： 解釈と教材の研究』54 巻 1 号、2009 年 1 月、PP.40-50
23. 垂水千恵「〈借り物〉の言語を駆使して―台湾の日本語文学から考える」『 日本文学』52 巻 4 号 52、2003 年 4 月、PP.41-47
24. 垂水千恵「試論 1930 年代台湾文学中的語言問題 ： 従郷土文学論戦到<<台湾文芸>>」『Journal of the International Student Center、 Yokohama National University 15』、2008 年、PP.21-31
25. 垂水千恵「Book Review 新たな台湾文学研究の可能性に満ちたテクストの発掘-『日本統治期台湾文字集成』(全二〇巻、第一期）」『Eastern book review』265 号、2003 年 3 月、PP. 30-33
26. 垂水千恵「台湾の言語状況と文学・戦前の台湾文学・呂赫若を中心に 」『Ritsumeikan studies in language and culture』13 巻 3 号、2001 年 12 月、PP. 25-31
27. 岡林稔「中村地平と台湾―「熱帯柳の種子」をめぐって」『社会文学』19 号、2003 年、PP. 99-111
28. 横山 茂雄「エッセイ 桃源への旅―日影丈吉と台湾」『 幻想文学』65 号、 2002 年 11 月、PP.162-175
29. 平出隆「伊良子清白の台湾日記」『文学』2 巻 4 号、2001 年 7 月、PP.136-139
30. Izumi Tsukasa「<彙報>「台湾文学」 を創造/想像する ： 日本統治期 「日本語文学」 からの考察」（平成 12 年度文学研究科 修士論文題目及び要旨）「 Journal of art and letters 」『藝文研究』80 号、 2001 年 6 月 1 日、P.118
31. 星名宏修「「血液」の政治学―台湾「皇民化期文学」を読む」『Bulletin of the College of Law and Letters、 University of the Ryukyus』7 号、2001 年 3 月、PP.5-54
32. 姚巧梅「佐藤春夫文学における台湾の位置―殖民地小説をめぐって 」『解釈』47 巻 1、2 号、2001 年 1 月、PP.47-56
33. 峯島正行「ふるさと台湾と尾崎さん」『大衆文学研究』2 号、PP.40-43、 2009 年 12 月
34. 高良留美子「真杉静枝と台湾経験―昭和文学の失われた輪(ミッシング・リング)」『 社会文学』29 号、2009 年、PP.49-56
35. 星名宏修「書評 柳書琴著『荊棘之道--台湾旅日青年的文学活動與文化抗争』」『殖民地文化研究』9 号、2010 年、PP.173-175

36. 王姿雯「坂口襦子と殖民地台湾における「受容」と「排除」をめぐって」『 東京大学中国語中国文学研究室紀要』11 号、2008 年 9 月、PP.16-39
37. 劉海燕「憧憬・移植・実践―台湾新文学における中国白話文の導入に関する一考察 」『Multicultural studies』10 号、2010 年 3 月、PP49-61
38. 横路啓子「在台内地人のプロレタリア文学 ： 1920 年代末の藤原泉三郎の諸作品を中心に」『天理臺灣學報』 21 号、2012 年 6 月、PP.13-24
39. 邱若山「佐藤春夫の台湾旅行--小田原事件への旅」『國文學 ： 解釈と教材の研究』53 巻 6 号、2008 年 4 月、PP.67-77
40. 横田由紀子「台湾日日新報社発行『まや子』について」『ヘカッチ』 5 巻 14 号、2010 年 5 月、PP. 41-44
41. 陳培豊「「同文」リテラシーがもたらした近代文学 ： 日本統治下、台湾の殖民地漢文が歩んだ自助再生の道」『ことばと社会 ： 多言語社会研究』 14 号、2012 年、PP.84-113
42. 劉淑如「「台湾の文学少女」黄氏鳳姿の生成をめぐって―西川満の出版戦略を軸として」『日本近代文学会北海道支部会報』10 号、2007 年 5 月、PP94-75
43. 林水福「台湾での遠藤文学 ： 私的追想とともに」『三田文学』[第 3 期] 91 巻 109 号、2012 年、PP. 303-307
44. Toshio Nakajima「 日本統治期台湾文学研究 日本人作家の系譜(山形編)―詩魂の漂泊・長崎浩」『The annals of Gifu Shotoku Gakuen University. Faculty of Foreign Languages』、2008 年 2 月 28 日、PP.47、49-75
45. 劉海燕「台湾新文学初期の発展とその軌跡に関する一考察」『Multicultural studies』8 号、2008 年 3 月、PP.197-211
46. 横路啓子「藤原泉三郎とその台湾時代―文学活動を中心に」『天理臺灣學報』20 号、2011 年 7 月、PP.27-40
47. 横路啓子「『台湾日日新報』「文芸」欄(1926-35)の役目--プロレタリア文学をめぐって」『天理臺灣學報』19 号、2010 年 9 月、PP.39-54
48. 陳萱「野上彌生子の殖民地台湾の旅--感覚描写を通じた台湾認識」『Studies of comparative literature. Hikaku bungaku kenkyu』96 号、2011 年 6 月、PP.51-68
49. 和泉司「〈皇民文学〉における〈国語〉と軍事動員--周金波「助教」ノート」『三田國文』 53 号、2011 年 6 月、PP.58-69
50. 和泉司「錯綜する『内』と『外』 ： 四〇年代台湾文壇における「蓮霧の庭」と龍瑛宗を中心に」『 三田國文』 44 号、2006 年 12 月、PP.1-28
51. Toshio Nakajima「日本統治期台湾文学研究 西川満論」『The annals of Gifu Shotoku Gakuen University. Faculty of Foreign Languages』 46 号、、 2007 年 2 月 28 日、PP.59-64
52. Toshio Nakajima「日本統治期台湾文学研究 「台湾文芸家協会」及『文芸台湾』的誕生」『岐阜聖徳学園大学紀要. 外国語学部編』45 号、2006 月 02 月 28 日、PP.91-108
53. Toshio Nakajima「日本統治期台湾文学研究 - 日本人作家の抬頭 - 西川満と「台湾詩人協会」

の成立」『岐阜聖徳学園大学紀要. 外国語学部編』44 号、2005 年、PP.43-54
54. 頼振南「「日本文学翻訳史概観 」(特集 台湾からみる日本--進化する国際コラボレーション) -- (台湾からみる日本の近現代) 」『Intriguing Asia 』69 号、2004 年 11 月、PP.146-160
55. 邱 若山「近代日本文学における台湾像」(特集 台湾からみる日本--進化する国際コラボレーション) -- (台湾からみる日本の近現代) 『Intriguing Asia』69 号、2004 年 11 月、PP.133-145
56. 豊田周子「王昶雄「鏡」試論--決戦時期台湾における自己探求の物語」(特集 台湾文学)『野草』 74 号、2004 年 8 月、PP.115-131
57. 王 恵珍「龍瑛宗の「原住民族発見」--花蓮体験がもたらした意味」(特集 台湾文学) 『野草』 74 号、2004 年 8 月、PP.95-114
58. 黄美娥 、松村昂［訳］、 塚田亮太［訳］「台湾古典文学史序説(1651～1945)」(特集 台湾文学)『 野草』 74 号、2004 年 8 月、PP. 58-94
59. 伊藤潔「書評と紹介 藤井省三・黄英哲・垂水千恵編『台湾の「大東亜戦争」--文学・メディア・文化』」『日本歴史』 670 号、2004 年 3 月、PP.115-117
60. 林虹瑛「日台会話新歌--台湾俗文学における日台混交文歌謡冊子 」『Asian and African linguistics』33 号、2004 年、PP.61-97
61. 浦谷 一弘「殖民地統治期〈台湾〉の探偵小説--林熊生『龍山寺の曹老人』」『 花園大学国文学論究 』32 号、2004 年 12 月、PP.57-89
62. 呉叡人「もう一つの「閉塞時代」の精神史--龍瑛宗・台湾戦前小説にみられるコロニアルな主体の形成 」『 Modern Japanese Literature 』75 号、2006 年 11 月、PP.167-178
63. 黄教子「台湾における日本語人たちの短歌--日本文のきしみの中で 」『國文學』51 巻 9 号、2006 年 8 月 PP.100-108
64. 和泉司「新垣宏一「砂塵」論 ： 「異文化を見る」という視点」『三田國文』38 号、2003 年 12 月、 PP.30-46
65. 陳萱「北原白秋の見た殖民地台湾 ： 華麗島への憧憬と異郷への反撥 」『比較文学・文化論集』 28 号、2011 年 3 月 31 日
66. 戸田一康「葉石濤作品に見られる日本文学の影響--太宰治を中心に 」『日本台湾学会報』 8 号、2006 年 5 月、PP.108-122
67. 鄭清文、三木直大[訳]「鋼製ワイヤロープの高度--李喬文学の達成[含 解説] 」『殖民地文化研究』 10 号、2011 年、PP. 213-222
68. 岡崎郁子「政治貧困・言語貧困社会を生きる台湾文学」『世界文学』 112 号、 2010 年 12 月、PP.47-55
69. 赤松美和子「台湾文芸営 50 年の歩み--台湾〈文学場〉構築への一考察」『Modern China studies』80 号、2006 年、PP.205-216
70. 葉石涛「私の台湾文学六〇年」『殖民地文化研究』5 号、2006 年、PP183-188
71. 荘植行「台湾における若者と日本のポピュラー文化の関連 」『Journal of the Literary Society of Yamaguchi University. Yamaguchi Daigaku Bungakukaishi 』56 号、2006 年、

PP.25-47
72. 黄英哲「日本統治時代の台湾通俗文学（提言 東アジアの日本文学・日本文化研究--その課題と可能性）」『Modern Japanese Literature』73 号、 2005 年 10 月、PP.267-270
73. 頼瑞琴「日本統治期の台湾文学における留学体験」『Studies in Chinese language and culture』5 号、2005 年 7 月 1 日、PP.1-28
74. 魏徳文「画像と文学--佐藤春夫「殖民地の旅」一日月潭、霧社、能高越を例として」『天理臺灣學報 』19 号、2010 年 9 月、PP.1-18
75. 和泉司「青年が「志願」に至るまで ： 周金波「志願兵」論」『三田國文』41 号、2005 月 6 日、PP.11-41
76. 張文薫「日本統治期台湾文学における「女性」イメージの機能性」『日本台湾学会報』7 号、2005 年 5 月、PP.90-105
77. 張季琳「楊逵と沼川定雄 ： 台湾人プロレタリア作家と台湾公学校日本人教師」『東京大学中国語中国文学研究室紀要』3 号、2000 年 4 月 15 日、PP.93-126
78. 丸川哲史「1948 年前後の台湾新文学運動にかかわる論争と脱殖民地化の問題--『新生報「橋」副刊』を中心に」『 日本台湾学会報』2 号、2000 年 4 月、PP.25-45
79. 垂水千恵「呂赫若の演劇活動--その演劇的挫折と文学への帰還」『日本台湾学会報』 2 号、2000 年 4 月、 PP.1-12
80. 井手勇「「皇民文学」という言葉の意味について」『Studies of worldviews 』9 号、2003 年 3 月、PP.27-41
81. 張修慎「「皇民文学」に見られる台湾知識人の意識--「志願兵」「奔流」と「道」 を中心として」『Journal of Taiwan studies. Gendai Taiwan kenkyu 』8 号、1999 年 12 月、PP.94-104
82. 葉石涛、西田勝[訳]「一台湾老朽作家の告白」『社会文学』13 号、PP.95-葉石涛、西田勝[訳]「一台湾老朽作家の告白」『社会文学』13 号、1999 年 6 月、PP.95-106
83. 池上貞子「「台湾文学この百年」藤井省三--台湾文学の輪郭をえがく」『Eastern book review』220 号、1999 年 6 月、PP.32-35
84. 林央敏[著]、Higuchi Yasushi「台湾語文学運動史論」『 Bulletin of the Faculty of Language and Literature』12 巻 2 号、1999 年 3 月 1 日、PP.133-154
85. TARUMI Chie「台湾新文学における日本プロレタリア文学理論の受容 ： 芸術大衆化から社会主義リアリズムへ」『Journal of International Student Center、 Yokohama National University 』12 号、2005 年 3 月、PP91-110
86. 下村作次郎、黄英哲「戦前期台湾大衆文学初探一台湾文学史の空白」『中国文化研究』16 号、1999 年、PP.1-19
87. 森岡ゆかり 74 号合評 「新しい台湾漢文学史の試み--黄美娥「台湾古典文学史序説」」『 野草』75 号、2005 年 2 月、PP.129-132
88. 山口守「越境する文学と言語--中国文学・台湾文学・日本文学（シンポジウム「台湾研究」とは何か?）」『日本台湾学会報』1 号、1999 年、PP.25-30

89. 唐[コウ]芸「中国文学あれこれ(81)日本統治期台湾作家・頼和―白話詩とその言語諸問題」『季刊中国』92 号、2008 年、PP.61-71
90. 島田謹二原「台湾文学的過去、現在和未来(上)」『文学台湾』2 巻 2 号、PP.159-166
91. 「關於日刊漢文欄廢止之總督談」『台灣時報』、第 210 号、「(國語普及紙面刷新紀念號)」、1937 年 4 月 1 日
92. 赤松美和子「台湾ポストニューシネマの日本表象―『悲情城市』（1989 年）から『海角七号』（2008 年）へ」『日本台湾学会報』15 号、2013 年、PP.40-54
93. 赤松美和子「李昂「迷園」・『自傳の小説』における「他者」なる主人公 ： 九〇年代の台湾文学への一考察」『お茶の水女子大学中国文学会報』30 号、2011 年、PP.115-130
94. 赤松美和子「『聯合報』『中國時報』二大新聞の文学賞(1976-1989)をめぐって ： 女性作家たちによる「私たち」の台湾文学の誕生」『大妻女子大学比較文化学部紀要』12 号、2011 年、PP.3-19
95. 赤松美和子「朱天心「想我眷村的兄弟們」にみる限定的な「私たち」」（お茶の水女子大学中国文学会）27 号、2008 年、 PP.83-96
96. 赤松美和子「戒嚴令期の臺灣における「文學場」構築への一考察―救國團の文藝活動と編集者痖弦」『日本中国学会報』（日本中国学会）59 号、2007 年、PP.232-247
97. 赤松美和子「李昂『自傳の小説』における語り」『お茶の水女子大学中国文学会報』23 号、2004 年、PP.49-65
98. 赤松美和子「在日本出版的臺灣文學目録」『臺灣文學研究集刊』（台湾：国立台湾大学台湾文学研究所）2 号、2007 年、PP. 175-192
99. 赤松美和子「五十年間台湾文芸營歴史的初探―作為台灣文學場域構築的觀察」『台湾史料研究』27 号、2006 年、PP.110-131
100. 盧濤「日本における異文化コミュニケーション研究の歴史と現状」、マネジメント研究、7 号、2007 年 3 月、PP.79-92

中国語

（一）専門書

1. 塞爾登(Selden、 Raman)、雷蒙.塞爾頓(Raman Selden)、彼得.維德生(Peter Widdowson)、彼得.布魯克(Peter Brooker)合著、林志忠譯『當代文學理論導讀』、台北：巨流出版銷、2005 年
2. 阮斐娜（Faye Yuan Kleeman）著、吳佩珍譯『帝國的太陽下：日本的台灣及南方殖民地文學』、台北：麥田、2010 年
3. 町田三郎著、連清吉譯『日本幕末以來之漢學家及其著述》』、台北：文史哲出版社、1990 年
4. 陳淑容『一九三〇年代郷土文学／台湾話文論争及其余波』、台南：台南市立図書館、2004 年

5. 中島利郎編『1930 年代台湾郷土文学論戦資料彙編』、高雄：春暉出版社、2003
6. 連横『台湾通史』、台北：幼獅文化 1978 年
7. 連横『雅堂文集』、南投：台湾省文献会 1992 年、294 ページ
8. 連横『台湾詩乗』、南投：台湾省文献委員会 1992 年
9. 沈雲『台湾鄭氏始末』南投：台湾省文献委員会 1995 年
10. 江日昇『台湾外紀』、台北：世界書局、1985 年
11. 王松『台陽詩話』上巻、南投：台湾省文献委員会 1994 年
12. 王詩琅『日本殖民體制下的台灣』、台北市：眾文、1980 年
13. 黃秀政、張勝彥、吳文星著『台灣史』、台北：五南圖書、2002 年
14. 吳文星『日據時期台灣社會領導階層之研究』、台北：正中書局、1992 年
15. 呂紹理『展示台灣ー權力、空間與殖民統治的形象表述』、台北：麥田出版社、2005 年
16. 宇野哲人著、張學鋒譯『中國文明記. 第二部分、一、中國之家族制度』、北京：光明日報出版社、1999 年
17. 町田三郎著、連清吉譯：《日本幕末以來漢學家及其著述』、台北：文史哲出版社印行、1992 年
1. 張寶三、楊儒賓編『日本漢學研究初探』、台北：喜馬拉雅基金會、2002 年
2. 張寶三、楊儒賓編『日本漢學研究續探：思想文化篇』、台北：台灣大學出版中心、2005 年
3. 古繼堂『台灣小說發展史』、台北：文史哲出版社、1989 年
4. 李瑞騰『台灣文學風貌』、台北：三民書局、1994 年
5. 宋澤萊『台灣文學三百年』、新北市：INK 印刻文學生活雜誌出版、2011 年
6. 林載爵『台灣文學的兩種精神』、台南：南市文化、1994 年
7. 胡民祥編『台灣文學入門文選』、台北：前衛出版社、1989 年
8. 施 淑『日據時代台灣小說選』、台北：前衛出版社、1992 年
9. 陳芳明『左翼台灣：殖民地文學運動史論』、台北：麥田出版社、1998 年
10. 許俊雅『日據時期台灣小說研究』、台北：文史哲出版社、1995 年
11. 許俊雅 編 《日據時期台灣小說選讀』、台北：萬卷樓圖書、1998 年
12. 荊子馨（Leo Ching）『成為「日本人」：殖民地台灣與認同政治』、台北：麥田出版社、2006 年
13. 彭瑞金『台灣新文學運動四十年』、台北：自立晚報社文化出版部、1992 年
14. 游勝冠『台灣文學本土論的興起與發展』、台北：前衛出版社、1996 年
15. 梁明雄『日據時期台灣新文學運動研究』、台北：文史哲出版社、1996 年
16. 張金墻『斷裂與再生《台湾文芸》研究（1964～1994）』、台南：南市文化、1999 年
17. 葉石濤『台灣文學史綱』、高雄：文學界、1998 年
18. 葉石濤『台湾文学入門』、高雄：春暉出版、1997 年
19. 葉石濤編譯『台灣文學集』、高雄：春暉出版社、1992 年
20. 葉石濤『台灣文學的悲情』台北：派色文化出版社、1990 年

21. 葉石濤『台灣文學的困境』、高雄：派色文化出版社、1992 年
22. 葉石濤『文學回憶錄』、台北：遠景出版社、1983 年
23. 葉石濤『台灣文學的回顧』、台北：九歌出版社、1983 年
24. 鍾肇政『鍾肇政回憶錄（一）』、台北：前衛出版社、1998 年
25. 鍾肇政『鍾肇政回憶錄（二）』、台北：前衛出版社、1998 年
31. 方孝謙『殖民地台灣的認同摸索』、台北：巨流圖書、2001 年
32. 吳文星『日據時期台灣師範教育之研究』、台北：國立台灣師範大學歷史研究所、1983 年
33. 林瑞明『台灣文學的歷史考察』、台北：允晨文化出版社、1996 年
34. 林佛國《瀛社創立六十周年紀念集．瀛社簡史》、台北：瀛社、1969 年
35. 曾笑雲編《東寧擊鉢吟錄前後集》、前集は 1937 年出版、後集は 1939 年出版
36. 林欽賜編《瀛洲詩集》、台北：台灣詩人名鑑刊行會、1932 年
37. 黃洪炎編《瀛海詩集》、台北：台灣詩人名鑑刊行會、1940 年
38. 江寶釵《臺灣古典詩面面觀》、台北：巨流、1999 年
39. 施懿琳《從沈光文到賴和：台灣古典文學的發展與特色》、高雄：春暉出版社、2000 年
40. 余美玲《日治時期臺灣遺民詩的多重視野》、台北：文津、2008 年
41. 李郁蕙《日本語文學與台灣：去邊緣化的軌跡》、台北：前衛出版、2002 年
42. 中島利郎編《一九三〇年代臺灣鄉土文學論戰資料彙編》、高雄：春暉出版、2003 年
43. 河原功著、莫素微譯《台灣新文學運動的展開：與日本文學的接點》、台北：全華、2004 年
44. 陳淑容《一九三〇年代鄉土文學/臺灣話文論爭及其餘波》、台南：南市圖書、2004 年
45. 黃美娥《重層現代性鏡像：日治時代臺灣傳統文人的文化視域與文學想像》、台北：麥田出版、2004 年
46. 黃美娥《日治時期臺北地區文學作品目錄》（上）（下）、台北：北市文獻會、2003 年
47. 黃俊傑著・臼井進訳『台湾意識と台湾文化-台湾におけるアイデンティティーの歴史的変遷-』、東方書店、2009 年
48. 鄭成功、鄭経、『延平二王遺集』、台北：世界、1957 年
49. 王詩琅『日本殖民地体制下的台湾』、台北：衆文圖書、1980 年
50. 林瑞明編『賴和漢詩初編』、彰化県立文化中心、1994 年
51. 陳翠蓮「日拠時期台湾文化協会之研究：抗日陣営的結成与瓦解」、台北：1986 年
52. 黃建業編『跨世紀台湾電影実録 1898-2000』、台北：2005 年
53. 黃朝琴『我的回憶』、黃陳印蓮出版、1981 年
54. 葉栄鐘『台湾人物群像』、台北：晨星出版 、2000 年
55. 藍博洲『日拠時期台湾学生運動(1913-1945)』、台北：時報文化出版、1993 年
56. 史明『台湾人四百年史（上)』、台北：1998 年
57. 黃煌雄『蒋渭水伝ー台湾的先知先覚』、台北：1992 年
58. 栄鐘『日拠下台湾政治社会運動史（下)』、台中：2000 年
59. 張純甫『張純甫全集　第 4 冊』新竹市立文化中心、新竹：1998 年

60. 張漢裕主編『蔡培火全集六台湾語言相関資料（下)』、台北：財団法人呉参連台湾史料基金会、2000 年
61. 中島利郎編『1930 年代台湾郷土文学論戦資料彙編』、高雄：春暉出版社、2003 年
62. Joseph Conrad（康拉德）著・鄧鴻樹訳『黑暗之心』、台北：聯経、2006 年
63. 張恆豪主編『台湾作家全集：翁鬧、巫永福、王昶雄合集』、台北：前衛出版社、1990 年
64. 陳芳明『殖民地台灣－左翼政治運動史論』、(台北：麥田出版、1998 年)
65. 施淑「文協分裂與 30 年代初台湾文芸思想的分化」『兩岸文學論集』、台北：新地出版社、1997 年
66. 警察沿革誌編纂委員会　王詩琅訳『台灣社會運動史：文化運動』、台北県：稲郷、1988 年
67. 戚嘉林『台灣史』第四冊、台北：農学社、1998 年
68. 呉文星『治時期台灣的社會領導階層』、台北：五南図書、2008 年
69. Tsurumi 著、林正芳訳『日治時期台湾教育史』、宜蘭：仰山文教基金会、1999 年
70. 呉密察『唐山過海的故事－台灣通史』、台北：国立台湾大学出版社、1998 年
71. 連横『台灣詩乘』、南投：台灣省文獻委員會、1992 年
72. 楊雲萍『連雅堂先生相関論著選輯（上)』、南投：台湾省文献委員会、1992 年、1-4 ページ
73. 『六十年前台湾俗文学』、台北：東方文化書局、1976 年
74. 黄英哲編集『日治時期台湾文芸評論集雑誌篇第一冊』、台北：國家臺灣文學館籌備處、2006 年
75. 黄得時『評論集』、板橋：台北縣立文化中心、1993 年
76. 台湾教育会編『台湾教育沿革誌』上・下、台北：南天書局出版、1995 年
77. 李園會「日據時期台湾教育史」、台北：国立編訳館、2005 年

（二）論文

1. 張簡昭慧「台灣殖民文學的社會背景研究-以吳濁流文學、楊逵文學為研究中心」中國文化大學日本研究所碩士論文、1987 年
2. 張文蕪「1930 年代台湾文芸界発言権争奪一《福爾摩沙』再定位」『台湾文学研究集干 1」』創刊号、PP.105－124、2006 年 2 月
3. 垂水千恵「為了台灣普羅大衆文学的確立一楊逵的一個嘗試」柳書琴・邱貴芬主編『後殖民的東亜在地化思考』台南：国家台湾文学籌備處、2006 年、PP.113－130
4. 陳明娟「日治時期文學作品所呈現的台灣社會-賴和、楊逵、吳濁流的作品分析」東吳大學社會學研究所士論文、1989 年
5. 黄得時「台灣新文學運動概觀」『台北文物』4：2、1955 年 8 月、51 ページ
6. 柳書琴「誰的文學？誰的歴史？--日據末期臺灣文壇主體與歴史詮釋之爭」『新地文學 4』、2008 年 6 月、38-78 ページ、PP.41-88 ページ
7. 柳書琴「傳統文人及其衍生世代：臺灣漢文通俗文藝的發展與延異(1930-1941)」『臺灣史研究』14：2、2007 年 6 月
8. 松永正義〈關於鄉土文學論爭（1930～32）〉、葉笛譯、《台灣學術研究會誌》第四期、1989 年 12 月

9. 黃美娥〈日治時代臺灣詩社林立的社會考察〉《臺灣風物》第四十七卷第三期、1997 年 9 月、43-88 ページ
10. 黃美娥〈北台第一大詩社－日治時期的瀛社及其活動〉（中央大學第六屆近代中國學術論文研討會、2000 年 3 月 24~25 日）。
11. 黃美娥：〈從詩歌到小說--日治初期臺灣文學知識新秩序的生成〉《當代》、2006 年 1 月、42-65 ページ
12. 黃美娥〈差異/交混、對話/對譯：日治時期台灣傳統文人的身體經驗與新國民想像（1895~1937）〉《中國文哲研究集刊》28 期、2006 年 7 月、81-119 ページ
13. 黃美娥〈日、臺間的漢文關係：殖民地時期台灣古典詩歌知識論的重構與衍異〉《臺灣文學研究集刊》第 2 號、2006 年 11 月、1-32 ページ
14. 黃美娥、陳盈達：〈百年吟聲、風雅柢柱：瀛社百年活動簡史〉《臺北文獻直字》、2008 年 12 月、PP. 25-92 ページ
15. 陳培豐、〈日治時期的漢詩文、國民性與皇民文學-在流通與切斷過程中走向純正歸一〉、文章收入成功大學編印《跨領域的臺灣文學研究學術研討會論文集》（臺南：國家臺灣文學館、2006 年）
16. 黃美娥〈日、臺間的漢文關係：殖民地時期台灣古典詩歌知識論的重構與衍異〉《臺灣文學研究集刊》第二号、2006 年 11 月、PP. 1-32 ページ
17. 吳文星〈日據時期臺灣總督府推廣日語運動初探〉（上）《台灣風物》37 卷、第 1 期、PP. 1-31 ページ、1987 年；（下）《台灣風物》第 37 卷、第 4 期、1987 年、PP. 53-86
18. 柯喬文〈殖民話語與集體記憶--以「三六九小報」（1930-35）古典小說為考察〉《島語》第 3 期、2003 年、PP. 66-73
19. 施懿琳〈日治中晚期臺灣漢儒所面臨的危機及其因應之道：以彰化「崇文社」為例〉『第一屆臺灣儒學研究國際學術研討會論文集（上冊）』臺南：成功大學、1997 年、359-392 ページ
20. 楊永彬〈日本領臺初期日臺官紳詩文唱和〉所得、文章收入若林正丈、吳密察主編《臺灣重層近代化論文集》、臺北：播種者文化、2000 年、115 ページ
21. 陳建忠「發現台灣：日治到戰後初期台灣文學史建構的歷史語境」『台灣文學評論』1：1、2001 年 7 月 1 日
22. 薛綏之「旅台雜記」『北方雜誌』、第 6 期、1947 年 6 月、32 ページ
23. 鄭梅淑「日據時期台灣公學校之研究」台中：東海大學歷史研究所碩士論文、1988 年
24. 王泰升「台灣日治時期的法律改革」『台灣研究叢刊』、台北：聯經、1999 年
25. 謝明如「日治時期台灣總督府國語學校之研究（1896-1919）台北：國立台灣師範大學碩士論文、2007 年
26. 沈慶昊著、金培懿譯「關於日本漢文學歷史展開之一考察：與韓國漢文學作比較」張寶三、楊儒賓編『日本漢學初探』、台北：財團法人喜瑪拉雅研究發展基金會、2002 年、261-262 ページ
27. 橋本恭子「島田謹二《華麗島文學志》研究-以「外地文學論」為中心-」清華大學中國文學研

究所碩士論文、2003 年
28. 鐘美芳《日據時代櫟社之研究》東海大學歷史研究所碩士論文、1986 年
29. 林正珍《近代中日社會思想中的人性論-以康有為及福澤諭吉為中心》國立臺灣師範大學歷史研究所博士論文、1991 年
30. 許俊雅《日據時期台灣小說研究》、臺灣師範大學國文研究所、1992 年
31. 柳書琴《戰爭與文壇：日據末期台灣的文學活動(1937.7-1945.8)》、台灣大學歷史學研究所、1994 年
32. 楊永彬《台灣紳商與早期日本殖民政權的關係：1895 年~1905 年》、臺灣大學歷史學研究所、1996 年
33. 廖振富《櫟社三家詩研究－林癡仙、林幼春、林獻堂》師範大學國文研究所博士論文、1996 年
34. 李國生《戰爭與台灣人：殖民政府對台灣的軍事人力動員(1937~1945)》、台灣大學歷史學研究所、1997 年
35. 吳育琪《台灣南社研究》國立成功大學中國文學系研究所碩士論文、1997 年
36. 游勝冠《殖民、進步與日據時代臺灣文學的文化抗爭》、清華大學中文博士論文、2000 年
37. 郭怡君〈《風月報》與《南方》通俗性之研究〉、靜宜大學中國文學系碩士論文、2000 年
38. 李文卿〈殖民地作家書寫策略研究-以皇民化運動時期《決戰台灣小說集》為中心〉、暨南大學中國語文學系碩士論文、2001 年
39. 高嘉謙〈國族與歷史的隱喻-近現代武俠傳奇的精神史考察(1895-1945)〉、暨南大學中國語文學研究所碩士論文、2001 年
40. 川路祥代《殖民地台灣文化統合與台灣傳統儒學社會（1895~1919）》、成功大學中文研究所博士論文、2002 年
41. 柯喬文《「三六九小報」古典小說研究》、南華大學文學研究所、2003 年
42. 呂淳鈺《日治時期台灣偵探敘事的發生與形成：一個通俗文學新文類的考察》、政治大學中國文學研究所、2003 年
43. 林宗賢《十九世紀末日本輿論界之台灣論述－以福澤諭吉與內藤湖南為研究對象》國立政治大學日本語文學系碩士班論文、2006 年
44. 張明權《同文政策下的台灣漢詩壇（1931-1945）》靜宜大學中文所碩士論文、2008 年
45. 頼子清「古今台湾詩文社（一)」、『台湾文献』10:3、1959 年 9 月、90－96 ページ
46. 廖一瑾『台湾詩史』、293 ページ、台北：文史哲出版社、1999 年 3 月
47. 聞樵「漪蘭吟社」『台北文物』4 巻 4 号、77 ページ
48. 黄美娥「北台第一大詩社-日治時代的瀛社及其活動」『古典台湾：文学史・詩社・作家論』、台北：國立編譯館、265-273 ページ
49. 張明権「同文政策下的台湾漢詩壇（1931-1945)」静宜大学中文所碩士論文、2008 年
50. 許俊雅『台湾写実詩作之抗日精神研究 1895-1945 年之古典詩歌』、台北：国立編訳館、1997 年
51. 施懿琳「日拠時期鹿港正氣詩研究」国立師範大学国文研究所碩士論文、台北：1986 年

52. 呉文星「近代台湾的社会変遷」『大学校院通識教育巡迴講座全国性通識教育巡迴講座歴史領域講座講稿』、1993 年 2 月、1-10 ページ
53. 鄭梅淑「日拠時期台湾公学校之研究」東海大学歴史研究所碩士論文、台中：1988 年
54. 李光智「「国定」課程之研究：台湾日治時期公学校課程的形成与発展（1895-1945）」、64 ページ
55. 黄美娥「日治時代台湾詩社林立的社会考察」『台湾風物』第 47 巻、第 3 期、1997 年、68-83 ページ
56. 羊子喬「巻四、論述. 日僑与漢詩」『南瀛文学家-郭水潭集』、新営：台南県立文化局出版、1994 年、370-372 ページ
57. 郭水潭「日僑与漢詩」『台北文物季刊』4 巻 4 号、台北：1956 年、105 ページ
58. 王幼華「日治時期苗栗県伝統詩社研究-以栗社為中心」『国立中興大学中国文学系碩士在職専班碩士論文』、台中：2000 年
59. 黄得時「台湾新文学運動概観　上」『台北文物』、3 巻 2 期、1954 年 8 月、13-15 ページ
60. 葉石濤「台湾新文学運動可分為幾個階段？(上)」『台湾文学入門』、20 ページ、高雄：1997 年
61. 廖漢臣「新舊文学之爭— 台湾文壇一筆流水帳」『台北文物』、3 巻 2 期、1954 年 8 月、26-27 ページ
62. 河原功著　葉石濤訳「台灣新文學運動的展開－日本統治下在台灣的文學運動」『文學台灣』、1-3 期、1991 年 12 月-1992 年 3 月-6 月
63. 黄邨城「談談「南音」」『台北文物』3 巻 2 期、1954 年 8 月
64. 施學習「台灣藝術研究會成立與福爾摩莎創刊」『新文學雜誌叢刊 2』、65-71 ページ
65. 施淑「書齋、城市與鄉村-日據時代的左翼文學運動及小說中的左翼知識份子」、兩岸文學論集、50-83 ページ
66. 林瑞明「日本統治下的臺灣新文學運動-文學結社及其精神」『文訊月刊』29 期、1987 年 4 月 1 日、35-50 ページ
67. 何義麟「皇民化政策之研究-日據時代末期日本對台灣的教育政策與教化運動」台北中國文化大學日本研究所修士論文、1986 年、4-7 ページ
68. 陳培豐「重新解析殖民地台灣的國語「同化」教育政策－以日本的近代思想史為座標」『文化研究月報』25 期、2003 年 3 月 25 日 2003 年 3 月 25 日　ネット版、資料取る時間 2010 年 12 月 10 日、http://www.cc.ncu.edu.tw/~csa/oldjournal/25/journal_park166.htm
69. 中島利郎著、彭萱訳「日治時期台灣研究的問題點－根據台灣總督府的漢文禁止以及日本統治末期的台語禁止為例」『文學台灣』46 期、2004 年 4 月、300-301 ページ
70. 河原功著、松尾直太訳「1937 年臺灣文化、臺灣新文學狀況--圍繞著廢止漢文欄與禁止中文創作的諸問題」（台灣文學史書寫）國際學術研討會論文、臺南：成功大學、2002 年、8－14 ページ
71. 陳芳明「臺灣新文學史（5）「三〇年代的文學社團與作家風格」『聯合文學』184、台北：2000 年 2 月、154-163 ページ

72. 林瑞明「日本統治下的臺灣新文學運動：文學結社及其精神」『文訊月刊』29 期、1987 年 4 月、48 ページ
73. 柳書琴「再剝石榴：決戰時期呂赫若小說的創作母題」『呂赫若作品研究』、台北：聯合文学、1997 年
74. 林瑞明「騷動的靈魂 － 決戰時期的臺灣作家與皇民文學」『台湾文芸』、136 期、1993 年 5 月、40 ページ
75. 高志彬「清修台灣方志藝文篇述評」『台灣古典文學與文獻』、33-56 ページ、台北：文津出版社、1999 年
76. 黃美娥「殖民地時期日人眼中的清代台灣文學」許俊雅主編『講座 Formosa：台灣古典文學評論合集』、台北：萬卷樓圖書、2004 年、197-224 ページ
77. 黄得時『連雅堂先生相関論著選輯（下）』、南投：台湾省文献委員会、1992 年、79 ページ
78. 羊子喬「巻 4 論述日僑与漢詩」『南瀛文学家――郭水潭集』、新営：台南県立文化局出版、1994 年、370-372 ページ
79. 林瑞明「自序」『台湾文学与時代精神』（台北：允晨文化実業、1993 年）、8 ページ、